女鑑

第十四年
第十二号

毎月一日發行 第三種郵便物認可
明治二十四年八月創刊 明治二十五年三月十二日



東京日本橋駿河町
三井吳服店
大阪高麗橋三丁目
地方よりの御註文は御手紙にて御申越被下候はゞ小包郵便にて發送仕る可く候尚ほ註文御案內書は御一報次第御送り可申上候
一切の商品は店內一面に陳列致し置候に付き御立寄り御縱覽被下度樣希上候

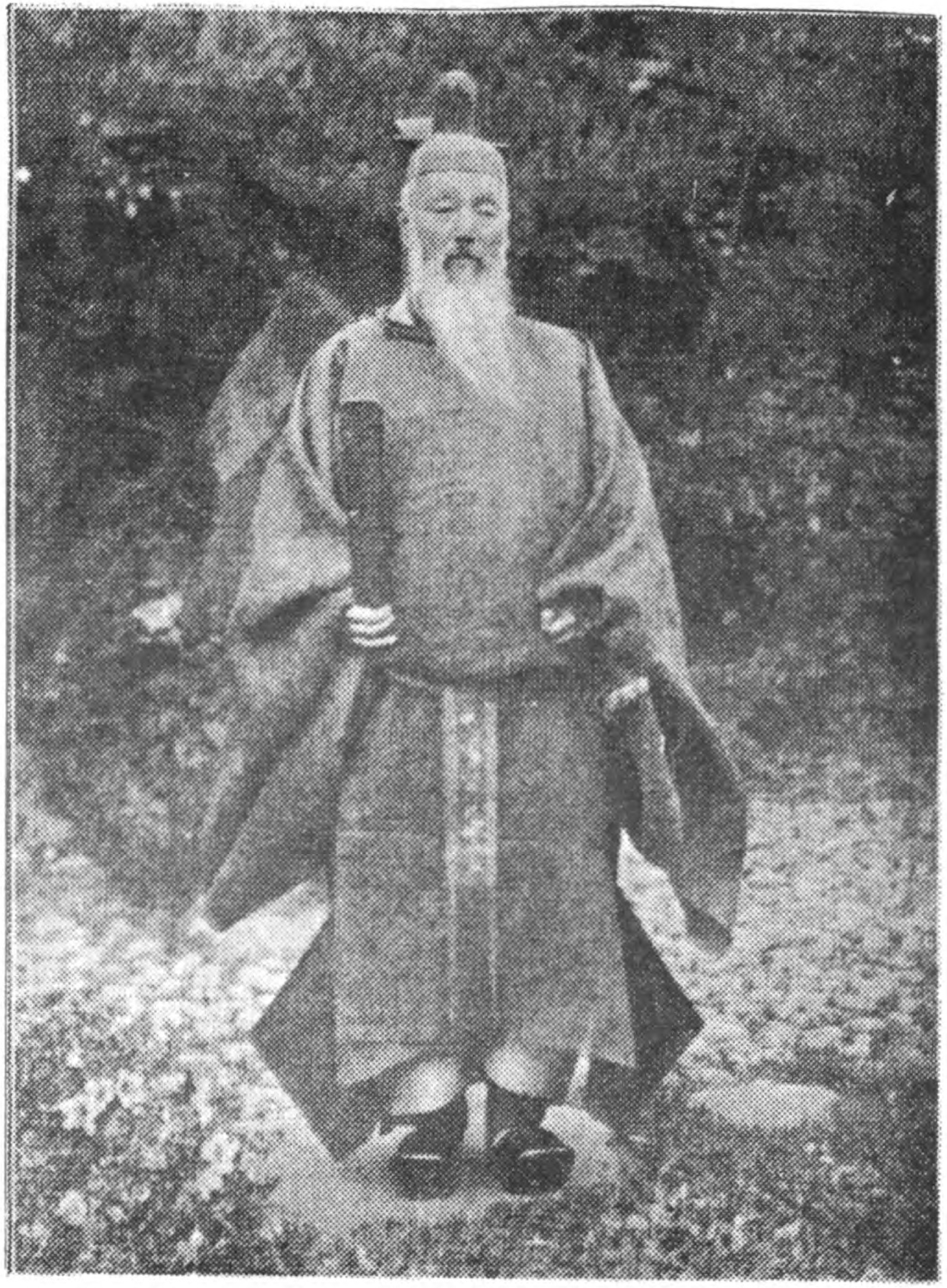
女鑑 明治四十四年 第拾二號 目次



常宮内親王殿下



周宮内親王殿下




常宮周宮両内親王殿下御養育主任佐々木伯爵並夫人貞子

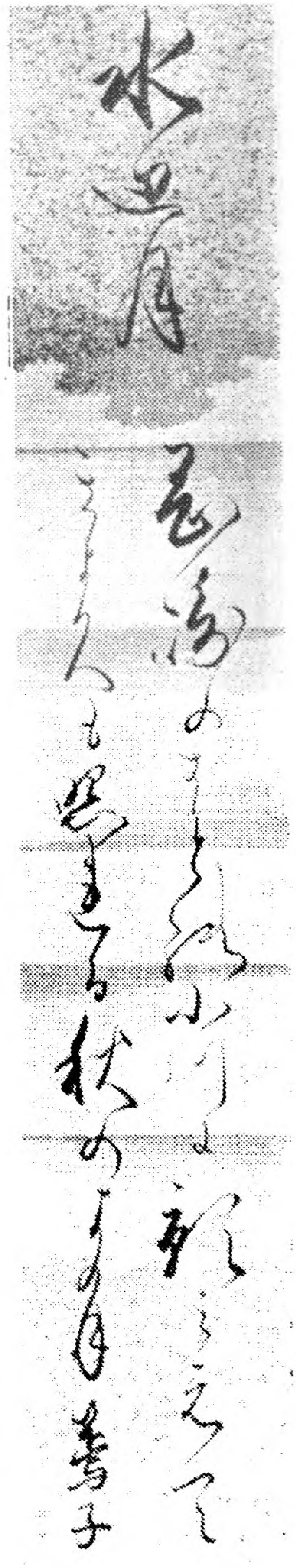
久邇宮兩女王殿下



御姉君篤子女王



御妹君純子女王




小川直子刀自


跡見花溪女史


中山幸子刀自

（訪問欄參觀）

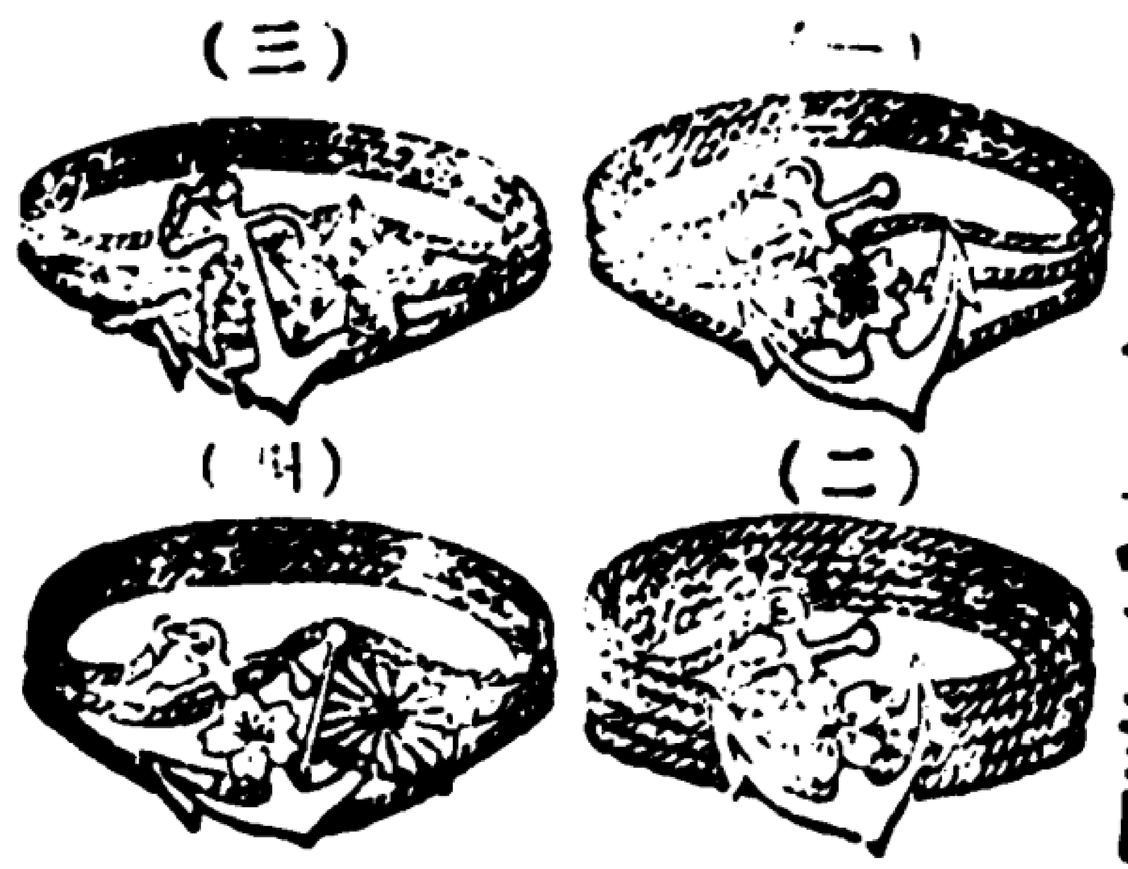


松村海軍中佐の家庭


內外博覽會金牌受領
FIRST CLASS. GOLD MEDAL. GOLD MEDAL. FIRST CLASS. FIRST CLASS. FIRST CLASS.
PATRONISED BY THE IMPERIAL HOUSEHOLD
最上
醬油
REGISTERED
TRADE MARK
元和二年創撰
ヒゲタ醤油
宮内省御用達
田中玄蕃醸造
下総國銚子港
ESTABLISHED IN 1616.
HIGETA SHOYU.
Manufactured by
G. TANAKA,
CHOSHI, JAPAN.

新案

戰捷記念指環



一、二號十八金製 ●價五圓半

全銀製金メッキ ●價壹圓廿錢

三、四號十八金製 ●價六圓

全銀製金メッキ ●價壹圓半

（市外郵送料金廿錢）

東京市京橋區尾張町二丁目

時計及寶玉類内外雜貨商

貴金屬美術品銃砲火藥商

天賞堂

（電話新橋三二一五三）



佛國パリスエンモー會社製造



ムスク白粉

ハ佛國製品中ニ卓絶セル優等品ナリ

ムスク白粉

ノ香氣ノ高尚ニシテ馥郁タル皮膚ニ特効アル之レ貴嬢各位ノ賞讃ニ辱ス所以ナリ

偽造品ありムスク獸印に御注意を乞ふ

直輸入

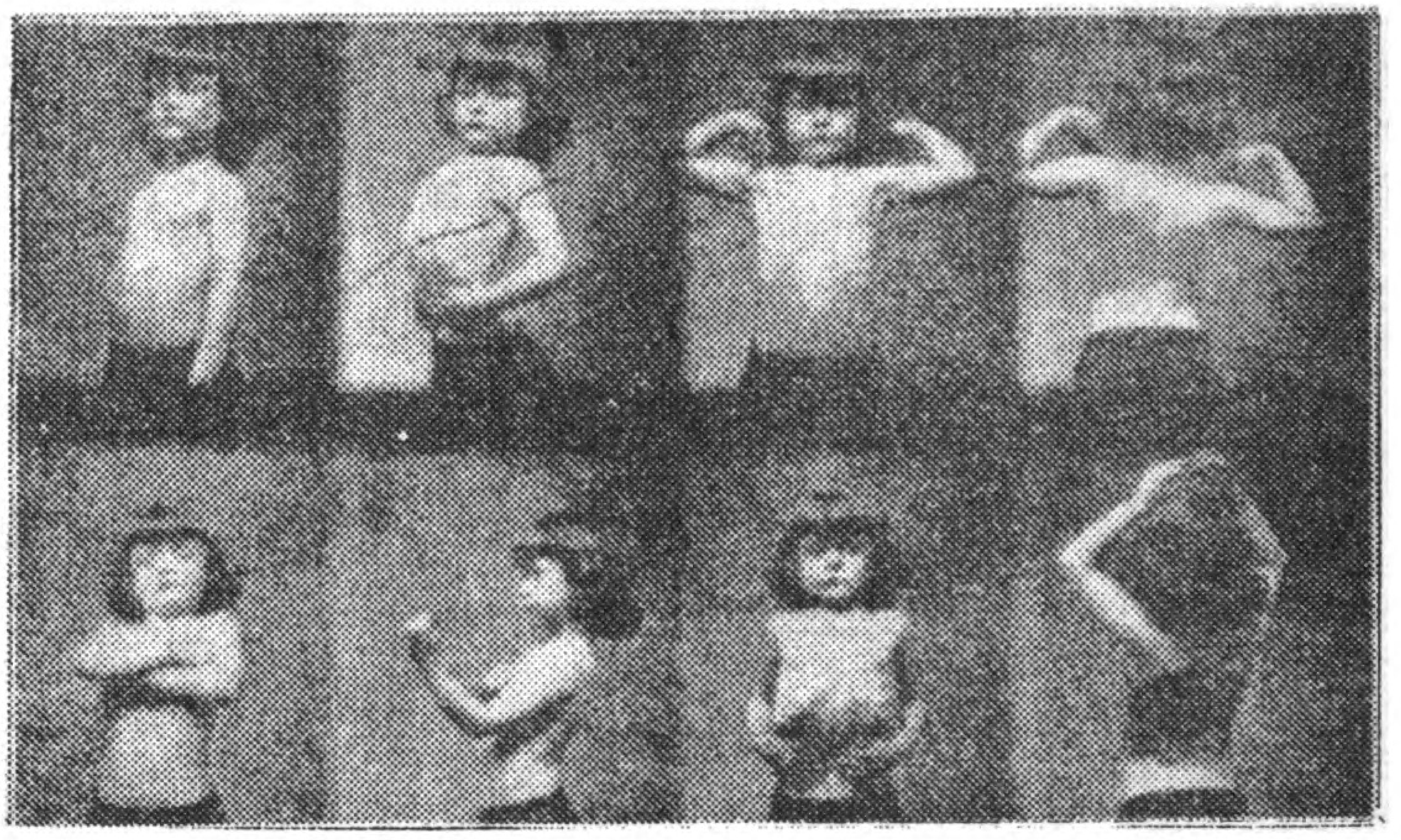
東京日本橋區橘町二丁目九番地

竹間品造

（百名[illegible]開催の大[illegible]紀念[illegible]寫[illegible]
[illegible]其中數名の日本男女學生[illegible]注意[illegible]觀[illegible]）



獨乙國イエナ市に於ける大學夏期講習會



此圖は米國に於ける六歳の女兒が體操練習の様を寫したるものなり下なるは其父なる人が種々の練習を同女に加へつゝある處なり米國人の如何に體育に意を注ぐかを見るべし



讀め!!! 家政整理に注意するものは

見よ!!! 家事經濟に留意するものは

東京府立織染學校教諭 石川弘藏君著

▲最新刊▼

家政學參考書

衣類整理法

全壹册

▲洋裝總クロース金文字入本紙數二百八十余頁 定價金九拾錢 郵税金十錢

衣類の整理保存は家政整理上極めて必要なることにして特に家事經濟と密接の關係を有するものなるにも拘はらず世人の斯道に關する智識甚だ幼稚なるを免れず本書は其缺を補はんが爲に著者が先に東京府教育會及東京女學講習會等に於て講演したる筆記に就て訂正増補したるものを乞ふて上梓したるものなり其内容は衣類の撰擇洗滌より汚點拔き色上げ仕上げ法等に至る迄衣類の整理保存に關することを所謂家政學に屬すべき範圍内に於て最も適切簡易に極めて正確明瞭に記述して遺憾なし實に本書は各種女學校生徒及裁縫家政學教員實驗者の良參考書たるは勿論家庭の好資料たるを深く信じて疑はざる所なり

發兌元 東京市神田區千代田町二番地（電話本局四十四番） 博報堂書店

通信 女子教授

學術講義

會長 東京教育會長 子爵 岡部長職君

毎月一回 第壹號十一月三日發行 全學期十八ヶ月完結 ◉會員募集

▲教育科 女高師範教授 東基吉
▲修身科 女高師範教授 篠田利英
▲國語科 女高師範教授 佐方鎭子
▲地理科 府立第一高女教授 伊藤貞勝
▲歷史科 府立第二高女教諭 高本みつ子
▲理科 女子師範校長 林吾一
▲家政科 華族女學校學監 下田歌子
▲英語科 英語學會講師 原祐道
▲裁縫科 女高師範舍監 喜多見佐喜子
▲作法科 女子大學講師 小笠原清務
▲女子衛生 東京女醫學校長 鷲山彌生
▲兒童心理 高等師範教授 松本孝次郎
▲應急手當法 醫學士 三好常三郎
▲割烹科 女子大學講師 赤堀峰吉
▲茶道講話 無樂庵 井城抱齋
▲挿花 遠州古流 秋香庵 一英

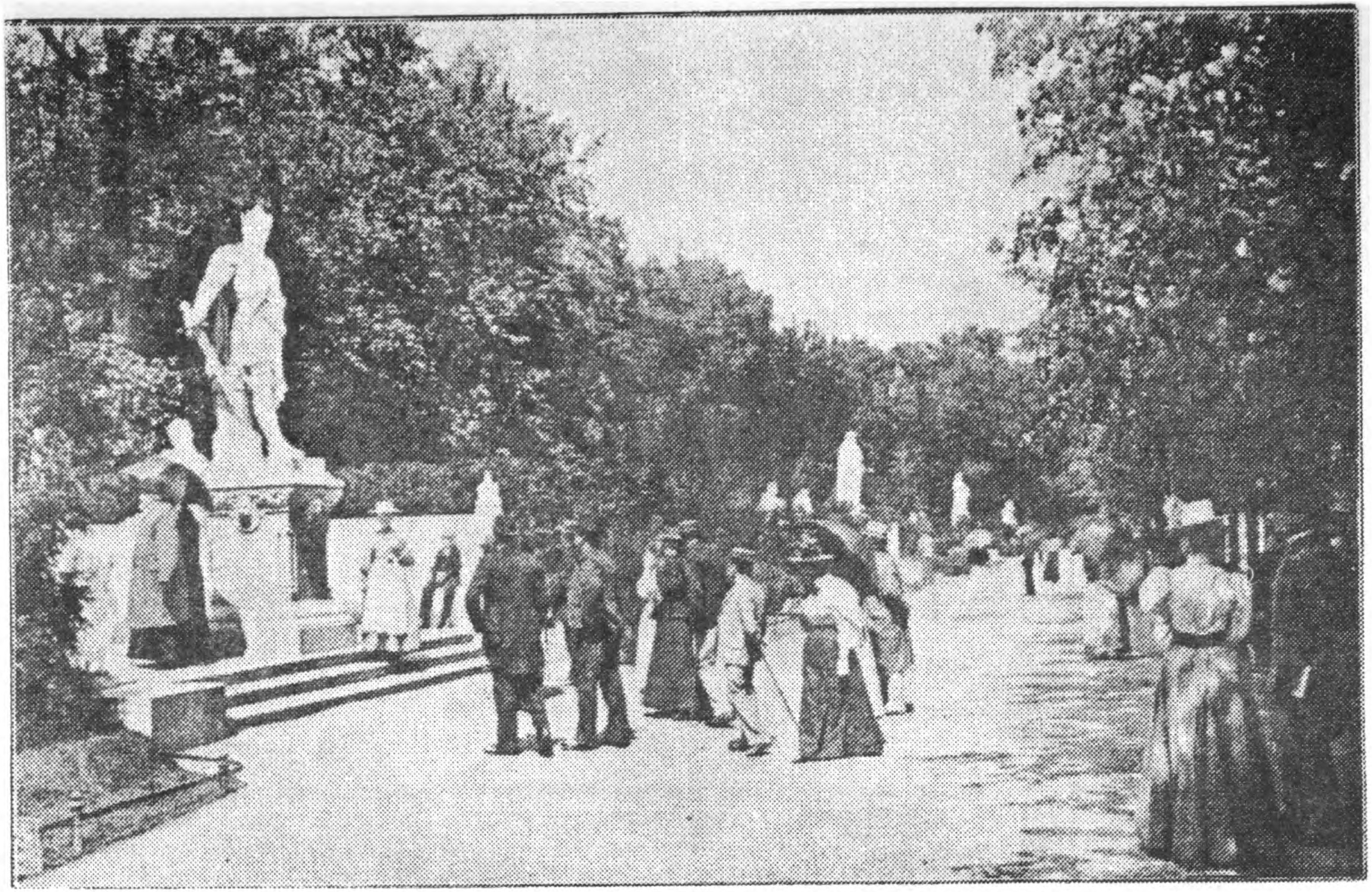
第二期新學期を開始するに當り科目を増加し内容を擴大し新に高等女學校の程度に準じ女子に必要なる學藝技術を授く學校に通學し難き諸姉は勿論女學生諸君の好參考として入會を希ふ

◉附録◉ 女子師範學校入學試驗問題并解答 教育檢定試驗問題并解答 高等女學校入學試驗問題并解答

◉入會金廿錢 ◉會費三ヶ月七十五錢 六ヶ月一圓五十錢 全學期四圓五十錢

見本廿五錢 規則二錢

◉東京神田橋外 東京府教育會附屬 女子講學會



獨乙國伯林府チーアガルテン公園

女鑑彙題投稿優等者

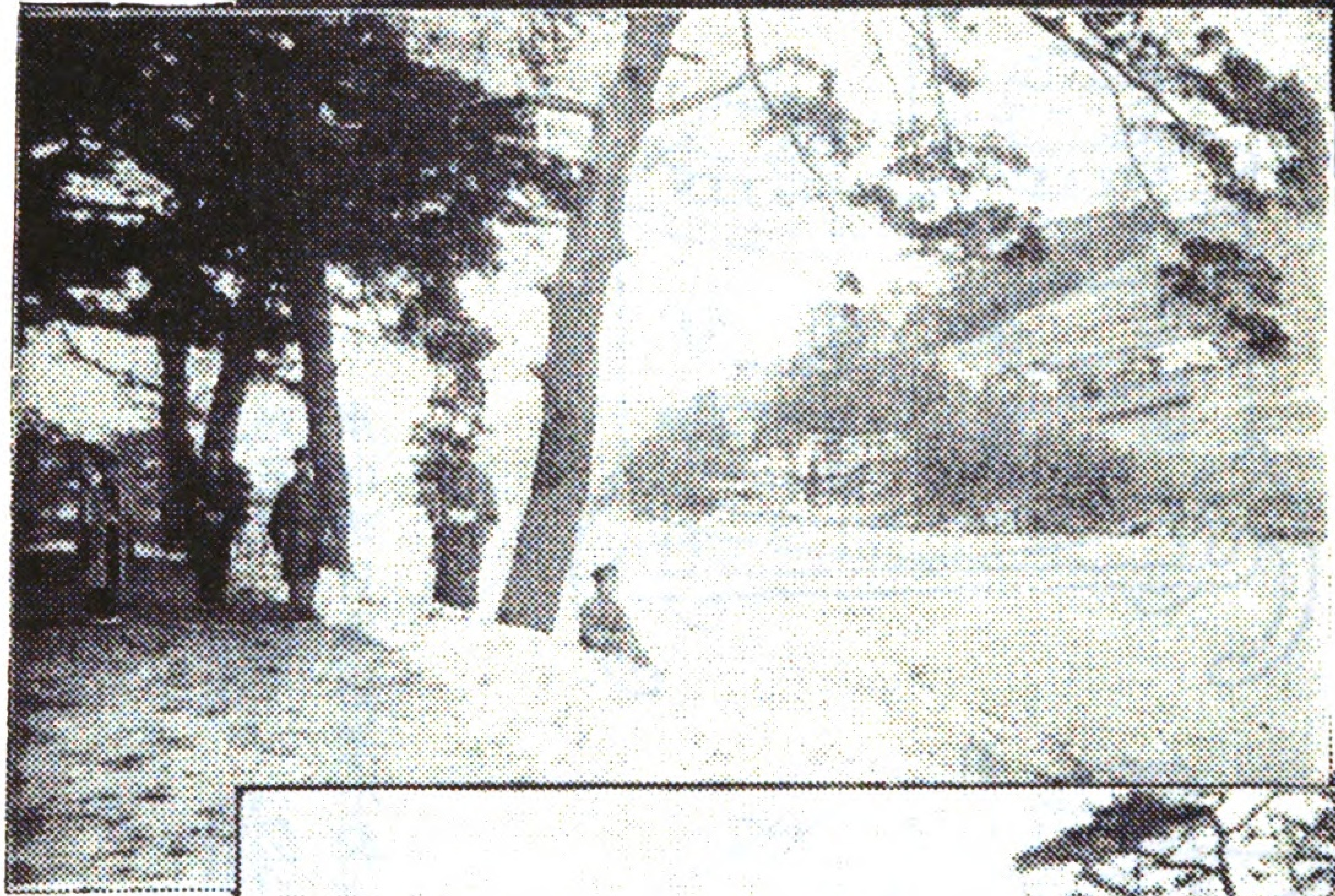


神田みよし子

不破きみ子

常陸湊公園





信州天龍川沿岸の景



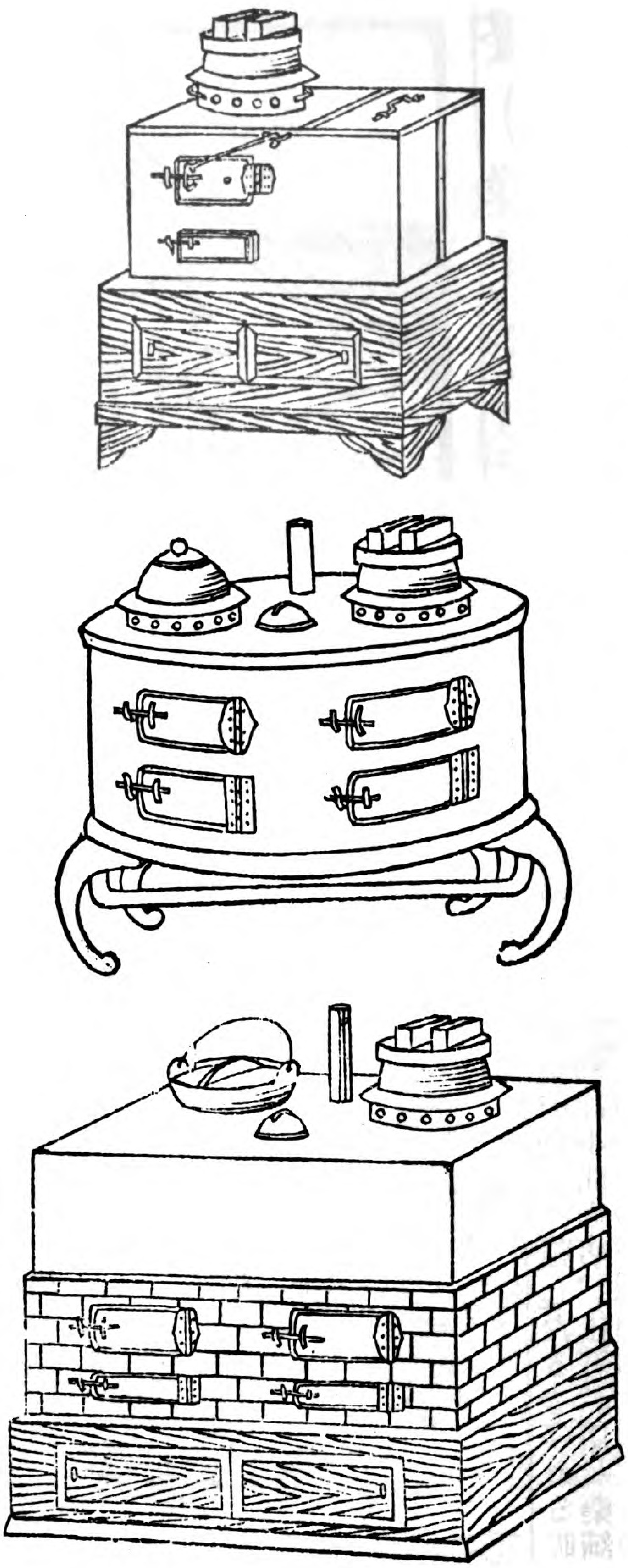
水戸公園好文亭より仙波湖を望む

世界無比國益東洋寶來竈

◉弊舗二拾有余年間經驗と御使用實驗の御諸君とに由り他の竈の及ばざる良品なり

◉此竈の効能は従前の竈よりも煮焼の手數及び時間三分の二を省く

◉此竈は弊舗多年實驗上徳用無二の品なり



薪炭炊
コークス炊
瓦斯炊
石炭炊

東京市日本橋區小傳馬町二丁目二番地

改良竈元祖　伊藤成太郎

○大日本の淑女方が一般に渇望する處の原料の確實なる洗粉は此の花洗粉也



特約販賣店
淺草公園第六區 辻小間物店
京橋區桶町 増田勉強堂

一度御試用の上御高評を乞ふ



東京本所區小梅瓦一番地

發賣元 紫明堂

ドクトル木村順吉
藥劑師歌橋又三郎
先生發明（特許出願中）二十世紀大改良溫体具

疝氣すばこ。產前產後の必要はら帯



K. U. Gürtel

福壽帯

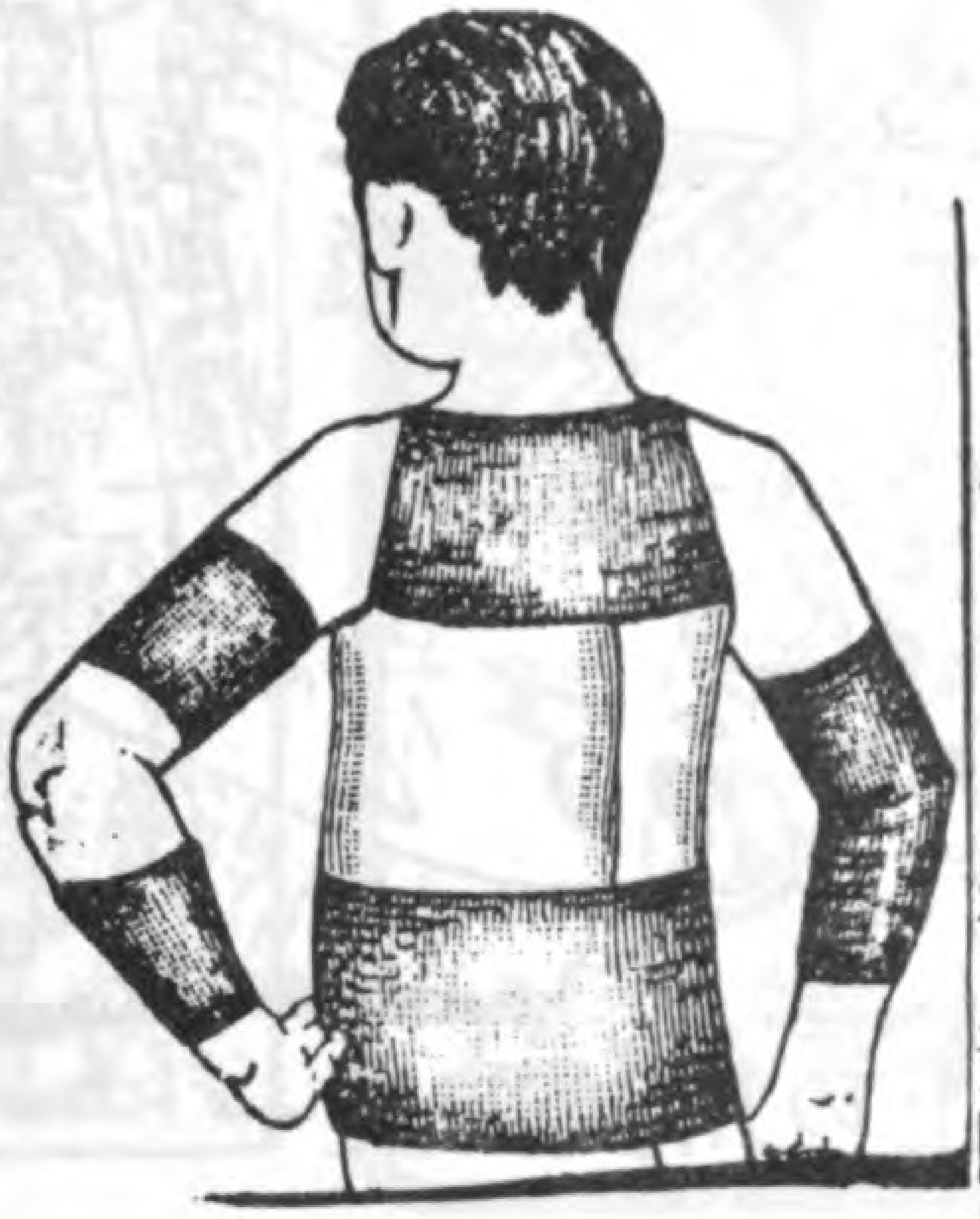
一名くすりおび

（價　定）

一號五十錢　二號七十五錢
三號九十錢　四號一圓五十錢
五號二圓　小包料十錢

其他大小各種御注文に應じ調製仕候

福壽帯ヲ身體各部ノ疫患ニ應用シタル圖



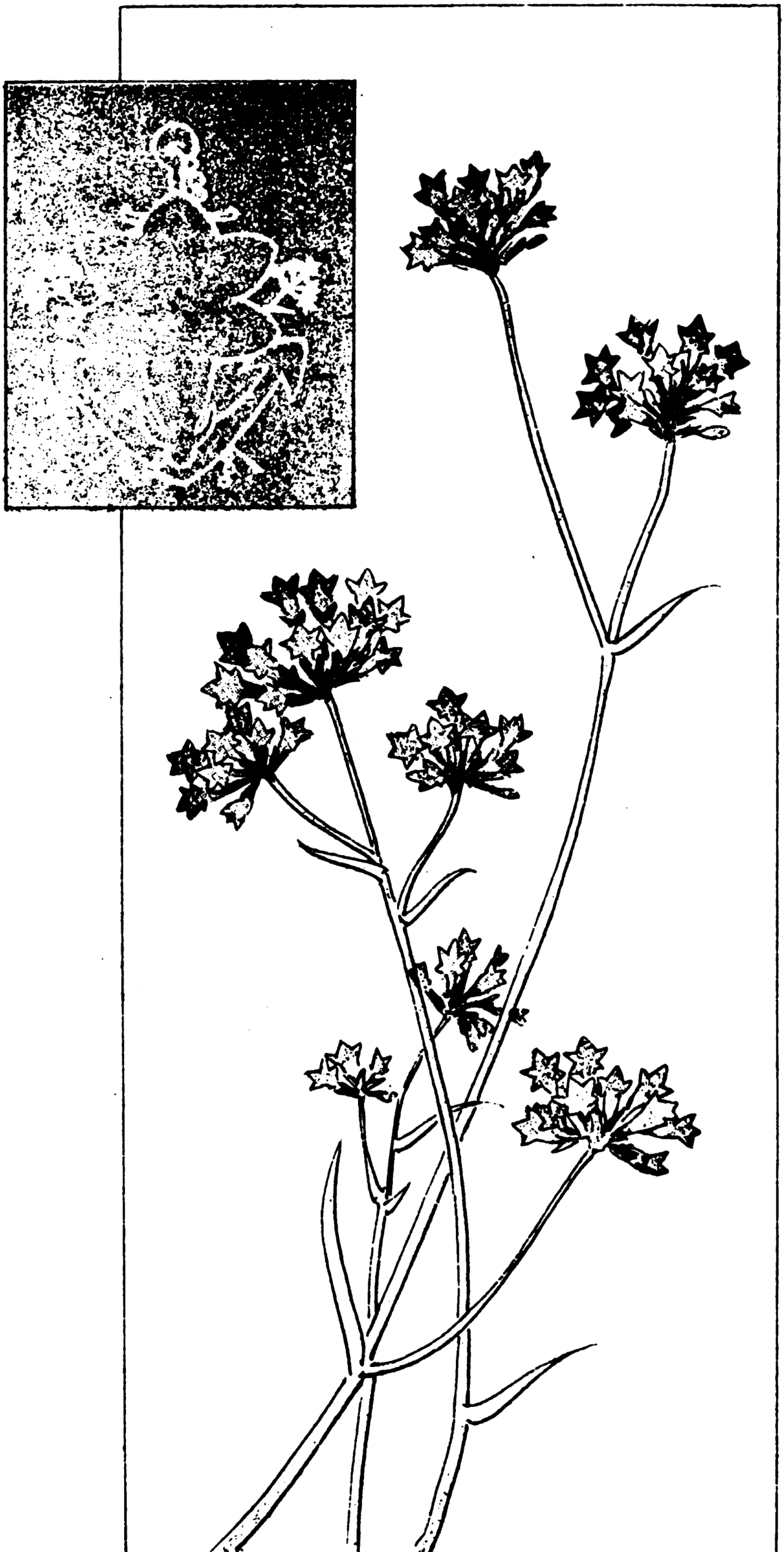
●福壽帯くすりおびは健康保全の目的に適し身體局部の防寒要具なり●防寒、保溫、驅蟲防疫消炎等の効あり●總て寒冒によりて起る處の種々の病を豫防す●胃加答兒、腸加答兒、子宮病、腎臟病、膀胱加答兒、咽喉頭加答兒等に効あり●動物電氣を刺衝するの効力有により電氣帯の代用をなす●特に冷性の人又は小兒の腹帯として常に用ゆれば腹部溫めねびえせず小便を遠くするを以て寢小便の癖ある者に奇効あり●四季の變換する時殊に入梅の節に最も必要とす●害虫を驅除する効あるにより軍人軍屬旅行者には最も必要なる衞生具なり●產前產後に用ゐて母子の健康を保全す男女老幼とも四季の別なく腹帯として使用すれば無病健康なるべし●効能を主とし虛飾を省き美麗なる箱入に製造しあるも廉價なるを以て姙婦、產婦旅行者等への進物用に適當す、くわしくは能書に有

處方調劑
ヘモグロビン大販賣
諸藥品販賣
特約大販賣店

發賣元　歌橋輔仁堂

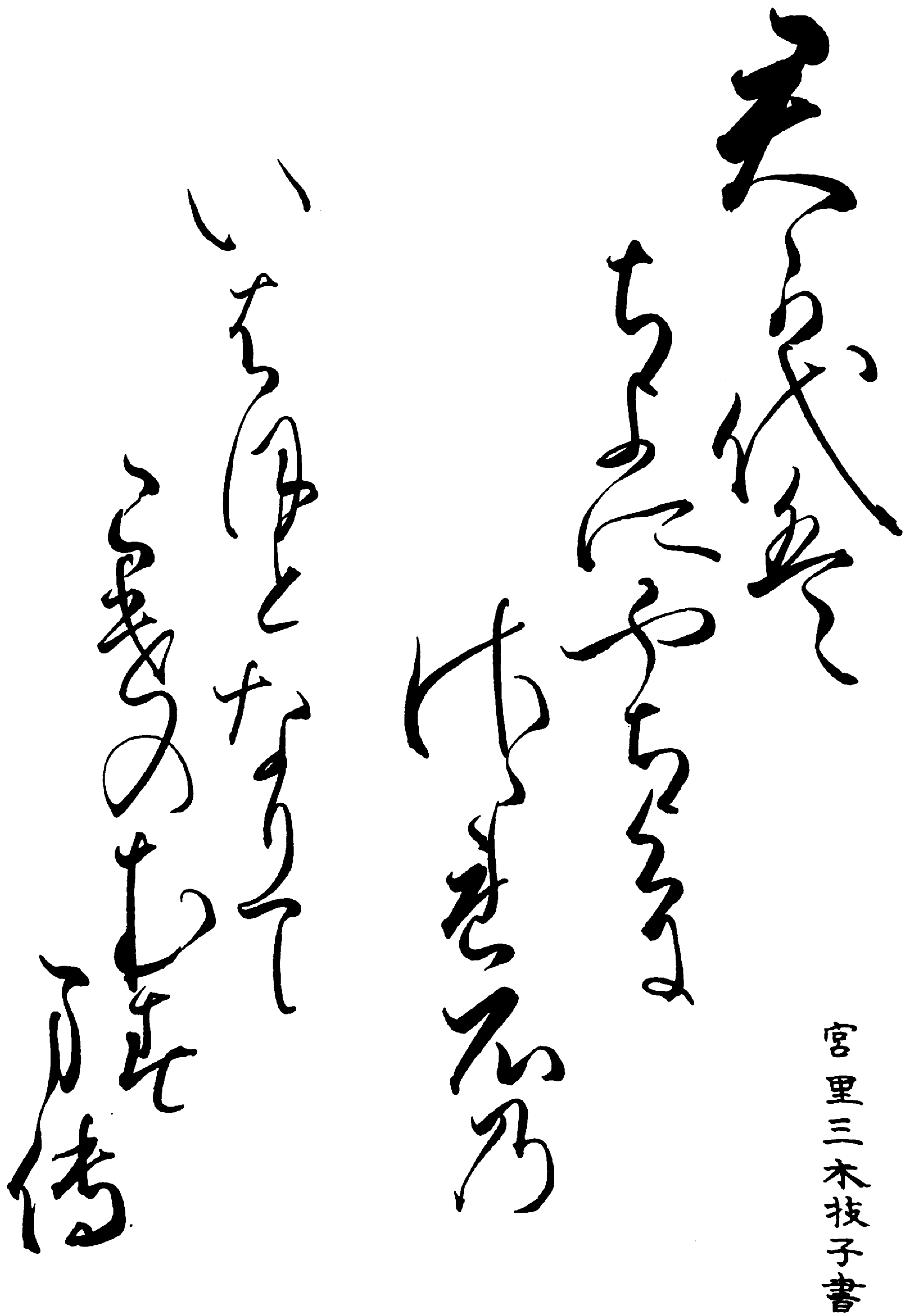
東京日本橋區駿河町十一番地

東京牛込下宮比町尾澤藥店。橫濱市辨天通二丁目丸善藥店
其他各地有名藥店にて販賣す



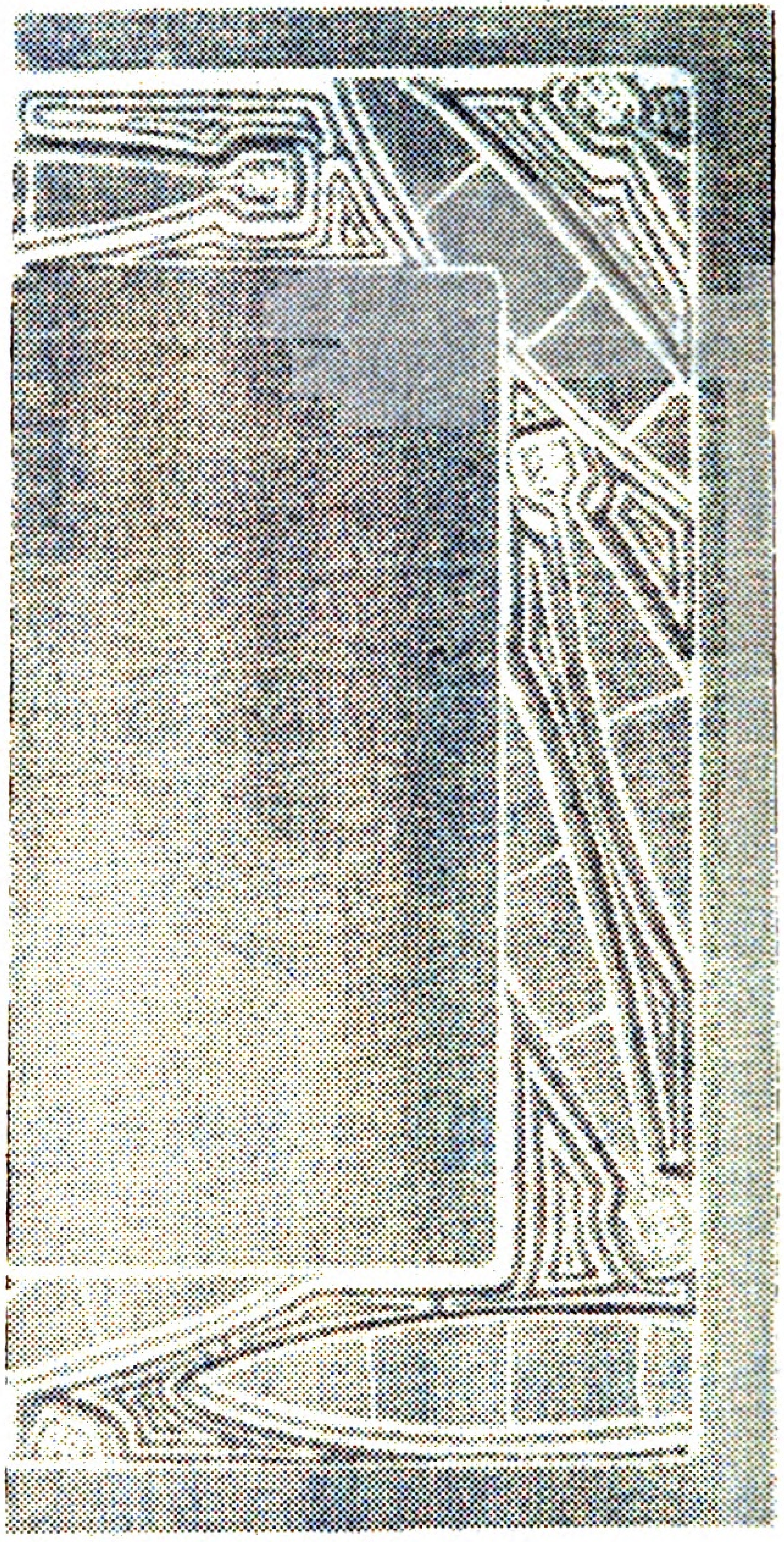
東郷花

東郷花は我が聯合艦隊根據地なる某地に香り床しく咲き出でたる最とも優さしき小花なり東郷提督の日頃愛翫せらるゝまゝ誰れいふとなく東郷花と命名せらるゝに至りしとぞ又た錨地に此花を添へたるは某意匠家の考按にかゝり國光社發行の卅八年女生日記の表紙に用ゐたるものなり

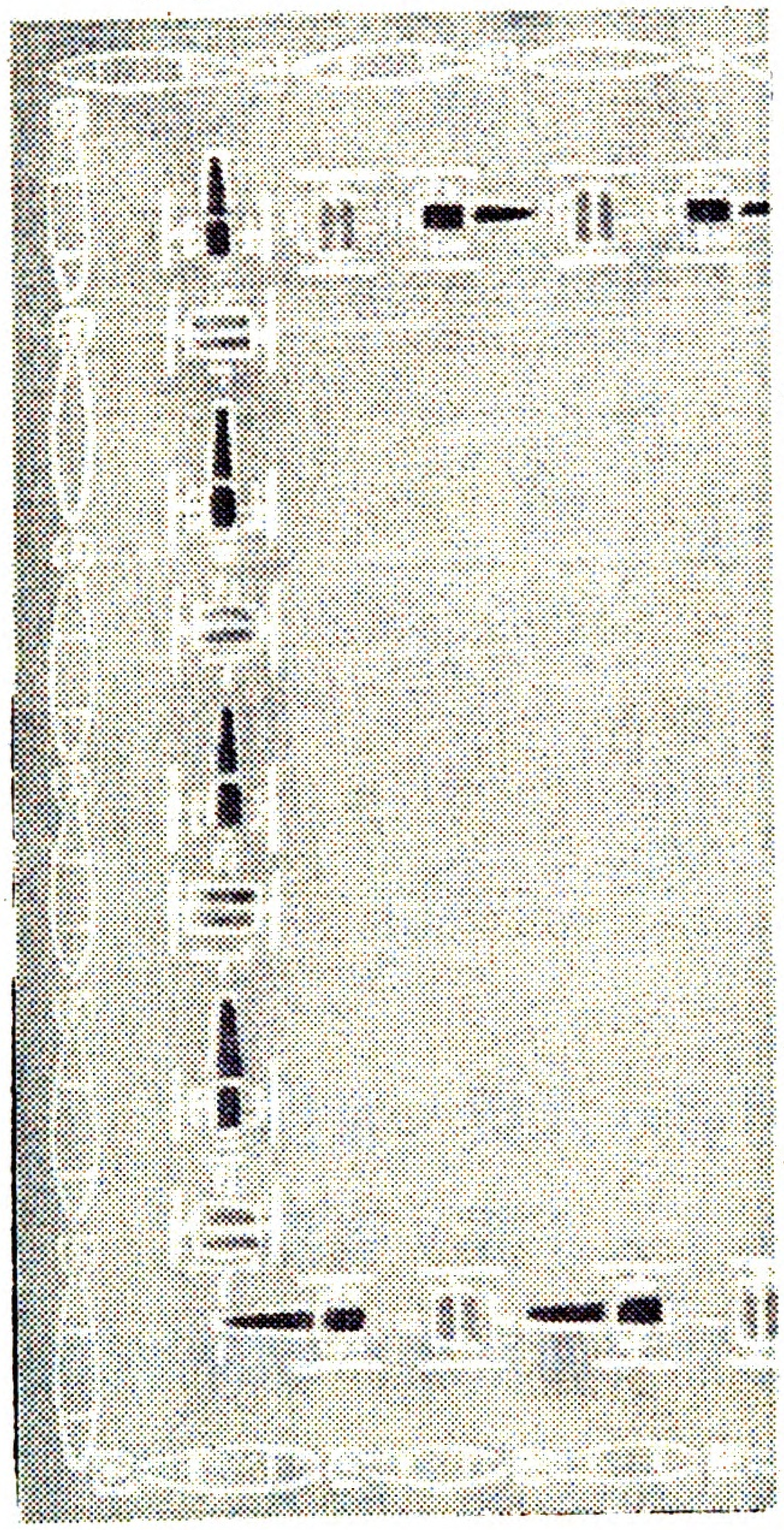


宮里三木技子書

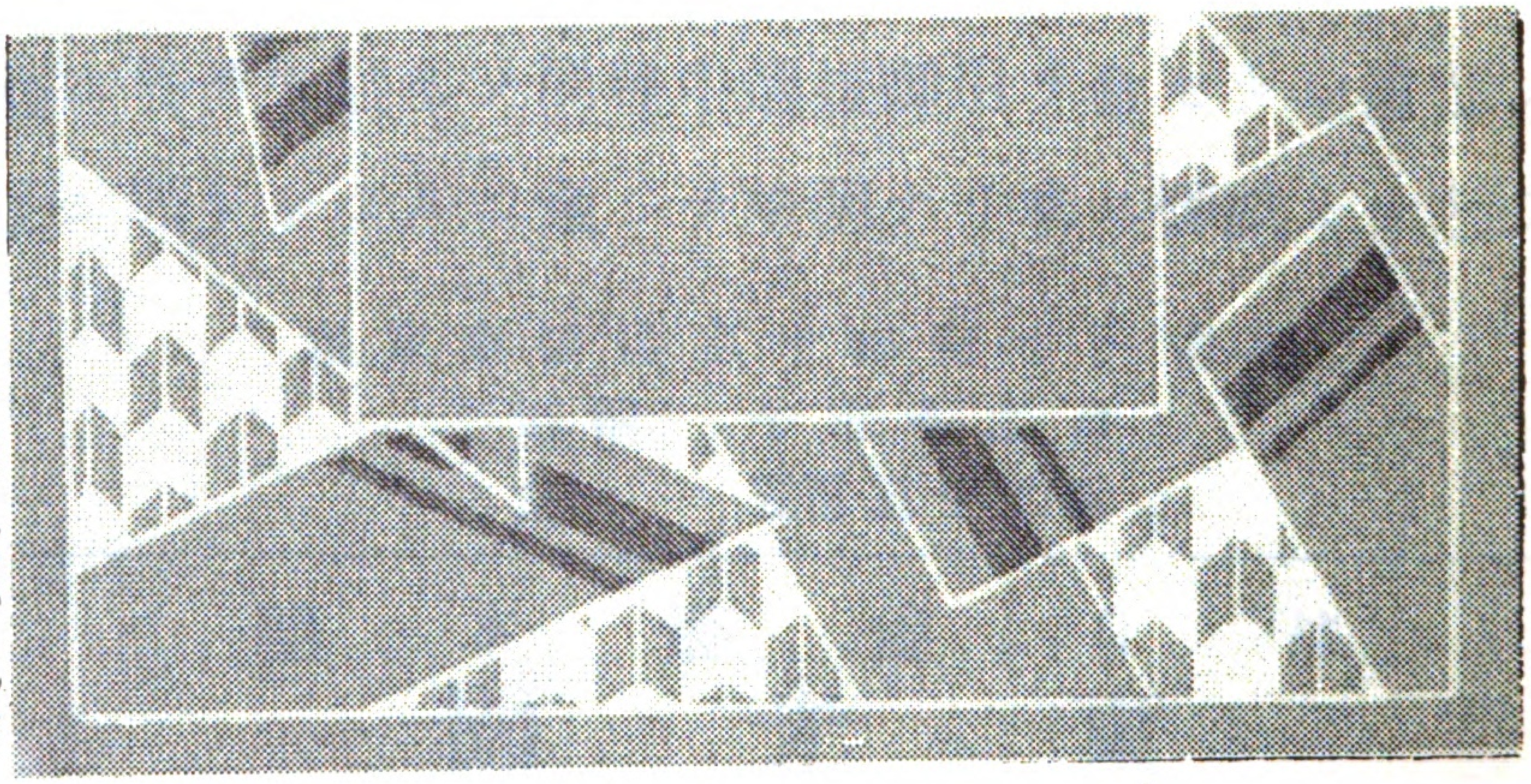
長崎圖案精美會出題古今武器に寄するナプキン圖案



第一等當選　魚形水雷（半折圖）　小田切喩吉氏案



等外二等　砲車水雷　半折圖　同人案



二等當選　箭絣（半折圖）　藤瀬直二郎氏案

御羽織紐　御帯とめ　時計紐

絹糸編物類　房類

★印優等絹縫糸

仝絹小町糸各種

其他糸組物類大勉强販賣仕り候

日本橋區兩國米澤町
三丁目五番地

富屋商店





定價・金五十錢・金廿五錢・金十五錢・金二十錢



第十四年第十二號

聖徳四海に洽ねき此の大御代に生れたるさへあるに、況て今日の天長節の祝會に遭逢せるは、寔に前代に其例なく、恐らく後世にも復た見るを得べからざる盛事なるべし。

東洋永遠の平和の爲にとて、宣戰の詔勅を下し給ひしより、纔かに十ケ月に及ばざるに、三軍向ふ處ろ、山河草木みな披靡し、滿洲の野、敵の隻影なく、父老簞食壺漿して、王師を迎ふ。

嘗ては韓半島の獨立扶植の爲に、膺懲の實を擧げさせ給ひ、今は清韓はいふも更なり、東洋全體の利害を慮かりて問罪の師を起させ給ふ。誰か又其の至仁至徳に感泣せざるべき。

是を以て國民擧な爭ふて命を奉じ、或は身を捐て、生を輕んじ、或は財を投じ、資を献げて、敢て後れんことを是れ恐る。

歐米各國また同情を寄せ、拍手して我軍の連捷を祝し、前途の勝局を希待せざるなし。蓋し虎視狼顧勢力相競ふの今日と雖も、正義人道を悦ぶの至情は、溢れて竟にこゝに至れるなり。

上下數千載、古今萬國の史上に於て、未だ嘗て有らざるの盛事に逢へる吾等の光榮は、之を祖先に誇るに足るべく、長く子孫をして羨ましむるに餘あるべし。嗚呼是れ偏へに聖世の餘徳にはあらずや。

籬に匂ふ菊の花も、千代を壽き奉り、夕日照りそふ楓の色も、國民の丹き心を表はして、今日の盛節を祝するぞ實に芽出たき。

天長節

文學博士　小杉榲邨

畏くも天皇陛下の御降誕日を、天長節と唱へ奉りて、上は竹の御園生榮えます皇族宮々がたより中は華族大臣其以下なる諸の司人にいたり、下は數にも足らぬ農工商の群類まで、凡そ皇國普天の下率土の濱、いづれの山阪僻地のすゑといへども、この日を拜賀せざるなく、いともかしこく長久を祈り奉ること、實に盛なりといふべし。

この日、あたかも其の佳辰にあたりて、萬民ひとしく御盛光を仰ぎまつれる折柄なれば、今この典故をたづね奉るに、光仁天皇の御降誕は、和銅二年十月十三日にまし〱しが、御即位の後、寶龜六年九月十一日勅し給へらく。十月十三日は朕が生日なり、此辰に至るごとに、感慶兼ね集まる宜しく諸寺の僧尼をして、毎年この日、轉經行道せしむべく、海内の諸國、幷びに屠ることを禁斷すべく、内外百官に酺宴を賜ふこと一日、仍て是の日を名づけて、天長節と爲すべし、庶くば此の慶情を以て、普ねく天下に被ふらしめよ。とみことのらしゝかば、其の十月十三日にいたり、果して天長節を行はせられ、大いに群臣に酺して、歡好酒食を献せしむ、宴畢りて祿を賜ふこと差あり、といふこと、續日本紀三十三の卷、この天皇の御條下にのせられたり、さて此の年よりつぎつぎ、その御祝式を行はせ給ひしことも見ゆ、蓋し、此の天皇は、朝政刷新の御心あつくまし〱て、絶えたるを繼ぎ廢れたるを起し、新しく式令などせうけられたることも最とさわに、兵士の羸弱な

るを憂ひ給ひて、兵農の別を立てさせられし例しもあり、また朝野の腐敗を匡さんとの大御心も深くまし〱けるが、大かたこの御時代は、支那及び韓土との關係漸くしげく、社會百般の事物の流行は悉くそれらの國々より齎らされ、からぶりの御わざを多くまねばせ給ひて、禮儀作法すべてその準據にいでしのみならず、佛教は既に貴族の間に行はれて正にその盛況をきはめ、三國一の大佛は鑄られて總國分寺に安置され、諸國僧尼の二寺なき所なく、代々の天皇は百官を率ゐて大佛を拜し給ひ、聖武天皇の遺物を納めたる東大寺正倉院は、其の工事も大かた成りて、繪畫彫刻建築の異彩を後世に傳へしことゝて、佛教將た崇信し給ひし御事なれば、おのづから御記に載せられたるが如く、諸寺の僧尼をして轉經行道などなさしめ給ひし御事、めづらしからざる勢ひなりき。

然るに、此の御式の典故は、からの故事に據らせ給ひしならんと察し奉るは、からふみ封氏見聞記といふものに謂へらく、

太宗降誕の日を以つて、長孫無忌に謂ひて曰く、今日は是れ朕が生れし日なり、俗にいふ生日は喜樂すべしと、吾の情を以つてして飜へつて感思し因つて泣下る、中宗、常に降誕を以つて、待臣貴戚を内廷に宴し、學士と柏梁體の詩を聯句す、然れば則ち國朝以來、此の日皆宴會あり、玄宗の開元十七年、丞相張說遂に奏し、八月五日を以つて千秋節となす、百寮承露囊を献ずる者あり、是の日樓に御し宴を張り、城を傾けて縱觀すれば、天下の士庶皆賞樂をなす、其の後亦た改めて天長節となす（原漢文）

といふなどの文意を味ふに、玄宗よりこのかた從りに行はれし事とおぼゆるに、もとは千秋節といひしを、後に天長節と改めたるも、かの天長地久などいふ熟語をおもはれしにはあらざるか、また百寮の承露嚢といふものを献せしよし、これもいかなるものか詳かならざれど、字義を以つて按ずるに、御恵みの露をうけたる嚢などいふ意味にて、うるはしくかざりつくりし袋の類にか、かの茱萸袋などにおもひよせて、かく側説するなり、なほ考ふべし、當時唐の時代の文物に擬せらるゝもの多き、この天長節のごときも、かならずそのへによりて行はせ給ひしなるべく想像し奉る、されども此の後、誕辰の御祝式は行はせらるゝも、なほ天長節と唱へ奉りたるやいかゞ、淺見寡聞、いまだ考へ得ず。

近く王政維新に際して、この御名稱を復舊し給ひ、三大節の一に算へさせらるゝ御事なるは、みな能くうかゞひ奉る所なり。

皇后陛下の御誕辰日も、宮中に在りては、百僚に宴を賜ひ、大かた天長節に擬せられて、高等官以上に謁をたまふ事なるを、うち〳〵に地久節と唱へ奉れるなど、いはゆる天長地久の字義、おのづから備はりて、いとめでたき御唱へなり。

特にことしのこの御大節は、國家未曾有の戰捷、皇威を萬邦にかゞやかさせ給ふ、わが日本の御ひかり、いとも〳〵廣大なれば、臣民同胞は、この御ひかりをかしこくもうれしくもいたゞき奉りてことほぎ奉らでやはあるべからむ。

經濟上より見たる風俗改良（中）

十五銀行頭取　園田孝吉氏述

醫者の弊

次に刀圭社會の風儀に就ても注意して置きたい事がある。第一醫者の行爲に關して氣に喰はぬのは、少し上等な醫者になると、中々威張込んで、病家から來診を賴んでも忙しいとか何とか云つて容易に來て吳れない事である。眞に忙しくて來られぬなら仕方がないけれども、同じ塲合でも、大臣とか華族とか云ふと、屹度出掛けて行く。均しく煩忙であるならば、大臣でも華族でも行き得られぬ筈。之は畢竟患者の身分を見て手加減をつけるのである。大臣と我々平民とは、地位に於てこそ高下があれ、生命に於ては一も輕重はない。我人共に同じく惜しきものなれば、其生命を助ける職分に當たる人が、患者の位地の貴賤貧富に因て忙しいとか何とか云はれては甚だ困るではないか。醫者も矢張營業なれば、診察料の高下に因てかゝる區別を爲すかも知れぬけれど、いかに營業と云ふても、其間には大に人情といふものを斟酌して貰はねば困まる。

又一つは此醫者が乘つて來る所の輓夫の事である。病家から其輓夫に祝儀と云ふか何か知らんが、兎に角金を吳れる慣例になつて居る。之が非常に拙者は氣に入らぬ。何

患家から輓夫に祝儀を遣らんければならぬか、何故醫者自身が雇ふて居る人間に病家の者が心付をせねばならぬか、此等は實に餘計な手數で且つ不經濟な話である。假りに失費も手數も忍んで遣るとしても、此醫者の輓夫に心付を遣るには隨分面倒なものである。距離の遠近に依ても差があり、又醫者の位置に依ても區別がある。甲には五十錢遣るとか、乙には三十錢遣るとかゞある。之が爲め餘計な配慮をしなければならぬ。夫れが爲に拙者の緣家では非常な混雜を惹起したことがある。其緣家の生活は餘り裕かでない。通常此邊へ來る醫者の車夫へは、確しか五十錢呉れて居つた。それを或時二十錢か三十錢遣つた所が、輓夫が怒鳴り込んで來て大騷ぎをして、患者まで殆んど眼を廻はしたといふやうな、實に不體裁、不都合極まる話がある。故に今後は車夫に病家より遣るべきものは、醫者自身で拂つて置いて、後で病家より請取るやうに改めて貰ひたい。醫者が來診する度每に、女中が一々奧樣の所へ來て、彼の醫者の輓夫には如何程遣りませうかと尋ねる丈けでも煩はしい事夥しい。又診察料に關しても、半期々々の仕拂時になると細君の配慮は普通でない。少な過ぎてはならぬと思ふから好加減に診察料を包んで、其外に反物とか鷄卵箱杯を添へて贈る。之は患家のみならず、醫者の方でも隨分迷惑なる事であらうと思はれる。醫者も一種の營業なれば、遠慮なく勘定書を送つて、其外には餘分な貰物をせぬと云ふやうに改めたい。

家庭婢僕の數

次に日本の家庭には何故に多數の婢僕を要するか、是も一問題である。玆に一つ泰西の實例を擧げて話して見やう。拙者が先年英國に駐在して居つた時分は、終期には子供の五人も出來て、隨分手數の掛かる生活を爲した。其上領事館の官舍に住つて居たから、上は皇族を始め其他發著の人々に應接し、日本食を整

ふやら何やらで隨分忙しい。斯樣な人は一年間に何百人來たか解らない程である。然るに當時拙宅で何人の婢僕を使用して居たかといふと、僅に五人丈けであつた。五人の兒女の時分には、兒女の世話をする女が二人、其二人の女が萬事指圖なしに引受けて遣つて吳れた。又房室の掃除やら、寢床の始末やら、其他給仕やら何やら夫等の業務を掌どる爲めに、上番と云ふやうなものが唯だ一人、四階五階建の家屋なれば房室の數も自然多いのに、雜務は感心にも唯一人で辨じて居つた。ルイザと呼ぶ女であつたが、未だ存命であらう。今日でもどうかすると書束を贈つて來る。貴方程親切な主人を持つたことは無いと云つて寄んで居る。夫れは御世辭かも知れぬけれど、兎に角前後八年間使用して居つて、英國を去て歸朝する時分には相互に泣き別れをした位である。此女には朝來何にも差圖の仕樣がない。主人が命ぜないでも終日働いて居る。椅子に腰を掛けるのは、食事の時とか、茶時に茶を喫む時だけで、其外は決して腰を掛けて休息する事のないといふ女である。右三人の外臺所に料理番が一人、仲働きが一人居つたが皆女である。時としては日本人の厄介者が一兩人居る事もあつたけれど、夫等は餘り役に立たない。然るに婢僕にも各々分擔があつて、臺所の方に居る女は、調理の外に手を掛けないから、ルイザ一人で來客の給仕をしたり、玄關の戶の開閉をしたり、其他種々なる雜用を滯りなく辨じて居つたのである。何故斯く少人數で多量の用務に堪へるかといふと、英國では日本のやうに來客に茶を出すとか、火鉢を出すとか、菓子を出すとかいふやうな手數のない結果だ。例之ば來客があつても、婢僕の役目は其客を客室へ通ほすだけで濟む。其處へ主人が出て行つて挨拶をする。其會談中は決して僕婢は出入りをしない。又來客とても煙草を喫ひに來たでもなく、茶を飲みに來たのでもないから、一向人手が要らぬといふ實況である。

英國家庭の風儀

英國の家庭に於ては一定の茶時がある。其時に十人や十五人位の來客があつても、使用する女中は、唯だ茶器其他菓子類を座敷へ運ぶだけの事なれば一人で足りる。茶を入るゝのは主婦の役目、給仕は兒女等が務め、又來客中にて交替に任に當たるといふ風なれば、僕婢を近ける必要は更に無い。是は誠に淸らかにして且簡便なる風儀と思はれる。夫れに就て一つ恐れ入つた話がある。今の有栖川宮殿下が先年英國御留學中、或る敎師の家庭に御住ひになつて居られた事がある。處が茶時抔に御見舞に出ると、殿下より親しく茶菓の御給仕に預つたことを記憶して居る。右は獨り其敎師の家風ではなくて、實に英國一般の家風である。

拙者の舊主島津家に於ては、一兩年來英國の女敎師を雇ひ、四五人の御子供方を之に托して、純然たる英國風の家庭敎育を授けさせて居られるが、その敎育法たるや規律整然感服の外はない。實に末賴母しいことである。時々御見舞すると、舊主たる公達が矢張親しく茶の給仕をなさると云ふ有様である。之に反して日本の風儀は如何であるか、來客が見えたといふと、先づ玄關番が戸を開ける、客が通ると烟草盆を出す、茶菓を出す、事に依ると咖啡も出せば紅茶も出すといふ騷ぎ、何故日本人は斯様に面倒な事を爲さねばならぬであらうか。茶は少許のもので濟むであらうけれど、茶菓等の給仕の爲めに餘計な人手を要する且つ藥鑵の湯も朝夕絶えず沸して備へて置かねばならぬ。而して啻に茶を喫むに止まらず、朝から甘き物を食ふ。之は衛生上より云ふても非常に有害であると思ふ。

家庭主人の無性

又我國の家庭に於ける主人公の無精なるには懐かざるを得ない。酒を飲む時にはお酌が要る。衣服は一人で着られない。風呂に這入れば他人に流して貰はねばならぬ。一寸先きに在る物品を取るにも他手を煩はすのである。之は昔日の殿樣流儀とも稱すべきものであらうか、惡く言へば全然不具者同樣である。夫れでは何の爲に人間に肢脚が附いて居るものか一向理由が解らぬ。而して主人公出入の時分などは、滑稽にも家族總出で玄關に出て送迎するといふ騷ぎである。

拙者が龍動領事在職中、我が大藏省に於て正貨囘收策を執り、その事務の取扱方をば領事館に一任した。それで我が領事館では、二三年の間に幾千萬圓といふ銀塊を英國より日本へ送つたが、之が爲め幾人の人手を要したかと云ふと、拙者の外に書記生が一人、英人の小使が一人居つた丈けである。書記生は專ら本邦と往復の事に當り、拙者は英文往復、金錢出納、銀塊購入等の事を掌どり、銀行抔へは自身で通帳を携へて往來したのである。かくて一ヶ年間の取扱高は何百萬圓といふ金額に達したのである。此他外務省との關係事務もあり、且つ種々な用事も多かつたが、それでも格別な譴責も受けずに事を辨じた。之が若し我國の官廳であつたならば、少なくも五六人以上の肢脚を要したであらうと思ふ。甚だ自負がましい樣であるけれど、國民が皆斯樣な決心で事に當つたならば、一家の僕婢は勿論、政府の官吏も半分位は減じ得らるゝ事であらうと考へる。

警察の不注意

我國の風俗中改善を加へざるべからずと認めらるゝ弊風は漸々擧げて見たが、此處に一つ警察の注意を促して置きたい事がある。拙者は始終途上で配慮つて居る所の事であるが、先づ第一に電車、馬車、人力車

自轉車等の驅け歩く公道に小供を遊ばして置く事は宜しくない。否危險である。馬車人力車抔は忙しい時には忙しい程速く驅ける。拙者の馬車も先日計らずも小兒を突轉ばしたが、幸ひ馭者が老練なりし故怪我もせずに濟んだけれど、萬一彼の時踏潰しでもしたならば、拙者は直ちに殺人罪を以て問はれたであらうと思ふ。道路は元來天下の公道で、人馬の驅ける爲めに作られて居るのに、其道路を公園か運動場見たやうに使用せしめて置く事は宜しくない。未だ一人遊戲も出來ぬ兒女等を、馬車、俥車、自轉車等の往來頻繁織るが如くなる道路の中央にコロ〳〵遊ばして居るといふのは、兩親の不心得も亦甚しい。而して人命を保護する爲めに見張つて居る所の警官等は之を見て無頓着で居る。

尙一つ警察の注意を願度きは、途上に大きな石塊が轉つて居つたり、大きな洞穴が穿いて居つたり、或は砂利を公道の中央に積んで置たりする場合に、小さい標燈が點いて居るけれど、容易に見えぬ。之が爲め馬車や人力車が躓いて倒れるやうな事が屢々ある。警察は何故に尙少し之を取締らぬであらうか。白刄を振廻はす者があれば、人命保護の爲めに直に捕縛するけれども、道路の眞中に白刄を樹てゝあるのは咎めない。公道に石塊や洞穴の在るのは恰も白刄を植えてあると同じ理由ではあるまいか。拙者は毎時も歩行の時には、石塊が轉つてあると、自分で之を片付けて通る。全然巡査の名代を務めるやうなものである。然るに公衆は道路の中央を平氣で歩いて一向除けもせぬ。御者抔が後から聲を掛けると、屢々怒鳴り付けらるゝ位であるが、是は畢竟東京には歐米諸國の都府の如く、人道と車道との各別の設備がない結果でもあらうけれども、東京や大阪のやうな車馬の往來の頻繁なる市街地に於ては、往々意外なる死傷者を生ずる恐れもあるから、公衆もなるべく道路の兩側にそふて徐かに歩行するやうに注意したら可からうと思ふのである。

女子の精神修養と入學問題

文學士　下田次郎君述

女子教育の發達に伴ひまして、近頃は又女學校の種類が澤山に出來、從つて夫れ〲專門の技藝を敎ふるやうに成りましたのは、女子の爲に至極喜ぶ可き事には相違御座いませんが、併し何れの學校も、皆女子に必要の技藝を敎ふるといふ丈けの、只形式上の事ばかりでありまして、更に精神敎育といふ事に、少しも重きを置きて居ませんから、現今の女子は動ともすると、どうも墮落に陷り易いかのやうに、私は察せられますが、何にしろ精神敎育の足らんのは、取りも直さず現時の女子敎育に取て、一つの缺點でありまして、到底今日の敎育制度では、勿論完全の域に達せられたとは申されませんで、今日の女子敎育は、如何なる程度で、如何なる順序を以て進んで行くかと申しまするのに、先づ普通科を卒業しますれば、更に高等女學校に這入る、夫れから猶一歩進んだものが、女子大學とか、乃至高等女子師範學校に這入るといふ、順序になるので御座いますが、先づ十中の七八迄は、高等女學校で終はるか、左なきは更に技藝專門の學校に這入りまして、女敎員か裁縫の先生位で終るのが關の山で、夫れ以上の希望に對しましては、殆んど女子には高尙の理想が乏しいかのやうに察せられます、好し其程の思想が有りましたにしても、實に僅のものであつて、今日の有樣から申せば、到底完全な女子敎育を期するといふ事は、餘程至難の事であらうかと思はれます、勿論女子敎育の目的と致しまして、第一其主眼とする所が、取も直さず良妻賢母たる可きものを養成して、夫れから、他日善良なる家庭を作るの資に供する人材を養ふのに在るのですから

技藝ばかり發達しましても、其思想が極めて偏屈であつて、そして品格までが野卑であつたならば、到底善良な家庭を作つて、子女教育の大任に當るといふ事は出來ませんから、女子は寧ろ技藝よりも、先づ精神の修養に重きを置かんければなりませぬ、と申しても決して技藝を賤しむのではありません、勿論女子に取りては、技藝も極めて必要で、家庭の福樂を扶くるにも、重大の關係を有するものでありますから、精神修養に次で女子はどうしても、一通りの技藝は修めなければなりません、技藝修養の有無は、直接一家經濟の上にも關係を及ぼしまするし、又男子の慰藉者といふ側より申しましても、思想の高下と技藝の有無とが、互に密接の利害を伴ひまするから、技藝も必要には相違ありませんが、去りとて技藝一方に偏して、精神の修養に少しも着目せない所の今の教育法は、甚だ不完全のものと私は斷言するに憚からないのであります。

其處で精神教育の滿足を圖る爲に、今日の女學校よりも猶一歩進んだ、高尚な程度の學校を設立致しまして、成る可きだけ門戶を開放して、女子に修學の自由を得せしめたいといふ、是れは私し一個の持論で御座います、成る程日本には女子大學などもありまして、高等女學校卒業以上のものを、教ふる程度にはなつて居りますが、是とても日本全體で以てやつと一校か二校位しかありませんので、是れから益々增殖して行く、多數女學生の希望を滿たすといふ事は、到底不可能の事であらうかと、私は考ゆるのであります、是れに反しまして、歐米各國の有樣を見ますると、只もう羨ましいやうな譯で、まあ女子大學の多いのが獨逸と米國、就中獨逸丈けでも其數が殆んど二十程もありまして、實に其教育は行屆いたものであります、殊にバハリア大學などと申しますると、主に女子を本科生として入門を許したもので、男子同等に專門の學科を修めるのでありますから、獨逸は醫學の發達を以て世界に誇るが如く、女子迄が高等の醫學を研究

しまして、學士や博士に成つて居るものは、澤山に御座います、獨り醫學ばかりでなく、是れに伴つて他の學科迄が、男子同樣に修めらるゝのでありますから、神學などは女子の最も喜んで修得する所で御座います、又米國などでは、御承知の通り最も自由の盛んな所でありまするから、從て學校なども皆自由開放主義でありまして、日本の學校のやうに甚しい制裁や階級が、少しも設けられてありませんから、一般に女子敎育の程度が、能く進步して居るので御座います、之に反して、日本では高等女學校以上になりますと夫れ〴〵一定の制規がありまして、一寸した專門の學校へ入門するにさへ、却々容易の事ではありませんので、甚だ不便極まるやうな事になつて居るので御座います、例へば東京に在る女子大學へ入門するには、五年卒業の高等女學校を出たものでなければならんといふやうの有樣で、四年卒業の高等女學校を出たものでは、到底入學が許可されんので御座います、僅か修業年限に一年の差があるとないとで、其所に非常の懸隔が生じまするので、決して女子の爲に便利な喜はしい現象とは、私はどうしても思はれんので御座います、何故我國の高等女學校の修業年限が、こう二樣の區別を生じたので御座いませうか、勿論夫れは地方の狀況に基いたものにも相違は御座いますまいが、夫れと申すも女子敎育の方針が一定しないからで畢竟女子に取りては、甚だ不便極まる事と、私は竊に危まねばなりません、又女子大學の方に取りましても、勿論是は入學者其者の、學力程度を一定したものに、相違はございませんが、元來女子は男子と違ひまして、其學力程度が男子程重要でなく、隨て又其社會に活用する所の區域が甚だ狹小であつて、直に男子同樣の制裁を加へる事が出來ませんのみならず、女子は技藝の熟練に兼ねて、精神の修養を本とするのでありますから、入學程度にかやうの制限を設けるといふ事は、第一敎育普及といふ主眼に叛ける形ちといはねばなりません、若し今の敎育法が、精神的修養を積むといふのにあらずば、決して入學資格を問ふ必

要がありませんから、可成は情況の許す限に於て門戸開放の主義に變更したいのであります、此樣申上げますると、餘り極端のやうでありますけれど、若しも學力程度が卑いものは、其以上の學校に入學する事が出來ないといふならば、勢ひ獨力で研究した上でなければ、自分の希望する學科を修める事が出來ないので、さうなる迄には茲に多少の年月を費して、入學資格を養はねばなりませぬ、それもづうつと進歩して、世間一般に女子の學力が、男子同樣に發達した時ならば、如何樣の制裁を設けるのも好いのでありますが、まだ〳〵今日の如き幼稚の時代に、そんな制裁を設けるのは、却て女子教育は或る一定の限界に劃せらるゝ譯で、決して其れ以上の發達を期待することは、到底出來ない事と私は考へます、で高等女學校を卒業したものには、其れ以上の學校に、自由に入門が出來るといふやうにしたいのが、私の持論でありまして、どうしても精神の修養を重ねて、完全な人格を作ろうとするには、相當の學殖を得ねばなりません、勿論是れには又多少の弊害が伴つて、一般に學力程度の卑いものでは、入學してから非常に骨が折れまして、其れが爲め成功を見ない内に、中途退學するといふやうな事も出來ませうけれど、是等は其人の忍耐力と、勉勉心の如何にも依るものでありまして、是れが爲め一般の女子に迄も、此樣の制裁を加へるといふ事は、如何のもので御座いませうか、僅か修業期限はたつた一年の相違があつた丈けで、其學力程度に非常の懸隔があるものとは、私はどうしても思はれません、好し有つた處で敎科書の一と二丈けの相違で、一を讀む者は必ずしも二が分らんといふ限りは御座いません、只一を讀み得る丈けの素養があれば好いので、二が讀めないからといふて、全然其學力程度を否定する事は出來ません、勿論今日の女學校はどちらかと申せば、まあ技藝教授が重もでありまして、又其技藝が單に技術の練熟を要するばかりでなく、例へば裁縫のやうなものに致しましても、理論を標準として、其原理から敎ふるので御座い

ますから、全然學力の乏しいものでは、どうも致方は御座いませんが、而も相當の理解力があつて、そして普通の學力さへ備つて居たならば、好しや一年位な入學資格が低くつても、入校後の成績に左程懸隔が起るものと、私はどうしても思はれません。

近頃は女學校の種類が澤山出來まして、講習會なども種々開かるゝやうな有樣で御座いますが、是等は何れも技藝練習を目的としたもので、是以上の學科や、精神的教育を主眼とした學校の少ないのは、實に遺憾な譯でありまして、到底教育の盛況と云ふ點に參られません、餘り極端だかは知りませんが、今の教育は、職業教育とでも言ふ可きものでありまして、どの學校も、どの講習會も、女子自らが他日成業の場合に獨立の糊口を凌ぎ得るといふ丈けの、技藝を授くるに過ぎないのみならず、女子躬からも只此樣に單純な目的を抱いて居るものゝみですから、學校さへ卒業すれば、別に男子に便らなくても好いといふやうな考へで、自ら増長心を起しまして、貞淑温良などといふ女子の德性は、何處へか捨てゝ仕舞ふやうな形ちになるので御座います、成程女子には一通りの技藝も必要には相違御座いません、いや一通りの技藝は具へて居なくてはなりません、けれども好し如何程の技藝が有つたにしました所で、若し思想が劣等であつて、品性が甚しく野卑であつたならば、到底家庭の主宰者として、立つことは出來ないであろうと、私は斷言いたします、勿論女子教育の主眼は、他日の良妻賢母を養成するにあるので、畢竟圓滿相熟の家庭な司配して、子女教養の大任に當り、一方には男子を扶助して交際社會に立入り、一方に一家の經濟を處理して、和氣靄々たる幸福を助長するにあるのですから、思想の高下と品性の尊卑とは、尤も是等の事に大なる影響を及ぼすものですから、女子は寧ろ技藝の修養よりも、精神の鍛錬を第一の心懸けとせねばなりません。

扨て夫ならば如何にして女子を導き、如何にして精神教育の普及を圖るかといふに、今日の有樣よりも、づ丶と女子の地位を高く進めて、尙一層高尙の學科を修めしむるに在るのです、さう致しまするには、今日の女學校では甚だ不完全でありまして、女子大學と申しましても、甚だ少數でありますから、まつと大學の數を殖しまして、入學の自由を許すのであります、そして一方には帝國大學や高等學校などの門戶を開放しまして、本科なり撰科なりへ女子の入學の出來るやうにして、自然と其素養と位置を高めるやうに致したいので御座います、畢竟精神教育と申しましても、宗教や倫理の如き、哲學的方面ばかりで決して遂げらる丶ものではありません、其位地が高くなると、修養が重なるとに從ひまして、思想も品性も其れに準じまして、發達するものでありますから、何んでも是れは一步進んで、今日よりもまつと高尙な學問を、させんければならぬので御座います、例へば世に下等の婦人と申しまするのも、畢竟は地位が低くて修養が足らないからで、如何に藝術や學問が出來ましても、其思想や品性が劣等であつたならば、其婦人の司配する家庭は、勢ひ劣等野卑のものとなるもので、斯の如きは又完全の婦人と、いふことは出來ないのであります。

此樣申上げまずると、餘り大袈裟のやうで御座いますが、實際西洋の教育法は、男子も女子も一切皆平等でありまして、更に階級といふものがありませんから、女で學士や博士になつて居るものが澤山に御座いますが、日本ではまだ夫れ程に進步して居ないのみならず、女はそんなに學問なんか仕込むに及ばぬといふやうな、一般の風習になつて居りますので、女子の地位は餘程低く丶なつて居るので御座います、是れと申すのも、日本は西洋と違ひまして、生活上の事から社會上の事まで、總て男子に依賴して、女子は知らぬ顏で濟ますといふやうな、妙な傾きがあつたからで、夫れならば女子に左樣な高尙な學問は不必

要かと申せば、決してそんな譯は御座いませぬ、第一男子に依賴するといふのが、大なる間違で、例へば社會の慈善事業であるとか、乃至又教育事業であるとか、女子の負擔すべき事には、男子に構はず自分で脊負つて立つといふ勢ひでなければなりません、世の中が追々進歩するに從ひまして、男子は益々多忙になりますから、女子事業の領分迄、男子の手を煩はすといふ事には參りませんから、勢ひ女子の要求が多く成るので御座います、さうなりますると、只家庭の司配や、一家經濟の整理ばかりして居る譯には參りません、或る場合には多數團體の事務も取らんければならんのでせうし、又慈善會だとか教育會だとかいふ、公共結社の會計もせんければ、ならない事もあるでせう、其場合に至りまして、自分の地位と責任とを滿足に保つて參りまするには、どうしても修養が第一で、修養さへ充分に供はつて居つたならば、品性も思想も自ら高尚になるもので、畢竟精神教育の結果が、美はしく現はるゝことになるで御座いませう、以上述べましたる事は、女子教育の發達に伴ひまして、將來女子から社會に要求すべき、事柄に屬するのみならず、追々西洋の例に倣ひまして、婦人の希望が進むと同時に、從て其地位が今日の程度よりも高くなり、且つ其精神が高尚になるに連れまして、始めて完全なる理想の良妻賢母が、求めらるゝやうになろうかと、私は、私從來の教育上の經驗に照しまして、敢て斷言するに憚からないので御座います。

次に一言して置きたいのは、戰後に於ける婦人の傾向で御座います、戰後吾が婦人界に先づ必要を認められますのは、婦人團體の勃興で、上下一致の實を擧ぐると云ふ事であらうかと思ひます、申す迄もなく、今回の戰爭に就きまして、愛國婦人會などといふ、結構の團體が出來た爲に、漸く上下接觸の端を開きまして、婦人の獨立事業が、其獨立思想と共に必要であるといふ事を、認められたのは事實で、今後は益々貴賤の階級がなくなつて、平等に一致提携の實を擧ぐるに至るであらうと考へます。（文責は記者にあり）

女子の修養

島田三郎氏談

左に掲ぐるものは、頃日、島田三郎君を往訪して得たる、君の女子修養談なり。意に於いて差ふ所なきも、文責附より往訪者にあり。

女子、特に女子の修養に關する考へとては、人としては男子も同一で、社會の必要上男子の修むべくして女子に不必要なことも、男子に不必要にして女子の必ず修むべきこともある筈です。

こは往訪者が、ルソーのエミール中に説ける、女子教育の特異點を以つて君が意見を質したればなり。凡そ、男子には男子の天禀あり、女子には女子の天禀あり、心的狀態を以つて言へば、女子は男子に比して、意弱く情強きものなり、而して、其の情の強さは何に原因するか、恐くは、其の身體の構造、生理の狀態が、情に強き心的狀態に適するものならんか、且つ、普通の呼吸に於いては女子は男子と同じからず、即ち呼吸の仕方淺くして稍急なれば、脈の數も男子よりは多し、是等の事が腦髓と關係して、自然、深く慮るに適せず、細く注意することに適するにはあらざらんか。即ち是を以つて君が意見を叩く。

成程、生理上にも其樣ことがありますな、未だそれに就いて考究したこともありませんが、生理と心理とは固より直接の關係を保つて居ますから、教育を施す上からは充分考へなければなりますまい。

私の考へでは、女子は概して虛榮心が盛な樣ですが、これは、大いに害のあるものですから、如何でも

撓め抑ふる必要がありませう。

私共も自ら知つて居るですが、實に過ぎた名、分に過ぎた譽を得ると、勢力に過ぎたことをする様になるから、爲に志を損じ、品位を傷ふ様なことに立到るもので、私も多少世間に名を知られた爲、いろいろな場合に今では困ることが多いです。

現に住んで居る此の家でも、或る關係から極めて安い時に買つたのが、今では高くなつて居るから、人には澤山に金でも持つて居る様に言はるゝこともありますが、其實借金があるばかりで、

島田君の居宅は麹町中六番町なり。大小多數の室は極めて清潔に、前庭後園の樹木頗る幽邃の致に富む是を見て君が富めることを言ふ者無きにあらず、而も君が清廉も亦君を知る者の等う言ふ所なり。

私は只安んじて、心靜に自分の所信を行ひ度いといふ、極めて慾の薄い希望を常に持つて、或は名を得度いの、立派な邸宅に居度いの馬車に乗り度いのといふ考を毫も持ちませんので、家内の者に異存もありませんから、居宅なども、もつと小い所へ移り度いと毎に思つて居るのですが。兎角虚榮心は志を損じ低げんでも濟む頭を低げて、自己の品性までも傷ける、賄賂などを貪る、心にも無いことをするなど、多くは實に過ぎ、分に過ぎたことを求むるから原因るやうです。

君が奢侈虚榮を誡むるは其の平世の持論なり。君が是を言ふや、言々悉く眞情より出で來る。或は君が平生を指して、極めて質素といふにあらずと爲す者無きにあらずと雖、是等は質素と放置とを混同し、儀容を整ふると奢侈とを混同したるものゝ言のみ、破帽弊衣の書生などが、當代の名士沼南先生と自己とを比較べて左右言ふものゝ如きは言ふにも足らず。話頭は一轉して、當時世上の問題たる、賢母良妻主義の適否如何といふ上に移れり。

人間と限らず、凡て生物に存續といふことが天理ならば、善良に子を育てるのは人として必ず爲べきことでございませう、そこで、父と母と何れが能く、子の保育に適して居るかといふに無論母だらうと思ひます。されば、母の賢不肖は直接に保育せらるゝものへ移る譯ですから、偶然稱へられた賢母主義も此の天理に適つて居らうではありませんか。

人は家庭を形成りますから、父と共に子の保育に關りますが、他動物の父は子を捨去つて、存續者の保育には關らぬ樣です。

往訪者は稍打案じて、燕、われは父母して保育する樣ですが、他の物は總て……といひしが、後にて思ふに、尙ほ鳩、其他にもあるものゝ如し。

左樣、然し彼等も、母が最初巢に就いて居るから、父が餌を獵りに行くので、其等の點は犬猫などより、燕の方が人間に近いかも知れません。

茲に說到つて先生微笑を漏らす、凡そ人の談話を、筆に依つて傳ふることは到底能ふべからざることなり、速記は能く其の言語を寫せども、話者の態度を寫すべからず、音色、音容—音長及び音幅—を寫すべからず、而も談話は凡て言語よりも、話者の態度、聲の抑揚、音色音容の交へ方を以つて重しとす。君は、人を以て他動物に倣ふべきものと爲すにはあらず、天理は一樣に洽きものとして、一般生物の、存續者保育の本能が、主として女性に與へられてあらんには、人も亦其理に外るべからずと爲すものゝ如し。

それから良妻といふこと、特に東洋の習慣に染つた頭を以つて此の語を聞けば、何だか、女子が男子の附屬物になる樣な感覺を喚ぶものですから種々の異見もありませうが、それ等は、外の事を大に重しとし、

内のことを小に輕しとして、自然外を尙び内を卑む思想の結果から來たことですが、内外相待たなければ獨立して世に處せられるものではありませんから、内を卑むといふ道理は決してありません。已に内を卑むといふことの無い以上は女子が男子、妻が夫に對する位地は、只天分に應じて務むべき所を務むるだけで、孰れが尊、孰れが卑といふことはありますまい。

然るに、人も其の存續といふことが、一般生物と同じく天理として必要ならば、存續の源たる夫妻相配することも必要で、夫妻相配することが必要ならば、不善良を良しとして善良を可からずとする道理はありませんから、女子教育の理想に良妻主義を置くのも當然ではありませんか。勿論これは存續といふ上より言ふので、婚姻の目的に就いては尙は他にいろ〳〵ありませうが。

賢母良妻主義を以つて唯一の目的とするにあらざれども女子修養の主なる目的とするは君の意見なるもの丶如し、賢母良妻主義に弊ありとするの論の一部は、君に依つて補はれしが、賢母良妻主義に依つて教育せられしもの丶、幸に善良の男子と共にすれば可なるも、不幸にして夫と離れし場合に、其の品位を保つて立つこと能はざるべしとの説は補はれず。女子をして獨立するに足るべき實業教育を修めしむべしとは一時盛に稱へられしところ。話頭は更に轉じて此事となれり。

女子の獨立といふことも一部の議論としては立つでありませう。卑い例を以つて言はゞ、大工の妻が髮結をする、或は夫よりも收入が多いといふ樣な場合に、大工も餘り勝手なことを爲ないなど、是等は只其の一例ですが、男子の品性が卑くて、男子は男子、女子は女子、各其の天分を盡すといふことを知らず、妻をば、唯養ふべきものかの樣に思ふ時代に當つては、獨立し得る程の力を女子に與へた方が、一方は卑屈にならず、一方は幾分他を尊重して、却つて圓滑に治るかでありませう。然し彼の、或は教育家、或は美術

家、音樂家など、一方に秀で、獨立するは別者です。

言ふまでもなく、是等は、獨立するために學問藝術を修むるのではない、學問藝術に專心なるが爲、種々なる關係から獨立して居る人もあるので、稍變則の、一種特別の思想から來て居るのです。獨立の不便に甘んじて學問藝術に專心するのは高い思想に相違ないです。然し、それが高いから兩性相配するのが卑いといふ譯はありますまい。天道の爲に盡すには獨居でなくてはならぬといふセント、ポーロの樣な人もある、釋迦も矢張さうでせう。又夫妻相助けて事を爲す人も多くあつて、皆それぞれ盡すところに盡して居りますから、孰が高い、孰れが卑いといふことはない、高い卑いは各其の思想如何にあるのです。

要するに人としての修養は男女に依つて異る譯はありませんが、家政を料理するとか、子女を保育するとかいふ上より、女子には女子だけの教育と修養とが必要でせう。それに就いて注意すべきは、從來も文學などは隨分、女子自らも修めた樣ですが、物質的科學の方は一般に度外に置かれてゐるやうです。然し、家を治め、子女を保育するには衛生學其他必要なものがありますから、それ等は是非共修めねばなりません。

以上、君が意見は盡されしが、更に話頭は轉じて、精神修養上の事に移る。往訪者先頃赤十字社に關係ある某氏と會せし時、某氏いふ、赤十字社看護婦某なるもの、頃日チブス患者を熱心に看護したるため傳染して、遂に某豫備病院内に於いて職に斃れたり。余、其の遺物を檢せしに、一部の聖書ありて、卷中所々に朱點を施したるあり、自己の意を書き加へたるあり、是等を以て何ほ他と比較するに、宗教上の信念あるものは概して其の思想が宗教心なきものより健全なり。然るに、基督信者は幸に讀み易き聖

書のありて、何所へも携帶し、何時にても讀み得れども、佛教等には然るべき書無きが故に、常に携帶して心を慰むるの便なきもの丶如し。基督教者以外の精神的教育に志ある人は、何とか工夫して、聖書の如くに讀み得らる丶書物を作る必要あらん云々と。訪問者是を以つて君に語る。君、案を打つて語らる。

然うです。宗教心は實に必要で、自分の實驗から言ふも、大いに益を得たことが多い樣です。佛教は一旦支那で譯せられて、傳來の中には種々轉じたところもありませうが、如何も、何所に眞意があるか解らない樣な節が多い樣です、彼の法然上人の一枚起請文は簡單に說き明してあるやうですが、もろこし我が朝に諸々の智者達が沙汰し申さる丶觀念の念にもあらず、又學問をして念の心を悟りて申す念佛にもあらず只往生極樂の爲にはと說いてある、あれが若し佛教の全班を盡したものならば、私は極めて消極的のものと思ひます。

と君が、一枚起請文の初一二句を擧げし語氣、往訪者が其の全文を知れるが故に、他は言はずとも解るならんとの意たるや明なるべし。然るに、其を知らざる人は、君が消極的の物と言ふの意を解すること其を記臆に存ずる往訪者が解する如くならざらん。故に其の全文を示せば、

一枚起證文

もろこし我てうに、もろ〳〵の智者達が沙汰し申さる丶觀念の念にもあらず。又學問をして、念の心をさとりて申念佛にもあらず。たゞ往生極樂のためには、南無阿彌陀佛と申てうたがひなく往生するぞとおもひとりて申外には、別の仔細候はず。たゞし、三心四修と申事の候ふは、皆決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞと思ふ中にこもり候なり。此外に奥深きことを存せば、二尊のあはれみに外れ、本願に

もれ候べし。念佛を信ぜん人は、たとひ一代の法をよく〳〵學すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智の輩に同じうして、智者のふるまひをせずして、唯一向に念佛すべし。云々。

といふものにて、法然上人が、誰にも解らせんため、極めて卑近に、淨土宗の主旨を說き示したるものなれども、尙ほ解し難き節あれば、一二の解釋を試むべし。

佛教……{ ……聖道門(難行道と稱す) / ……淨土門(易行道と稱す) }

聖道門{ 大乘{佛乘 / 菩薩乘} / 小乘{聲門 / 緣覺} }

淨土門……心と行との相應、これを安心起行と稱す。

心……{ 至誠心 / 深心 / 廻向發願心 }　即ち三心、觀無量壽經中の語なり。

至誠心、明鏡の上に一點の塵なきが如く、僞なくして、毫も我と我を欺かざる心と解すべし。

深心、深き信仰心にして、毫も疑を挾まざるものなり。

廻向發願心、他力宗門にしては心を淨土の一方に向けて、一直線に彌陀に向つて進むこと、即ち唯心淨土己身の彌陀にて、誠を盡して我と宇宙の本體と同化するなり。

古來の佛教家を見るに、厭世的の人が多いではありませんか。尤も是は、世を救ふには世俗と脫離して、一段高い所に居なければならぬといふ思想から、だん〳〵間違つて來たところもありませうけれど。

私も閒さへあらば本多庸一君の聖書の講義を聽きに行きますが、妻に就いて、認めたところでも、宗教の力は非常に心を强うするやうです。

相配になつた初の頃には、妻も佛教の信者でして、原來妻の實家は佛教家で、其の家庭に育てられたのですから、御寺詣にも行き、現に最初の子供を失つた時など、基督の式で葬ることは反對で、佛教の式で葬つた程でしたが、鑛毒問題で奔走する頃から、だん〳〵基督を信ずる樣になつたのです。

私はそれを基督敎の力と認るですが、それから非常に强くなりまして、爲るだけのことは爲て、其が爲に如何ならうと、神の定めた運命に安んずるといふ樣な、物事に當つて恐れぬ風になつた樣です。

原來が餘り困難を感じない家庭に育つたので、如何といへば困難に耐へられぬ方の筈ですが、それが寧ろ私の方が勵まされるやうな次第です。あの撰擧の時にも、

昨年春の總撰擧に、三菱一家の後援にて加藤高明、奧田義人の二氏が、初期議會以來君の撰擧區たりし橫濱にて候補を爭ひし時、從來君の爲に盡し、同地の有力者は多く三菱に應ずることゝなりしかば、君は草鞋穿にて各撰擧人を訪問し。遂に最大多數を以つて當撰せしが、當時夫人は事務所に詰切つて、大いに運動を助けられしとぞ。

私は、人と爭つて代議士の位地が得度いといふ考もありませず、幸引込んで置かうと思つたですが、それでは、今まで同情し、信認して呉れた撰擧者に對して相濟まんと、妻が勵す爲に遂に立つたのでござりましたが、若し不幸にして當撰しませんでも、爲して敗れるは爲さずして止むには勝つたのでせう。

感冒と小兒の飛火

瀬川醫學博士談

▲寢冷と薄着　目下赤痢、腸窒扶斯等の流行病が猖獗を極めて居るが、之れ等の注意を嚴重にする事は勿論であるけれど尙一般に衞生上注意すべきは即ち感冒である、旣に殘暑も過ぎて朝夕は頗る冷氣を帶びて來たから、寢冷の爲め又は薄着をしたりすると必ず感冒に罹るのです、朝は大分寒いと思ふと晝頃には汗を流す程暑くなることもある、夫れ故外出する時などは尤も注意せねばならぬのだ、併し之等の事は事新しく云ふ迄もない事なれど知りつゝ注意を怠るは衞生上に有勝ちの事、故に此節の時候では感冒の注意は第一に必要とするのです

▲感冒の豫防　併し時候の上から言つても之れから感冒の豫防としてお勸めするのは冷水摩擦であります、冷水の皮膚に觸れて戰慄すると云ふ程でもなく初めて行る方には直ぐ思ひ立つた此の良氣候からお勸めするので、冬になつて風邪で寢るよりは每朝タオルで冷水摩擦を行れば、心氣自から爽快となり、面倒だと思つた事も次第に其の好結果を顯はすのであります、之れは子供でも婦人でも實行して貰ひたいのです

▲飛火の注意　序に小供の飛火に就てお咄し致して置かう、之れは四季絕へぬ病だが素人の云ふ飛火の中は、水痘、濕疹、水庖疹、膿庖疹などを含んで居りましよう、何にしても小兒は機嫌が惡いので母親も困るのです、之れには多く發熱の伴はれるのであるが、中には熱の發しないのもあります、併し危險な病氣ではないが、子供の體質、皮膚の强弱によつて出來方にも夫れ〳〵違ひがある、此の病ひは全身に出來るのであるから、全治迄は二週間位を要すのです、孰れにして身體を淸潔にし、百倍位の硼酸水で良く全身を拭く事は、此種の疾病に大切な看護法であるのです。

露國皇室の妖星（女皇カタリナ二世の傳）

藤一如
田中花涙

（一）

唯だ一婦人に過ぎざるカタリナ（所謂かざりん）よ。汝が主權擴張の一段に至りては、汝が、帝位を簒奪せる露國皇室に於て有名なる、かのイバン暴帝にせよ、又はペートル大王にせよ、汝が後に撞着たらざるを得ないのである。汝は其夫帝なるペートル第三世を廢し、且つ之を弑して、露國の帝位を簒奪した暴女皇ではないか、汝は如恁暴虐非道の罪業を犯したにも拘はらず、一生の功績尠少ならざる爲め、當時の史學者流は、何れもその赫々たる文武の勳功に眩惑され、汝、北歐のセラミスとも云ふべき暴女帝の大罪極惡をば、在世の當時知らぬ顔をして、飽迄口を噤み、敢て公言爲なかつた。されどその隱蔽手段は到底長く續けられるものでない。何日か乾度暴露するに定つてゐる。

ア、カタリナよ、汝は露國々家に功勞があつた。とは言へ、その罪惡が一たび世に暴露すれば、永年赫々たりし光輝は忽然として消へ失せるであらう。惡運の盛んなる塲合には、一時或は善者に勝つ事もあらうけれど、結局、之れを永久に保持し得る事は、蓋し數理ではない。

請ふ吾人をして、先づ全露國の女帝カタリナ、アレキソブナの事蹟に就て、玆に一編の物語を爲しめよ。

（二）

その暴虐と惡運とによりて、見事露國の大女帝と渇仰さるゝに至つたカタリナてふ一婦人は、西暦千七百二十九年五月廿三日を以て、普魯西國ステッチンに生れ、初めはソフヰヤ、オーグスタ、アンハルドと云つてゐたが、露國へ移つて「オルトドックス」敎の洗禮を受けて、名をカタリナと改めた、父は普國の陸軍少佐、アンハルド、セルブスド伯と云ふ人である。さてソフヰヤ、オーグスタ孃（カタリナの幼名）の幼時は、世に傳ふるところ、頗ぶる稱贊に過ぎて、殆んど信を措くことの出來ぬことばかりであるが、その近臣の記するところに依ると、

「孃は幼くして品行正しく、長じて容色麗はしく殊に愛すべき姿を有せり。敎育は母公専ら之れに任せられ、その傲慢心や、發生の兆あるを見るや、早くも之れを抑壓し、また務めて上流の婦人或は名士の間に來往せしめたりき。」

孃は至つて讀書を好み、又銃獵を嗜み、諸人と共に屢々遊獵に出掛けられた事があつたと。かくて孃が十六歳の青春を迎ふるに至り、玆に露國帝室に嫁すべき好機運を獲得したのである。これ全くその母公の奸計と、孃の貪慾とに由るので、時の露國皇帝は女帝であつて、エリザベスと云つたが、この女帝、終生夫を迎へずして、嗣子がなかつたゆゑ、千七百四十二年に、アンハルド公チヤールス、フレデリックを養つて嗣子とせられた。即ちペートル大王の女の生まれた王子で。十四歳の時、サンペテルスブールに迎へ給ひ、例の「オルトドックス」敎に改宗せしめられ、名をもペートル、フエルドローキッチと改め給ふた。そして大公爵を授けられ、尚も勅命によりて元老院加入式を執行したる上、公然露國の皇太子に冊立されたのであつた。

その後三年を經て、エリザベス女帝は太子に夫人を迎へ給はんとて、普ねく獨乙列國に書を送つて索

められたが、殊にアンハルド伯夫人に厚く懇囑されたのであつた。非常なる大望を達するは此の時にありと、早くも見て取つた伯爵夫人は、ソフヰヤ、オーグスタ孃と共に即時國を發途して、遙々サンペテルスブールに立たれたのであつた。元來アンハルド伯夫人の同胞たるホレステーン伯と云ふ人は、即ちエリザベス女帝の幼時に婚約された人であつて、初め女皇は深くホレステーン伯をば愛慕されて居られたのであつたが、不幸にも、結婚數日前に、伯は俄然黃泉の客となられたのであつた。斯かる事情があるにも拘はらず、女皇は、夫人來着の初頭は、至つて之を冷遇せられた。併し夫人が如悸内にも、操縱の技倆と、得意の能辯を弄し、徐々として巧みにもちかけた爲に、有繫に頑强の女帝エリザベスも、故ホレステーン伯のことゝもを憶念して感泣し給ひ遂にその愛夫の姪女ソフヰヤ、オーグスタを大公爵ペートルの妃とすることに約された。而してその大公爵に對しては、儀式的にすらも、その諾否如何を問ひ給はず、婚儀は追つて執行することゝなし、ソフヰア、オーグスタ孃をして「プロテスタン」派より、露國々敎「オルトドックス」敎に轉宗せしめ、名さへカタリナと改めさせ給ふたのである。

（三）

かくて孃は大望の端緒を握つたとは云へ、定めなきは人事の常とかや、果然一朶の黑雲群がり起り、まさに孃の榮達を遮斷せんとした。大公爵は元來虛弱なる體質であつたが、此時俄かに惡症の疱瘡に罹り、一時は生命も危く見えたのであつた、が辛くも死だけは免れ給ふたので。けれども惡疾のために、顏面歪みて、數多の痘痕を殘し、その醜さと云つたら、惡鬼羅刹もかくやと思はれ見るも身の毛の彌立つばかり。アンハルド伯夫人が、その平癒を祝さうとして、初めて訪問された時には、驚愕のあまり號泣し、走り歸りて之れを孃に告げ、豫め覺悟を極めさせたといふ程であつた。が、帝位をも簒奪しやうとの大望を懷抱けるカタリナは少しも驚かず、大慾に

眩らめる者の眼には、惡鬼も天人と見ゆるなるべし。と云けん如く、直ちに大公爵の室に赴き、走り寄りて之れを抱き、少しも嫌惡する樣なく、その平癒を祝されたのであつた。けれども實は虛僞の喜悦を裝つたので、後自が室に歸るや否や、母公の手に靠れて氣絶爲たとは、如何にも笑止千萬なことである。

大公爵とカタナリとの婚儀は、盛大なる式を以て執行されたけれど、夫婦間の不熟は、到底人の眼を蔽べくもあらず。この絶倫の美婦と、この無類の醜夫とが結婚あつてこの方、幾ばくもなくして不平と苦情は並び起り、加ふるに大公爵（皇太子）の行狀が次第々々に修らないやうになつた。それは露國の國風を喜べる守舊黨は、大公爵の依然として、故國普魯西の習風を守らるるのを快からず思ひ、ベストチエッフ大臣を首め、閣臣の面々は、この期に乘じて務めて其良友を遠ざけ、大公爵を故意に放蕩に誘ふたからなので。大公爵が嘗て人に語つて、

『予が權力を掌握するの日に至らば國敎たる「オルトヾックス」派の專制を解除して、等しく他の宗徒をも保護しやう。』

と言はれたことがあつたので、之れを聞いたる「オルトヾックス」敎の徒黨は、大公爵こそ、彼の神を忌み、人を殺せる普國のフレデリック大王と同說同感の人だと恐愕し、又激憤して、竊かに徒黨を興し、太子を皇嗣より廢除して、その幼男ポールを以て之れに代へやうとの密謀をめぐらしたのである。

皇太子に反對の一派は、劈頭第一、カタリナを自分等の黨中に加へて、皇太子とエリザベス女皇との間を裂かうと謀つた。エリサベス女皇は親らが大酒家であるのみならず、極めて內密に夜宴を催すことすら、屢々されたのにも拘らず、皇太子の放蕩なるを何等の忌憚なく面責して、一歩も宥恕されなかつたのであつた。女官ジョアナが嘗て皇太子のために女皇の前に執り成して、

「殿下御失行の原因たる、要するに敎育の乏しきためなれば、さまでに咎め給ふことかは。」

と申し上げた。すると女帝は怫然として氣色を變へ嬌聲を荒らげて、

「これジョアナよ、汝は西比利亞の路を知るか。」

と叫ばれたのであつた。女官ジョアナは驚ろき怖れて御前を退き、またと再び皇太子のために、何事も言はなかつた。その西比利亞てふ語は、即ち西比利亞へ流竄せしむるとの諷刺で、この露國北漠の寒地たる西比利亞は、罪人を流竄する處であることは、言はずとも讀者の熟知せらるゝ所である。

（四）

此時已に皇太子妃カタリナは、博く上流の士人敎職等と交際し、その説を聞いたり、又は日ごとに「サレクト、カザレ」寺に詣でゝ、さも神妙らしく禮拜し、貧民などを見ると、如何にも忍び難なの面色で、定まつたやうに物を施された。天下に僞善者は少くないが、かくばかり大膽なる僞淑女は、又と他にあるまい。云ふまでもなく、皇太子その人の素行が、修らなんだに相違ないけれど、等しく醜行あるカタリナには、毫も之れを責むべきの資格はないのだ。シトリル、ラズモフスキーと云ふ者があつた。これはカタリナ等一の寵人で、もとは三絃を彈いて、旅稼ぎをして居たものであつたさうだが、後に勅命を以て武官に列せられ、中學校長と迄になつた。第二の寵人はサルチコフとて、前には大公爵家の家令であつたが、如何なる譯があつたか、その大公爵を捨てゝ、今はカタリナの腹心の者となつてゐるのである。

然るにカタリナの母公たる、アンハルド、セルブス伯夫人が、次第〳〵に帝室より忌み遠ざけられるやうになつた。それは丁度この頃のことで、遂には露國より放逐されて、歐洲各地をさまよひ歩き、後辛くも佛國の宮廷に養はれて居つた。母のアンハルド夫人が後、千七百六十年にルクセンブルグで死なれたが、その時若干の負債が遺つてゐたのを、カタリナは頑として之れを拒み、債主に辨償しなかつたとか。また以てこの母子の間を察すべきである。

露國の宮中には、斯の如き怪事があつたのだけれ

ど、人民等は九重の雲深き園生に、斯くばかりの妖星が輝いてゐやうとは、夢にも思はなかつた。

外面如菩薩の彼れカタリナをして、俄かに女帝の信を失はしめやうとするのは、決して容易のわざでない。と見て取つた皇太子は、いづれ他日機會を待つて爲すべき事もあらうと、そのまゝオーンボルグの地に赴き、侍從の將卒――悉く普國の軍服を着す――を訓練して居られた。併しながら其も空の事で、飲酒彈琴、空々として徒に長年月を送つたゝめ、大事を取り逃して、遂に帝位を失ふの基とはなつたのである。

皇太子と、其妃カタリナとの衝突の時機は遂に到着した。一千七百六十二年一月三日、エリサベス女帝が崩御されたので、太子即位しペートル第三世と號された。ペートル第三世は、カタリナを廢し、その子を私生兒として愛嬪エリサベス、ロマノフナを納るゝ意であつたが、それも心の内に決心されたのみ。――遮般の消息は歴史も口を噤ぎて傳へないので、吾人は之れを知る由がないが――別段何等の備ふるところもなく、放埒を事として、空しく時日を過ごして居られた。即ちこの優柔不斷こそ、カタリナ一黨の爲め、非常に利益となつたのである。殊に不思議とも謂つべきは、新帝ペートル第三世の愛嬪と、其の姉妹なるダシコツフ公爵夫人とは、共にカタリナの黨中にあつて、而かも屈指の謀臣であつた事で。

カタリナは寺院の參詣と、貧民の救助とを怠らず、近衞の將士には禮を厚くし、物を賂ふ等、百方人望を收むるの手段を運らし、茲に機の漸く熟するを見て、一黨の者相議し、八月上旬（即ち一千七百六十二年）を以て事を擧ぐるに決せられたが、思も寄らず、黨兵の口から密事が洩れたので、餘儀なくその期を早めねばならぬことゝなつたのである。

（五）

七月八日、カタリナ黨兵の隊長、パスッチは捕縛されたが、獄中よりダシコツフ公爵夫人に書を送つ

て、「早く事を舉げ給ふべし。さらずば大事去るの悔あらん。」と促がした。その書はオルロッフ家之れを受け、家人アレキシース直ちに馳せて、カタリナとダシコッフ夫人との旅行地、フヰンランド灣なるモン、フレーシルの避暑館に赴きて、之れを兩人に手渡した。カタリナは之れを見て、一身の危急存亡、かゝつて此の瞬時にあるを察し、急に叛兵を招集して、その中に怯懦なる者でも見ると、勵聲一番、「婦女子であつても、妾のやうた剛膽の者もあるぞッ。」と諷し、或は、「妾は雄心勃々であるぞ。」など叫んで、專ら一隊の勇氣を皷舞するにつとめられた。實にも此時や、一髮千鈞の機會であつた。さればその言は衷心より發したので、故らに虛勢を張つた言葉ではなかつた。

かくて夜半の頃、カタリナとダシコッフ夫人とは、ともに服裝を換へ、用意の農車に乘つて、アレキシース、オルロッフ馭者となり、サン、ペテルスブールを指して出發された。此夜一天晴朗、星さへ落々として、一翳の雲だも認めなかつたが、何故か、中途にして馬が仆れたので、これが爲めに周章狼狽、且つ失望したカタリナは、殆どなすべきようすがもなく、帷幕の臣アレキシース、オルロッフすらも「ムはや大事を思ひ止りたまへ。」と直言した位であつたが、剛膽あるカタリナは、

「此期に及んで、さやうな心弱きことを云ふべきものでない。」

と諭し勵まし、一同徒歩にて、約二十丁も進んだが折しも帝都の方より一輛の馬車、轣轆として軋を立てゝ進んで來た。誰ならんと近づき見れば、他人ならぬグレゴリ、オルロッフで、渠はカタリナの着京が遲いのを心配して迎に來たのであつた。カタリナは幸にこの馬車を得たので、翌朝七時に宮廷に達することを得たが、その時「イスメロフスキー」の衞兵數百人が平裝のまゝで、カタリナの身邊に來集し、「女帝陛下萬歲」、「反賊退散」、「新敎叛徒滅亡。」などゝ絕叫した。カタリナは見兵の少いのに驚いた

が、毫も疑懼する色を顯さず、直ぐと慷慨過激なる演說をして、衆を勵ましたので殺氣は見る〱露都を覆ひ、九時頃になつて、二千人の壯兵犇々と來集した。カタリナは騎馬にて此等の兵を引率して盛服の教職數人を伴ひ、驚き騷ぐ群衆の中を過りてカザン寺に赴き、ノヴヲゴロド大教正に就きて、戴冕式を行つた。此時教職一同は頌歌を誦し、市中の各處には教畫を掲げ、あらゆる樓鐘は殷々と祝典の聲を齎し、祝砲は轟々と新帝の即位を祝した。此日新帝カタリナ二世大女王は盛裝してオークの花冠を戴き閃々たる白刄を手にし、悠然として鞍馬に踞し、幾多群衆に謁見されたので、さしもの洶々たりし人心も、この一奇觀のために忽ち鎭靜して、皆な異口同音に、

「女帝陛下萬歲、國母カタリナ萬歲。」

と絕叫し、その聲さながら天地を震動させた。帝都の人民旣に斯の如くであるから、革命は全く成つたと云つても不可はない。

（六）

後年名を揚げたポテムキンが、始めて新女帝に知られたのは、實に此際にあつたので。時にポテムキンは騎兵隊の旗手であつたが、女帝の兜に飾羽のないのを見て、殊勝にも自分の飾羽を取つて、之れを女帝に捧げた。すると女帝は欣然として之れを受けこれより此美少年士官は、新女帝の知遇を蒙むることゝなつたのである。

一面ペートル帝の方は如何にと見るに、帝はこの危急一髮の時期をも察せずして、徒らに時日をペートルホッフに送り、旣にして帝都の警報に接するに及んでも、彼れ叛徒能く何をか爲さんと、輕蔑してこれが備だもなさず、猶且荏苒として日を送つて居られたが、一たび叛兵の勝利を聞いて、今更ら心も挫くばかり、劃策のよすがもない位狼狽たのであつた。

時にムニチと稱する忠誠なる士官があつて時を透さず、叛徒を征伐あるやうに皇帝に勸めて、

「サン、ペテルフブールも今や殆んど皇土でない有様に立至つて居ます。よしや全都をあげて兵燹に罹らうとも、それを顧慮して居る場合でありません。それはたゞ叛徒の流血を以て消す丈のことでございます。」

とまで切諫した。けれども帝は踏躇逡巡、急に處するの法を知らず、迂とや云はん愚とや言はん、之れを斥けて大臣オロンゾッフを特使に、カタリナの許に遣し、速かに悔悟順歸すれば、その叛逆の罪は措いて問うまい。さもなければ、討滅目前にあらうぞと告げしめる事に定め給ふた。何んと迂濶千萬ではないか。

大臣オロンゾッフがペテルスブールの宮廷に到着した時、カタリナは玉座に在つて臣民の朝観を受け、苟も躊躇して此旭光の前に平伏を敢へてせざるものは、直下に照り殺されんず勢である。かくと見たる特使大臣は戰慄して言の出ずるところを知らず、再拜恐惶、辛うじて皇帝の旨を傳へた。するとカタリナは傲然として、

「汝能く之れを察せよ。事を起したものは朕ではないぞ、朕はたゞ人民の衷情を容れたに過ぎないのである。」

大臣はこの答を得て退り出でんとしたが、カタリナは、ハタと睥まへ、

「汝もまた朕の臣下と同樣、朕に忠意を表せよ。」

と嚴かに語を重ねた。

勝運既に新女帝の身に歸し、生殺の大權また女王の手にあるのだ。

大臣は一議に及ばず命のまゝに、跪いて忠意他なき旨を誓つたのである。そこで退出することだけは許されたが、命を待たずに此處帝都を去ることを禁ぜられた。

危難いよ〳〵目下に迫りたるペートル第三世は、有繋に今は猶豫なり難く、初めて忠義の士、ムニチの諫言に從ひ、共に輕舸に乗つてペトルホッフを發し、クロンスダットに航したのである。けれども機

や遅し、其他の海陸兵士は、早くも擧つて新女帝の黨人となつて居たので、その司令官は、ペートル帝の一行に對し、無論にも放言大聲して、

「若し强いて上陸さるゝに於ては、船諸共に撃沈しやうぞ。」

と脅嚇した、ムニチは獨り泰然自若、少しも恐怖の色もなく、

「兵士等はたゞ脅嚇するだけのこと、實際發砲など致す氣遣はありませぬから、早く海岸に飛び上り給へ。」

と勸めた。が、皇帝は之れを聽かず、走つて船室の內に隱れ、侍女等と共に悲泣されたのである。苟も一國の皇帝たる身として、弱々しい事ではないか。船は已むなく、ペトルホッフに引き返された。ために賴みの綱も今は切れて、逃るゝ手段も早や盡きはてて了つたのである。

此場になつても愚鈍なるペートル帝は、なほ未だ悟らず、カタリナには結婚の恩こそ施してあれ、毛頭ほども怨まるゝ謂がないから、よもや我が帝位までも奪ふなんぞと云ふことは萬々あるまい、と思ひ込み、况して生命までも狙はうとは夢にだも思ひ寄らぬ所であつた。そこで耻かしいほど謙讓を極めた手紙をカタリナの許に送つて、そなたより謝さずもよい。朕は過失を謝し、且つ皇后に帝權を讓與しやうとまで云つたが、併しその返書だになかつた。

危難は歩一歩と加はり、ます〳〵其急を告ぐるに及んで、更らに最も耻づべき一書を認め、以て我が一命を助けられて、退隱料を與へられるならば、予は潔よく帝位を去らうと云ひ送つた。ところがカタリナは其答辭に代へるに、皇帝と廷臣とを捕へて、之れを獄に投じた。而も其待遇苛酷を極め、帝は衣服なく、足袋なく、たゞ襦袢一枚を身に纏ふだけのことであつたばかりか、心なき番兵等が、之れを見て嘲笑せるなど、見るから淺ましき境遇となつた。

（七）

旣にしてパニム伯よりカタリナの旨を傳へて、ペ

ートル第三世は、讓位の式文に署名して、ラプシャに護送せられ、一切の財物を殘りなく奪ひ取られたので、憐れにも廢帝は、黑奴一人と愛犬一匹、それに提琴一個と小說數冊を携帶することだけを許して呉れと哀願された。

ペートル廢帝は、配所に到つた後、哲學に心を潜めて餘生を送らうと決心したのである。然るに殘虐なるカタリナは、廢帝に哲學をも與へなかつた、勿論餘生をも與へない。

カタリナは帝を此世の獄に投ずるのみで滿足しないので、更らに地下の獄に送らうとした。

アレキシース、オルロッフは女帝の密旨を受け、一日テプロッフと共に廢帝を訪ひて、陽に慰言を述べ、ために會食を催ふし、窃に謀つて毒を酒中に投じた。廢帝は酒味を以てかくと覺つたのか、それとも兇人の面色殺氣を帶びてゐたので之れを察したのか、その邊の消息は知るよすがもないが、卒然酒盞を地に投げ、高聲で牛乳を求めたのである。事玆に至つた以上は、二人の兇徒も最早や一刻の猶豫もなり難く、直ちに假面を脫し、腕力を以て劇烈なる格鬪を試み、遂に無殘にも食事用のナプキンを以て、苟も、前露國皇帝ペートル第三世を縊り殺したとは。言ふも忌はしき限ではないか。その後巴里條約に署名し、且つアレキサンドル第二世の戴冕式の時、オルロッフ公爵を授けられた人は、誰あらう此弑逆主謀者の正統後孫であらふとは。

謀殺復命のために、アレキシース、オルロッフが、宮中に伺候した時は、カタリナは方に貴紳等と共に食卓に對坐しつゝあつたが、アレキシースの顏の殺氣、未だ消え去らぬのを見て「何と度胸のすわらん奴ぢやな。」と云はぬばかりに眼光で制し、他室に伴ひ往き、十分ばかりして又席に歸つて來たが、いつもに變らぬ温顏で、饗宴を主宰せること前と同樣であつた。實に類稀れなる大膽不敵の婦人と謂ふべきである。

翌日女帝は、先帝が血管破裂の急病に罹つて、俄

かに上帝の恩招を蒙つた趣を公示し、之れに附するに數名の大醫の名を記せる證明を以てした。且つ宮中に於ては大喪の禮を行なひ、女帝よりの特命を以て全露國中のあらゆる寺院に於て、先帝の靈魂安伏の祈禱を執行せしめた。天を欺き人を瞞し、己れの良心までも犧牲にして、權威に戀々たるカタリナ、露國の謂ゆる大女帝と稱する人は、あゝかゝる外面如菩薩の毒婦を指すのである。

三十四年の長き間は、女帝カタリナは何の憚る所もなく專ら放恣を事として居られたが、內にしては政務を改革し、外にしては兵威を輝かし、かの著名なるイスマイル及びプラーカの鏖戰に、土耳古を服し、波蘭を略し、女ながらも實に、露國の威名を宇內に轟かしたのである。

佛國の不信教的學者輩は、概してカタリナの英傑であつたことを云ひ、極力之れを稱賛し、喋々その美事を擧げて居る。蓋し皆なその事業の末葉のみを尊んで、敢て其が心術如何に及ばないからである。

（八）

今やこの大女帝が終焉の時は到來した。頃しも一千七百九十六年十一月六日、カタリナは心地惡しとて一室に入つたまゝ、時經るも出て來る模樣がなかつたので、待女等は命をも待たで、室內に入つて見ると、こは如何に、女帝は氣絕したまゝ、床上に倒れて居つたのである。人々は驚いて介抱し、刺戟劑を用ゐたので、其功空しからず、一時蘇つたけれども、

「あれッ、妖怪が來て喉を締る。」

と叫んで、怖ろしい眼を見張り、恐悸のあまり、聲を放ちて號泣し――その聲の物凄かつたこと、傍にあつて之れを聞いたものは、永く忘れることの出來なかつたとのこと。――悶え〳〵て遂に瞑目したのであつた。

あはれ露國の帝室たる始祖ペートル大王以來、アレキサンドル第三世、即ち現帝ニコラス第二世の父帝に至るまで、凡そ十一世、歷代のツアール中、此

女帝を除くの外、一人として、或は害に遭うとか、又は自殺するとか、何れも變死せないものはないのであるが、この女帝とても、嚴格なる意味より評せば、やゝ狂死に近いと云ふてよいのである。要するに國威の暴燃なること、他に多く其比を見ざる露國が、帝室の不祥なること斯の如く夥しいのは、そも如何の因緣に屬することであらう。あゝ惡運は如何に强猛であつても、それは永く續くべきものでないと云ふ、天の調理を吾人是れをカタリナに於て看た。否な露國帝室によりて證明されてゐることを認めざるを得ない。

（完）

武家の後室（白須才兵衛後室）

須藤求馬

旗下の士白須才兵衛の後室端春院は、德松君鶴姫君の母君の妹なり。その名を町子といひて、容儀美しく心だて雄々しく、甞て將軍家（綱吉）にみやつかへし、御臺所入輿に付き暇を乞ひ、白須家へ嫁ぎし處、幾程もなく才兵衛卒去し未だ嗣子とてもなく、因て遠藤備前守常友の三男を養子に仰付られ白須家を相續せしめられたり。後室町子刀自は、當時の習として、髮を剃り法體となるべきに、さる事をも爲さず、髮も遂にして養子幼年なるに由て後見となり、諸事に心を配り、先天的慈悲ふかくして、後生專一に心にかけ、常に觀世音菩薩を信じ、朝夕普門品を讀誦し、出家に供養し貧民に施行し、誠に殊勝なる女性なり、又一通りは儒道歌學にも達し、其上取分け武藝を好むゆゑ、召使までに諸藝を奬勵し、家來一統には勿論武藝を出精せしむるに付、附々の役儀を勤むる諸士は、同僚と寄合ひ云ひけるは、勿論惡き事には御座らねど、御女性の身として餘り武藝を勵みたまふ事は、御所存の程こそいぶかしけれど私話までにて、かねて後室の雄々しき氣質莊重なる態度ゆゑ、只管御無用とも言ひかたきとぞ見えにける。後には後室大小をさし、侍女どもにも帶刀いたさせ、

一日下髪に大脇指をさし、側に刀を置き、女中にも皆下髪に麻上下を着せ、家中の徒士小役人に至るまで、改めて才兵衛存生の時の通に禮を受けたまへり。又正月十一日には具足の祝儀などありて鎧着の式を行ふ、時々茶湯の遊を爲すの外は、常に世務を聴くの暇には女中を相手として、乘馬の稽古劍術の試合などありければ、世に例なき女性なりとて、御附々の衆中も不審晴れやらず、或時此事を尋ねければ、後室申されけるは、此方たちの不審尤に候、今天下泰平の御代なるに、女の身として武藝に精を出す事如何と思ふよりの諫めなるべし、全くさにはあらず。悴辨次郎を忠孝の男子と爲し、君の御用にも立てヽ白須家をも榮えさせんとの所存、武藝は女なれども武士の役、さらく氣遣したまふな、物好きには致し申さずとありければ、附人どもある時、後室の常々の有様を公儀を達せし處、將軍家も御笑ひありて積陽夫人は大黒天の母なり、大力にして勇者なり、本朝にては神功皇后は申すも畏し、右大將賴朝の後室政子は、世に尼將軍と稱へられ、天下の制道を爲し、孤兒遺臣をして我儘の振舞を許さず、近くは飯尾豊前守の妻女、遠州濱松城にたて籠り、久しく敵軍を惱まし、十四人の女武士を從へて終に戰死したり、其外女の武勇なる事は往古より甚だ多し、かの女、學問の心得もありと聞けば、定めて是等の事を尤なる義と存じ付いての事なるべし、聊邪の心にては有まじ、誠に甲斐々々しき女なる哉とぞ仰せらる、其後上にも女中を上使として、猶また樣子を見せたまふに、先達て御聞かせなされたるに相違なし、爾後遙か程すぎて、遂に大奥へ召寄せたまふを、後室さては我身持御尋ねならんと覺えたり、何事にもせよ、此白須家へ嫁ぎ來てより殆ど二十年に及ぶと雖、登城せしこと曾てなし、且又女姓としての登城の事世の例も未だ多くは聞き侍らず、此度御免によりて出仕致す事、身に餘りての冥加、家に取りての面目、誠に一門の譽これに勝るものあらじ、有り難き仕合なりとて、諸事を改め支度を調へ、格式の下髪に擢

取り姿、大小を帶し、侍女兩人召連れ、これ亦大小を佩させて乘物の兩側に連れ、夫々の家士を從へ登城ありしが、奥向の女中衆珍らしき行裝なりとて、さゝやき笑ふもあり、又心あるものは感じ入るもありしとぞ。

かくて後室は將軍の御前に罷出御目通たまはり、彼れ此れと御言葉かゝり、御雜談の上、その方平生の樣子先達て來聞及びしが、我れ召ぶとあらば其體にてはよも罷出まじと想ひし所に、誠に感ずる事もなく、勇氣なる女なりとの上意の上、如何やうの心底を以て世の常の女とちがひかく心懸け申事ぞと仰せられしに、後室畏りて、御尋の段、憚り樣ながら御尤至極に存じ奉り候、女の身として武藝等心懸け候とてさのみの事は御座なく候へども、倅辨次郎幼少より女の中に計り生立、其上主人女の義に御座候へば、諸侍どもに武藝の事は存付もなき樣に罷成るべきは必定の事と存じ、女ながら私の身として武藝を心がけ候へば、男子たる者は自然と少々不得手なる者も、是れは男子の役目と存つくべきなり、さあらば、家中專らに武藝を勵み申やうに相成申べく候、さやう御座候へば、辨次郎義も諸藝の稽勵とも相成べくと存候ゆゑ、後々は御用にも立申べくと存じ奉り候迄の義に御座候と申上られければ、將軍御滿悅淺からず、成程尤なる所存なりとの上意にて、種々御言葉の末祿賜はり、世に例少き面目を施し、有がたく御禮申上げて退出し、夫々の役向へも挨拶致して館へ歸られける、此事世評に上り、近來希代の女性なり、寡婦の龜鑑なり女大名なりとて傳稱せられたりとぞ。

▲美音と肉食との關係　肉類殊に魚肉を多く食する國民中には美音の人稀なる由にて伊太利人中にもネーブルス及びゼノアの人には美聲少なく諸威人は最も多く魚肉を食するより唱歌者最も少なし瑞典人は穀類を多く食し美音家の最も多き國民なり鳥類にても肉食するものは嗄聲を發し穀類を食する鳥は音樂の如き聲を發すと云ふ。

學藝

東關紀行講義（一）

文學士　境野天華

端書き

作者は源親行、鎌倉時代の初期に出來たもので、從つて其の文章は和漢を混淆した一種力のある體をなして居る。文章中白氏文集、其の外の成句に基くところ、古今萬葉の古歌を引くところ、其の外和漢の故事に據るところが極めて多い、此等を一々說明することは頗る煩雜に亙り、且つ明かには其の根據出所を指摘することが出來ぬ處もあり、又本文已に昔の事實と歷史とを誤り記したる處もあるらしいので此等は只大體の解釋に止め、全體の意義の通曉を妨げぬ位に止て置いた。漢語と和語との續き樣時に不調和を表はして居る處もあるが、此等は平安朝の末から、鎌倉室町時代にかけて出た和漢混淆文には常に見る所であつて、讀者は現代の眼を以て其瑕瑾のある所を看破し、決して其の顰に倣ふやうなことをしてはいけない。

齡は百年の半に近づきて鬢の霜漸く冷しといへどもなすことなくして徒にあかしくらすのみにあらず。さしていづこに住みはつべしとも思ひ定めぬ有樣なれば彼の白樂天の身は浮雲にも似たり

首は霜に似たりと書き給へる哀れに思ひ合せらる

びんの霜漸くすゞし。次第に年を取りて頭髪が白く變るのを云つたもので、すゞしと云ふのは霜と云つた縁から引き出した語である。

白樂天、有名なる唐朝の詩人。白氏文集は此の人の詩文を集めたもので、平安朝の頃には尤も盛んに行はれ、當時の文學には到る處に其の詩の句が引用されて居る。此の處に引かれて居るのは文集中の送蕭處士遊黔南と云ふ詩に能文好飲老蕭郎、身似浮雲鬢似霜とあるのが其の出所である。鬢の字が此の紀行には首の字になりて居るのは其の意味の上で大差がないからして別の出所を探がす必要もあるまい。

(通解)自分の年齢もはや人間の定命と云はるゝ百年の半の五十年にも手が届きさうになりて居て、年と共に黒かつた髪もいつしか變りて雙方の鬢漸く白く、霜を添へて來ると云ふ如何にも心細い事ではあるが、それかと云つて全然の老ぼれともなりきれないので、何事もせずに日を送ると云ふ事も出來ず、矢張り生きて居る間は何かとこうして世にたづさはりて居ることである。元來何處と云つて定住の場所と云つても確かならぬ流轉の此の身、彼の詩人白樂天が作りた詩の句――自分の身を譬へて見たなら空に飛ぶ行衛も知らぬ雲の如きものであつて、年を經るに從ひ頭に置く白髪の霜は日に置き添ふるばかりである――と云つたのは丁度今の自分の身上を歌つたもの丶やうにも感じられ、痛切の情に堪へぬ

もとより金張七葉の榮えを好まず、たゞ陶潛五柳のすみかをもとむ。しかはあれども山の奥の柴の庵までも、しばらく思ひやすらふほどなれば、なまじひに都のほとりにすまひつゝ、人なみに世にふる道になんつらなれり。これ即身は朝市

にありて心は隱遁にあるいはれなり。

金張七葉金は金日磾、張は張安世、共に漢書（書名）の中に見えて居る人、此の人々は天子の恩寵を蒙むり、七代の子孫に至るまで榮えたと云ふことが書き傳へられて居る、七葉と云ふのは即ち七代と云ふことで、子孫の代々榮えて行くのを木の葉の生ひ茂り芽ざすのに譬へたものである。次に五柳と云つて此の七葉と云ふ字に對して居るなどは對句を喜んだ文壇の餘習として見てよからう。

陶潛五柳、陶淵明（晉の人）自ら宅の周圍に五本の柳を植付けて五柳先生と呼んだ。此の人の事迹は昔から種々の書に見えて居て頗る有名であるので今は茲に述べる必要もあるまい。

朝市にありて云々　文選の中に小隱隱二陵藪一、大隱隱二朝市一と云ふ句がある。此の句の意味は凡て山里や、人遠き森の陰、藪村でなければ隱くれ住まれぬと云ふやうに考ふるのは未だ初心の隱逸者と云ふべきで眞個の隱逸者と云ふものはさうでなくて反つて、人が群がり集りて居る都の町中（朝市）に住まつてそれで尙隱逸の心を失はないと云ふので、著者自身はこう云ふ意味で都の近くに隱れ家を定めて居つたと云ふ辯解の爲めに云つたものである。

（通解）自分は元來彼の昔の金日磾とか張安世と云ふ人達のやうに七代の孫まで榮耀榮華の身分であることを願ふものでない。只昔の陶潛が隱逸を慕ふものであつて此の人にならうて、安らかにのどかに、此の世を送つて見たいと云ふ希望を以ては居るが、然しそれかと云つて強いて深山の奥に隱くれて殊更に世に知られず暮らしたいと云ふほどの願ひは思ひ絶えて居る。それで自分と自分の心を慰めて都近く住居さして世の中の人並みに暮らして行くことである。自分はこれがほんとうの隱逸と云ふべきものであつて、ほんとうの隱逸者は都の町中にあるべきもの、強いて深山幽谷を尋ね戢ふべきものでないと考へて居る。

かゝる程に思はぬ外に仁治三年の秋八月十日あまりの頃、都を出でゝ東へ赴く事あり。まだ知らぬ道の空、山重なり、江重なりてはるばる遠き旅なれども、雲をしのぎ霧を分けつゝ、屢前途の極なきに進む。

思はぬ外に。兼て期する所なく、ふとした事が起りて其の爲めにと云ふ意。

(通解)かくして暮らし行く内に、豫期せぬ意外の事が出來して、仁治三年(四條天皇の御世)の秋の八月十何日と云ふ頃、京都を後に見て、東の鎌倉へと下向する事になつた。此の度の旅行は自分には始めての道中の事であつて(道の空の空と云ふ字には別に意義はない)、道中のさきざき、幾何の山を過ぎ、幾多の湖水海水のほとりを經て行く遙かの旅路の事で、雲を凌ぐ山坂を越え、霧深き谷間、川面を渡りて果てもなき行程の末を辿り辿りて行く事であつた。

終に十日あまりの日數をへて鎌倉へ下りつきしあひだ、或は山館野亭の夜のとまり、或は海邊水流の幽かなるみぎりに至り、こゝに目につく所々、心とまるふしぶしを書きおきて忘れず忍ぶ人もあらば、おのづから後の形見にもなれとてなり。

山館野亭、山上の旅館、野路の旅宿と文を飾りたるもの、高處も平地もと云ふ意。

(通解)十何日かの日數を經て鎌倉には着いたが、其の間に或時は山中の旅館に一夜を明かし、或時は、野中の旅宿に一夜を明かし、又ある時は海近きあたりを行き、或時は河水の流を渡り、潮の音、河瀬の音の幽かなる處(みぎり)を過ぎるにつけても、面白き景色、由緒ある處の眼にも止まり、心の記臆にも殘ることを洩さず玆處に書き記るして

置くことであるか、若し、自分が此の紀行の事を思ひ忘れもせず、心に記して呉れる人もあらうならば、自分一人と云はず、普く世の人々の紀念にもなることであると思つて此の旅行記は書いて見たのである。

以上は此の紀行文一篇の序と云つてもよい、作者が、此の紀行を書いた由緒、因縁を示したのである。

東山のほとりなるすみかを出で、相坂の關打ち出づる程に、駒引きわたる望月の頃もやう〳〵近き空なれば、秋きり立ちわたりて、ふかき夜の月影ほのかなり。ゆふつけ鳥かすかに音づれて、遊子猶殘月に行きけん幽谷の有樣思ひいでらる。

駒引きわたる云々　王朝の頃毎年八月望月の日諸國より牧馬を貢する時、朝廷の使臣之を相坂の關に至りて迎ふるとが例になりて居る。望月の駒と

相坂の關とは能く此の頃の歌に關聯して詠みこまれてある。望月の駒の例に紀貫之の歌拾遺集の中に「相坂の關の清水に影見えて今やひくらん望月の駒」。とあるのは此の一例である。

ゆふづけ鳥　鷄のことを云ふ。木綿付鳥とかくのは昔世の中騷亂ある時、木綿(楮から作りた布)をつけた鷄を京都の四境、相坂、山崎、木幡、松が崎等の關所に贈りて祭をすることになりて居た。之れを四境の祭と云ひ、又鷄を木綿付鳥とは是から云ふのである。此の鷄を此處に出したのは次の遊子殘月に行くと云ふ故事　即　孟嘗君の故事と結び付けん爲めである。」

遊子云々、唐の賈島と云ふ人の曉賦に、　遊子猶行二殘月一函谷鷄鳴、と云ふ句がある。これは此の頃流行した朗詠であつて、其のもとは孟嘗君の故事を云つたものである。孟嘗君は齊の威王の公子であつて、平生食客を多く養つて居つた。其の食客の一人に狗盗と鷄鳴とをなすものがあつ

た。此の人が鷄鳴、即ち鷄のそら鳴きをして關所の番人を欺き、中夜に函谷關を脱して遁ることを得たと云ふ有名なる故事がある。清少納言が歌「夜をこめてとりのそらねをはかるとも、世に相坂の關はゆるさじ」と詠んだも此の故事に基いて居る。

（通解）東山（京都の東方に連なる一帶の山、）の麓なる自分の住居を立出で相坂の關所を越えた。諸國から駒を朝廷へ貢獻する時期八月十五日の望の頃にも間もなき八月十何日と云ふ時節の事であるからして、空には秋霧立ち、深更の月影は爲めに微かに曇りを帶びて見られるのであつた。丁度何處で鳴くのであらう、鷄の聲が聞える。それにつけても彼の昔の孟嘗君（遊子は旅人の事で孟嘗君を指して云つたもの）が從者に鷄の空鳴きをさせて、函谷の關其の爲めに危い秦から逃れ出たと云ふ其の時の光景は今現在自分の前に見えて居る此の場の光景に似て居たのでは無からうかと見ぬ世の昔の事が胸に思ひ浮べられるのであつた。また

むかし蟬丸といひける世捨人、此の關のほとりにわら屋の床を結び、常に琵琶をひきて心をすまし、やまと歌を詠じ、おもひを述べけり。或人の曰く、蟬丸は延喜第四の御子にておはしける故に、此の關のあたりを四の宮河原となん名づけたりといへり。

いにしへのわらやの床のあたりまで
心をとむる相坂の關

（通解）蟬丸と云ふ隱遁者が昔、此の相坂の關近く閑居の草庵を占めて、其處に得意の琵琶を奏で、思を澄まし、また時には和歌をも作りて心をやり、靜に世を過ごしたと云ふことであるが、今日此の昔の跡を過ぎるにつけて昔の人の事が自然と胸に浮べられる。或人が曰ふのに、此蟬丸は實に延喜の帝

即ち醍醐天皇の第四の皇子であるからして此の相坂の關の附近をまた四宮河原と云ふのであると云つた。

昔、蟬丸が草の庵を結んだ跡は此の關所近くと聞いて居るが、今此處を過ぎるにつれて古の事が思ひ出されるのは心が關所に引きとめられるのであらうか。

東三條院石山に詣でゝ還御ありけるに關の清水をすぐさせ給ふとてよませ給ひける御歌「あまたゝびゆきあふ坂の關水に、けふをかぎりの影ぞかなしき。」と聞ゆるこそいかなる御心の内にかとあはれに心細けれ。

關の清水、前に擧げた貫之の歌にもある如く、相坂の關に近い名所で昔からよく歌にも文にも引かれる所である。

(通解)これもまた昔の事、東三院と申上げた一條天皇の御母宮が石山寺に御參詣ありて還御せらるる時(されば事實の違ひがないと云はれて居る)關の清水の邊りを過ぎ給ふた時こう云ふ歌を詠ぜられた、其歌は――幾度も幾度も此の相坂の關は往來して、此處の關の清水にも幾度となく吾が姿を水に寫したことであるが、それも今度限りでなる。水にうつりて居る我が影！此の後はとてもと思ふので其の影を見て自分は悲しさが込み上げて來た。――と云ふのである。御心にどうした御考があらせられて此の歌は出來たのかと推し量りて見れば、今其の關の清水を見るにつけて一層あはれに感じられるのである。

關山を過ぎぬれば打出の濱、粟津の原なんどきけども、いまは夜のうちなれば見えわかず。昔天智天皇の御代、大和の國飛鳥の岡本の宮より近江の志賀の郡に都うつりありて大津宮をつくられけり、

ときくにも、此のほどはふるき皇居のあとぞかしと覺えてあはれなり。

さゝ浪や大津の宮のあれしより
名のみ殘れりしかのふる里

(通解)相坂山(關山)を越えてはや打出の濱、はや粟津の原に來たと人が云ふのを聞いても、月も入りはて夜の暗らさに、何處か何處やら一寸も見わけが付かなかつた。昔天智天皇の御代に大和飛鳥(高市郡)の岡本の宮から近江の志賀都に遷都ありて、大津宮を作られたことがある、其の宮の古跡は今自分が過ぎ行く道から近いときいてはそれも舊き世の事、今は皇居の跡もふるき昔の跡を傳ふるのみであると哀れに胸に響いたので、こう云ふ歌を詠んだ。

さゝなみや(枕詞)昔の志賀の都は何處であつたか其の大津の宮は跡もなく荒れ果てゝ今では只名のみ志賀と云ふ里の名になりて古くから殘て居る。

曙の空になりて勢田の長橋うち渡す程に、みづうみ遙かにあらはれて、かの滿誓沙彌が比叡山にて北の海を望みつゝよめりけん歌思ひ出でられて、こぎゆく舟の跡の白浪まことにはかなく心ぼそし。

世の中をこぎゆく舟によそへつゝ
ながめし跡をまたぞながむる

滿誓沙彌、奈良朝時代の沙彌(梵語、僧の義)其の歌と云ふのは萬葉集と拾遺集の中に少し異つて出て居る。即ち拾遺集のは「世の中を何にたとへん朝ぼらけ漕ぎゆく舟のあとの白浪」とある。滿誓の事は此の紀行の外に方丈記にも出て居る。

(通解)今は夜も明けて來たので、四邊の景色も曙の空の光りに明かに見渡された。勢田の長橋を打渡りて行く時琵琶の湖水は渺上遙かに殘る處もな

く見晴るかされた。此の絶好の曉の景色を見るにつけ、昔滿誓と云ふ沙彌が比叡山の上から此の湖水を見下して詠んだと云ふ歌が思ひ出される。滿誓の歌にも詠み込まれてある如く、湖上を漕ぎ行く舟のあとの白波、舟の通行した跡に白く波が立つて見えるのがいつか果敢なく消えて仕舞う、人の世の中も實に此の白波のやうにしばらくはありと見えても何時となし消え去りて跡方もなくなるものであると思つたら實に心細かつた。

世の中は丁度われわの湖水の上を漕いで居る舟の後方に泡立つ白浪のやうな物だ、一寸も賴み難いものであるとながめて昔滿誓沙彌は悟りた歌は詠まれたが、自分も今日此の景色に對して滿誓の歌を追想し、同じ感慨を以て眺めて行くのである、眺めしあとを眺めて往くのである。

此ほどをも過ぎて野路といふ所に至りぬ。草の露しげくして旅衣いつしか袖のしづくと心細し。

東路の野路のあさつゆ今日やさは
袂にかゝるはじめなるらん

（通解）湖水を眺めながら往けば何時しか野路と云ふ所に着いた。朝のことで草葉に置く露しげきに濡れつゝ歩み行けば、旅衣の裾わづらはしきのみか、旅情頻りに動いて涙まで催され何時の間にか袖までも雫に霑ふと云ふ心細いことであつた。

東へ下る旅路の此の野路のあたりに置く朝の露に霑されながら歩み往けば、心細さにいつか涙まで流れて袂まで霑ふて來た旅の心細さは今日初めて身に覺えたのである。

篠原といふ所を見れば、西東へはるかに長き堤あり。北には里人すみかをしめ、南には池の面遠く見えわたるむかひの汀は綠ふかき松のむら立、浪の色も一つになり、南山の影をひたされども、青くして洸瀁たり。

南山の影云々、白氏文集の中の昆明春と云ふ詩句に、昆明春、昆明春、春池岸古春流新影浸南山青滉瀁。とあるのを引いて來たもので、南山の影が昆明池の水に映りて、青い色が水に流れ漂ふて居る有樣を云つたものである。

(通解)篠原の邊を見渡すに、東西に長い堤がありて、北の方面には人家多く、建て列ねられて居る南方に當りては廣い池がありてそれが遙かに見渡される。其の池の向岸に綠色濃き松簇生し、松の綠も池の水の浪の色も一の色に見えて居るが、彼の唐の天子の御苑の內の昆明池に映りた南山の翠影と云ふではないが、松の翠綠色が池水に映り涵たりて一帶になりて靑色を呈し、水に流れただよふて居る庭は昔昆明池の有樣もこうであつたらうと思ひ浮べられるのである。

洲崎所々に入りちがひて蘆、かつみなど生ひわたれる中に、をし鴨のうちむれて飛びちがふさまあしでを書けるやうなり。都を立つ旅人この宿にこそとまりけるが、今はうちすぐるたぐひのみ多くして家居もまばらになり行くなどきくこそ飛鳥川の淵瀬には限らざりけめとおぼゆ。

行く人もとまらぬ里となりしより
　あれのみまさる野路の篠原

あしで　和歌を書くに、文字をくづして葦の生ひ亂れて居るやうに擬へて書くことを、あしで書きと云ふ。

飛鳥川の淵瀬　世の中の移り易く變り易いとを昔から是の川の淵瀬の定まらぬに比して歌ふたものである。古今集に「世の中は何か常なる飛鳥川きのふの淵はけふの瀬となる」とある此の外、此の意味で飛鳥川のことを云つたものは文章にも歌にも多い。

(通解)池には沙洲幾處となく突出し、其の邊りに

は蘆荻だの、かつみ（菰の類）だのと簇生して居る。其の間を鴛鴦だとか、鴨だとか幾群となく飛び廻はりて居る景色が丁度波の葦手書を見るやうである。昔は京都を出發して海道を下る旅客の多くは此の篠原の宿に一泊するのが普通の事であつたが、昔と異つて今では茲處に足を駐めず、素通りにするものが多いので、從つて初め繁昌した所であるにも關らず今は人家の數も次第に減じ行くのであると人が話して居るのを聞くにつけても、うつり變りの劇しいのは獨り彼の飛鳥川の淵瀬のみでもない、現在自分が眼前に見て居る此の篠原の里の有樣とて矢張り其の一つに漏れぬものであると寂しく感じた。

征人旅客が此處の里には足を駐むることが無くなりて北の方と云ふものは、野路の篠原は昔の面影もなく日々と荒廢に歸するのみである。

かゞみの宿に至りぬれば、昔なゝの翁の寄りあひつゝ老いをいとひてよみける歌の中に「かゝみ山いざ立ちよりてみてゆかん、としへぬる身は老いやしぬると」いへるは此山のことにやと覺えて、宿もからまほしけれどなほおくさまにとふべき所ありてうちすぎぬ。

立ちよらでけふはすぎなんかゞみ山
知らぬおきなの影はみずとも

七の翁　承安三年三月十九日、寶莊嚴院に於いて和歌の尙齒會行はれ、清輔敦頼等七人の老歌人相會し、古歌を誦したる事古今著聞集の文學の部に見えて居る。茲に引かれて居るのは古今集雜部に出て居る歌で尙齒會の時翁の一人宮内のかみといふのが歌ふたものと記せられて居る。

（通解）鏡山の麓なる鏡の山に着いたが、承安の昔七人の老翁相會して尙齒會をやりて身の老を歎じた時、一人の翁が歌ふた古歌鏡山今わが眼前に横はる鏡山を近く立寄りて見て行きませう、自分は

どの位年が老いて鏡の裏にうつる白髪、額の皺はどの位まで身の老を示して居るのかそれが見たいから――と云ふ古歌を歌つたのは此處の鏡山のことを云つたものであらふかと考へられたので、床しくなりて茲處に一夜の宿も借りて見たかつたが、此の先々にはまだまだ幾個所となく尋ね探るべき名所古跡も多いことであつたからして、それも思ひ止まることにした。

立寄りもしないで素通りで今日は行き過ぎやう、鏡山の鏡に昔の翁の面影をうつして見ることも出來ぬは如何にも口惜しく、殘念のことではあるが。

むかしは女の小そで模様、十五六歳の女はその頃のもやう、廿四五ばかりの女はその年相應のもやう、四五十歳の女はその年ぐらゐのもやう、五十以上六十ばかりの女は後家むきとて、そのとし位の模様を着し、あるくにも其とし位の様子にあゆみ、帯の格好も、其の年相應のもやうにするゆえ五人十人つれ立てあるくを見るに、小袖の模様、帯の様子、歩き様にて、老若中年は貌を見ずして分りしが、近年は十四五歳のもやうも、十七八ばかりのものも、三十四十の女も、老若も、皆郡内縞、或は八丈縞、丹後縞、または紋付ものさては、無地小袖等、帯ははゞ廣をみなむな高にしり長々と出し、歩みやうはどたどたと牛のやうに身品もなくあるく故、老若中年皆一様に見ゆ。これは女ながらも器量なく、みな人まねをする故なり、小袖の紋付無地縞類のはやりはみな遊女の眞似なり。昔は常の女縫箔の光る小袖を着る故、遊女は無地もの縞の類を着て、つねの女と風かはるべきためなり。帯も常の女の帯は幅狹きゆゑ、遊女ははゞ廣の帯をして、是もかはるべき爲めなりしに、今は常の女遊女の眞似して、無地ものは縞の類の小袖、幅廣の帯になりしは、みな是人眞似する、器量のなき故なり。

（古老物語）

英文雜錄

慶應義塾大學講師 宮森麻太郎

MISCELLANY IN ENGLISH AND JAPANESE.

By A. Miyamori.

I. Letters. 書翰文

INCLOSING A CHECK.

May 28, 1904.

Treasure Keio Gijuku.

Dear Sir:—

I beg to enclose herewith a check for Twenty-Five Yen in payment of my annual subscription to Keio Gijuku for the current year.

Faithfully yours,

E. H. Vickers.

小切手を送る文

拜啓金貳拾五圓の小切手封入致候間慶應義塾寄附金の本年度分として御領收被成下度候

ヴイッカース拜

年月日

慶應義塾會計掛殿

The Treasurer,

Keio Gijuku University.

慶應義塾大學

會計掛殿

RECEIPT OF THE ABOVE CHECK.

Tokyo, May 28, 1904.

Received of Mr. E. H. Vickers the sum of Twenty-Five Yen as subscription for the present year.

T. Suge,

Treasurer of

Keio Gijuku.

同上小切手領收證

證

一金貳拾五圓

右本年度の寄附金として正に領收候也

年　月　日

慶應義塾會計掛
菅　友　輔

ヴィッカース殿

INQUIRING ABOUT THE DATE ON WHICH SCHOOL BEGINS.

H. Urabe, Esq.,
Sec'y Keiogijuku Univ.,
2 Nichome, Mita,
Shiba, Tokio.

5 South, Karuizawa,
September 4th,'04.

My Dear Mr. Urabe :—

Will you kindly send a postal card to my address indicating the date on which my lectures for the next term are to begin?

With thanks in advance and with kind regards,

Faithfully yours,
E. H. Vickers.

始業期日を問合す文

東京市芝區三田二丁目二番地
慶應義塾大學書記
占部百太郎殿

拜啓次學期に於ける小生の講莚は何日より始むべきや御手數ながら葉書にて當所宛御一報被成下度願上候右豫しめ御禮申上置候　早々頓首

輕井澤南五番地にて
ヴィッカース

年　月　日

占　部　君
侍史

ANSWER TO THE ABOVE.

Tokio, Sept. 5,'04.

My Dear Prof. Vickers,

In reply to your inquiry, I write to say that your lectures are to begin on the 13th inst., Tuesday, at 8 o'clock A. M.; and your hours are arranged as follows :—

	8——9	9——10	10——11
Monday.	Economics for 3rd year.		Economic History for 4th year.

Tuesday.	Tariff for 5th year.	Social Problems for 4th year.
Wednesday.	Economic History for 4th year.	Economics for 3rd year.
Thursday.	Sociology for 2nd year.	Logic for 2nd year.
Friday.	Sociology for 2nd year	Logic for 2nd year.

Expecting to have the pleasure of seeing you in a few days,

Sincerely yours,
H. Urabe.

同上返事

拜復御講莚は來十三日(火曜)午前八時開始の筈に御座候又御受持時間は左の如く取きめ候間左樣御了承被成度候

	八時より九時	九時より十時	十時より十一時
月曜	三年經濟學		四年經濟學史
火曜	五年關稅	四年社會問題	
水曜	四年經濟學史	三年經濟學	
木曜	二年社會學	二年論理學	
金曜	二年社會學	二年論理學	

數日の中には拜眉の榮を得る事と相樂居候　草々

占部百太郎拜

ヴイッカース樣
侍史

II. Pleasantries. 滑稽

UNREASONABLE.

Mrs. Jason.—I am afraid you mix water with your milk!

Milkman.—Well, ma'am, you can't expect me to mix powered sugar, cracked ice and rum with it, for seven cents a quart, can you?

無理な注文

稅損夫人『牛乳屋さんお前の牛乳には水がまぜてありはせぬかと思ふよ』

牛乳屋『奥さん其れは仕方がありません一合三錢の牛乳へ砂糖や氷や糖酒をまぜて賣ることは出來ませんから』

註釋 sevn cents は日本の十五錢位にして a quart は六合なり依て一合三錢位に當る

HIS FORTE.

Doctor.—You owe me a bill of fifty dollars.

Slowpay.—Well, if I had a job I might pay you. Can't you give me a job?

Doctor.—What kind of a job could I give you?

Slowpay.—Well, you might give me the job of collecting the bill.

彼れの得手

醫者「あなたの藥料は五十圓になりますよ」

遲拂氏「承知しました私が手間仕事を得たならば御拂申すことが出來ます。あなたは私に仕事を與へて下さることは出來ませんか」
醫者「どんな仕事を私があなたに與へることが出來ませうか」
遲拂氏「ソーデスチあなたは其の藥料を請求する仕事を私に與へることが出來ますよ」

HER MANLY TRAIT.

Mrs. Hix.—Mrs. Juno strikes me as being entirely too masculine for a woman.

Mrs. Dix.—Yes, indeed. Why, every time she has an ache or pain she makes as much fuss about it as a man would.

彼女の男らしき性質

東夫人曰く「城夫人は婦人としては餘り男氣の勝た人だと思ひます」
出口夫人曰く「實にあなたの言はるゝ通りです。あの方はどこか痛い時はいつでも男子の方ほどの騷ぎをしますもの」

SCHOLASTIC.

"Yes, our son is to go away to school soon. His father will go next week to take the entrance examinations."

"His father?"

"Yes; the school is a very select school, you know, and no boy is admitted unless his father is worth at least fifteen millions."

學校らしい

「左樣私方の男兒は間もなく入學する筈です。就ては父が來週入學試驗を受けに行きます」
「御尊父が入學試驗に行くのですか」
「左樣です御存じの通りあの學校は大層良い學校です而して父の財産が少くとも一千五百萬圓なければどこの男兒でも入學は出來ません」

III. **News Items.** 新聞記事

THE TSAR REVIEWS DEPARTING TROOPS.

A St. Petersburg telegram says that on the 25th inst the Tsar reviewed at Kishineff the troops of the Fourth Army Corps, destined for the Far East.

露帝出發軍隊を檢閲す

露京よりの一電報に依れば露帝は去二十五日キシチフに於て極東へ向け發すべき第四軍團の兵士を檢閲せりと云ふ

THE SIBERIAN RAILWAY.

The circum-Baikal railway has been completed, a trial run having taken place on the 25th inst; and

Russia is now daily running 15 trains on the Siberian Railway.

西比利亞鐵道

貝加留湖迂回鉄道は竣工して去二十五日試運轉を行へり而して露國は今や西比利亞鐵道に依て毎日十五列車を運轉しつゝあり。

H. I. H. PRINCE ARISUGAWA'S ADDRESS.

Thursday afternoon, over two hundred members of the nobility met at the Nobles' Club to listen to an address by H. I. H. Prince Arisugawa, President of the Imperial Marine Association, on the sbuject of the proposed creation of a volunteer fleet.

木曜日の午後二百名餘の華族は華族會館に會合し海事協會長有栖川宮殿下の義勇艦隊の建設に關する御演説を聽けり。

THE DEATH OF PROF. HEARN.

Professor Lafcadio Hearn, the well known author on things Japanese, died from heart trouble on the 25th inst.

The funeral obsequies will be performed to-day at the Kobudera temple, Tomihisa-cho, Ichigaya. The deceased was formerly a professor at the Tokyo Imperial university and subsequently at the waseda university.

ハーン教授の逝去

日本の事物に關する著名なる著者ハーン教授は去二十五日心臟病にて逝去せり。市ケ谷富久町瘤寺に於て明日葬儀を行ふ。同氏は以前には東京帝國大學に教鞭を執り後早稲田大學に講師たり。

ILLNESS OF COMMANDER OF BALTIC FLEET.

Admiral Rojestvensky, Commander of the Russian Baltic Fleet, is ill.

バルチック艦隊司令官の病氣

露國バルチック艦隊司令長官ロゼストウエンスキー督提は病氣中なり。

A SHORT HARVEST IN FRANCE.

London, Sept. 22.—The French harvest shows a decrease of twenty-five per cent as compared with that of 1903.

佛國の凶作

倫敦九月二十二日發——佛國の收穫は昨年の收穫に比すれば二割半の減少を示せり。

CORONATION OF THE SERVIAN KING.

London, Sept. 22.—King Peter of Servia has been crownd with much ceremony at Belgrade. All the Powers were represented except great Britain.

セルヴィア王の戴冠式

九月二十二日倫敦――セルヴィア王ピーター陛下はベルグレードに於て盛なる儀式を以て戴冠せられたり。英國を除きて他の列國の代表者は共式に列席せり。

THE CONDITION OF PORT ARTHUR HIGHLY CRITICAL.

General Stoessel, in command at Port Arthur, has informed the Tsar that the position at Port Arthur is highly critical, as food and munitions have run short.

旅順の狀態甚危急なり

旅順總督ストエセッセル將軍は露帝に報告して旅順に於ては食物及軍需品欠乏して非常に危殆の地位に陷れりと云へり。

THE REV. MR. KAWAGUCHI AGAIN STARTS FOR TIBET.

The Rev. Mr. Kawaguchi, who returned in 1902 from his perilous journey to Tibet, leaves to-day again for Tibet. He will leave Kobe on the 11th inst and proceed to Nepal via Burma and Calcutta. Whilst in Nepal he will present the King of Nepal with a Japanese copy of the Buddhist scriptures, and will afterwards enter Tibet under the protection of the British.

河口師再び西藏に向ふ

一昨年西藏に於ける危險なる旅行より歸朝せる河口師は再び西藏に向ふて今日出發する由。師は來十一日神戸を出帆しビルマ及カルカッタを經てネパールに向ひ同國滯在中國王に日本譯の佛經一部を献上し其れより英人に保護せられて西藏に入る由。

✿ ✿ ✿ ✿ ✿ ✿ ✿ ✿ ✿ ✿ ✿ ✿ ✿ ✿

The wife is the key of the house.

妻は家の錠前なり

True happiness, if understood, consists alone in doing good.

眞正の幸福は畢竟只善を爲すにあり

All work and no play makes Jack a dull boys

働くのみにて遊ばざれば愚鈍となる

A talent is Perfected in solitude; a characters in the stream of the world.

智能は獨居に於て完成され品性は此世の流れに於て完成せらる

A good face need no paint

好き貌には白粉を要せず

Silence is better than unmeaning word

沈默は無意味の語に優る

漢文講義 （賴山陽） 阿井笛村

節女阿正傳

余西遊筑、過赤間驛、見其數十家瓦屋茅店、依山傍樹、烟火蕭條而已、既而過博多、得聞驛有節女、博多人松永子登、爲余說甚詳云

節女名阿正、父曰七兵、業農又釀酒、家頗豊、一娶妻、皆先死、各生一女、節女後妻出也、初七兵年五十、讓其家於外甥七左、而別營舍老焉、及病篤、聚其族囑之曰、吾命在旦夕、而無丈夫子、唯有二女、以累公等、願養嘉右妻以長女、至於次女、待其長妻之於長二、以承宗家之緒、嘉右者其後妻之弟也、長二者七左之子也、親族相計、如其言、以長女配嘉右、使之子育阿正焉、阿正天質穠粹、事嘉右夫妻甚謹、嘉右性無賴不事事、日與其村馬醫萬助飲酒沈湎、典義父所與田業幾盡、親族交規之不聽、是時阿正既長、長二亦弱冠、長次爲人質直勤恪、而連遇災患、產稍落、是以因循未成婚也、赤間鄰邑曰勝浦村、村長半五家甚富、爲其子源吾擇婦未得、聞阿正有才姿、欲獲之、會萬助因事來村中、語以其意、萬助心竊計、吾苟勾當此事、則借此翁勢力、何欲不成、遂諾而歸語之嘉右、嘉右大喜、欲不謀親族而許之、親族來誚責其違舊約而規新利、嘉右患之、其明召萬助語故、且曰爲之如何、萬

助曰、請謀之愚兄道全、呼道全到、畫策曰、本村長善次、與半五聯職親善、託以媒介、使公然來請、奴輩何能相沮也、嘉右大喜、使萬助潜往授意、善次許諾、偕來決議、乃呼阿正告之、説以利害、阿正默然不答、良久曰、諸君爲妾計妾寧不荷、雖然阿爺臨沒、撫妾而許之二郎矣、慈心所屬萬不可背、百事唯命、此獨不能從、涙與言倶下、道全等大怒曰、吾輩所説不唯爲卿計利於義父、施及吾輩與有榮耀焉、舍此洪福而慕落魄之長二顚倒之甚、嘉右又罵曰、汝不肯此婚、必有縁故、意汝已與長二通也、余必逐出二人、阿正低頭不言、萬助曰、事已至此、何必喋喋、不如速消吉納幣、使善次閲曆、曰某日吉矣、於是衆歡飲徹夜、阿正向隅飲泣而已、自是梳粧皆廢、家慮其有變、更守之、既而數日、阿正忽洒然收涙、稍理髮頭面、家意改志防護寖解、阿正乘間沐浴裝束、入屋後炭廠、以廚力貫咽、兩手據膝伏而死、時年十八矣、

此の文章は頼山陽先生の作られたるものであります、最初の一節は此の阿正傳を作らるゝに臨み、序文として一言述べられた言葉であります、余西遊過赤間驛＝自分が西の方筑前の國に遊び赤間驛と云ふ町を通つたことがある、見其數十家、瓦屋茅店、依山傍樹、烟火蕭條而已＝其の赤間と云ふ町は田舍町で、五六十軒の瓦葺の家や茅葺の小店が、色々打雜りて、山に依りて立てたるもあれば、樹に傍ひて建てたるもあり、其家々から立揚る烟や、火が、誠に蕭條きを見る計で、是ぞと云ふ目立つものとては一つもなかつた、既而

博多の町に寓して居る間に、右の赤間驛に節女があつたと云ふことを聞出した、然かるに博多の人で、松永子登と云ふ人が、自分の爲に其事柄を說きてくれることが、甚詳しくあつたと、これ丈が序文の言葉であります。

節女名阿正父曰二七兵一業レ農又釀レ酒家頗豐＝節女と云ふはみさを正しき女と云ふことで、有りふれたる文字故解釋を待ちませぬが、此の節と云ふ字は、竹の節と云ふ字で、これを何故みさをと訓むかと申すと、竹の幹は、誰も知る如く、一つ一つの節によりて成立て居るので、竹の本質は此の節にあると云ふてもよいのであります、されば人間も恰ど竹に節があるのと同じことに、男女に限らず、無くて叶はぬ大切の本領持前を堅く守りて失はぬのが、即ちみさをであります、夫故其の人々の立塲立塲に依りて此本領を著はすのを名づけて忠節貞節抔と稱するのであります、扨て此お正と云ふ節女は、其父を七兵衛と曰ひまして、家は農を業とし、又酒を釀して賣る商賣もして居り、金持で頗る豐かな暮しをして居ました、此七兵衛は一生の中に二度妻を娶りましたが、二人共に夫に先だちて歿なりました、其二人の妻が、どちらも女の子を一人づゝ生みましたが、此のお正と云ふ節女は、後妻の生みました娘であります、初七兵年五十讓二其家於外甥七左一而別營レ舍老焉＝事の起りは七兵衛が年五十歲に及びました時に、其の家を外甥（姉又は妹の生みたる子）の七左衛門と云ふ者に讓りて、自分は別に舍を營みて隱居をしました、其の後病に罹りて、段々重くなりたるときに、聚二其族一囑レ之曰＝其親族どもを枕邊へ呼び聚めて遺言をした、其言葉に吾命在二旦夕一而無二丈夫子一唯有二二女一以累二公等一願養二嘉右一妻以二長女一至二於少女一待二其長一妻レ之於長二一以承二宗家之緒＝自分も此の病は迚も全快の見込なく、命が最早旦夕の中に終ることと思はるゝ、然るに丈夫子が一人もなくして、唯二人の女の子がある計であ

る、就ては願か公等のお世話を以て、嘉右衛門を養子に迎へて、長女の方を之に妻はせ、次女の方をば其成長したる後に長二郎に妻せて、宗家の緒を承けさせることにして下さいと斯樣に言ひ置きをして歿くなりました、其の嘉右衛門と云ふ者は七兵衛の後妻の弟で、長二と云ふ者は、七左衛門の子でありまず、そこで親族の者が相談して其の遺言の通りに、長女を嘉右衛門に妻せ、阿正はまだ幼さひ故に、嘉右衛門夫婦の間に使ニ之子育一‖子として養はせる、即養女とさせました、處で此の阿正と云ふ娘は、天質穠粹‖其の天質が誠に美しき（穠は花のこんもりと咲き出たるかたち粹は飾りも何もなくして、自然に奇麗なると）上に、其の心ばへもやさしく、嘉右衛門夫婦に事ふることが、甚だ謹み深くありました、然るに嘉右性無賴不レ事レ事‖嘉右衛門と云ふ男は、其性質が無賴で、家業の事を少しも構ひ付けませぬ、‖與ニ其村馬醫萬助一飲レ酒沈湎‖毎日毎日其の村の馬醫の萬助と云へる者と酒を飮で、グデン〳〵に醉て計り居りました故與ニ義父所一レ與田業一幾盡‖義父が與へた所の田地田畠を典して餘つ程方は無くして仕舞ました、親族交規レ之不レ聽一そこで親類共が交る〳〵に之を規しめるけれども、少しも聽き入れませぬ、是時阿正既長長二亦弱冠‖此頃お正も最早長くなりて、長二も亦弱冠となりましたが、長二爲レ人質直恪勤‖長二は其の人と爲りが質直で、能く恪勤ましたけれども、而連遇ニ災患一產稍落是以因循未レ成レ婚也……如何なる事か連りに災患に逢ひまして、產が稍落ち目に成て來ました、是以因循して、未だ婚禮を致しませぬ、處が亦閭の隣邑に、勝浦村と云ふがありまして、其の村長の半五郎と云ふ者が、家が甚だ富で金滿家であります、爲ニ其子源吾一擇レ婦未レ得ー此の半五郎が其子の源吾と云ふ者の爲に婦を尋ねて、あれやこれやと擇みましたが、まだ好いのを見付け出しませぬ、處へ此の阿正と云ふ娘の聞レ有ニ才姿一欲レ獲レ之

才もあれば姿も好いと云ふとを聞込みまして、何とかして下に入れたいと考へて居ました打柄、會萬助因事來村中語以其意―會ど好い都合に萬助が何か用事があるに因て勝浦村の中に來たものですから、お正を息子の源吾の婦に貰ひたいと云ふ自分の考を吐しました、萬助心竊計吾荷勾當此事則借此翁之勢力何欲不成依て萬助が心の中で計みましたに自分が苟し此の婚姻の事を引受て勾當すれば、此翁（半五郎を指す）の勢力を借りて、何一つ思通りにならぬ事はあるまいと、斯樣に思て遂に其れを諾つて歸て來て、之を嘉右衛門に語すと、嘉右衛門も大に喜び、親族にも謀せずに、此緣談を許さんとしました、それを聞き附て親族がやつて來て、詰責其違舊約而規新利嘉右患之―其舊約に違て新たに己れの利益になる事を規るのは不埒であると、詰責ましたので、遉がの嘉右衛門も之には患りました、そこでその明る日萬助を召んで故を語すと、萬助がそれは自分の兄の道全に謀しなされと云ふので　早速道全を呼で來ました、畫策曰本村長善次與半五聯職親善託以媒介使公然來請奴輩何能沮也‖それで道全が畫策を立て、曰ふに此の赤間村の村長善次は、半五郎と聯職で親善であるから、善次に媒介を託んで、公然貰ひに來ることにすれば、奴輩が（親族共を指す）何能それを沮することが出來るものかと申たので、嘉右衛門成程と大に喜び、使萬助潛往授意　萬助に云付て、潛かに善次の所に往きて其の意を以て授せました、善次許諾偕來決議‖それを善次が許諾まして直樣萬助と偕にやつて來て否應なしに決議てしまひました（今日文明の世には斯樣な壓制の沙汰はありませぬが、昔の時代では村長の如き低い役をして居る者でも、下に對しては理も非も問はず、壓制を加へたものであります）乃呼阿正告之說以利害そこで阿正を呼出して、緣談の次第を申し聞せ、猶又彼是と利害の話を說き聞かせました、阿

正默然良久曰諸君爲レ妾計妾寧不レ荷雖然阿爺臨レ沒撫レ妾而許二之二郎一矣慈心所レ屬萬不レ可レ背白事唯命此獨不レ能レ從涙與レ言俱下一阿正は之を聞て、默然居ること良久でありましたが、扨曰すに、諸君が妾の爲に成る樣にと御相談下されますのを、妾が寧と難有思はないでなりましうか、雖然阿爺が臨沒に妾を撫で、、後々長二郎殿の妻と成ることを許されまして、其の親の慈みの心の厚く止まりて居るとでありますゆゑに、萬々之を背くことは出來ませぬ、外の事なら百事でも、唯々命のまゝに從ひますけれども、此事ばかりは御受をする事が出來ませぬと、涙與言俱下ました、道全等大怒曰吾輩所レ說不二唯爲レ卿計一利二於義父一、施及二吾輩一與有二榮耀一焉舍二此洪福一而慕二落魄之長二一顚倒之甚一前の如くお正が答へたに依て道全等は以ての外に怒て曰ふに、吾輩が今言ひ聞かせた事は、唯汝計の爲となるのみではない、第一汝の義理ある父の利益になることで、施而吾輩迄も與に榮耀になることである、斯樣な洪福を捨て、、落魄はてた長二を慕ふと云ふは、顚倒の甚だしきものであると云へば、一方から嘉右衛門が、又罵て汝不レ肯二此婚一必有二緣故一意汝已與二長二一通也余必逐二出汝二人一汝が此の婚姻を不肯のは必と何か緣故があるに相違ない、意ふに汝は已に早や長二と私通をして居るのであらふ、よしそれならば余は必と汝たち二人を逐出すから、そふ思へといふ樣な黯梅に、諸方から怖したり、又賺したりしましたが、お正は低レ頭不レ言一頭を低れて何も申しませぬ、すると萬助が事已至レ此何必喋喋不レ如速涓レ吉納レ幣一最早事がこゝ迄に至たる上は何ぞ必ずしも喋喋と彼是云に及ぶものか、夫よりは速に吉日を涓み結納を濟すがよいと思ひまして使二善次一閲レ暦曰某日吉矣一そこで善次に暦を閲べさせた處が、善次の曰ふに來る某日が吉日じやと云ふので其の日に取極めました、於レ是衆歡飲徹レ夜阿正向レ隅飲泣而已一於是衆歡び酒を飲み、夜

を徹してしまひました、此の間にお正は只片隅の方に向ひて、涙を飲みてさめ〲と泣て居る計りでありました、自レ是梳粧皆廢家慮ニ其有レ變更守レ之‖是から後はお正は髮を梳き上ぐる事も、粧をする事も、皆廢てしまいましたから、家の人々萬一の變が有てはと、慮かりまして、更る〲に番をして氣を附けて居ました、既而數日阿正忽洒然收レ涙稍理レ髮靧レ面家意改レ志防護懈‖既而五六日も立ちまして、お正が忽ち洒然と涙を收めて、稍しづゝ髮を理げたり、面を靧つたり（靧は面を洗ふと云ふ字なり）する様になりましたから、家の人人は是は必と志を改めたのであらふと意ふて、防護が緩く解け緩んで來ました、阿正乘レ間沐浴裝束入ニ屋後炭廠一以ニ厨刀一貫レ咽兩手撲レ膝伏而死時年十八矣‖そこでお正は其間に乘んで、沐浴（沐は髮洗ふ浴は湯あみ）をして體を淸らかにし、裝束を整へて、屋後の炭廠には入り、厨刀で以て咽を突き貫ぬき、兩の手を膝に撲きて死にました、其年が十八歳です誠に哀れな次第であります。



（未完）



奥大將の北堂しな子刀自

吉田光子

▲北堂の住居

九州鐵道の小倉驛から乘車して、中津又は宇佐に向ひますると、小倉から丁度十五哩位（六里許）の所に行橋町といふ一驛がございます、豊前の中央でもあり、又た後藤寺行の線路も此所で岐れて居るので可なり繁華して居る小都會でございます、此の行橋町を貫ぬいて流るゝ永狹川といふ川の川上に溯りますと、今や穰々と稔つて居る稻穗の波のうねを、小高い丘でもつて劃つて居て、緑濃き常盤木の欝々として茂つた小村がございます。

此村の名は字を延永と申しまして、最と靜けく又た寂しい一寒村でありますが、村外れの桑畑の間に、陸軍大將奥保鞏氏を生んだ老夫人しな子刀自が、八十三歳の老齢を以て、平和に、質撲に、安らけき晩年を送つて居らるゝのであります、このヒーローの母と親しむ此の小村は、實に名譽ではありますまいか。

村の容態は穩やかであつて、塵をも揚げぬ小徑は、詩の女神が、裳を曳いた樣に、逶迤として、朝に夕に長閑けく起る野良歌の聲を響かせて居るのです、何とも云へぬ崇高な觀念は、此の寂寞たる一小區域

の、丘や林や、畑や野の間から生じて來て、一種の感懷に打たるゝ樣な心地が致しますが、若し此の村から、此の老夫人を取除いたならば、延永村は恐らく平々凡々の一寒村と化して仕舞ふではありますまいか、眇たる老夫人の感化もまた實に至大なものといはねばなりませぬ。

遼陽占領の公報が、行橋町に達したとき、行橋町民は、我軍の大捷に踊躍して、直に提灯行列の隊を組みまして、延永村なる大將の母堂を見舞ひました此時の母堂の御心の中には如何なる感を起しなさいましたかと思ひますと、外ながら感涙を禁じ得ないではございませんか、老夫人は昔し氣質の紋服を正しく身に着けて、轟ろき渡る萬歳の聲の裡に、覺えず一滴の涙の露を落されたとのことで御座います、張り裂く許なる胸中の御喜悦は、八十三年といふ長い生涯の間にも、復たと得られ難い程のものであつて、女性としてこんな清い美くしい涙を濺ぐものは千萬人中一人もありますまい、思へば母堂の一生の幸福は、實に多大なものと申さねばなりませぬ。

されど母堂が、かゝる大なる幸福を受けらるゝに至るまでの經歷は、苦楚慘憺たるものであつて、決して平易な途行をされて居たのではありません、譬へば嶮阻な峨々たる岩石の間の小途を辿りて、一歩を誤れば危い千仭の谷に轉げ、深い萬丈の淵にも陷り兼まじき間を、毅然として切拔けて、始めて平坦々たる一望千里の花咲き充てる春の野に出たやうに、母堂の今日の幸福は、昨日の苦難の酬ゐといふてよろしいかと存じます。

▲北堂の經歷

北堂は元と(小倉藩小笠原家)のお小姓組を勤めたる石川洞翁といふ方の長女で、十五歲の時に同藩の御馬廻りであつた、奧凡之丞氏に嫁かれましたので、凡之丞氏は舊名を保矩といつて、才智學問共に拔群の方でありましたから、藩主の寵愛も格別で御座いました、或る冬の夜藩主の內宴に侍べられた時、以來凡之丞と改名すべき旨を以て、手書して其名を賜

はられましたので、藩主忠忱公自筆の三字に、左の如き紀念の一墨を添えた一幅は、大將の令弟にして北堂に奉侍せる奥保章氏の家寶として殘つて居るとの事であります。

文久癸亥中冬夜陪ニ侍内宴一、命ニ臣保矩一改ニ通稱一、且手書所レ賜也、保矩恐ニ歳月久遠、紙破墨渝以歸ニ烏有一、故糊裝藏ニ之家一、欲下令ニ爲ニ我子孫一者一、拜中恩榮之厚上也、實十一月二日云　奥　保矩謹識

夫人は克く貞淑の道を守り、前後に七人の兒供を擧られましたが、長男は蚤世され、他は半ば女子で、殘れる男子は、今の大將を頭に三人で御座いますから、無論大將が嗣子として、奥家を繼ぎ、刀自の膝下に冊つかれる筈でありますが、種々の都合上から總領の保鞏氏は養子に行かれることになつたのであります、それは、元來小倉藩則ち當時の小笠原家の家臣に三軒の奥姓があつて、何れも一族ではありますが、凡之丞氏の家は、分家筋に當つて居まするので、其頃本家の奥家に男子がなくて、家を嗣ぐものがないから、藩の掟として、凡て本家の男子の絶へた時には、分家より入つて養子となることになつて居ましたので、保鞏氏は藩規に從ひ、本家の奥氏を相續せねばならぬ事となりました、然るに實際、凡之丞氏の嗣子となるべき總領の事でありますから、止むを得ず、表面上末の弟たる保章氏を長男に引直し、大將は三男といふ名義で、藩の許を受けて、本家を嗣がれたのであります、昔し氣質の北堂が、士人の名分を重んじて、陸軍大將男爵といふ榮燿身に餘るべき東京の美を盡したる邸宅を顧みられずして、草深き田舍の小學教員たる保章氏に一身を托して、胸中一點の虚榮をも願はれぬのは、全くかういふ譯のある爲めで、其の御心の高潔なことを思ひますと、誠に奥床しさを感ずるではありませぬか。

北堂の最初の經歴は、洵に平靜で、何たる波瀾もなかつたのでありますが、彼の維新の亂に當りて、長州征伐といふ事變が起つてからといふものは、局面は一變して、北堂の境遇は是までとは、全く趣きを

異にするやうになりました、それは長州征伐の餘沫が小倉藩に及んだからで、長州の兵士等は、向ふ鉢卷ブッサキ羽織の打扮で、馬關海峽を渡つて、勝誇つた時の聲を揚げて小倉の城下に迫つて參りました小倉の方では、當時の執政島村某を始めとし、何れも奮戰して、或は君の馬前に立ちて勇しき犠牲となつた人もあれば、或は矢表に向つて苦戰奮闘した人もありましたが、女性は殊に紅の裳を高く揭げて、薙刀小脇にたばさんで、彼方此方と馳せ進ひ、風にも堪へぬ女房達まで皆勇ましく働かれましたのは、流石は武家の育ちと申す外は御座いません、然るに多勢に無勢で、勝敗の數は己に定まりまして、城主忠忱公も今は早や是れまでなりと、恨を呑んで、田川郡の某村に身を忍ばるゝことになりました、是の時北堂の夫君几之丞氏は、奥方附の御役でありましたので、忠忱公に從ひ奉るを得ずして、同郡の金田といふ所に、奥方を奉じて、朝夕を送つて居られましたが、明治の二年に、遇とした病にかゝられて主公の運命と、時勢の變遷とに心を殘されながら、遂に不歸の客となられました、折も折、時も時で、五人の子女を抱持せらるゝ北堂のお悲嘆は、如何にありましたか、思ひ參らするだに、實に憐れではありませぬか。

然るに此時維新の大業は成功して、廢藩置縣の一令の下に、世襲の常職に養はれて居た武士は、忽ち食祿を失ふて、今日の糊口にも窮する程の慘狀に陷つたものも少なくない程の有樣となりましたから、況て折り敷く草の庵に、主從互ひに、時雨と濡る袖を絞るが上に、柱とも杖とも賴む夫に別れ、僅かに力弱き女の手一つで、多くの子女を分ち暖むる夜半の肌づれも、其の冷たさに泣かるゝ事は幾夜であらせられたか、或時は和らかき足に、草鞋の堅き緒を結めて、聊かの因縁を賴み、又或時は人知らぬ胸の苦勞を一つの胸にたゝんで、月漏る家に露の滋きを忍ばれた事もありませう、武士の女として、武士の妻として、薙刀の一手、又は女の道をこそ心得られた

れ、明日食ふ米の工夫して、炊ぐに辛き厨の事の、手馴れぬ丈に、其辛苦と慘憺とは、言語も及ばぬ程の事であつたことは、北堂の其後人に話されたのでも明白であります。

▲奥大將の生育

北堂が大將を生まれたのは、お年が二十五歳の時でありましたが、此頃は幕府の末とは申しながら、德川の流れの水もまだつきませずして、各藩共に三百年來の太平の夢を結んで居ましたので、西陲の一藩たる小倉あたりは、流石にまだ浪立騷ぐ可きたゝずまいはなく、その累代の藩士たる奥の一家は極めて靜平でありました、されど蛇は一寸にして牛を呑むとやら、かゝる靜けき家庭に、呱々の聲を揚げられた大將は、飽くまで嚴格なりし父君の氣質と、穩和沈着なる北堂の躾とを受けられて、自づと備はる傑出の才能を發達せられたのは勿論の事であります。

今北堂の物語の一二を記しますれば、當時小倉藩の學校を思永館と申しまして、藩士の子弟は皆此の學校に入りて、文武兩道を勵みましたので、大將も九歳の時から、短い小倉袴に肩臂怒らせて、日々この學校にお通ひなされ、北風劇しく、寒氣骨を刺すが如き冬の朝にも、劍の如き霜柱を素足の草履に蹈み碎き、體軀全體が冷へ渡つて、感覺を失ふことも屢屢でありましたが、こんな時には自ら拳を固めて、吾と吾が體軀を亂打しつゝ、暖氣を呼び回へすといふ有樣でありましたさうで、朝餐の如きは、多くは凍りたるまゝの冷飯を、湯に漬けて搔込むで、まだ曉の星の影が、淡く光を放つて居る頃に、家を出らるゝのが通例であつて、若し寢過しでもされた時には、正しく膳に向ふ暇もなく、城の大皷に箸投げ出して、駈け出でられしことも度々であつたとのことです、又た大將が十一歳の折、十四五歳許りの藩士の子弟が、城の馬場に上りて、馬術の稽古をするのを、御覽になつて羨ましさの餘りに、屢々父君に迫りて、己れも馬の稽古がしたい、と願はれましたが、幼年であるからとて、お許しが出ませんので、

大將はもどかしさに堪へず、ハイヨーの掛聲の勇しきを見ては、どうしても堪へられませんので、遂に同藩士小石某に賴み、兩親には內々に馬場にお這入りなされましたが、この事をお聞きされた、父君母君も、我子ながら其志の堅きに感じ、强てお止めもせられなかつたのであります。

明治維新の際に當りましては、大將も已に腕白一方の少年ではなくて、思慮ある、立派な青年となられました、門閥世襲などいふ幾百年の間行はれた窮屈な制裁は一切棄たれて仕末つて、功名富貴は、力量次第で得らるゝといふ時節でありますから、血氣盛りの大將は何と安閑として居られませう、早く志を立てゝ鄕關を出でられて、或は勤王攘夷、或は佐幕と、全國の志士が火花を散らして戰つて居る中に、垢つきたる袷一貫に大の太刀を横へて、殆んど日本全國を横行して、到る所に遊說を試みられましたが、その働き振りは隨分目醒しかつたとのことで、急激なる勤王家として、反對黨に對して、大なる警戒を與へられましたので、爲めに種々の嫌疑を受け物色頗る急であつて、國々到る所に變名を用ゐられて力めて嫌疑を避けて居られました、變名を用ゆるのは、こんな時代には普通のことではありますが、此の變名の裡には、樣々の苦心が籠つて居て、幾多の難行苦行を嘗められましたことは、更に疑ひを容るべきで御座いませぬ。

▲今日の北堂

苦心の花は、遂に開ひて、果を結ぶに至りました、そのかみ小笠原藩の小姓たりし少年、天涯放浪の一書生は、今や日本全國どころではない、實に世界各國民の膽を破る驍將として、鳴り響き、千歲の歷史に其名を留むべき英雄となられました、嘗て逆境の底に沈淪して、數多の小供の爲に泣通した一寡婦は、今や大なる名譽を双肩に擔へる陸軍大將の母堂として、戰捷の報至る每に、國民の萬歲を受けて居らるゝのは、如何ばかり光榮で、また滿足で御座いませうか。

されど北堂は今以て東京を知られないのは、何と驚ろくべきではありませんか、大將が姫路から大阪の師團長に轉任せられた頃までは、北堂も御一處に住はれて、厚き孝養を受けて居られましたが、都會十丈の紅塵は、老體に適せずして、質素を欣ぶ北堂の厭ふところとなり、榮譽ある愛兒の邸宅を去つて、延永村なる草の庵に移られたのは、今より十五年前のことで、其後の大將の出世も、春は花咲く墨田堤も、月の待乳山も、日々谷の公園も、電車鐵道も知られずに、綠濃き村雨や、藍吹く松風に心耳を澄まして、寡慾と沈默とを守つて居られます。かの行橋に隣れる延永村は、北堂が住はれて居るから、誰れしも大將の幼時の遊び所であると思ふも無理ではござゐませぬが、延永村の閑雅なる家は、大將とは何等の關係も御座ゐません、たゞ令弟の住宅であつて、北堂が老を養ふ平和の懐に過ぎぬのであります。

▲北堂の容貌と風采

人間七十を以て古來稀なりとすれば、北堂は古稀の齡を過ぐること十三年、實に八十三の高齡で入らつしやゐますが、更に老衰された態とてはなく、稍々潤き額と、何となく慈悲の光ある眼尻とに、多年辛酸の波の跡を刻み込んで居られますが、世の濫々たる老人といふものとは、全く趣を異にして、兩眼の少し朧ろげにかすんで居るのみで、頭髮もまだ瑞々しく、鹿子まだらの粒疎きを引きしめて、茶筌の先きを弗と切り下げ、人並よりは大きく福々しき耳朶の秀てゝ見ゆるは、さすが大將を生まれた賢母と誰しも喝仰するを禁じ得ないのであります、その風采は醇朴にして、少しの飾氣もなく、早や幾回か水を潜つたらしい小さき蚊飛白の單衣を無造作に纏ひ、名譽も光榮も、空吹く風と聞き流されて居る質素のお姿に對しては、愈々以て敬愛の念を起さずには居られませぬ。

今回の戰爭が終局を告げまして、大將が芽出度凱陣遊ばした時、延永村なる此の庵を訪ふて、母子互ひ

に御無事なお顔を見交はさる丶折には、涙脆き北堂は申すに及ばず、鬼神をも取挫ぐべき大將も、感極つて清き數行の涙を灑がれることと存じます、湧くが如き萬歲の聲や、歡迎の響よりも、母堂此時の御悦が、如何に大將に取りて、幾層優れたる滿足を感ぜらるべきでありませうか、思ふに大將の逸事として後世に傳ふべき多くの美談は、必らず此時に生ずるでありませう。

松村海軍中佐夫人を訪ふ

一記者

二月九日以來數度の旅順海戰に參加して勇名を轟かしたる我が帝國軍艦吾妻の副長海軍中佐松村龍雄氏の留守邸、及び同氏の實弟で、同じく二月九日の海戰に旗艦三笠に乘組み、東郷聯合艦隊司令長官の帷幄の内に在りて、彼の島村參謀長等と共に作戰の機務に從ひつ丶、山本機關長吉村主理と同時に、敵彈の爲に名譽の負傷をなしたる參謀海軍大尉松村菊男氏の留守邸は、

▲兄弟共に同棲

で、住所は芝區白金臺町二丁目でありますが、記者は過ぐる九月二十日の午後、同町なる梨羽海軍少將の留守邸を訪れました歸途に長驅して同邸を訪れました。

梨羽邸の門を出で丶右手へ、目黑の停車場の方へ、物の三四町も步んで、陸軍火藥庫の手前、右手に物奇麗なる板塀の一と構、此所なりと聞きましたので足早に、嚴しき檜の正門へ向へば「松村龍雄」との瀨戸札と其下に「松村菊男」との二枚の札が掲げられてあります。而して、正門はひつたりと鎖されてありますので、右手の潛戸を押し開て、門内に入り檜葉、若松の翠色滴るばかりの植込を拔けて、七八間進み、正面の硝子戸の玄關に取告を乞へども、

少しも應答がありませんので、乃ち右手の格子戸に音訪へば、ハイと優しく應へるものがあつて、取告れたのは、年頃十八九の、品良き召使、やがて、案内せられて、右手へ本玄關の方へ連られ、更に右手の八疊の

▲客室

へ導かれました。正面の床の間には虎竹の墨繪の幅、その前には奇麗なる大花瓶には、桔梗、苅萱、などの秋草を飾げなく挿けてある、振返つて仰げば楣間には松樹の扁額を掲げ、猶ほ海軍々人の寫眞や軍艦の寫眞額などを掲げてある、右手の後庭には取り立てゝ何と云ふ趣味はないけれども、見上ぐるばかりの大いなる松樹があつて、それが常に風を喚んでゐる、またその下枝を自然の屋根とし、形象美しき一の祠がある、何神を祀つてあるのか、なか／＼風情ある眺である、また其傍は、花壇のやうになつてゐるが、そこには綠葉生ひ茂る中に、眞紅の鷄頭が夥しく突立つてゐて、時を得顔にそれを彩つてゐる、椽先近く、秋の蝶々が繚亂として羽袖輕く飛び廻ると思へば、庭の隅の栗の梢には消魂しき百舌鳥の聲、何となく閑靜幽寂な住居である、また此室の庭の方は一體に硝子戸で圍んであつて、冬なれば硝子戸を見越に後庭の景色を眺めるといふ工合になつてゐるのが、反對に玄關の方は唐子遊の極彩色の奇麗なる繪襖、自分は其を凝乎と視て居ると、やがて、先の召使、座蒲團、莨盆、茶と、順次に運ばれました。すると、間もなく、奥の方から、徐に出で來られたのは、年齢五十七八の、まだ艶々しき頭髪を切垂にした、如何にも氣品高き老媼で、伊勢崎銘仙の袷に、紬の黑の紋付の羽織を召されたのは、即ち、

▲中佐母堂きよ子殿

で、御座いました。記者は、蒲團を滑り下りて、丁寧に挨拶すると『まあ、どうぞ其儘で』ッて、自ら蒲團を引き寄せて座られました。やがて、記者は負傷大尉の御見舞を申しました所『え、どうも有難た

うございます、皆様のお蔭で、菊男の傷も早く癒りまして、既う此頃は、大本營附となつて、何處か北海道の方へ參つて居ます、しかし、居る所は確固分らないのでございます。……どうも、初めて海戰があつたと聞きまして、直ぐ又

▲菊男が負傷

したと聞きまして、餘り早いので驚きました。……ハイ、傷ですか、これは左の大腿へ榴散彈の破片が中りましたので、此時、吉村さん(主理)も山本さん(機關長)も負傷なされたさうです。……ハイ、佐世保の病院へ歸つて來ました時は、體温が餘程ありまして、四十度にも上りましたけど、私が佐世保へ參りました時は、大分宜くなつて居ました。それから、日増しに元氣になりまして、新聞の方や、種々お訪ね下さる方に對して戰爭のお話をしたり、唯、床の中で、それを慰めての樂みとして居ましたが、その内に傷も非常に快くなりまして、間もなく、退院し彼の滿洲丸に乘つて彼方へ參りました、それから大本營付となつたのでございます……。」

さて、序に、

▲大尉の略歴

を伺ひまするに、日清戰爭の時は、まだ海軍兵學校の生徒であつたさうです、そして、其後種々の艦に乘り組み、先年笠置艦の回航委員となつて、米國から歸朝し、續いて同艦の乘り組みを命せられて居たが、昨年五月になつて、更に三笠に轉乘して、東郷司令長官の帷幄に參して作戰の機務に從うて居られたのでありましたさうで。

やがて、中佐母堂はお耳の故で、談話の受取り難くてや『しばらく、御免下さい、私はちと耳が遠うございますから、嫁を呼んで參りませう。』と云つて、立ち上がられて『登志さん〳〵』と廊下を呼んで行かれ、やがて、母堂に隨うて、出て來られたのは、年比二十二三の雪と擬ふ顏に頭髮の花月も相應はしく、丸顏の眉の濃い、眼元のぱつちりとした美しい一個の婦人、これは、即ち

▲中佐夫人登志子

の君で、海老色矢絣のフランネルの單衣に藤紫の半襟の下着を召され、黒繻子の晝夜帶をちんと、その上を又、赤つぽい帶締を締めて居られましたが記者は先づ初對面の禮を述べ、また更に來意をも告げまするど、花瓣のやうな唇開かれて『まあ、よくこんな偏僻な所まで、わざ〳〵お出で下されて…………』と、御如才なき挨拶せられて、さつと縁側の方を見遣られて『どうも、蒲團を干してありまして、實に失禮を……』と云つて、下女を呼ばれて、取り片付させせんとせられましたから、記者はまづ、これを止めましたが、やがて、召使が珈琲、御菓子などを運ばれましたので、記者は、遠慮なく、珈琲に喉を濕して、先づ、今度は

▲中佐の略歴

を尋ねましたところ、夫人は『……ハイ、慥に、これ〳〵と云ふことは覺えても居りませんし、また知りませんけど、なんです、ほんの概略ならば、申し上げませう。ハイ、日清戰爭の時ですか、あの時は丁度、大尉で、運送船の監督を遣つて居りました、それから井上常備艦隊司令長官の參謀となり、それから海軍大學校へ入りました。そして、學校を出ましてから、侍從武官になり、それから昨年の七月吾妻の副長となつたのでございます。……ハイ、國ですか、舊は佐賀です、……ハイ、年齡ですか、良人は三十七で、菊男さんは三十一でございます。…………』と。つぎに、又、中佐と大尉との

▲兩人の嗜好

に就いて伺ひました所、夫人は『ハイ、良人は、お酒も餘り頂きません、……宅に居る時は、閑暇に任して植木を彼方へ植ゑたり、此方へ植ゑたりしてゐます。そして、此頃は、謠曲に大分凝つて謠つて居りました。……ハイ、子供でございますか、これは隨分子煩惱といふ方で、宅に居ますると、始終いろ〳〵調戯つて居ります。……ハイ、菊男さんですか、これも兄と凡てが酷く似て居ます。ハイ、嗜

好と申しましても、別に取り立てゝ之と云ふことはございませんです、唯、客人とお話すること位が非常に嗜きでございます』と。
聞くに、大尉は平生極めて豪宕磊落な方で、稍々いはゆるハイカラ風はありまするけれど、太だ交際に長じ、夙に東郷司令長官の知遇を受けてゐらるるさうでございます。
さて、次に

▲その家族

に就いて、伺ひまするると、中佐母堂さよ子は今年六十歳の高齢で居られますけれど、今猶健全で、中佐夫人登志子殿と共に其留守を守つて家政を治められてゐます。そして、中佐と夫人(三四)との間に、長女麻子(七つ)長男満雄(四つ)との一男一女あります。そして、又、大尉剣男氏には、豫て福島縣知事有田義資氏の四女禄子と結婚の約がありまして、過ぐる四月に禄子の高等女學校卒業を期とし、目出度華燭の典を擧ぐる筈であつたといふことですが、今度の事件の爲め、つい、祝延の有様となつてゐるといふことです。けれども、禄子の君は最早同家に起臥せられて、嫂登志子の君を姉のやうにし仕へ、登志子の君は亦禄子の君を妹のやうに愛し、相互に姉妹の如くに仲睦まじく、共に力を協せて、姑に孝養を盡し互に遠征の良人の無事を禱つて居らるゝさうでございます。

▲中佐母堂の談話

中佐夫人の應接に出られる前に、記者は、母堂とお話しまして、圖らず、談旅順の攻撃に及び『此方にも大變な人死があるさうです。』と云へば、母堂は一寸眉を顰めて『え、なか／＼要害な所だと申しますから、なか／＼彼所を攻めるお方達もお大抵ではございますすまい。』と云はれて、なほも語を續けられて『これで、まづ士官以上の方は戰死なすつても、さ程何うといふ事はありますまいが、以下の普通の兵隊さんなどの内には實に／＼お氣の毒な人もあるやうです、ね。』と云つて、何と感じられてか、はや

双の眼を曇らせて居られたが、軍人の母として同情の感の溢れて湧いたのではあるまいかと思はれました。そして、母堂は、何と思はれてか、少し話頭を變へられて、出征軍人の家族の眞情を吐露されて申されるやうには『なんでございますね、新聞なんかで見ますると、軍人の家族の方が、その出征て居る人の事を、最早、到底二度と再び生きて還へることのない者としてゐるから、餘り心配しないとか、または、豫ての覺悟だから、今更何う斯う心配しないとか……と、大層氣の强い、寧ろ冷淡のやうな事を云はれるやうに書いてありますけれど、その家族として、一人の父たり、子たり、夫たる人に對して、何うして心配せずに居られませうよ、あんな事を云ふ方は、私は全く嘘の皮だと思つてゐます。元より軍人となる時は、國家の爲に身命を抛つものと定つて居るものですけれど、それは家族として何の位心配するものか知れません、私なんかは二人の伜とも斯う云ふ風に海軍に出て居ますが、それ海戰があつた、號外が出る、その號外の鈴の音を聞く度毎に何んだか氣がぞわ〳〵して何うしても落ち付きませんです、二月九日の海戰があつた時も、何んでございます、其號外が出たかと思ふと、早や二度目の號外は掬男が負傷したとのことで、實に餘り早いので驚きましたよ、それから直ぐに、たしか二月十三日に此方を出發して佐世保の病院の方へ參りまして、國元の方へ序に廻り四月九日に戻つて來ました………』と、斯く長々しく話されて、或る一面の軍人家族に對して、一種の諷刺的の言を放たれましたが、蓋し公平な眼を以て見ますれば、此母堂の言の如きは是れ出征軍人の家族としての眞情を吐露したものであらうと思はれて、記者は深く腦裏に刻み込まれるやうに感じました。

▲美しき家庭

さて、又、記者は、中佐と大尉との二家族から成る圓滿和樂な美しい家庭を作られてゐることを稱しました所、母堂は、にこやかに口元には微笑さへ浮

べられまして『ハイ、兄弟が一所の家に住まつてゐる時は、それは事に由ると工合の惡いこともございませうけれど、また宜い時は此上ない都合の宜しいものです、兄弟二人とも海軍でございまして、到底二人とも佐世保なら佐世保、呉なら呉と一所に住むといふことは出來ませんから、龍雄が菊男の家内も同棲して、私の手許に居れば、相互に寂しいこともないだらうからと申し出しましたから、斯うやつて二家族が一つの家庭を作つたやうになつて居ります龍雄は斯う意見でありまするし、菊男も亦それに些の異存もございませんし、此上ない好い都合として居りますから、皆な纏つて居るのでございます。それに嬉しいことには、嫁には二人とも實に〳〵仲が善く、……私の口から大層嫁自慢するやうでちと可笑しうございますけれど、オホ……互に相扶け合つて、そして私の命令に能く從うて遣つて呉れますから、私は大變嬉しう思つて居ります、そして、私は唯孫の世話くらゐで、家事向のことも一切二人に打ち任して置いてあります。斯う遣つて、兄弟が一家に住み、嫁が二人仲善くやつて往つて呉れるだけが私が何より心嬉しいことです、そして、二人とも良人は海軍でございますから、その良人に對する心持や何かゞ凡て同じでございますから、號外が出ますれば、二人とも頭を鳩めて一緒になつて見て居ますといふ鹽梅です……。』と言はれましたが、實に羨しい春のやうな家庭は、此賢良なる母堂の下に形造られて居るのであります。

▲夫人は本誌多年の讀者

さて、最後に、夫人とお話申しますると、夫人は本誌に就いての記事など精しく存じて居られまするので、記者は女鑑をお讀みになりますか、とお尋ねしました所『ハイ、さうです、既う三十年から、ずつと今まで取つて居ります。』と、云はれましたので記者は大いに驚きました。そして、同時に又本誌と淺からざる緣故がありましたので、非常に心嬉しく思ひまして、深く感謝の意に堪へなかつたのでござ

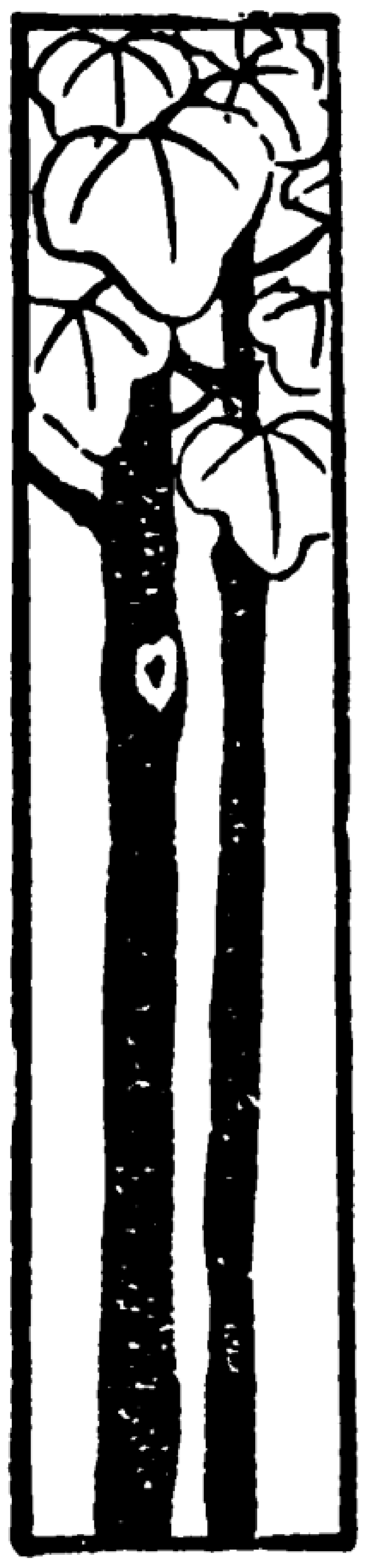
います。幸に、和氣藹々たる此家庭の寫眞を拜借しましたが、此の

▲天長節の佳節

に際して、光榮ある海軍士官の家庭として、そして、同夫人なる本誌多年の愛讀の君を紹介し得ることは、一面に於いて亦本誌の光榮とする所でございます。

▲令孃麻子

記者が夫人及び母堂と話して居る時に、年比七八つの、頭髮をお垂にした、目のぱつちりとした愛らしい孃ちやんが出て來られて、丁寧に疊へ兩手を八字形に突いて挨拶をされましたが、これも家庭に於ける躾が嚴しく行き屆いて居るのであると思はれました、兎に角世の摸範として耻ずべからざる家庭でございます。



矢代海軍中佐夫人を訪ふ

一記者

松村海軍中佐の留守邸を辭して直に、同町なる

▲高雄艦長

として精鋭の聞え高き海軍中佐矢代由徳氏の留守邸を訪づれました。

飾げなき門を入つて、右手の方へ斜に、玄關に訪へば、召使の下婢が出て來ましたので、乃ち例の通り刺を通じて夫人に面會を乞ふたのでした。

間もなく、年比二十八九の、面長な、頭髮を洋風に束ねた婦人が出迎はれましたが、これは即ち、中佐夫人で『まあ、此方へ』と、請ぜられましたけれど、記者は少し急いで居りましたから、まづ『此所で失禮します。』と、云つて、玄關の上り框に腰を卸しましたので、其處へ下女が座蒲團、烟草盆、茶と

順次に運びました。さて、そこで、

▲中佐の略歴

を伺ひまするに、夫人は『履歴と被仰つても能くは存じませんが、ざつとしたことならば……ハイ、兵學校を卒業しまして少尉になつたのは、十九年ださうです。日清戰爭の時ですか、彼の時は、丁度大尉で千代田艦砲術長を勤めて居ました。ハイ、北清事變の時ですか、彼の時は兵學校の砲術教官でありましたから、別に出征はいたしませんでしたそれから中佐に進みまして、昨年二月橋立の副長になり遠洋航海に参りまして、歸つてから天城の艦長となり、それから昨年の暮に現今の艦長になつたのでございます。』と。

▲中佐の平生

君は夙に豪邁を以て稱せられてゐる方で、平生は至つて沈默寡言、泰然として山の如く、物に動せぬといふ風であるさうです。而して、中佐には

▲母堂瀧子

とて、今年七十一歳の高齢になられた方が居られますが、中佐は此方に對しても極めて孝養を盡されます閑雅の折には令孃令息を膝下に鳩めて、古今英雄の事蹟を物語りつゝ、諧謔を交へて、お伽相手に餘念なしといふ風であるさうです。また中佐は家事向一切の事はすべて夫人に打ち任してあつて、少しも容喙せぬと云ふことでございます。

次に嗜好は、別に取り立てゝ是と云ふ程のことはないさうですが、その長技とする所は、砲術で百發百中、敵艦が宛も磁石が鐵片を引き付ける如くに、吸ひ付けるやうに命中すると云ふとでございます。

▲中佐と母堂

出征後仁川旅順等の戰勝に就き、夫人の許へ數度音信がありましたが、何れも語短く意長く『たゞ何時も連戰連捷で、實に愉快で愉快で堪まらぬ、實に天祐としか思へない、自分も益々健勝で、艦務に從事してゐるから、安神してお呉れ、母上身體御大事に……』と、云つたやうな文面であるさうです。而

して出發の際は非常に喜び勇んで、今度こそは、相手が露西亞といふ憎い奴だから、思ひ切つて、どうか斯うしてどえらい目に遇はしてやりたい、大に戰つて戰つて遣りたい、命なんかはいらぬ。……』といつて、出掛けられたさうですが、母堂も亦大に喜ばれまして、中佐に向ひ『お前、思ふ存分に戰つてお呉れ、決して〳〵家内のことなんか氣に懸けないで宜いよ。お前が命を捨てゝでも、まあ、よく御奉公して呉れば、私はそれが何より嬉しい、……』と、流石に中佐の母堂ほどあつて、斯樣に健げな言を、云はれましたが、中佐は坐に涙を浮べて、此の慈母の此言を體して、さら〳〵後顧の憂なく君國の爲め、一身を抛つて、盡さるゝことであらうと思ひます。次に

▲その家庭

に就いて伺ひました所『ハイ、良人ですか、舊は熊本の方でございます。……ハイ、良人は今年四十一でございます。私の名ですか、私は信子と申しまして、丁度三十四でございます。ハイ、子供ですか長女は秋子と云ひまして、十三歳になります、學校は鳥居坂の英和女學校の豫科三年で、毎日通つて居ります。それから二女が道子で是が五歳、三女の名が京子で、これは三つでございます。女は此三人でまだ長男徳太郎と云つて、七歳になるのが居りますが、これは直ぐ前の白金小學校に參つて居ります。因に曰ふ、夫人は、彼の明石艦の副長海軍中佐吉島重太郎氏の令妹であるそうです。

▲令孃秋子の君

秋子孃は、頭髮をお垂髮にした、實に愛らしい花のやうな令孃でありますが、その容貌の美しい如く、そのお心立も美しい、矢張り花のやうな方で、此所に秋子孃に就いて一の佳話がございます。

これは、今年の二月に大雪が降つた日の朝のことでした、例の通り秋子孃は、朝早く學校へ出掛けまして、やがて、物の小半町も歩んだと思ふ比に、或家の門前で、今しも下駄の鼻緒を切らして、後へも

引けず、それとも前へも往けず途方に暮れてゐる一人の少女がありましたが、年の比は自分と丁度同じ位で、餘り良い家の兒と見えないと見えて、扮裝もさ程美しくない、突くるめて云へば貧乏人の兒でありました。秋子孃はこの哀れな有樣を見て思はず足を止めて、

『下駄の緒が切れたの、何か着てるものがあつて？——』

と、尋ねましたところ

『いゝえ、何にもありませんで……。』

と、既う泣き聲になつて、眞赤な足を眞白な雪の中に踏み入れてゐます。

往來を通る人が幾人もあるけれど、皆外目をして知らぬ振をして通つて行くので、誰一人とて此少女を憐れむものはありませんでした。

秋子孃は坐に愍みを感じまして、袂の中より白き手帕を取り出して、

『これを上げるから、緒を着てなさいな、其間、私が傘を差して居つて上げるから』

と、云つて、手帕を彼の女の手に渡しましたが、彼の女は今は嬉し涙をほら〳〵と零して、その手帕で鼻緒着てゝ、厚く禮を行つて我が家の方へ道を急いだと云ふことです。

實に年こそ幼けれ、此温かさ同情を寄せられた貧女は、大方綿厚き衣を着たほども温かきことであつたらうとのこと。

こんな事は、話で聞くと、何んでもない事のやうに思はるゝが、扨て實地となつて見ると中々さうたやすくは出來ぬものである、令孃ともいはるゝ立派な身分の人が、往來の眞中で憐れな貧しい小娘の爲に、下駄の端緒をたてゝやるなんど、すれば出來るものゝマアしない方が百人に百人と云つてよろしい位であらう。秋子孃の此のうるはしい行は、確に其の品質の如何に高尚であるかを知るに足るは勿論、母君の平生の躾方、扨ては家庭の風趣の如何を覗ひ知るべきではありませんか。

女學校

新たに設けられし東洋女藝學校

記者

海老茶うつろふ袴の影、リボン匂やかなる束髪姿の別けても多き東都の中央、神田區は仲猿樂町十五番地に、這般新たに設けられた女學校がある。巍然たる校門には一枚の看牌を掲げ、墨くろ〴〵と私立東洋女藝學校と染められてある。該校の

△開校式

を擧げたのは未だ日は浅い、僅に二月と經ぬのである。日露交戰の時節柄と云ひ、此際に於ける教育事業は頗る困難なるにも拘らず、校長、學監の諸氏は非常の熱心にて、目下七十有餘の校舎が存在せられてある帝都の女學界へ打て出で、尠からず蒙むるべき時局の影響にも躊躇せず、飽くまでも進んで女子教育に盡瘁せんとの奮鬪的覺悟を以て、決心芳ばしき菊花に魁けて、去る九月五日に開校式をば擧行されたのである。噫その勇氣の程、熱心の程、只管感ぜざるを得ない。而して此勇氣と熱心とより成立した所の

△校の目的

と云ふのは、言ふまでもなく其校名の示して居る如く、女藝の發達奬勵を圖るに在るけれど、同校の理想は更に〳〵、より以上の立派なるもので、その抱負と言ふは左の通り。

女學の目的は品性の陶冶、婦德の養成にあること

言ふを俟たず、然れども猶趣味の豊富なる獨立自營心の修練亦た忽にすべからず、されば美術技藝の如き大に之を奬勵し、その趣味を養ひその用に充て、自立の道を授くるは、女子に於ける教育の最も必要なることゝ信ず、吾儕茲に鑑る所あり、此目的を達し併せて婦徳品性の涵養を期せむ爲め不肖自ら計らず、敢て本校を設立す、而して私かに期する所は、貞實堅忍の風なり、温良貞淑の氣なり、獨立進取の心なり、以て當代女子教育の模範たらんとす云々。

是は該校の趣意書に記す所であつて、此趣旨の下に設立され、何處までも斯の趣旨の下に活動し得るならば、實に〳〵立派なるものである。幸ひに中途に挫折せぬ樣、該校の爲めに希望する、否、女學界の爲に切に祈らねばならぬ。

△學科の概要

該校の教科と云ふのは、正科と別科との二種に成つて居る。

裁縫　刺繍　造花　繪畫圖按　應用染色

以上の五科は正科に屬するもので、

家政專攻　教員養成　洋服專攻　和洋服速成　禮法　割烹　音樂

等は別科とされてある。而して正科には前揭技藝の外に

倫理　家政　英語　國語　習字　數學　應用理科　音樂

などを修めしめる事となつて居る、以上の正科別科の外に又英語專攻科と云ふが設けてある。尙詳細な事は該校の規則に出て居る。

△職員と擔任教師

該校の校主は高橋粂太郎と呼ばれて、青山邊の某銀行家である。素より女子教育には何等の關係も有て居ない、銀行家が女學校の校主たるに於ては、其間必ず事情が伏在するであらふが、斯る事は茲に取調ぶる必要もないから記さない。次に記すべき校長―これは前記の高橋氏なるや判然せぬが、事實は該校

の學監たる田添幸枝子女史が兼任されて居らるゝ樣子である。次に校醫として大八木幸子、舍監として增田八重子の二女史が其職に任せられて居る。夫から講師と其受持の科目は左の如くである。

禮法、割烹……石井泰次郎、石井治兵衛
體育……石橋藏五郎
刺繡……長谷川岩吉、菱沼やす子
日本畫……豊岡東江、玉置照信
醫學……大谷木幸子
生花……長田むら子
音樂、唱歌……鈴木健太郎、大庭かつ子
洋服……小川貞次郎
染色……河原一郎（工學士）
袋物……加藤長次郎
裁縫……吉田富貴子
造花……吉岡男成
英語、洋畫……田添幸枝子（バチロル、オフ、アート）
應用化學……內山潮左衛門（理學士）
建築……保岡勝也（工學士）
衛生、生理……綾部利三郎（醫學士）
國語、作文……岡みち子
茶道……島崎とく子

この他に顧問として、遠山椿吉（醫學博士）、川端玉章（畫家）、横井時敬（農學博士）、村上專精（文學博士）、上原六四郎（音樂家）の五氏を記名されてゐれど、是れ唯形式に過ぎないのである。

△學監田添女史

該校の職員と教師は以上の如くで、校の主腦者は無論校主なるべき筈であるが、其校主の高橋氏は如上の次第で、ホンの形式的の學校持主と言ふ許りで、總ての責任は學監の田添幸枝子氏が負はれて居る。女史は今より十三四年前米國に渡航し、始めニユーヨークの中學に入り、同校を卒業して後、更にオハイオ州の女子大學に入り、同國に六年間留學し、卒業後、去る三十一年に歸朝して、間もなく在米中の學友に賴まれて長崎の

△活水女學校

に敎鞭を把る事となつたのである。この活水女學校と云ふのは、米國人の設立に係る、同地でも有數の勢力ある女學校であつて、常に米國から敎師が交替で來任して居るといふ事である。けれど同校の監督の

△ラッセル夫人

は常に同校に在留して、尤も忠實に職務に盡瘁して居るそうな。で、田添女史は本年の三月右の活水女學校を辭して東京に歸り、這回この東洋女藝學校を經營するに至つたと云ふ事である。

△生徒と寄宿

該校は前にも言ふ如く、設立の日は未だ淺いが、其割合に生徒の數は比較的多く、目下全料を通じて四年四名を有して居る其中該校内に寄宿して居るものは十名許りある。是等の生徒は大低家政學專攻科であつて、其外は刺繡と造花を修むる者である、又

△生徒の製作品

に就ては、未だ開校の日の淺き爲め、充分の方針も定まつて居ないが、他の校の如く製品を三井とか白木屋とかへ持行き、店頭に陳列して、一意顧客を待つが如きことは望まないと、學監田添女史は語つて居らるゝ。併し一年に二回即ち三月と九月に

△製作品展覽會

を校内に開いて、弘く社會の觀覽を乞ひ、作品に就ての批評を求むる豫定で、來年の三月には其第一着として開會すべく、今より生徒も當事者も意氣込みつゝあるのは頗る賴母しき事である。

△學監の心痛

元來該校の所在なる校舍は、以前東京女子美術學校と稱されたもので、其當時餘りに芳ばしからぬ風評があつたさうで、爲めに同校は他へ轉ずる事になつたが、その校舍の跡は廢校と爲つて居つたを這回前記の高橋氏が引受て、學務一切を田添女史に托して東洋女藝學校を新設したのであるから、內容を知らぬ人は矢張り以前の美術學校が改稱したものと思ふ

て居る故、この點に就て學監始め校の職員等は少からず心痛して、前者と全く無關係であると云ふ事を常に告白して居る。

今や滿都到る所に女學校の設立されあるを認めざるなきも、而も其成績の純良高潔に至つては、之を數ふるに頗る躊躇せざるを得ない、この場合に處して呱々の聲を揚げ、大に女子の技藝を奬勵すると同時に婦德品性の涵養を期せんとて名乘り出でたる東洋女藝學校たるもの、願はくは前途健全にして、須らく前項の趣旨を實現すべきやう、予輩は我が一般女學界の爲めに深く〳〵希望するのである。

○美の標準

美の標準に就きて近著の獨逸新聞の記するところ左の如し

●髮毛、歐米諸國の文明國は、一般に黃金色、茶褐色及黑色を賞すれども、マリアナ諸島の人民は、白色の髮毛を賞し、波斯人及び土耳其人は赤色の毛髮を賞せり。

●額は、獨逸に於ては、高く穹窿形を爲せるものを美と爲せども、希臘國に於ては、卑き額を美とす。

●鼻は、波斯にては、弓狀の鼻を美となせども、ハイチ島にては、壓し潰されたる鼻を賞し、若し鼻高なる小兒生まれたる時は、母親が故意と之を壓し潰して低くするを習慣とす、露國人は反り曲へりたる鼻を賞し獨逸人は高きを賞し、土耳其人は肥大なるを賞せり。

●口は、各國人種ともに、小なるを以て美と爲す。

●齒は、歐洲に於ては白きを美と賞すれども、印度に於ては之に反して、却て赤き齒を尊び、又黃色の齒を愛する人民もあり。

●顏色は、各人種とも花の如き淡紅色を賞すると普通なるが如きも、其質は區々にして定まらず、グリーンランド人は、顏を青色若くは綠色に塗り、露國の婦女は、石灰の如き白色を以て美となす。



女學生の廿四時

白萩女史

これは、私の極親しいお友達の一人秋野菊子と申すお方の一日廿四時の暮し樣を、い、い、ざつと記したものです、菊子嬢は中流社會の家庭のお方で、お齢は十八某高等女學校の第四年生でございます。

▲夢醒む

涼しげな朝の風が、そよ〳〵と庭の木の葉を動して、東の空がほの〴〵と明けゆくころ、窓近の杉の生籬を漏れて、からから〳〵と、車井戸の冴えたる音！それが、菊子嬢には、丁度宜い目覺となつたのでございませうか。今まで夢安らかに眠つて居られました其涼しげなる眼を徐に開いて、雨戸の隙間から射込む光明に驚いたかのやうに、急躁しく寢臺から半ば身を起されるのでございます。

身體はどうやら起きましたけれども、まだ其眼は全然醒め切らないで、自分には、何だか、眼の上へ吉野紙でも貼つてあるやうな氣がするのでございます。で、その細やかな左手の甲で、双の瞼を靜に擦りながら、さも物憂げに顧返つて、少し伸び上つて枕頭の目覺時計を凝乎と見入つて、暫く目を白黑しました、碁盤の目ではございませんが。

「まだ、五時前！、三十分ばかり早う目が醒めた！」

と、斯う心陰に思つたと同時に、何となく、三十分！それだけ起損でもしたやうな氣もしたのですが三文の德とやら云ふ勘定づくな心にも、直ぐなりまして、菊子さんは、ずつと起き上つて、寢卷のまゝで、其室の雨戸を徐に押開けて、それから書院の小窓や、戸といふ戸、明けべき所は殘らず明放して、そして、新しい、塵一つ無い空氣を歡迎し、暫く、夜具の温熱を涼し、やがて、これを丁寧に疊んで、一つ〳〵、蒲團、掻卷、敷布、枕と順次に戸棚に納めるのでございます。

▲洗顔

既う寢室がすつかり片付いて了うと、漸く目の上が五月蠅なくなつて、如何にも瞭然としまする、そこで、鳴海絞の平袖の寢卷を脱いで、衣桁に懸けてあつた平常着の、大分水を潜つたやうな縞物の單衣に着換へ、巾狹な唐縮緬の帶を締め早速水屋へ行き其所に置いてある練齒磨に舌扱楊枝を使ひ、菫石鹸で顔を洗ふのでございます。

水屋には、下婢が早く水を汲んでおくのですが、間に合はぬ時は、御自分で、水を運ぶこともありますので。

▲朝の祈禱

これは、二十世紀の今日此頃、いはゆるヴハイオレット的の女學生の殆ど思ひ由らざる所であります（特別の基督教信者などを云ふのではありません。）菊子孃は祖父樣や、祖母樣の神佛を信仰なさることに感染れて、天神樣を信仰し、毎朝毎夕、手洗ひ口嗽いで、瞑目合掌、しばし祈念を凝らすのでございます。で、出入の老媼などは、『本當にお若いのに感心でございます』などと、云つて居るさうです。しかし、若し口の惡い、文明の女學生達が、この菊子孃の事を聞いた時は、中には、恐らく『お若いのに感心路潜り』とか、或は又『既う、五昔お待ちなさい』など、叩くものもございませう！

▲御機嫌克う!!

朝の祈禱が了へましてから、菊子孃は、始めて、

御両親に向ひ、小笠原式とかいふ恭しい風に、疊に両手を衝いて「御機嫌克う」と挨拶するのでございます。それから、御隠居様（祖母のみ）に。次は、弟様と、これは互に軽く此詞を言ひ交すので。

▲掃除

朝の挨拶を了へてからが、またなか〳〵忙がしいので、さて、是から掃除と云ふ順序になつて居ます菊子嬢は、餅屋の嫂様と云つた風に唐縮緬の赤い襷を甲斐々々しう十字に綾取つて、新しい手拭に頭を包み、細やかな真白の手に羽二重屑の拂塵取り、障子は勿論床の間、違棚、小窓など、損傷の付かぬやうに、手早く、隅なく拂き終つて、始めて箒を取るのでございます。

嘗て、菊子嬢の掃き方を祖母様が御覧になりまして、少し笑つて『菊さん、お前は、將來、お嫁に往つたら、圓形いお部屋を建へて貰はふ方が宜い』と、云はれましたので、菊子さんは大變弱つて、それから、掃除する時は、殊に隅々を注意して、よく掃くやうになつたのでございます。で、御自分の寢臺が了へると、其次の八疊のお座敷を掃除する役目に定つて居るのでございます。

それから、箒、拂塵を一定の置場處に歸し、間もなく、縁側へバケツに水を運び、濡雑巾で、縁側、閾、などを拭掃除し、尋いで、乾布帛で、床の間、違棚などを乾拭するのでございます。

▲お化粧

毎朝の大々的の仕事――お掃除が濟むと、もう、占めたと菊子さんは心嬉うなつて、乃で、また第二の顔洗ひをなし、尚又大肌脱になつて、冷水摩擦をも行ひ、それから皎々とした明月のやうな鏡臺に差し向はれ、四道具の揃つた細面を鏡臺に映して、頭髪を解くやら、油を塗るやら、梳づるやら、浮垢を除るやら、それは〳〵忙しい程手を働かして、出來上つたお髪は、矢張、元の、雪の御顔に相應しい花月、無論、紅白粉付ける要もなく、只濡手拭に菫香水振りかけたので、頸のあたりを二三遍拭いて、

最後に、銀座の闕口か、何處かで買て來た、新形の桔梗色の、リボンを翳すので、まづ〳〵頸以上が御目出度出來上るのでございます、此最後のリボンは、繪師が顔書きて、瞳子が後にすると同じ格で、菊子さんのお顔、ぐッと引き立つて來るのでございます。

▲朝飯

お化粧が出來上つてから、朝食の前に、折には庭園に下り立つて、植木の世話をすることもありまするが、これは、偶なことで大抵はお髮が上ると直ぐ、八疊の茶の間で、朝食に取り掛かられるのです。食事は可成打ら揃うて行ふと云ふ主義でありますけれど、まで日本の普通の家風として、菊子孃などの家でも、各自都合に由つて區々別々に行ふのでございます。けれども、弟樣も矢張學校へ出らるゝから二人は必ず御一緒に並んで食べるので、いつも、姉樣の菊子孃は、弟樣の御給事と云ふ役廻り、



さて、朝食が了へてから、菊子孃は御自分と弟樣の二人の御辨當を拵へになります。

▲登校

既う、彼是六時半ともなりますれば、菊子孃は、御自分の書齋に往かれまして、小やかな塗机の前に畏まり、其日の時間表を見て、書籍ノートブック、筆、紙などを取り揃へて、それ等をメレンス友禪の風呂敷に包み、それから、何か

少し調物するのか女鑑などの雜誌を見るか、何かして暫らく食後の靜止を守つて居るのでございます。又折々茶の間で、新聞を見て、我軍の勝利を嬉さうに、お母様や弟様に告げることもございます。

七時半（學校まで二十分かゝるのです。）頃になりますれば、菊子嬢は、奇麗に洗濯してある白足袋を穿き、白メレンスの襟のかゝつた襦袢に中柄の紺絣の單衣を重ね、巾狹な帶をくる〳〵と卷き付けて、いゝきちんと疊んでおつた海老茶袴を穿ち、それから、御兩親に登校の由を告げて、包を小腋に、辨當を堤げて、左手に深張の洋傘を杖に、勝手口から、表付の鶸茶の緒の縋つた下駄を穿いて、門を出てゆかれます。

▲學校までの途中

深張の洋傘を肩にして、徐々と歩きながら、今日の學校の事、代數のこと、國語のこと、裁縫のこと英作文のことなど、いろ〳〵と考へて、やがて、ものの小半町も歩んだと思ふ時、後の方から、癇高い聲して、

『秋野さん、菊子さん！』

と呼ぶものがありますので、顧返つて見ますると、これは同級の遠藤房子と内田秀子といふ口惡の女學生でございました。

『オヤ、御二人お揃ひで、お早う!!』

と、菊子は正しく立ち留つて、やゝ蝦腰になりますると、

『ハイ、菊子さん、お早う！』

『お早う！』と、何れも笑顔、

やがて、菊子嬢は思ひ出したかのやうに、

『房子さん、秀子さん、皆様、あの、宿題の英作文お作りになりまして？』

と、尋ねまするると、

房子は透かさず

『ハイ、英作文ですか、あれは、なか〳〵難かしいのね、昨夜は夜一夜て、字書と首引したけれど、てんで、手のつけやうがないの、もう可厭になつ

ちやつたの！……菊子さん、貴孃は、お出來なすつて？」
「いゝえ、どうして、どうして、私も出來ないの、隨分難しいんだもの！……ぢや、秀子さんは……」
と、今度は秀子の顏を見ながら尋ねますると、
「ハイ、お合憎樣で、お問ひになる丈なんとかだわ」
と、聲高に笑ひました。菊子孃も房子も亦笑ひました。
やゝあつて、房子は、
「本當に難かしいとも、なんとも、苛の惡い位むづかしいのね……髙橋先生のお顏の通りに難かしいのね、……オホヽヽヽ。」
「オー、可厭だ、房子さん、貴孃は隨分お口が惡いのね。オホヽヽヽ。」
と、菊子も笑ふ。
「だつて難かしいお顏ぢやありませんか、痘痕で…」
「いくら、痘痕だつて、房子さん、何も宿題が難かしいことはないわ。」
「菊子さん、いやに、貴孃は髙橋先生に、ひの字ですねえ。」
「あら、可厭ですよ、なにも、私、別に贔負すると云ふことはないんですよ。」
「どうかしら、蓼食ふ蟲もなんとかですからね、そりや、分らないわ、……だが、私、なんだか、今の髙橋先生が蟲が好かないの、前の河合先生は、ほんとに私、好きだつたわ、愛嬌が零れるほどあつて、優しくつて、しとやかで、何處となく女らしかつたわ、今のあば先生と來た日にや、頑固で頑固で、まるで、男（い）暴者のやうな……。」
秀子は、此時何と思ひましたか、
「房子さん、髙橋先生だつて、何も愛嬌のないことはありませんわ、澤山、うんとございますわ。」
「オヤ、〳〵、秀子さん、貴孃も、矢張り、ひの字ですね、何うして、あの先生に愛嬌なんか、何處にあるの？」
秀子は、少し笑氣味になりまして、

『お顔に……！』と袂を當てました。
房子は少し考へた振して、
『あの、大きな顔の何處の何町に愛嬌のあの字が落こちて居るの？秀子さん！』
『あら、貴孃も分らないのね、鬝の鈴成さ、千成鬝さ、愛嬌がそれこそ、零れるほどと……。』
『オー、いやな洒落、いくら、千人前の愛嬌があつたつてどこか、頰の邊が苦み走つて居つてプラス、マイナス、どうしても、苦味が勝つてゐるから、矢張無効よ』
『ぢや、マイナスが多いの、』
『さうですとも。』



菊子孃は、今まで默つて二人のへらず口を聞いて居ましたが、此時、思はず失笑して、耳朶まで眞紅にして、やがて、
『あんまり、高橋先生の噂なさつたから、後から來られましたよ。』
と、調戯半分に脅すと、房子はちよつと顧返つて見て、
『何に、そんな感の宜い、皮薄なのは違ふから、大丈夫大丈夫！』

＊　＊　＊

これは、菊子と直接の關係のないことでありますけれど、女學生の口惡い人の諷刺までに

▲學校にて

菊子等が學校へ登つてから、十分間餘經つて、鈴

が鳴つて、生徒一同殘らず教室へ入つて、先生の來るのを待つてゐました。やがて、先生が來られて、出席簿を付け、やがて、代數の教授を受けました。次は、幾何で、其次は英作文で、例の高橋先生でありますので、遠藤さんも、内田さんも、また菊子さんも三人互に顏を見合して、何か頻りに無線電信を掛けました。そして、菊子孃は其マイナスといふことが可笑くつて堪まらない位でした。すると、先生が房子に對ひまして、

「遠藤さん、今日は何だか、嬉しさうな顏して笑つてゐらるゝから、大方能くお出來なすつたでせう、さあ、一つ黑板へお書きなさい。」

房子は、出來ないと云つて斷りました。が、其次に秀子さんに當てました。これも出來ないと云つて斷りました。其次が菊子に當りましたので、菊子は、到頭、黑板に英作文を認めました。そして、先生の添削を受けたのでございました。次は矢張英語で、それから、正午休が一時間、菊子孃は二三人と、逐掛けたり、逐掛けられたり、種々、あどけない遊を爲てゐる間に、直ぐ、午後の學科が始まるのでした。が、午後の二時間は菊子孃の嫌ひな算術ではなくて幸にお得意の裁縫で、何となく嬉しさうな樣子でございました。

學校は土曜水曜の兩日は平日より一時間早く退けるのですが、菊子孃は同校庭球會員の一人で、而も運動遊技が嗜きですから、必らず、其兩日は、ラッケットを握つて運動場裏に活動するので厶います。

又、近頃から學校では、恤兵部へ獻納すべき繃帶製造を始めましたから、菊子孃は一週に二時間居殘つて、繃帶卷をするのですが、何れも國家の爲とて一番これを樂みとして、生徒各自、其順番の廻つて來るのを、鶴首して待つてゐるさうでございます。

▲歸宅後

學校から歸つて來ましてからは、直ぐ其儘の扮裝で近所の或る私塾へ國語漢文の稽古に行き、てにをはの使ひ方や、助字の使ひ分けを習ふて、四時半比

歸つて、始めて、自分の書齋に落ち付のでございます。

まづ、朝と反對に袴を脫いで、折目正しく疊み、衣紋竹に着物を掛けるか、衣桁に袖疊にして打ち掛け、平常着に着換へ、それから、今日の學校の復習をするのでございます。それから、さうも無闇に勉强も出來ないものですから、遊び旁々雜誌などを覗くのでございます。

さて又、夕餐の前には、時々臺所へ出で、學校で習つた割烹を試みて、庖刀自慢といふこともわりませんが、兎に角自分が拵へたものを他の膳の上に載せるまでの樂みとして、餘念なく、庖丁を執るやら、冷爐の下を煽ぐやら、時々大騷することがで



ざいます。

ので。

▲夕餐

此時は朝食の時と違つて、家内一同打ち揃ふて行ふのが例となつて居まして、一日の內で、最も樂しき、愉快な時であります。菊子孃の阿父樣は、例に由つて、一陶を傾けて、もう滿面朱を濺いだやうで、しかも莞爾として、さも〳〵樂しげに、家內一同の食事するのを見らるゝのでございます。そして、此時、菊子孃は、何か自分の理想を抱いてか、悲しい話や、痛しい事や、汚なき事や凡て惡感を抱かぬ範圍内に於て、選り扱いで、可成面白い話や、珍しい話や、立派なことや、美しい事を話すやうにと、心掛けて、居るらしい

▲食後の娯樂

夕餐が終へると、菊子孃は緣側の凉しい所に立つて、得意のヴハイオリンを奏でます。そこへ、弟樣が、次の座敷から、勢よく『伐てや懲らせや魯西亞國を。』つて、歌つて來るのでございます。そして、直ぐ、

『姉さん、通りに行つて來ませう。』

と、强請られまするので、菊子孃は、程近き通の方まで、散歩に出掛け、雜誌屋か、繪草紙屋を見て一周して歸るのでございます。

▲夜學

散歩から歸ると八時頃でございますが、それから、明日の調物や、宿題や、種々勉强するのでございます。

試驗前には隨分夜を更かして勉强することもありますが、平生は、早起早眠、所謂朝早く起き、夕早く寢るは、人をして、健康に、富貴に、そして、怜悧ならしむるといふ主義に基いて身を處してゐらるるやうでございます。

また折には、夜間、裁縫を爲たり、編み物を爲たりすることもあります。

▲平和の夢

起床の時のそれと反對に、靜に蹐を伸べて、寢卷に着代へ、自覺時計を掛けて、それから、ランプを消せば、忽ち黑闇々。菊子は靜に枕に就て、今日のこと、明日のこと、種々と秩序のない事を考へるのですが、間もなく、我と我が身の覺えなくなりまして、平和なる夢の境に入るのでございます。

（をはり）

訪問の心得

菊池雪子

日本固有の女禮式を用ゐる場合も漸次に區域が狹うなりまして、是れからの主婦方は英語も話し、佛語も學び、從つて外國人と交際する機會に屢々出逢

のであります、日本人同志でも、何うも舊式のまゝに致しますよりは、時勢に伴ひて矢張和洋折衷とか新舊融合とか云ふやうな理にいたす方が、適當でございますまいか、簡便になりますので、不知不識の間に、日本の女禮式も實行の上からは、兩方を中和したやうになつて參りました、中流以下はさしたる相違もないかも知れませんが、其れより以上になりましては、訪問の時、多くは西洋造の應接間に案内せられ、椅子卓子の並んでゐる所で、座つて禮をする代りに立禮をし、茶の代りに珈琲を進められるといふやうになりまして、西洋の禮式を心得て居人ならばすべてに矛盾することもなく、人に笑はれる失策もありますまいと思ふのでございます、尤も年老いた御婦人方は斯る場所にお見えになりて舊式のままにおやりなさいましても、なまなか一ッ二ッ西洋をまねるよりは、見よいものではございますが、若い方、明治の新教育をうけられた婦人ならば、西洋の風を少々は辨へて置きまして、折に臨んで輕躁な擧動のないやうに致しますのは、實に見よいものではございませんか。

訪問の際、心得て置かなければならぬ事を、少々お話いたしたい積りでございますが、先づ其の前に訪問の利益ある點を擧げて見たいと思ひます。

「家にのみ居れば外出するのが嫌になります、また外出しつける習慣をつければ、家に蟄居して居るのが嫌になります」成程、眞の幸福は家庭の中にありて、家庭に於てのみ求められるものでございますから、處女の時には兩親をよそにし、嫁しては良人子供を下女任せにして、交際々々と喋々しく處々を飛び廻ることを深く誡めなければなりません、だからと申て、一切訪問を禁ずる理由もございません、また左樣解釋を下すのも誤りです、兎に角、處女や主婦は、家庭に家庭の快樂を覺えさせる天職があると均しく、猶廣大な使命を有つて居られるのですから社會の無能物とならぬやう、其の使命を果さなければならぬのでございます、身分、階級生活の狀態に

よつて相違もございませうが、好か不好か、氣が進むか進まぬかに係らず、或る場合に於きましては、否應なしに訪問をし、又人の訪問に應對いたさなければならぬ事があります、女子は內事を治めつゝも外に働く夫を助け、交際を圓滿にせしめる潜勢力を有つて居るのでございまして、其の訪問によつて、徃々男子間の疎遠になつたのをも舊に復し、業務上關係を有つて居る暫しの交際を親密にさせる事も出來るのでございます。

消極的に訪問を非難すべきでもございません、親戚朋友の間に不和を釀して、往來の絶えたのをも回復いたす妙法は、訪問するによるのでありまして、例へば正月に年始の禮に行きますことは、年中疎遠に過ぎ來たつた事を忘れさせ、親みを舊に復するなど著るしい効驗のあるものでございます。

佛蘭西の文豪シャトブリアンが申しました言葉に「年始に隣家の人々の禮を受け、又は禮を述べに行くなどは、一年即ち三百六十五日の長い月日間、交際を圓滑にさせしめる」と云つてありますが、日本の俚諺にもよく「昨日の鬼が禮に來た」と云ふやうに之れも社會の義務缺く可からざることを知らせて居るのではございませぬか。

世間の誘惑物に心を奪はれぬやう、幽閑に生活すべきでありますが、社會の義務を全うする場合には一刻も躊躇せず、快活に、溫順に、人々に對する義理を盡さなければなりません、此の際尤も注意しなければならぬことは、他人の惡に感染いたしませんやうに、德行すぐれた人か、學識技能の發達して模範としてもよい人、又は交際する度每に智識の上に道德の上に、何か得る所あるといふやうな人を撰ばなければなりません、斯すれば日々の貴重な時間も有益なる交際に消費されるので、聊も悔ゆる事がございますまい、然し義理を缺かぬ場合には先方が德ある人か、不德の人か、八釜敷云つて居られぬことがございます、恁麽時には眞の義理を盡すだけ、形式を丁寧に、心を親切にして、一向禮義を亂さぬや

う、或る時間限り訪問なり、應接なり、いたすが宜うございます、何の快樂も來たさず、辛い思をしまするので、之れこそ義理一點張と思つてよいのです
　そこで、訪問は三ッに區別いたして見まするど、第一禮儀又義理の訪問、之れは義務として缺く可からざるもの、第二親愛の訪問、第三慈善の訪問となります。

禮儀上義理上の訪問

　義理の訪問は社會の禮法、風俗の要求によつて相應に盡されるものでございます、例へば年始祝賀の禮、死亡、病難、訴訟、失敗等の弔慰、結婚、出産の祝、出立の暇乞、歸鄕の報告、其の他官吏とか、知名の人物とか、自己より身分高き人を訪問する總稱でございます、凡て此等の訪問は、午後にいたすべきものでございまして、扮粧を適當にしなければなりません、何故なれば、粗末な衣服を着て、身分ある人の家に行き、次に他の身分高からぬ處に立派な着物を着、充分化粧して參りますならば、前者に出逢ふとき其の感情を損ずる恐があるので、不取直失禮になるのですから、死亡のあつた家に弔に行くには洋服ならば喪服を着るがようございます、喪服を用意せぬ時か、和服で行くのならば、黒つぽい華美しくない衣服を撰んで着るがようございます、何うかすると、葬式に會するに、婚禮の席にでも呼ばれたやうに、淡色の着物を着飾つて行く人がありますが、側から見るも片腹痛い次第であります、憂に沈んで居る不幸な人に對する弔慰の意にも逆ることになるのです。
　禮儀の訪問は定まつた時機に於てなさなければなりません、無暗と自己の都合まかせにいたすものではありません。
　禮儀の訪問も、嚴肅にいたさなければなりません午餐晩餐、夜會などに招待せられました時、參館しても、不參しても、當日を過して後一寸顏を出さなければなりません、又此等に招かれました時、若しも先方の主婦と別懇でないか、或は未だ一度も參館

したことのない場合には、宴會の席に連る前日までに、一度訪問をいたして置かなければなりません。

◉訪問の際、先方が不在である時は、名刺を取次の者に托して歸るのですが、わざ〳〵當家まで本人が足を運んで參つた事を主婦に知らせるために、名刺の片端を折つて渡します、都市に住む人ならば、夜會や饗應に招かれて後、訪問する規則なのを狀袋の中に名刺を封じ込んで郵送し、之れで足勞の禮を畧すも可であります、年始にも斯ういたして宜しいのです、たゞ先方の家族が幾人居るか、其の人數だけ名刺を入れて遣らなければなりません、けれど無論子供は其の中に數へられないのです。

訪問する時の心得

起居を人に尋ねることは、親切で丁寧なやうに思はれますが、西洋の人に申させますと「お變りもございませんか？」「如何で入らつしやいますか？」など安否を尋ねることは親しい友達か、同等の人にのみ云ふべきとでありまして、目上に對して敬禮にならぬと云はれます、安否を尋ねられた人は之れに對して「有難うございます」と簡單に答へて禮を述べ、談話を他に移すやうに務めなければなりません。

客に對して勞を執らせないやう、◉早く椅子を進めるのが、應對者の勤でございまして、之れは大概家の子の役目でございます、客は室を去るときに當つて、腰掛て居つた椅子を、自ら元の場所に持ち運び直して歸るのは、容儀を亂すことゝなるので甚だ宜しうございません、席を離れながら椅子は其儘にさしおいて退出いたすべき筈です、座禮の時座布團に上ることを、再三五六度まで進められて、やつと膝だけを觸れさせ、歸る時には布團を二つ折にして退く人もございますが、之れは如何なものでせうか、大切な座布團に折目の付くのを迷惑に思ふ人もございませう。

西洋間の上座は、冬には暖爐の前、日本間の上座は床の間の前と定まつて居りますから、訪問に行きました時に、自分から其處を選んで着席してはいけ

ません、けれども主婦から、其の上座を進められる時は、餘り遠慮に過ぎて好意に反くのは、却て失禮に當りますれば、訪問の時でも、饗應の席でも、如何やうな場合にでも、矯飾の謙遜をなさず、易々と主婦の望に任せて、其の云ふ通りいたしますはうが容儀正しうございます、禮法に拘泥して風采をつくらふとするは、主婦に對つて間接に貴姉よりも、私の方が禮儀に明るいと云はぬばかりになつてしまうので、交際上面白くないのです。

室内戸口を出るにも、自己一人でなき時は、我れ先にと押合うてはいけません、が、又互に何時までも讓りあつて居るのもいけません、尤も有位、年長者、婦人（これは歐米風）には、是非讓らねばなりません、同等の人々ばかり居る時には、或る可く人の後に身を抑へるやうにいたして居らなければなりませんが、何れの人も同樣に讓り合つて居りますならば最も戸口に近き人が、如才なくさゝやかな敬禮をして、先づ出るがようございます。

之れも西洋風でございますが、禮儀の訪問をする節には、婦人は手袋も、帽子も、搭巾をも脱ぎません室内に入り來る人が婦人ならば、既に着席して居つた人々は、皆椅子より起たなければなりませんが、入り來る人が、若しも男子でございましたらば、客の中男子のみが、主婦と同時に起立するのでございます、そこで、來客は先づ主婦に禮をなし、其れから並み居る婦人方に禮を述べます、其時答禮として訪問者は、半ば身を起すだけでございます、訪問が終つて歸りますときは、第一特に主婦に禮をなし、次に室内の客一同に禮をして出るのです。（つゞく）

妻の日常試驗

外山折柴子

妻となりては、よき奥樣と云はれたきもの也。やつ、い、いゝ、かゝア、おかみ、山の神などは御免蒙りたきもの也。奥樣と云はるゝ事、今の世の中に造作もなきことに

て。或商家の妻君は曰く、まだ奥様と云はるゝほど貧乏はしませぬ、とまで下落したる也。故に奥様と云はれずとも、人の妻となりては、奥様の行ひをしてもらひたき也。右に奥様及落の早わかりを並べていさゝか良妻賢母をふりまはす奥様に、一讀を煩はしたく思ふ。

及第の部

▲禮儀を守る　親しき中にも禮儀あり、たとひ一家の内たりとも、禮儀の缺け目は、すなはち反目の起りと知るべし。妻を中心として、禮儀の正しき家ほど、見よく、よく治まりたるはあらざる也。

▲長上の指圖をうける　極めて從順にありたきものにて、やがておのが意見も、これによつて圓滿に行はれ。おのれ以下のものも之を見習ひて、自然一家に不平の根を斷たるゝなり。

▲家業の手助けをする　奉公人の面倒を見て、喜んで主家に働かせる如きも、即ち家業の手助なり。強ちマッチの箱を貼りて、小遣錢を補ふもののみ云ふにあらず。

▲身ぎれいにする　美衣を纏ひ、麗容をつくるをすゝむるにあらず、よく衣と體とを洗濯して、いつも瀟洒としてありたき也。心の洗濯まで行届かば此上なし。

▲よく立働く　寢室にて三度大聲を發して下女を呼起すよりも、雨戸を一枚くる音の、彼の耳には早く響きて、其の德今少しお寢みと、慈悲の言葉をも掛けられる也、而も下女の閨を離るゝこと前者よりも早く、奥様の號令、その時よりぞ行はれ始まる。故に奥様のよく働ける家の下女は、多くは忠義也。よく働くと口やかましく且つ氣むづかしきとは自ら別問題と知るべし。

▲近所交際のよい　遠くの親類より、近くの他人といふこともあれば、近所合壁とは殊に親しくすべし、親しくすとは金棒を引歩くの謂にあらず。

▲愛相のよい　女はやさしくてこそ價値はあるなり、佛頂面など申す相は見よきものにあらねば、氣

に入らぬ風もあらうに柳かな、を眞似て、いつも愛相のよきことを望む。決して顏を曲げたればとて、それで世の中が思ふようにはならぬ也。

▲手ばしこい　顏を洗ふに、飯を食ふに、長い時間を要するは、大方お引摺の人也、椽を一つ拭くにも順序を考へ拔いて、裾で物を掃く如きことなく、注意よく手ばやく仕度きものなり。

▲無理を言はぬ　下らぬことに不平を起し、それを八當りする如きは、沙汰の限りなるも、いやしくも道理に外れたる事は、また自分にも好ましからぬ事は、他人に望むべからず。

▲冥利を知る　襤褸を繼いで着る、飯を疎末にせぬ、其他勿體ないと云ふことを知るべし、されど腐つた物を、勿體なしとて食ふ如きは、勿體なきを通り越したる也。

▲家内の締りをよくする　障子の開閉、火の元の用心、雇人に對する注意、これ奥樣の勤也。

▲良人にさからはぬ　妻となりし當座の心にてあらんには、良人の感情を害ふことは萬々なし、もし良人の不身持なることあらば、種子は自分より蒔けるものと思ひて、意見するにも氣永くすべし。

▲子供の面倒を見る　親として子の憎きものは一人もなかるべし、まして自分の產みしものは、自分の命にもかへまくほしくいとほしきものなるは、云ふまでもなきことながら、さてこれを育つるにさまで心を勞するかと云へば、まだ頑是なき幼兒に向ひて、さも腹立しげに折檻するなど、はなはだ解し難きことあり、それは育て方のあしきを棚に上げたる仕打とも謂ふべし、いとし愛らしと云ふ口の下より、手に脊にする面倒さに、丸きもの與へて一時の惜休めする如きは、殆んど百人中の九十九人也、さてもいとし愛らしといふ心は、美しき衣着せて、親の看を誇らんとてか。

親となりては、子の心の鵜の毛ほども曲らぬやう、すなほにやさしくすべし、うるはしき親子の愛は、一家を圓滿にする第一の光なり。

▲手跡の見事なる　女の藝として手跡の見事なるなど、甚だ好ましきことにて、歌よむ筆持たんには此上なかるべし、されど思ひのうきたるかたに馳すれば、身のあやまりとなるべきおそろしさを思ひて身をつゝしむべきはもとより、妻たる日常のつとめをおろそかにして、短冊ひねくるなども禁物也。

▲日記帳をつける　花に戯れ、月に遊びしおもしろさをも記すべし、さりながら此たのしさの何の報ひなりしかを思へば、わが行ひしことに筆執りて、脇の下に時ならぬ汗を流すこともあるべし、されば日記の後の紀念を見んよりも、其利益する所は、筆執れる時よき行ひを記したく、おのづから惡き行ひに遠かり、其日々々の小遣ひを記すにも、また費を省く途となりなむ。

▲覺悟のよい　なか〳〵責任重き身の、平素の覺悟こそ肝要なれ、暮れ行く年のいそぎに、長き怠りを示す如きはその一例にて、身だしなみの如きも、いつの間にはと云はるゝやうありたし。

▲手の内を出す　なさけは他の爲ならず、日ごろ費用を節して、落つる涙に價あらしむるやう。

▲無理を云はぬ　無理は燃立つ心に一時は滿足するやう通ることもあるべし、まづ人の顔のしかみし時は、おのれ其地位をかへて見よ、多くは心解くることあらん。

落第の部

▲亭主を尻に敷く　良人を良人として、外聞を保たしむるやうしてこそ、妻たる自分の面目を施さるなれ、敷かるゝものより、敷く尻の體裁あしきを知らぬ氣の毒さよ。

▲悋氣をする　情は時によりて激するものなれ、されど角を生して己が態度を醜くするは、自暴自棄とも謂ふべく、愛想の念を不愛想にて囘復せんとするは、火を消さんとて油を注ぐものゝ如し、況んや火のなき所に煙を上ぐるものに於てをや。

▲針仕事の出來ぬ　針仕事が昔の人の云ふ如く、女の金科玉條といふべき程のものにてもあるまじけ

れど、針の持てぬといふに至つては、甚だふたしなみの話也、斯の如き女は、心のほころびも縫へぬ勝なるべし。

▲膳の出し放し　午まで朝飯の片付かぬ如き、折折見受けらる、音樂の先生達も、かゝる事より籍を下等に置かるゝ也。

▲流行物をほしがる　流行の魁は、すでに廢れたる一番古きもの也、流行物を身に着けたるは、浮薄なる看版と見て差支なし、況んや柄になき身に纏はるゝ、流行物のをり〳〵は落涙するもののあるに於てをや。

▲小鍋立のすきな　豐太閤は曰く、天下の樂は小鍋立にありと、雪のふる日など一興なきにあらず、されど奥方のあられもなき食意地の、小鍋に張切れぬものあるを見ては、あまり感服せられず。

▲さし出口する　口は成るべく控え目にして過ち少し、我は顏してさし出る、月の前の板びさし、雨の爲を思へるとは云へ、さしわたりあらずもがな。

▲よごれ物をためて置く　一つ宛は面倒なり、多くなりては太儀なり、盥に一昨日のまゝなる洗ひ物それに散れる花びらまで埃となれる、それにて湯上りの心地よきを知れるは不思議なり。

▲口ごたへする　自分は長上に對して口ごたへする、目下の者の口ごたへするはさてうれしからず、これにて算盤を習ひたりといふ奥様のあるは、實に解し得られぬ話ならずや。

▲髪のむつかしい　髪の結ひやうにて奥床しく見らるゝもあり、氣を附けねばならぬことなり、見合の寫眞を撮る氣になりて、たび〳〵髪結女を困らせる其の顏つき、髪はいかに美しくなれるもそぐはぬ圖なるを知らず。

▲洗湯で湯を麁末にする　東京にて女湯に湯札を出さぬは、女は湯づかひの荒きを以てなり、如何につかい放題の湯なりとは云へ、冥利を知れば罰のあたる事なり、いゝ、しわんぼうの女も湯屋にては其の氣前の知れぬこと、男に肌見するさへ厭ふ女の、湯屋に

ては三助に脊を流させる醜態も平氣なるが如し、この邊の消息我は更に合點行かず。

▲我良人をほめる　くさすにもあたらぬことなれど、まづ聽がさるゝ身に成りて見るべし。

▲我子を無闇に叱る　面倒を見る代りといふに至つては、誰の産みたる子ぞと聞きたし。

▲錢遣ひあらい　必ずよき方の遣ひ道には少し、果は財布をはたき出したる其の金に、泣かさるゝことあるを知らず。

▲お饒舌　大切の用事には役に立たぬ口を以て、井戸端には議長となる資格あり、あなた丈になど、饒舌つた事の、あなたが數十人あるに至つて、おやと後悔しても及ばず。

▲外出あるき　子供をだしにして、寺祭りをだしにして、内に構はず出あるく、目につくことは皆身の毒ならざるはなし。

▲情のこわい　自分勝手の強き、やさしみのなき女、煮ても食へぬといふが如き、女の本性を失ひたるものなり、少くも女たることを忘れたるものなり女は柔にしてこそ能く剛をも制せらるゝなれ。

▲蔭口をきく　他人の服裝に難くせをつける、あらゆる他人のあらを拾ふ、女らしからぬ骨頂也。其外我里方をほめる、元の島田にして返せといふ如き痴劇を演ずる、寢床にて煙草の輪を吹かす、手紙一つ書けぬ、物事にそゝつかしき、子供の喧嘩に飛出す、縮緬の前垂をしめる、根性わる、調子はづれし大聲をあげる、贅澤でのみ、意氣がる、お引摺、返事ぎらひ、其上幾つ數ふるも際限なし、これ以上落第の部に入るべき、云ふに忍びざることをも、今は上流の家庭に見ることの少からぬぞうたてき。

▲全體女といふもの　は男子に比べると、妙なところに理窟を付けて、勝手な眞似をしたがるものでそれが一寸とした動作にもあらはれて、非難となり欠點となるのであるから、要するに先づ其心の中に愼みを加へて、常に己れを顧み、氣を引締めるが肝要なるべし。

実験 牛乳日本料理（第六回）

清水鈴子

▲早蕨

わらびの粉に白砂糖、白味噌を加減して入れましてそれを牛乳にて溶くのです、やがて溶けましたならば食料の青粉をうすめに加へてよくこね、上に胡桃をくばり蒸籠に入れて蒸し、後程よく切りて人に出しまする。

▲巻ぎぬ

うどんの粉に白砂糖を加へ、牛乳にてとろりと流る様になりたる時、焼鍋に油をひき、右のうどん粉を流し、やけて薄き衣となりました頃を見計ひ、軽き魚の肉、若しくば蒲鉾、さもなければ長芋を醤油しほ加減したるものを心に入れ、その衣で巻せんべいの如くになし、加益などで食べるのでございます。

▲若草蒸

慈姑の大きやかなるものを、生にて皮をむき摺りおろしたるものに、うどん粉、食塩、牛乳を加へ摺鉢にてよく摺り合せ、それを板の上に乗せて蒲鉾のやうに致し、その上を青昆布にて包つみ、こしきに入れて蒸しわぐるのであります。

▲けいらん

まづ餅米の粉六分ならばうる米の粉四分を牛乳にて溶き、手にて丸めらるゝ程のものを、掌に延し、その中へ上々の黒砂糖すこしつゝを入れ、包みてゆでるのです。

▲新とろゝ

常のとろゝに、醤油、牛乳を加へます、但し鰹節は入れません。

▲また

山の芋とろゝの一新法ですが、まづ鯛の肉を摺り、同じく醤油、牛乳にてほどよく溶き、温かき御飯にかけて頂くのです。

▲空蝉豆腐
豆腐を腐滓の如くに煎り、よく水氣を去り、それに牛乳を入れ鹽を加へ、またもみ鯛、玉子、油にて火を通しよく煉りたるものへ、山椒、麻の實などを入れて、右の豆腐を煮ます、尙白砂糖を投じ、味淋は好むがまゝにいたします。

▲茶碗蒸
生ゆばを擂鉢にて能くすり、そこへ山の芋を芋にて皮をむき、わさびおろしにてすりおろし、兩品をいかにもよく擂り合し、ほど能き時に牛乳を入れ、さて昆布だしに、酒しほ少し、醬油よき加減に合せ、その汁にてよくすり延し、加益には、しめぢ、やきぐり、きくらげ、皮午房など、時に見はからひて、皆茶碗に入れ、その上より右の合したる汁をよき程に盛り、蒸籠にならべて蒸すのであります。蒸し上りて出す時はさんせう、わさびの類を上に置きますこの外豆腐仕立、栗仕立、海苔仕立など、同じ傳で試みられます、但しその時は、極上の葛粉を水にてとき用ゐ入れまする。

▲新こくせう麵
第五回で說きました乳麵の通りにして、極上の素麵を湯煮に洗ひ、さて料理白みそを擂りてすこし濃き方にしかけ、沸えたる時、牛乳に昆布だし等を加へ然る上、そうめんを器に盛り、その上に燒栗、銀杏慈姑、岩たけなどの加益を置き、右の汁をためて出し、吸口には生姜、胡椒、きのめ、柚の皮、わさびの類をもちゐるのです。

▲銀杏よせ
よき銀杏を生にて打ち割り、上皮をとり、澁は沸湯にひたして布巾にて拭きとり、俎板の上に置き庖丁のむねにてたゝき、うどん粉を牛乳にてときたるものをつなぎに入れ、よき程にとりたるものを榧の油若しくばヘット油にてあげ、芹、みつば、根芋、麩松たけ、しめぢなど二三品あしらひて出すのです。

▲太刀魚
魚の大小に限らず、三枚におろし、腹骨をすき取り

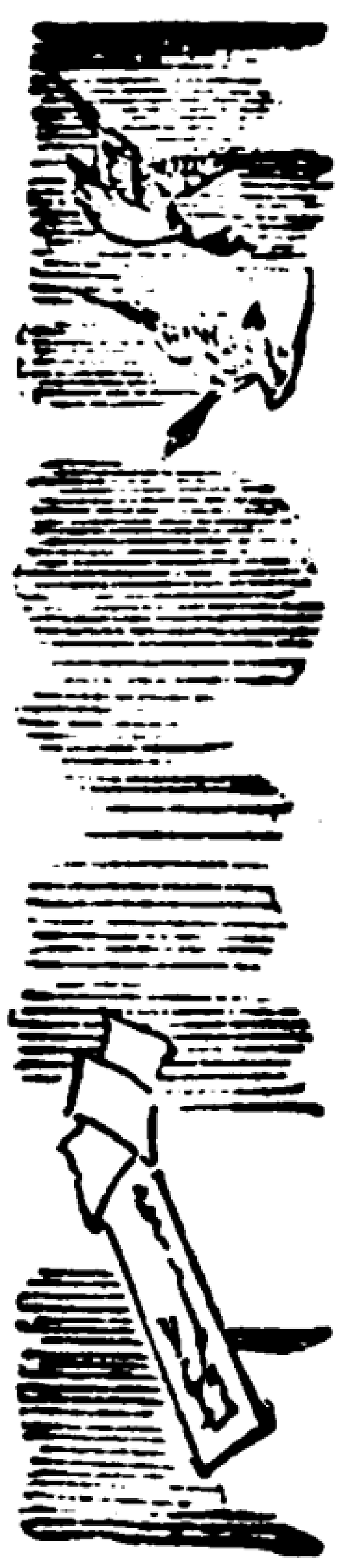
両肉を二つ切、また縦に三つほどに切り、いかやうにも結び、赤味噌をすり牛乳にて仕立るのです。あしらひもの吸口など時の好みに應じます。

▲章魚いぼの吸物

章魚の足を湯煮し、いぼばかりむしり取り、小口より随分うすく切り、赤味噌、牛乳にて仕立、あしらひは獨活、松たけ、麩などの類吸口はいづれなりともよろしうございます。

▲あなご吸物

太きあなごのかしらを放し、腸をよくとり、錢切に小口より薄く三切ほどつゞけて切りはなし、白味噌または赤味噌にて、牛房さゝがき、ゆりね、岩たけわり葱、蕪などの中一品とり合せ、牛乳を加へて吸物にいたします。また吸口は見合の事。



四季の臺所

中川雪枝

◎十一月

飯

『銀杏飯』 銀杏を湯煮して、荒皮澁皮を除り、二つに割り、鹽仕立の飯を炊き、ふき上る時、件の銀杏を飯の上に撒入れ、炊終りて、能く釜の中にてまぜ合すなり、

『海苔飯』 飯を少し柔かに炊きて、飯櫃に移す時よきほどに炙りたる淺草海苔をふりかけ、又移してはふりかけ、斯の如く幾度もなし、少しからき味汁をかけて食す、

『ひぢき飯』 短き鹿尾菜を水に浸して柔らげ、そをザッと湯煮し、其の茹汁を捨て、生醤油にて汁氣なく煮しめ、炊立の飯に混ぜるなり、

生にて作る刺肉

この期の原料は鯛、魴鮄、比目魚、鰈、鯔、鮒、生

鰹、烏賊、蛤、海鼠等なり、
鯛は賽の目または平づくりにして、山椒醤油、生醤油
等にて食し、魴鰹、生鮮は平づくりにして、生醤油
また蕃椒酢を用ひ、鰈、鰡、鮒、烏賊、針魚は何れ
も細作りにし、芥子酢、海膽酢、生姜酢等にて食し
比目魚は黒皮作り芥子醤油にて、蛤は剝身にして胡
麻味噌に、海鼠は小口切にして二杯酢を用ふ、副味
には、揉數の子、山葵、大根おろし、獨活の纎うち
揉大根、赤蕪の纎うち、紅葉おろし等を、

湯がきて作る刺肉

白魚、鰈、鰕、烏賊、赤貝、牡蠣、鯨等を左の料理
法にてこの期に賞翫するを得べし、
『白魚』湯を通し、煎酒に食す、煠蛸を加ふれば
妙なり、
『鰈』まづ刺肉につくり、四五回熱湯につけて水
に冷し、山葵醤油にて食す、
『鰕』煠でゝ皮を去り、肉を細く裂き、酢味噌に
て風味すべし、

『烏賊』ざッと湯がき、平作にし、山椒醤油にて
『赤貝』生のまゝ剝ぎ、湯を通し、芥子酢味噌に
て食す、、ツマには岩茸の細末にしたるなどよし、
『牡蠣』ざつと湯をとほし、三杯酢に仕立つ、ツ
マには茗荷の纎うち等を用ふ、
『鯨』白皮を薄く切りて湯を通し、芥子酢にて食
す、取合せには蛤剝身の煠でたるなどよし、

湯煮してつくる刺肉

三四種取出でゝ左に記載すべし、
『鮟鱇』皮とゝもに切りて湯煮し、生姜酢、生姜
味噌にて食す、獨活、木くらげを取合せに用ふ、
『鰕』湯煮して殼を去り、肉を一寸ほどに切りて
細く引裂き、鮭其他類似の魚肉を加へ、卸山葵など
を添へんには一層よく、煎酒にて仕立つるなり、
『鰡』鮪とゝもに大切にし（又一品づゝにてもよ
し）熱湯をくゞらせ、四五分ほどの厚さに切り、生
醤油にて食す、ツマには獨活の纎うち、卸山葵等を
用ふ、

酢のもの

この期には、野菜の原料少なければ、時を擇ばずして、容易に求め得られ、また貯へ置かるゝ材料にて少しばかり料理法を、

『ちりめんざこ』　大根おろし、或は和布など、雑ぜ、三杯酢にて食す、

『焼麩』　薄く切り、花がつを、三杯酢にて、

『干大根』　薄く輪切にし、細きもの、繊切干ならば揃へて一寸ほどの長さに切り、結昆布、蕃椒など雑ぜ、三杯酢をかけて食す、和布を切りてまぜるもよし、

『干瓢』　揃へて一寸ばかりに切り、二杯酢に砂糖を加へて風味す、

『錦木』　御山葵に花鰹をかきませ、生醬油をかけ又花鰹をかくるなり、

わげもの

原料に左の如きものあり、

『魚類』　鯑、鮪、せいご、準魚には鰕、牡蠣等

『野菜』　胡蘿蔔、牛蒡、蓮根、慈姑、百合根、銀杏、甘藷等、

△わげやう　　鯑はすり肉を丸めて、鮪は細づくりにし、せいごは骨をぬきて片身づゝ、鰕は葛粉を加へてすり身にし、牡蠣は剝身を湯煮し、胡蘿蔔は一分ほどの短冊切、牛蒡は玩弄品の蚊帳吊の如く切り蓮根は皮を剝きて二三分ほどの厚さに切り、慈姑はざつと茹で、皮を剝きて二つ切にし、百合根は一枚づゝはがして、銀杏はざつとあぶりて澁皮をむき、竹串に五粒ほど貫して、甘藷は云ふ迄もなし、

献立一例

この期に於ける献立の一例を左に記すべし、

『本膳汁』　鹽鯛、やき豆腐、葱、或は雁に蕪菜

『同膾』　比日魚、栗、大根　三杯酢、或は海老、胡蘿蔔、芹、ねぎ、卸し大根、

『同壺』　蒟蒻、やき豆腐、茸或は大根に鴨みそ、

『刺身』　辛し酢にて赤貝、鱈或は山葵醬油にて鱸のあらひ、

『燒物』鯛のてつか煮、ほゝなこまし〱、
『平』木茸、胡蘿蔔、午蒡或は鴨、松茸のさきたるもの、剥み午蒡、長芋、芹、
『茶碗蒸』鴨、榎茸、銀杏、縮緬麩、玉子むし、
『大猪口』いゝいゝからすみそいり納豆、

玉子料理

『包み玉子』猪口の中へ厚き紙を入れ、其の中へ玉子を割りて、猪口のまゝ蒸す、紙のいゝダ、又折れやうにて形おもむきわり、
『牡丹玉子』胡麻油を能く煮立て、この中へ玉子を割りて、おとす白味油に散りて牡丹の如くなれるを、其のまゝすくひ取りて皿に盛る、
『白たま玉子』よき玉子を割り、匙にて黄味をすくひ取り、白味となれるへ葛粉を少し入れ、能く擂り、燒鍋に胡麻の油をしきて、その上に移し、よき加減に燒けたる時裏をかへし、強く燒目のつかぬやうにすべし、
『かすてら玉子』玉子を割りて、これに山の芋のおろしたるに、温飩粉と白砂糖とを加へたるものをまぜ、よく擂り合せて、かすてら鍋にて燒く、
『林檎玉子』煮ぬき玉子の皮をむき、熱きうちに布巾にて林檎の形に丸め、柚の葉或は金柑の葉を軸につけるなり、
『ふり玉子』白味のみを深き碗に入れ、茶筌にてふりながら熱湯を注ぎかけるなり、いさゝかにても黄味まじれば手際甚だ惡し、
『玉子しんじよ』玉子を割り、黄色を好むものは黄味、白き方をよしとする人は白味のみを用う、何れもよき吉野葛を水にて解き、玉子の中へ四分目ほど入れ、よく攪交せて鉢の中にうつし、鉢のまゝこしきに入れて、茶碗蒸のやうにむし、其の色のさゆるを程として出し、かくてさまし置かば豆腐の如くなるべし、
以上玉子料理は、味を付けて食すべし、

思ひ付料理

この思ひ付は、態と拵へたるものをも有合せ料理と

いへるにおなじきものなり、

『蠶豆きんとん』　蠶豆を四五日間水に浸し置き、皮を剝ぎ、湯煮して之を二つに分け、其一つ分を能くすり砂糖食鹽を加へて煮つめ、他の一つ分を加へ能くかきまぜて更に煮附けるなり、

『甘藷きんとん』　甘藷の皮を剝ぎ中三分の二ばかりよき所を三四分位の厚みに切り、兩側は極めて薄く切りて、これを鍋の中に一つに入れ、水を甘藷の嵩だけに入れ、食鹽砂糖をよき程に加へて煮る、かくて掻廻す時は薄き分は崩れて厚き方へまつはり、よき甘藷ばかり用いしやうなり、お茶受などには甚だよし、

『胡蘿蔔の白わえ』　胡蘿蔔を短冊切にして湯煮し味をつけて汁を去り、豆腐を布にてよく絞りたるに食鹽をませでよく摺れたる中へ入れ、更に能くませ合はすべし、

『鰡のまんぢう燒』　先づ鰡の鱗を去り、腹及び脊骨を除き、鹽水に浸し置き、暫時にして取上げ、日光に二時間ばかり乾し置き、味噌をすり鉢にてよくすり、之に柚及赤砂糖を入れて能く混せ、右の鰡につめ、燒きて食す、

『よせもの蒸豆腐』　豆腐は布にてよく絞り、よく摺り、海老は湯煮して稍變色したるを、水に浸して皮を剝ぎ、木耳は熱湯に入れ、二十分ばかりの後石附を除き、細く切る、以上の三品を味汁の沸騰したる中に入れ、能く煮、之に玉子を割りて加へ、甑の中に入れて蒸す、又鍋の中に入れて燒くもよし、

『蕪の酢煮』　蕪の皮を剝ぎ、碁盤目を施し、熱湯中に入れて煮ること凡そ十分間、更に酢、砂糖、鹽の合せ煮て熱したる中に入れ、また二十分餘煮る、

『海鰻の牛蒡卷』　先づ牛蒡をよく洗ひて適宜の大きさに割り、熱湯に入て五分間煮、それより出してよく水氣を去り、適宜の大さにあつめて、海鰻にて卷き、素燒にして、四五度砂糖醬油にて附燒にす、

牛肉の大和しちう』　牛肉の切りたるを鍋の中に入れ、一切づゝ離して燒くべし、肉の色變りたる時

湯を多く入れて、其中に馬鈴薯、胡蘿蔔、慈姑など細かに切りて入れ、一煮えしたる時醤油にて味をつけ、葛粉と砂糖を水にてとき、汁の中へ入れて掻廻して煮る時は、大に味よし、生姜のしぼり汁など加ふれば更に妙なり、

『甘藷の雉子焼』　甘藷をザッと湯煮し、皮を去りこれを丸きまゝ網金にのせて炙り、醤油に砂糖を交せたるをつけて、又炙り、二三度かくの如くしたるを好みの恰好に切り、これも平常女中方の客來の時取肴の中へ加へ、又は附燒したる肴と取合せて、辨當などに用うるもよし、

漬物

季節のもの四種ばかり左に

『菊の花漬』　黄菊の花ばかり摘取り、ざつと煮、そをさまして鹽を加へ、押漬にす、鹽出して菊味にするに、取りしばかりの菊よりも、其匂ひ高きやう覺ゆ、

『柚の青漬』　柚の實のいらざる青きうちに取りて乾天を流しては灰のアクを附け、黄粉團子の如くし壺に入れ、目貼をして蓄ふべし、用うる時はぬるま湯にて洗ひ落せば、香もうせず、色もかはらず、

『胡蘿蔔の味噌漬』　胡蘿蔔のわと先を切り、五六日風通しよき所に置き、甘鹽にして漬けるなり、三四十日經ちて、一日日にほし、味噌へつけかふ、又粕漬にするには、鹽を少しからめにすべし、

『蕪の味噌漬』　天王寺蕪をよしとす、莖一寸ばかりつけて甘鹽に押つよくかけて漬け置き、さて天氣よき日一日乾かして、味噌に入るべし、粕に漬けるもよし、何れ百日餘も經ざれば食料とならず、

▲栗の茶碗蒸　是は精進料理でありますが其調理法は栗の皮澁を奇麗に剝取り大きな栗ならば一個茶碗一個分の割合に見積り夫から山葵卸しで卸して豆腐、山の芋、葛等を少し宛能く摺り混ぜ昆布煮汁で鹽梅して摺延ばしそして松茸なり初茸なり何でも好みの種物を茶碗に入れ件の汁を掛け蓋を爲て蒸すのでありますが其蒸し方は人數が少なければ釜の中に簀を仕掛けて夫に茶碗を並べても宜しうムいます。

女子教育の王政復古

阿多廣介

凡て活動は、皆其の原動力の強弱に伴ふもので、原動力が強ければ活動も強く、原動力が弱ければ自と活動も弱からざうを得ない。之を汽車汽船に就て見るに、其の速力は一に原動力たる蒸汽に關しますし、人の活動は精神の強弱に關し、精神の強弱は身體の健否に基き、即ち體力は人の活動の原動力であります、而して國家社會の活動は何に基くかと云ふと、是は即ち國家社會を組成せる國民を産み又國民初期の教育者たる處の母であると推定するも過言ではない。されば母の躰力は、やがて國民の體力、母の元氣はやがて國民の元氣であつて、母は即女子であれば、女子は國家社會の原動力であります。

今歴史に鑑み、又國の興敗に就て見るに、例之ば亞米利加或は獨逸の如き新進の國に於ては、人の知る如く女子の權力が強く、女子の活動も壯快であります。其の體力の如きも勇健で、言語擧動總て活潑であるからして、從て國民も亦勇壯活潑でありますが、是に反して、清國或は土耳古の如き老大國に於ては、女

子は日陰物見た樣な者で外出もされず交際も出來ず、殊に淸國婦人の如きは活動されぬ樣に、人爲を以て足を紮着されて居る、實に氣の毒千萬の境遇ではありませぬか、從て社會も活動進歩せず、亡滅に近づきつゝあります。是何故かと云ふと、其原因は、新興國に於ては恰も人世の靑年時代に於けるが如く、前途多望にして抱負遠大に、活氣充滿して居りますから、多くの競爭者を有し、從て男子は其戰鬪員として專ら競爭に從事せなくてはならぬし、又女子は後援者として、兵站も恤兵も外交も勉なくてはならぬから、單に一家を經營するばかりでなく、大に男子を援助し、刺激し、慰安し、調和し、又内外の交際をなすの必要を生じ、大に活動せなければならぬ、故に女子も其社會成立の上に、至大の關係を有し單に女權の發揚するのみならず、男子より尊敬を受くるに至るのである。されば其の競爭場裡に立つて活動する處の女子が産みし子女には、母の體力や、氣力が、遺傳する故、勢ひ第二の國民の活動が强壯となるのであります。反之して競爭者がなく、所謂太平が繼續するときは、人心は文弱に流れ、風流淫逸に傾いて、男女の趣好活氣なきやうになるからして、從て纎弱なる病的の者を以て、或は優美とし、或は華美と稱し、互に相愛し相慕ふやうになり、其の結果生まれたる子は、體力柔弱精神優柔となるのも無理ならぬ事であります

一寸とした事でありますけれども、今より二十年許り前の事ですが、我が第三師團即ち名古屋の師團の兵卒間に、今の所謂ハイカラ風の分け髮が流行して、如何にも兵卒として優柔の風采が見えました時に、機敏なる參謀官が少からぬ金錢を遊女屋に撒いて、遊女をして、武骨のものに愛興を振りまかす樣にした所が、立どころに兵卒が五分刈のじやんぎり頭に改めたと云ふ事であります。中々女子の勢力はゑらいものです。

又我が邦の歷史に就て考へまするに、本誌前號に登載されましたる雨來庵氏の日本武士の妻として詳說さ

れました通り、恐れ多い事ではありますが、太古天照太御神は、女性にして天下を照臨し給ひ、八百萬の神々を統括し給ひし事は申すまでもなく、皇后狹穗姫は大義親を滅して、德操を立て給ひ、妃橘姫は、身を以て日本武尊に殉して、三軍の危急を救ひ給ひ、神功皇后は應仁天皇を擁して三韓を征伐し給ひ、又松下禪尼は時賴を諷刺して、民の辛苦を救ひ、常磐御前は、自己の貞操を殺して、賴朝義經の如き英雄を訓育して源氏を再興し、巴御前の勇、北條政子の智、實に男子をして瞠若たらしめし者あり、或は又德川時代に於ては、春日の局の如きは、三代將軍を補育し、又各藩に於ても、名ある人傑は其の母や姉、若しくは妻や娘の感化刺戟を受けて、而して天下の豪傑となつたものが、實に尠くはありません。

反之して、藤原時代の如き、一時天下苟安の際に於きましては、男女優柔文弱に流れ、男子にして眉を落したり、歯を染めたり、女裝に扮して美男子を氣取つて居たやうな有樣でありますから、女子は尚更優柔になり、國勢は大に振はないやうになりました。

德川の末世に於きましても、列藩の中には、或は武勇の氣風を奬勵した處もありましたが、多くは太平に馴れて、幕府の嫌忌に觸れざるやうに、姑息の平和を樂んで皆文弱に流れました。

降つて王政復古の前に當つては、新興の各藩は多く文武の道を盛にしましたが、外面にこそ顯はれねど、其時代の武士の子女は一通りは武道を嗜みまして家風を維持し、少くとも男子の武勇を挑發したる効績がありました、維新後に於ては、假令外敵に恐るべきものがあるに拘らず、國内に於て以前の如き各藩の相割據して權力の競爭をなす事が失せたからして、人は目前の平和に偷安して、男女共優美文弱に流れ、上は王侯大臣より、下百姓に至るまで、華奢淫逸に流れ、優柔の氣風を男女の間に馴致するやうになりまして、國家活動の原動力は待合と藝者とに移り、宴會でも會合でも、藝者が全盛を極め殖民でも萬國博覽

會でも藝者や淫賣婦が先鋒となり、歐米各國にても藝者が日本の名物として代表し、奥様や令嬢方は後へに瞠若として無勢力なのは、歎かはしい次第ではありませぬか、之れでは誠に我邦の行先が案ぜられまする、然しながら、數千年來薫陶せられたる國粹の尙聊か存する所あるに依て、幸に明治卅七八年の役に於ても、或は北淸の役に於ても、また今回の征露事件に於ても、幸に國威を失墜せず、萬國を聳動するやうに國勢が赴いて居るのは、大に意を强うするに足る譯なれども、是は王政以前の教訓が尙存して、其の威武を發揚せしに過ぎないのであるから、苟くも現在の社會の狀况に安んじて行く時は、假令今日戰勝の名譽を輝すも、戰後平和の時に至つたならば、苟、偷安優柔の氣風を馴致して、文弱に流るゝ如き傾にならぬとも限らない、是私の大に女子道に於ける王政復古を唱ふる所以であります。何となれば敵は必しも露國に限らない、所謂平和は決して平和ではない、假令干戈は相交へなくとも、智力上、經濟上、體力上、德義上、今後は萬國の檜舞臺上にて大競爭をせなければならんのは、國民一般に覺悟せなければならぬからである。

されば女性たる者は、其の競爭場裡に立つべき國民を產み、養成し、且又自其の舞臺に活動せざるべからざる故、王政以前に於ける群雄割據時代の勇壯なる女性の精神と體力を以て、現世に於ける文明の智識德義を加味して、國勢の進運に伴ひ行かなくてはなりません。

王政復古と申せば如何にも古めかしく聞えますけれども、前に申しましたる武士の妻たる精神に復歸して文明の教育を受け、待合藝者に占領されたる女權を、家庭と、交際場裡に挽回し、大に國家活動の原動力となりて、戰後の經營を男女同等に分擔されんことを唱道するに外ならぬのであります。

女子と運動

女子高等師範學校教授　井口あぐり子述

女子と運動、此の問題は女子教育の發達に伴ひまして、近來漸く多くの人々の口にする所でありますが、不肖妾の如きものも亦た各所に於て度々意見を述べて居りますので、謂はゞ黴の生へた問題なのでありまして、殊更にお聽取を願ふ程でもない樣なものではムいますけれども、併しながら、其の希望目的を達し得ぬ限りは、何日〳〵までも矢張新らしい問題として、研究しなければなるまいと信じます。

本年二月、宣戰の大詔が煥發せられまして、我國が露國と干戈を交へまして此の方、擊てば必らず破り攻れば必らず取る、所謂連戰連捷の好結果を得て、今や滿洲の過半を占領致しまして、勢に乘じて奉天鐵嶺の險に迫り、威武一方ならず振ふて居ますものは、當局者……直接戰局に當つて居らるゝ陸海軍將士の方々が、宇内比類のない忠勇の精神……大和魂といふものを持つて居られまして、向ふ所要害もなければ敵もなく、生死を忘れて奮戰せられますのと、作戰計畫が悉く宜しきに適ひまして、一の違算がないからであることは勿論でムいますが、此の結果を來しますに就きましては、單に此の精神と此の勇氣によるとのみは申されまいかと存じます、尤も直接ではありませんが、內地に居らるゝ老幼男女の方々が、其の戰局に直接して居る當局者の精神を精神として、之に對する同情を注いで熱心に努めて居られるのも慥かに一つの原因であらうと思はれます、現に只今では婦人の方々が婦人獨自の力を以て、熱心に各方面の種々な事業に奔走して居られまして、其の効果の著しいことは、我國人の等しく認めて居る所でムいまして、又世界各國の人々も同樣に認めて與れて居ますので、誠に喜ばしい限りなのでムいます。

斯の通り、忠勇なる大和魂……堅固なる忠君愛國の精神は世界無比で厶いますし、老幼男女が一致團結の働きは現に世界の注意を惹いて居るのでは厶いますが、一歩進めて申しますれば、只だ此の精神と此の團結とのみでは、決して斯の様な連戰連捷の結果を得ることは出來なからうと存じます、卽ち之に伴ふて物質上の進歩といふものが、大に與つて力があるので厶います、物質上の進歩……言換れば智力の發達で厶います、軍事上の智力の發達は兵器を精鋭にして戰術の進歩を促がすものであります、萬一今日の場合、昔しの弓矢をもつて露國に向ふのでありましたら、其の結果は何うで厶いませう、如何に精神が堅固であつても、到底今日の様な結果を収めることは出來ぬものと存じます、して見ますれば、今日の戰捷の結果が智力の助を得て居ることは、申すまでもなく明らかな事實であります、それで精神と團結と智力と、此の三つのものが相依つて現今の有様を呈して居るので、我國は畢竟久しい歳月を費しまして、忠勇なる精神の涵養に勉め、一面物質的進歩の上に餘力を殘さず勵精しましたから、彼の強大なる露國に對しましても曾て後れを取らぬことゝ信じます。

然るに今茲に最も考へなければならぬ大切な事が殘つて居ます、それは何かといふに所謂體力で厶います人間の働きの上に於て體力の必要なことは今更申すまでもありませんが、如何に精神が勝れて居ても、如何に兵器が精鋭であつても、如何に戰術が巧妙であつても、此の體力が不充分でありましたなら、從つて働きの上にも其の影響を及ぼしまして、結局充分の結果を得ることは出來なからうと存じます、此頃昵近にしました出征者の一人から手紙が參りました、此人は矢張從前妾と同様に體育の事に關係して居た人で厶いますから、自然觀察の點も他の人とは異なつて居るかと存じます、今日の場合、我日本軍人の缺點を指摘して、皆さんの靜聽を煩はすのも如何では厶いますが、併し、體育の必要上大に參考にならうと

考へますから、朗讀を致します、（女史は其の書簡の前半を朗讀し了り）斯の通り日露軍人の握力を比較致しますれば、露人は日本人に比して三倍の握力があり、又た現に九連城占領後、捕虜になつて居る露兵と我出征の兵士とに角力を取らせました、即ち力角べをさせたので厶いますが、日本兵士三人懸りで露兵に向ひましても、それでも充分な勝を得ることは出來なかつたといふのであります、固より精神や戰術の上に缺けた處がありましては、幾ら體力が發達して居ましても、其の効力はありますまいが、我日本の軍人に露兵と同様、只今よりも、三倍の握力、三倍の體力がありましたならば、現今の戰鬪力を三倍したものにすることが出來る、よし三倍の戰鬪力に增すことは出來ずとも、二倍の戰鬪力に增すことは慥かに出來得ることであらうと信じます、それで、妾は此際是非とも日本人の體力を充分に致しまして、彼我對等のものにしまして、そして、完全な進歩を謀ることを考へたいと存じます、從つて注意すべき必要の起るのは、女子と運動、此の問題なので厶います。

從來の慣習上、男子の方でありますれば、運動しやうとさへお思ひになれば、何日何時如何なる方法を採るも自由自在で厶いますが、之に反して、女子は一身上の境遇の外に、他に種々な故障や邪魔がありまして、思ふやうに運動するといふことが出來なかつたので厶います、併し、近年に至りましては、體力養成の必要上から、女子の運動といふものも一般の注意を惹くことになりましたから、今後は大に改良をして、女子に充分な運動をさせる方針を執らなければなりません、醫師の話を聞きますのに、夫婦の間で厶いますと、男子が體質虚弱な方でありましても、女子さへ充分の體力を備へて居ますれば、丈夫な子供を產むことの出來るものだと申しますが、之は單に生理學上からの話のみではなく、其の實例も世間には澤山にあるので厶いますから、體育といふことに就ては、女子の方が寧ろ大切といつても宜いのでありま

す、殊に我々の跡を繼ぐべき第二の國民……體力の充分な子供を產み出さねばならぬ責任のある女子に取つては、此際一層其の必要を感ずるので厶います。

然るに、我國では此の運動と申しますものが、極めて狹い意味に限られて居ますため、男子の方のベースボルや其他と同じ樣に、女子の方ではテニスか若くはダンスにばかり指を屈するので、テニスやダンスの出來ないものは、運動の出來ないものと一概に思はれて了つて居る、けれども、運動といふものは決して斯の樣な狹い意味のものでは厶いません、運動は第一に呼吸系統、それから循環系統の發育を謀るので筋肉、血液に對することは又た之に亞ぐので厶います、それでありますのに、自然に定まつて居る規則正しい順序も考へずに、最初から身體の虛弱な弱々しいものにまで、テニスやダンスを强いまするのは、心臟の働きを過度にしまして却つて害のある位ゐなものであります、それで厶いますから、斯の樣な運動法は決して滿足なものとは申されません、では運動は何うすれば可いかといふことになりますが、運動の第一要義は何も困難しいことはないので、妾に申させますれば、唯自分の身體と疊一疊敷さへあつたならば、規則正しい運動を始めるのに少しも差支へはないのであります、然るに世の中では、只だ時々の流行にばかり追はれる弊が厶いまして、其の爲めに體力の上にも道德の上にも好ましからぬ結果を來すことが往々あるので厶います、無論、其の心力の發達が充分でない點から起るのでもありませうが、徒らにテニスに走り、舞蹈に走りまして、其の爲め道德上面白からぬ噂など耳に致しますことは、誠に何うも嘆かはしい次第では厶いませんか、此の樣な結果になります位ゐならば、寧ろ運動は女子の爲めには有害なものと誤解されても仕方がない譯なので、妾共は此の害になる方法は捨てゝ了つて、精神のある規則正しい方法を以て、出來得る限り女子の運動を普及させたいので厶います。

妾も幼少の時分から今日に至りますまで、隨分運動は致しました、先づ小學校時代の小供の時から、それ〳〵の階級を踏みまして、高等女子師範學校を卒業しますまで、尠なからぬ年月の間運動は致しましたが、其の後洋行致しましてから、彼國で修行しました三年間の成績を以て、之を我國で小供の時から致しました長い間の運動の成績に比べて見ますと、日本で致しました長年月の運動よりは、三年間の彼國での運動の方が價値があるので厶います、勿論、妾の身體を彼國の人々のに比べて見ますと、身長は低し、肉附は惡し、貫目は少なし、只だ氣性ばかりを以て押して居たのでは厶いますが、兎に角負けず劣らず割合だけの進歩は致しました、最初の中、運動の競爭などがあります時には、一度や二度は氣性を以て勝を占めることが厶いましたが、それが一時間二時間の長い間續きましては、何うしても勝つことが出來ません、呼吸が續かなかつたので厶います、即ち體力の弱いものは結局駄目なので、これは致方が厶いません斯の樣な有樣で厶いましたが、只今でも外國人に比べては下位に居ます、妾も、我國に歸つて見れば、身長こそ低けれ、貫目こそ輕けれ、日本婦人に對しましてならば、體力では決して後れを取らぬ考へで厶います、時によつては、他人樣に後れを取らぬとも限りますまいが、其の競爭を二度、三度、四度と度を重ねて時間長く致しますことでありましたならば、最後の勝利を占め得ることは疑ひませんので、之も畢竟は精神ある規則正しい運動法によつて身體を鍛ひあげたお陰で厶います。

現に妾どもの教授致して居ます體育會の生徒の中に、昨年の五月に入會しました一人の女子が厶いますが、此の人は性來至つて虚弱な質でありまして、入會致しまする自分にも、多くの人々から其の成功を危ぶまれましたので、入會を見合はした方が宜からうなどゝ注意した方さへあつた相で厶いますが、其の後入會致しまして、精神ある規則正しい運動法によつて、身體各部の發達を謀りまして、熱心に怠ること

がありませんかつたので、僅か一年の間に、其の効驗が見えまして、最初入會をさへ危險と思はれる程虛弱であつた其の人が、今は全く見違へる樣な健全な達者な人になりました、第一胸膈の廣くなつたこと、筋肉の强くなつたことなどは、殊更に著しく目立つた効驗なので厶います。

又た皆さんは御存知があるかないか存じませんが、帝國大學に一人の運動家が厶います、此の方は人並勝れて身長の高い方でありますが、是れも亦た極めて虛弱な生れ付の人でありまして、幼少の時分には其の生長をさへ氣遣はれた程なので、到底人並の物にはなれまいと親御方が心配されたばかりでなく、何日何時其の生命が終るか知れぬとまで言はれた人なので厶いますが、幼年の時分から運動といふ運動に心掛けが厚く、大學生となつて以來も、何處の運動にでも出席せぬことは厶いませず、又た、何處の會にでも加入して居ないのはないので厶います、それで、始終精神のある順序のある運動に熱心せられまして、久しい間體力を鍛錬せられました結果は、今日の處身體の壯健になられたことは申すまでもなく、何處の運動會でゝも優勝を占めぬことは厶いませんので、日本に於ける選手として有名なのみか、世界に通じましても斯人と肩を比べ得るものは多くあるまいといふので、世界の選手とまで評判されて居ます。

以上二つの例によりましても運動を規則正しく行ひさへすれば、必らず其の効驗は著しいもので、身體の虛弱な人であつても、一年間規則正しく熱心に運動すれば、體力の恢復することは出來まするし、又た之を怠らずに久しい年月の間行ひましたならば、其の効力は益す著しいものであるといふことは、明らかな事實であらうと存じます、尤も、最初から其の運動に關する設備を誤まつたものでありましたならば、幾ら熱心せられましても、其の好結果を收めることは出來ませんので、寧ろ之が爲めに精神上にも身體上にも、容易ならぬ害毒を來すものでありますから、努めて規則の正しい精神のある方法を撰んで、

其の方に進んで行かなければなりません。

さて、此の東京府の教育會におきましても、體育上については大に注目せられまして、此頃新設備に着手せられましたのは、誠に喜ばしい次第で厶います、妾どもは熱心に之が成功を希望致しまするもので、出來得るだけは、精神、智力、體力の發育進歩を並行させたいもので厶います。

前にも述べましたやうに皆さんは第二の國民の母となるべき方々で、皆さんは第二の國民を産み出すべき責任をお持ちの方でありますから、其の體力の鍛錬は殊更必要なので厶います、それで妾は切に運動をお勸めいたしたいのでありますが、妾の今お勸め申さうと思ひます運動法は、何も六かしい設備の要ることでもなく、又た、何も面倒臭いの時間が懸るのといふ程のことでも厶いません、只だ自分の身體一つと疊一疊敷さへありましたならば、立派に出來得ることなので、それは何の樣な運動法かと申しますと、深呼吸をすることなので、皆さんが毎朝寢起になりましたら、成るたけ新鮮な空氣を呼吸することで厶います、尤も二度や三度位ゐのことでは効力はありませんから、努て十回から十四五回位ゐ宛毎朝極めて實行しられるのが、一番規則に適つて居る運動であります、併し、之とても折々に行ふ樣なことでは其の効驗は厶いませんから、毎日〱絶えず怠らず間斷なしに實行することにして頂きたいので、此の運動さへ怠らなかつたならば、一年二年と年月の經つにつれて、乾度其の効驗の著しいことがお解りにならうと存じます。

(此の篇は曾て女史が東京府教育會に於て重に女學生の爲めにとて演説されしもの丶大意なり文字の責記者に在り)

わかば會

▲筆の花

筆の花は歌文に關する先輩大家の論說考証を登載す
筆の花には兼題あり競点あり競点は本居豊穎、小出粲、海上胤平、金子元臣の四大家輪番撰評なり
筆の花は毎月十日發刊

壹部郵稅共金拾參錢

わかば會は歌文専修の團體にして毎月一回筆の花及び綠を發刊す
わかば會は斯道初學者のために研究部なるものを設け最も便宜い方法にて作歌の添削を取扱ふ
わかば會規約及び研究部の規定入用の方は郵券參錢封入御申越あれ
わかば會々幹は……………塙　忠　雄

▲みどり

みどりは袖珍的小册子なり銘打つて曰く舊派を遂はず、新派を拒まず
みどりは號歌人諸家あり集[illegible]ものあり作歌課題あり文章あり
みどりは筆の[illegible]の臨時增刊なり
毎月二十五日發刊の豫定

壹部郵稅共金七錢五厘

筆の花及び綠發行所
わかば會
東京市神田區山本町二十三番地

●新奇發明 増酒資料（さけふやすもと）

壹斗の清酒は即座に倍増し（即ち貳斗）となる大金儲的醸造化學作用の一大發明新法なり、（附錄）腐敗酒直し法、醤油參倍增法、味淋酒速造法、酢速造法、新酒を古酒に變ずる法、香竄葡萄酒速造法、燒酎倍增法、味噌速造法等以上の釀造家及び諸賣藥業者の大有益案内……右今回披露の為拾萬部限り**無代進呈**す酒造家及前記載の營業者にして望の方は郵劵四錢同添申込次第直に傳習手續摘要錄を送呈す速に見よ營業上一日も缺くべからざる確實**大有益**の秘訣なり是ッ非早く利用せよ驚くべき大金儲あることを確證す（注意）本館の隆盛を羨み近時當館廣告に擬せて怪しき無効の偽法を傳ふる奸者顯はれたり有志者深く注意して偽傳者に欺かるゝこと勿れ…（當館は去廿壹年の創立也）

發明元祖 東京市神田五軒町拾九番地 **日本授産館**

●肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に驚然なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓特別製分壹圓五拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やくだし 通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用れば二三ヶ月間滯りたる月經にても忽ちキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止にても必ず立處ろに流下し且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃すること確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢（注意）本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似偽藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



●わきが（腋臭症）根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵劵代用必ず二劑增の事（電話下谷五四六番）以上貳藥

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

雲の上

高輪御殿

阿井飛洋

懲露の軍、日に快報を傳ふ、さるにても、之に從ふわが兵士の上やいかならんと、かしこくも常宮周宮御ふた所には、高輪御殿雲深く、御心をかけさせ給ひ、或時は一卒の輕きにも、御側近く優握なる御言葉を賜はり、或時は御手づから香を薫じて、戰死者の忠魂を泉岳寺畔に通はせ給ひ、或時は號外の聲に御耳を傾けて、其數十枚に將士を賑はさせたまひ、或時は出征兵士の忠勇を近侍に筆記せしめ給ひて、永く其名を朽ちざらしめ、或時は程近き町民に金圓を賜ひて、軍人遺族をして餘榮に浴せしめ、或時は御日課の御疲れも厭はせられず、負傷兵の爲に繃帶を卷かせたまひ、或時は提灯行列を見そなはし給ひて、御心ゆかしき御染筆を賜はるなど、その御高德のほど、臣民一同の欽仰したてまつる所なり、いでや平時の御行狀について洩れ承るところを記さん。

兩殿下には、いたく學問を好ませられ、一を聞いて十を知る御聰明には、御側近く仕ふるものをしてただ〳〵恐入らしめ、御書畫の如きも氣韻高く、師も及ぶまじきほどにて、よろづ御才智のなみ〳〵ならぬに、御慈愛の心深くましまして、絕えて御氣色の

かはらせ給ふことはおはさじと。
小川直子刀自は　兩殿下御幼少の頃より、御教育申上げゝるが、月日を經るまゝに、御心にかけさせたまふこといよ〳〵深く、師とおぼしめされればにや、何にても刀自のせらるゝことは、御贔負目にて、小川は何をしても上下ぢや、と仰せらるゝよし、さいつ頃刀自には、年老にければとて、御いとま願ぎたてまつりけるに　兩殿下には御涙雨雫の如く、こぼれいでさせ給ふに、刀自はたまりあえず、

はら〳〵と御袖にかゝるしら露の
我身にしむもかしこかりけり

家に歸りても、日、月と經ぬるも、その御面影のみ心に離れず、

かしこくも君思ふとてよひ〳〵に
袖しぼるとはたれかしるべき

となん詠出られたる、實に有難くも尊きことならずや。

おのれ先つ日參殿の砌、「小川直子の噺」と題せる、二冊の寫本を拜見したり、こは十餘年來同刀自が、兩殿下に進話の材料にとて、其都度書捨てたるを佐々木伯令夫人の丹精にて、悉く進話の年月日を記入され、次第を逐うて、美しく製本せられたるなりはた　兩殿下の淺からぬ御思召のほどを、推量り奉るに餘りありと謂ふべし。

兩殿下は斯の如く、御學識高く、御仁慈深きは、素より御天禀い然るところとはいへ、また御養育主任なる伯爵佐々木從二位の君の功勞、大に與らざるを得ず。

從二位の君は白髮童顏、一見人をして忽ち懷かしめ談話いさゝか城壁なくして、春風の通ふに任するが如し。予は伯によつて多くの美事を傳へ得べく、伯を訪ひたりしが、伯は曰く、予はたゞこの御殿に、兎も角も十餘年無事に勤めしといふの外、別にこれぞと取立てゝ語るほどの事なしと、おのれは伯のこの答へを得たるのみにては物足らぬ心地のせられたれば、なほ問ふ所あらんとしたるに、伯は素知ぬ顏

したまひて、君は音樂に堪能なるよしなるがなど、却てうらうへに水を向けられ、かゝる事誰よりは聞きたまひしかと、問ひ返したるより、はじめの目的は蔓の切れたるもの丶如くなりき。

されど又思ふに、十餘年の長き、無事に勤めしといはれしこと、この上かさねて問ふの餘地あらじ、其の無事といふ二字こそ、最も味ふべきものなれ。御學識高く、御仁慈深く、揃ひも揃はせられたる兩殿下の、さしも御めでたき御殿に、事のなきは何よりよろこばしきことにて、千代に八千代に御めでたさの限りなからむことを祈り奉る。

御苑の菊

小川直子

降りみ降らずみ、打しぐれたりし空も、晴渡りて、實に小春ともいふべき氣色なれば、常宮、周宮の御ふた所、御園生の菊の花、御覽せられんとていでます。御供には、佐々木從二位のいもせの君をはじめまゐらせ、例の人々皆めしぐして、午過る頃より御車めぐらせ給へり。數ならぬおのれらも、御供の末につらなれるは、嬉しきこと限りなし。

ふた宮の御裝束など、申すもさらなれば省きつ。先づ御馬屋の御門よりいりもてゆけば、左り右りに山高く聳え、其ふもとには、御堀の水、心深きさまに見えて、年經たる常磐木どものうつろふも、おかしう見ゆ。やう〳〵深くいるまゝに、遙にかなたは小高くて、其上に僊錦閣と稱へたる、いとうるはしき臺あり。その高どのにのぼれば、奥のおましは正面に御床ありて、御飾などえもいはぬに、かたへなるまろき御窓より、瑠玻の戸すき通りて、軒端のもみぢ、日影うつろひながら見ゆるなど、たとしへなし。御庭には、御池の水澄渡り、岸の木末は立田姫の心盡しの程さへいちじるく、うるはしきが、水底にうつろふ色のはえたる風情、如何なる繪師ありとも、

筆には及ぶまじう見えてゆかしけれど、まづ菊をこそとのたまひて、かしこにわたらせたまふに、道の程やゝへだゝりたれば、其道すがらも、左り右りの松の木の間の、もみぢいとうるはし。

老松の木の間〳〵にてりわたる
御園のもみぢたぐひなきかな

かくとり〳〵の木末ども、目もあやにあふがるゝに

たぐひなき匂ひなりけり御ともして
あふぐ御園の木々のもみぢは

など口すさびつゝ見渡しゆくに、從二位の君が、小川刀自よ、かの汀に鷺のたてるは、とのたまひければ、見やりて、

水底にうつるにしきをめでつゝも
たてりと見ゆる池のしらさぎ

かくそゞろごといひあへる程に、菊の御園に至りぬ。

いと廣らかなる御園のうち、薫りみちたる氣色たとへむかたなし。おのれ身のほどを思ふにも、いかなる幸にかあらん、かゝる御供もつかうまつることよと、忝さに老の袂もうるほひぬ。菊の形などもさまざまなるに、色あひはたとり〳〵なれば、其名どもいとみやびかなるが數しらず、はた一もとに咲出たる花の數、濱の眞砂にあらねども、よみつくすべうもあらぬなど、いとも〳〵めづらかなれば、園守が朝な夕なの心しらいをおもひて、

培ひし心盡しも一もとに
百千にほへる花にこそしれ

それより洗心亭と名附させ給へる御息所にいらせ給へり。爰は一きは高き山なれば、さながら深山の心ちして、生茂れる木だち物ふりたるが興深きに、瀧の音さへ遠く聞ゆ。

いさぎよき瀧の音さへひゞきあひて
にごるこゝろもすみわたりけれ

仙人のすみかにまさるしづけさを
うきよの人にしらせてしかな

しばし息はせ給ひて、爰をおりさせ給ふに、坂路の

かたへには山茶花の時えがほに咲出でたるが、白き赤き、ひとへなるもまた八重なるも、いとうつくしう見えければ、

御園生の大木のかげに咲いでゝ
冬かれしらぬ花のいろかな

とめでつゝめぐりくておりはてければ、宮はもとの偃錦閣にいらせ給ひて息はせ給へり、かくて御供のもの共に、御手づから御菓子を賜ふ、その御菓子さへ折にあひたるもみぢの紅に、柚子の黄金色など取添へさせ給へるに、猶御しるしの菊のにほへるのをもうづ高く賜はりければ、皆人かたじけなみ



て喜びあへる事いひしらず。しばしありて歸らせ給ふに、猶丸山にとてそなた一めぐらせ給ひて見そなはすに、入方の夕日の影も靜かなれば、

心さへのどけくなりぬ木がらしも
ふかぬ小春のけふのひよりに

こなたの御園には、心のまゝに生ひたちたる菊ども、あまたありければ、加賀美正五位の君手折りて奉り給ふに、御心ゆく御氣色の大方ならぬをあふぎたてまつりつゝ、日ひと日樂しみをつくしけり、あな嬉し、あなかたじけなと聞えむも、言の葉たるまじうおぼえて、拙き筆には盡しがたけれど、かしこさのあまりに、あら

あら書つらねけるは、去年の霜月二十日の事なりけり。

明治年間の天長節

吉良麹堂

月の三日は天長の佳節なれば、國民たるものは何れも國運の隆昌と共に　寶祚の無窮を祝し奉るべきになむ。今謹で明治年間に於ける此の佳節に關する既往の趣きを叙して、讀者と共に御聖徳の一端を仰ぎ奉るべし。

御降誕

陛下は嘉永五年九月二十二日未半刻(午後三時)御降誕あらせられ、同じ二十九日御命名祐宮と稱し奉らせらる、安政元年十二月十六日御色直、萬延元年閏三月十六日御深曽木、同じ二十八日御紐直の式を擧げさせられ、同年七月十日儲君に御治定あらせられ九月廿八日親王宣下御名を睦仁と賜はり、文久二年五月廿七日を以て御讀書始あらせられたり。但し、御降誕の御日は前にも申す如く九月二十二日なれども、明治五年改暦の後に至り、嘉永五年の御誕辰を推歩換算して、今の如く十一月三日と定められたるなり。

御降誕の靈地

西の都の御所なる皇居の東、日の御門の前を北に向ひし處は、其のかみ中山侯爵舊邸のありし地にて、此處なむ實に　至尊御降誕の靈地なるなれ、中央正面の方には、曾て故槇村正直氏が其の府の知事たりし時、建設したりといふ碑石あり、今は其石も年經るまゝに古色を帯びて、いとゞ尊とく神さびけるが其の周圍には優美なる鐵柵を繞らし、鐵門を鎖しありて、まことに一區神聖の地域なり、其の少しく東の方、幾本かの芭蕉常に婆娑の影を飜へし、一株の楓葉は秋毎に錦繡の色を染め、槎枒たる老梅春に魁けて香を薫らし、蒼々として四時色を變へざる松樹は尚幾萬年も彌榮えに榮ゆべき氣色見えたるあた

り、神々しき一基の井筒を認むるなるべし。石材は白川石の妙なるものにて、祐井の二字いとも巧に彫りこまれ、幾春秋をや經たりけむ、苔の清々しく蒼みわたれるこそ、即ち御降誕の折柄に御産湯召されし御跡にてあるなれ。

御産家

さて御産家は依然保存せられて、御門の西雜樹の間に在り、此處は修竹窓に映じて地上の箒痕常に新しく、櫨の紅葉は柿の實の黄みたると相映し、櫻は處處に枝を顯はして春の彌生を待つめり、槲木の年を經たるもあれば、木犀の香のみを殘したるもあり、其他名を知らざる樹木生茂り、朝な夕な鳥の聲斷間なく、あたりいと物寂びて有難きこと此上もなければ、往來の人は歩を停めて思はずも伏拜むなるべし、昔は此の中山邸より石藥師通を隔てゝ向ひが姉小路家、其南隣が橋本家、日野西家にて、學習院は之に對して斜に日の御門に向ひ、白川家は其隣に在りて、檜桓の茶屋の供待もありけり。然るに今は皆一面に青氈を敷きたる如き芝生の上に小松のみ生茂れり、このあたりに徘徊して當時の事を思ひ廻らせば、明治の大御代は又一段と有難く、いとも尊とき極みにこそ。

天長節と東宮御昇進

年々此の天長の佳辰に當りて、擧げさせらるゝ御榮典も數ある中に、先づ第一として算へ奉るは、東宮殿下御昇任の御沙汰にて、殿下御履歴の重要なる事柄は、次に擧ぐるが如く概ね此大祝日と關聯せり、

廿二年天長節	皇太子宣下
	任陸軍歩兵少尉
	叙大勳位授菊花大綬章
廿五年天長節	任陸軍歩兵中尉
廿八年政治始	任陸軍歩兵大尉
卅一年天長節	任陸軍歩兵少佐
	任海軍少佐
卅二年御誕辰	近衛師團司令部附
	常備艦隊附

卅三年御結婚日　授勲花章頸飾
卅四年天長節　任陸軍歩兵中佐
　任海軍中佐
卅六年天長節　任陸軍歩兵大佐
　任海軍大佐

即ち廿二年の天長節に皇太子に立せられてより、昨年に至るまで十五年間に、廿八年の政治始の日を除くの外、殿下の御昇進は總て天長の佳節に際して御沙汰あらせられたり、尙當日は陸海軍將校中の重なる人々にも數人づゝ昇任の御沙汰ある例にて、忝くも殿下と同時に臣民が此光榮ある恩典に浴することを得るは、全く大御心を軍事に傾けさせ給ふことのいと深くましませばこそ、今や東洋永遠の平和のために、露國に對して宣戰の詔勅を降し給ひ、皇軍滿州に連戰連捷の勢を振ふ折柄、此佳辰に際會して過し年毎の御嘉例を偲び奉れば、誠に有難き事ども多かり。

三十年前の天長節

陛下御降誕の佳辰を以て天長節と稱し、祝日の一に定められしは、明治初年のことにて、元年八月二十六日行政官より「每年此辰を以て群臣に　宴を賜ひ天長節御執行相成天下の刑戮被差停候偏に衆庶と其慶福を共に被遊候　思召に候間於庶民も一同御嘉節を奉祝候樣被仰出候事」とありて、當時既に宮中に於ける御式典は畧定まりたるが、觀兵式については明治五年の九月十九日に至りて太政官より「來る廿二日　天長節に付午前第十一時櫻田練兵場に於て兵隊整列　天覽被仰出候事」と布達ありしを始めとす、治に居て亂を忘れ給はぬ聖意の程、畏しといふも中々に愚なり、さて、當時民間奉祝の模樣はと申すに、京都にても其頃はまだ國旗を軒並に立るといふ風もなく、且つ伏見戰爭に引續きたる上下騷ぎの後にてはあり、それに間もなく御遷都にもなりし事とて、京都は俄に淋しくなりしが、さるにてもまだ幾分かの餘波は殘り居たるに、改て祝し奉るべしとの御布令ありしかば、最初の事にてはあり、殊に祭

好きなる同地人なれば、随分盛なる奉祝をなしたる由なり、勿論、今日の如く儀式に適ひたる拜賀などいふものにてはなく、市中一般業務を休み、祇園其他の祭禮のやうに、秘藏の屏風もて店頭を飾り、町に高張提灯を點し、其上山鉾などをも取出し、親族知己の招待をなしたる位に過ぎざりき、これ其當時の奉祝の有樣にて、「明治になつて又一つお祭が殖えた、誠に芽出度いことであると申して、銘々心からお祝ひ申しました、」と去る京都人は語り居たり。

次に東京にての模樣はといふに、先之と大差はなかりしならんが、明治五年の天長節には、三井八郎右衛門と小野善助より、奉祝のため清酒千樽を献じ、其筋よりは「府下の衆庶へ御酒賜はり候に付賑々敷祝ひ奉るべし、」との御沙汰あり、各區とも、或は出し練物を牽き、或は一樣の衣類を着し、或は舟にて囃子をなし、東京府廳に至りて一小區二十樽、又た小町は十四五樽宛を頂戴し、皆鼓腹して太平を祝しとなり、明治六年十一月の東京日々新聞を見るに

天長節につき府下一般門口に旗章を掲げ舉て之を祝せり、去年までは思ひ〳〵にて出すもあり、出さゞるもありしが、本年に至りては横町小路の別なきに至る、是人民朝恩の忝きを奉體する所以なり、然れども中には天長節の何たるを知らず、御祭禮など唱ふるものあり、抑も天長節といふは、かしこくも聖上御降誕の日にて御祝日とこそ唱へたき事なれ

との記事を掲げあり、亦以て其の一斑を推測ることを得べし、其頃神田猿樂町あたりの横町に些かなる遙拜所樣のものをしつらへ、中央に陛下の御名を書したる軸を懸けて、それに神酒神饌を供へありしとの事なるが、當時に在ては各地とも、似通へる軸物を床の間に懸けて、之に神酒など供へたるも多かりしといへば、處によりては今尚其軸の殘りたるもあるならんか。

近來の天長節

當日宮中におかせられては、早天より御装飾を奉仕し、午前九時より賢所、皇靈殿、神殿御開扉神饌を

供して、御祭事を行はせられ、陛下には大抵午前八時三十分頃を以て御出門、親王、宮内諸僚など供奉に召され、觀兵式御執行のため、青山練兵場に行幸あらせられ、君が代の奏樂中に着御、皇族、親任官、各國公使等に謁見を賜り、元帥、諸將官の御先導にて近衛師團及第一師團諸隊の御閲兵あらせられたる後、一旦玉座に着かせらるゝと共に、步、騎、砲、工、輜重の各兵それ〳〵分列式を行ひ、終りて還幸仰出さるゝ御例にて、君が代の奏樂は廣き練兵場の果より果に響き渡り、無數の拜觀者は等しく斯の盛儀を仰ぎて聖壽を壽き奉るになむ、さて又た陛下には觀兵式より御還幸の上、御座所にて各皇族殿下に御對顏、他の御間に於て親任、勅任の諸僚に謁を給ひ、次で十二時豐明殿に出御、內外臣僚に酒饌を賜はり、御宴の初め勅語を降し給ひ、內臣は總理大臣より、外臣は上席公使より、各答辭を奏上し天顏麗はしく御宴を終らせらるゝなり、そもや大御心の照り渡ること至らざる隈なきは、いつも〳〵恐れ入り奉ることとなるが、承はる所によれば、昨年觀兵式に行幸まし〳〵たる節には、金鵄勳章大綬を佩させ給ひて、尙武の民心を御奬勵遊ばされ、還幸の後、豐明殿の御宴に際しては、菊花大綬章を佩させ給ひ、文武百官に臨ませ給ひしが、そを拜し奉りし臣僚は轉た感涙に咽びしとぞいふ、又此の日、豐明殿の御宴に於て　陛下の御左手に、皇太子殿下も御食卓に就せられしが、天長節の御宴に殿下の列らせ給ひしは、此の年を以て始めとす、いづれ是も亦來ん年々の御嘉例の一に算へさせらるゝことゝ恐察し奉るなり。此他一般奉祝の模樣はといふに、當日、百一發の祝砲正午を相圖に響き渡り、戶々に飜へる國旗の影に照代の瑞を示すはいふまでもなく、全國各地の各官衙、學校などにては、夫々拜賀の式を行ひ、有位有勳者は賀詞を捧呈し、外務大臣の催しにかゝる夜會は何れの年も盛況を極め、民間各種の會社、團體にても亦相應の式を擧げ、いづこ奈何なる深山の奧の樵夫より、津々浦々の海士が風情に至る

まで、皇城の方を伏し拝み、祝酒を酌みて壽きまつらぬはなく、實に年々にまさり行く御榮わる御祝日にこそ。

外國新聞の賀詞

去る明治二十七年、我征清軍が鷄林の野を一掃して鴨綠江を渡るや直に九連城を陷れ、鳳凰城を拔き安東縣を占領し、岫巖亦我有に歸し、軍は既に孖子窩に次したる時、偶ま天長の佳節に際す、第一師團長山地中將は此佳節を期して金州攻撃の途に上り、西少將之が後軍に、乃木少將之が前衛に、隊伍整肅、軍容凛として午前六時三十分進發せしが、未だ戰交へざるに、早く既に敵軍を壓し、金州の險はいふまでもなく、旅順取るべく北京擧ぐべき概ありしが、列國等しく我軍の勇武絶倫なるに驚嘆せしは前古に比なし、此際北米合衆國なる紐育ヘラルド新聞は、十一月四日の紙上に「天長節」と題する一篇を載せ、我天皇陛下の御誕辰を祝しまつれり、其の譯文は左の如し。



當市に居留する日本臣民は、昨日をもつて日本皇帝陛下第四十二回誕辰を奉祝したり、願ふに天

長節の祝賀が大書特筆せられたるは、米國新聞の歴史に於て恐らく今回を以て嚆矢とすべし、而して米國新聞が之を大書特筆したるは實に其謂れあるなり、蓋し日本は輓近まで全く世人に誤解せられたり、世人は日本を以て單に安棲の國、花卉の國、茶園の國、婉娩の國、而して一般に安樂國なりと思惟したるなり。

サー、エドウヰン、アーノルド一躍の文人詞客が此の樂園に於ける遊仙の好話を以て世界を娯ましめつゝありし間に、日本　皇帝陛下は卓然たる先見を以て、國内に海外に、其の臣民の懿德良能を發達せんことを努め給ひ、又た其の國陸海軍の學術を進歩せしめて最上乘の優伎に至らしめ給へり、而して之に因て　陛下は日本を第一流強大國の列に進め、陸に海に、文明世界を驚倒するの大捷を獲給へり。

我ヘラルドは玆に祝意を　陛下に表し奉るに於いて、　陛下の東洋に於いて文明進歩の眞の大旗手たることを確信し、　陛下の日章大旆が北京城頭に樹つは暗黑の支那に新好の一世紀を開くものたることを確信す。

征淸の時尚且つ然り、况んや爾來　皇運日に月に隆昌に趨き、人道擁護の我仁義の軍滿州の野を蔽ふの時に於てをや、其の祝しふりの奈何にかあるべき、我等臣子の情として一日も早く知らまほしうこそ。

尙武の大御心

既往に於ける佳節の趣きは大要以上の如くなるが、今時局に關して思出せる御聖德の一二を擧げ奉らんに、我出征の陸海軍將士が捷を奏する每に、いつも　陛下の御稜威に由るとのみ申し居れるは、眞に其謂れあることにて、決して普通常套の語にはあらず之につけても我々の深く偲び奉るは、過ぎにし年、　陛下が上野なる美術會に行幸あらせられし折の事なり、此日　陛下には龍顏殊に麗はしく渡らせられ場内に陳列しある水彩畫、油繪など詳く御巡覽あらせられしに、場の中程にて、大尉の服裝をなせる一

士官が、龍上に仰向に打倒れて、左の手に持ちたる一葉の地圖を嚙裂きつゝ瞑目し居る額面の繪に御眼を留めさせられ、忽ち玉歩を停め給ひしかば、隨從の同會幹事より御說明を申上げしに、龍顏いとも御哀傷の體に見えさせ給ひ、深く御憐憫を垂れさせ給ひし御有樣を拜し奉れる扈從の人々は、孰れも、陛下の將士を御愛撫遊ばさるゝ大御心の程を汲み奉りて、せきくる感涙を拭ひもあへず、只々首を俛して嗚咽せりとぞ、蓋し此の圖は明治二十七年の役、朝鮮國平壤の激戰にて林大尉の戰死したる實狀を描したるものなり、かくて　陛下は又騎兵偵察の圖の前にも立せ給ひ、御感斜めならず思召しゝ御氣色なりし由に承はりしが、畏くも軍事の爲めに勞せられたる山野の御跋涉をや御追懷遊ばされけんと覺え參らせて、いともかしこき極みになむ、此日直に　陛下は侍從に仰せて、二品とも御買上遊ばさるゝ旨の恩命を下し給へり、又千代田の御城の南端なる高き處、御濠に臨みていと質撲なる家屋の松の間に建てられたるは、振天府と申し、日清の役のを始として征戰の紀念物、何くれとなく藏め置かせ給ふ所なり敵軍の金鼓旌旗銃砲劍戟の類、我將士の用ゐたりし器具、其寫眞などはいふまでもなし、一兵卒たりとも苟も一廉の働きせし者をば、其の銃劍背囊又は藥盒何品に限らず、陛下親く御指圖ありて、秩序よく陳列せしめ給ひ、其品の由來、其時の狀況等を、一々明細に記しつけさせ給へるこそ有難き極みなれ又戰死者といふ戰死者をば、尋常普通のものといへども、一人だに漏し給ふことなく、皆其姓名等を隊別に記させ給ひ、之を結構なる卷物に仕立てさせて整然と架上に備へ置かせ給ふ、まのあたり拜觀せし人の噂に、一歩を移し一物を拜するごとに、忝さのひたと身に沁み渡りて、湧き出づる涙を禁め敢へざりしといふ。嗚呼我が陛下のいかに殉難將士の忠節を偲ばせ給ふぞ、殊に仰ぎ奉つるべきは、此の大御心のいつまでも變らせ給はぬ御事ぞかし、夫の十年のむかし、黃海の戰ひに打死せし赤城艦長阪本八

郎太氏の如きは、今日にては、もはや其の名をだに語る人なき世の有樣なるに、九重の雲井の上にては嘗て照り曇りといふことのおはしまさねば、一たび振天府に入りて、その人の遺物影像等に接せし人毎に何れも其の光榮のいとゞ大なるを思ひ、其の凛然たる精神の長へに生けるを覺えざるはなしといふ。凡そ此等の御事は、たゞ聖德の末光に過ぎざれどもしたしく此を拜しまつりし族は更なり、そを人傳てにだも承はらん人、誰れかは斯の　君の御爲に身を致さんことを思はざらん、まして其の全體の四表に光被し、上下に格れるものおはしますに於てをや。是れ即ち我が貔貅の飢寒水火をもの〻數ともせずして、連戰連捷の功を立つる所以なれ、彼の出征の將士等が戰捷の原因をば必らず　聖德に歸しまつれること、徒らに美辭を献つるもの〻類にはあらざるを知るべし。明治三十七年といふ前古に比なき目出たき天長節を迎ふるに方り玆に謹みて識す。

▲女官と女鑑

本誌第十四年第九號に掲載したる、賑はしき家庭と題する記事を見て、宮内省の北大路（梶子）小野（三千代子）岡本（詮子）星野（章子）山本（え枝子）芝（信子）岸（濱子）林（松枝子）津田（はな子）の各女官は、東京孤兒院の事業に同情を寄せられ、先つ頃同院を北川はつ子及院兒を宮中に招かれ、茶菓の饗應ありチルの切地五百枚其他數々の寄附あり、爾來同院の贊助員となりし由。尙同院月報第五十四號に左の記事を見たり。

△雜誌『女鑑』の同情　本月一日發行の『女鑑』第十四年第九號に『賑はしき家庭』と題し、中川愛氷氏が嘗て我院を訪ひて觀られたる所に就き、厚き同情の筆を以て紹介せられたるが、其中に左の一節あり。

いづれを見ても愛嬌があつて、親ならぬ親に懐いて、孤兒ならぬ孤兒の、已が不幸を知らぬ顔なる

これには涙を落さゞるを得ない。

我等はこの厚き同情に對して眞に感謝に堪へず。

高山盈子刀自の生涯

宮内省文事秘書官　工藤一記

刀自は名を盈子といひ、吉岡氏なるが、父は堅兵衛とて舊の津藩の士にして藤堂家の臣なり、母は可豆とて是れ亦吉岡氏なり、天保十四年六月廿五日に染井の藤堂邸に生れ、十九歳にして當時福山藩の士にて阿部家の物頭役を勤め居たる高山宣直ぬしに嫁き偕に其の丸山の藩邸に住めりしが、其の翌年、文久二年には家を擧りて其の藩地なる備後國福山に移り此處に在ること二十有七年に及び、其の間に男の子三人を產み、維新の變をさへ過ごしたりき。明治十二年に至り、東京に還り來りしが、其頃は維新の後間もなきことゝて、舊習いまだ脱せず、新俗いまだ成らずして、士族の獵活路に迷ふ折柄なるに、夫宣直ぬしは純然たる昔かたぎの士風なれば、家事の如きは固より之を刀自に打委かせたりけるを、並々ならぬ刀自のことなれば、かゝる世となりても猶之を己が双肩に擔ひて、敢て復た夫を煩はさんともせず、いかにもして此の艱難を凌ぎ、兒輩をして名を成し家を興さしめばやと、千々に心を碎きける、さてこそ靜に宣直ぬしを勸めて、先づ東京には還り來しなれ。かくて後も猶幾層の辛苦をか累ねられけん、然れども後々までも家人をして終に匱乏を感ぜしめざりしといふ、余は當時其の勞苦のさまを見聞しつるものから、今日高山家の繁昌を思ふにつけても、刀

自の力量の大なるを歎ぜずんばあらず、明治十四年に至り始めて學習院に仕へて裁縫禮式割烹等の敎師となれり、學習院の女子部廢せられて華族女學校のいで來るに及び引續きて女學校に仕へたり。廿二年よりは職を宮城縣の師範學校に奉じて女生徒の薫陶に從事せり、廿七年よりこなたには赤十字社病院に聘せられ、看護婦の監督並に看護婦生徒養成の任に當り、遂に本邦看護婦社會に新生面を開きたり。世に赤十字社の看護婦とて其の美風を賞でらるゝに至れるは實に刀自の力を多しとす、廿七八年の戰役及び三十三年の事變には、何れも傷病兵救護の爲め廣島の豫備病院に出張して功績尤も多し、此等に因りて遂に勳六等に叙せられ寶冠章を授けられき、此の寶冠章といへるは、畏くも竹の園生の各皇族妃殿下の受けさせられつゝある勳一等にともなへる者の外拜受の例いと稀にて、其の勳六等にともなへるは刀自の外には、北淸事變北京籠城の折功勞ありし鄭永昌氏夫人と、日本水兵の母と稱へられて名聲高かりし英國婦人故マクレン孃とあるのみなりしが、客月上旬、今回の日露戰役につき病傷者看護の功勞ある米國特志看護婦ドクトル、マギー氏は勳六等にともなふものを、同じグラッドウイン氏以下八名は勳七等にともなふものを授けられたり、而も刀自と同等なるは其數いまだ五指に達せず、三十五年の末に至りて腦神經衰弱症に罹り自宅に引籠りて療養中なりしに、昨三十六年一月に至り丹毒症をさへ併發したりしかば、此はゆゝしき大事なりとて、此度は患者として赤十字社病院に送られ、治療に手を盡しゝ甲斐もなく、月の廿二日遂に還らぬ旅に赴きぬ。其の病の革まるに及びて、刀自が性行功勞等具に天聽に達せしかば、忝くも特旨を以て從七位に叙せられたり、凡そ今の世、女子にして位階を授けられたるものは、宮中の女官ならずは、學校の女敎師にて高等官の列に在るもの而已なり、官に在るものにあらずして、國家に功勞あるが爲め位階を授けられたるものは、實に刀自を始めとす、勳等といひ位階といひ、

刀自の賜はりしものは、左まで高からぬやうなれども、皆特別中の特別にして、一種の光彩を放てるものなるを知るべし）、尚ほ、赤十字社よりは、刀自が拔群の功勞に報ひんとて、特別社員に列し有功章を贈られたり、（赤十字社々員にして、何なる人が特別社員にして何なる人が有功章を佩びたるかを見ば、刀自の名譽の如何に高きかを知るべし）

抑々斯の明治の御代は人才勃興の時にして、女子に至りても光彩燦爛として人目を眩燿する傑物少しとせず、然るに、刀自の如きは一見凡庸の人に似たれども、其の中得もいはれぬ光輝ありて復た掩ふべからず、恰も錦を衣て絅を尙へたるものゝ觀あり、故に、之を舊時に置きて尤も稱すべく、之を今日に用ゐて更に感ずるに堪へたり、凡そ良妻に、賢母に、はた好師友に、適く所として宜しからざるなきものは其れ唯刀自ならん乎。

刀自性温恭貞淑にして物に逆らはず、然れども中に自づから凛乎として犯すべからざるものあり、其の自から奉ずること菲薄にして、衣服飮食などに好みなく、只見苦しからず品格を墮さゞる範圍を稽へて自ら之に安んじ、一圓に人の爲に善を施し急を救ふを以て樂しみとせり、晩年に及んでは、刀自自ら得る所の俸給も女としては少きにあらざりしが、長子惠太郎君醫業益す繁昌して、復た家計を資くるの必要なかりしかば、殆ど之を擧げて他人の用に供したり、平生極めて寡言にして專ら力行に勗め、何事をなすにも其の事情を審察し方法を考慮し、其の見込一たび定まるときは一意之に當りて遂げざれば息まず、而も其事の成るに及びては、功を人に歸して己れは與らざるものゝ如く、唯義務あることを知りて名利の何物たるを知らざりしは實に刀自の特色なり

考堅兵衞といはれし人は、藤堂家の留守居役にして江戸に在住勤務せしことなれば、一藩を代表して他藩の人々と交際をなさゞるべからず、謂はゞ當時の外交官なれば、その交際上酒席に列するを常とするに、性來酒を嗜めるものから、若し萬々一にも酒の

爲に夜を更し、藩邸の門限に遲るゝが如き失態ありては、家門の爲めゆゝしき大事なりと、僅か十二三歳の身ながらも刀自は殊の外懸念し居りしが、いつしか刀自も之に隨ひ行く例となりしに、刀自は常に心を用ゐて列座の人々に禮意を缺かせぬやう、好き程をはかりて父を促がし歸りしかば、父も亦甚だ便利なる一種の警蹕を得たる思ひありとなん、之れも孝行の一端なるが、其の氣象遠大にして、尋常の少女の行ひと其の撰を異にせるを見るべし、晩年、家には惠太郎君夫妻ありて、よく宣直ぬしを奉養し復た顧慮するを須ゐざれば、刀自は全たく赤十字社病院に寄宿して、朝夕職務にいそがはしき折柄、實家吉岡氏不幸打ち續きて、刀自が生みの母上をだに、世話するものゝなかりしより、之れを奉養する爲め其の職を辭せんとまで思ひ立ちしが、上に立つ人々より、いかなる破格の便宜をも與ふべければとて、聽されざりければ、やがて赤十字社附近に一家を賃して迎へ取り、朝な夕な定省に怠りなかりしまゝ、可豆子大刀自はいと心よく殘年を過されたり、生みの親々に對して斯くも孝心篤き刀自の出でゝ他に嫁くに、いかで其の舅姑に忽かなることのあるべき、舅君の事はいまだ聞かず、其の姑なりし人は、極めて嚴密の人なれば、一事たりとも苟もするをゆるされざりしを、刀自が敬愛の誠を盡して之れに事へまつりしさまを聞くに、夫の禮記に、孝子の深愛なる者は必らず和氣あり、和氣ある者は必らず愉色あり、愉色ある者は必らず婉容あり、儼威儼格は親に事ふる所以にあらざる也、といへるに適へり、されば姑にもよく／＼刀自を賴母しとや感ぜられけん、臨終に際して夫宣直ぬしの男女の兄弟の身の上を呉々も依囑されしに、刀自は果して其の依囑に背かず、陰に陽に此の人々の力となりて終生あらん限りの力を盡されたりとぞ。

何れの年の事にかありけん、未だ高山家の人々が福山に在住せられし時、居宅を取廣ぐる事ありて作事を營みつゝありし一日なりき、此日は屋根杯も大方

の事果てゝ、瓦をも措くべき筈なりしに、職工のそを爲殘して歸り去りたる後、宣直ぬし歸り來られ、屋根に瓦の措かであるを見て「天候の定めなき、若し雨にても降り出だしなば何とかする」と、詰られしは、家長として當然の言なるに、刀自は返さん詞もなく、深く己が留守を與かりし甲斐なきを恥ぢたりしが、只だ徒らに悔ゆるの益なきを知るものから、婉順の中に不撓の氣力を含みたる刀自の事なれば、やがて騎馬提灯に火を點し、そを腰のあたりに挿みて屋根に登りつ、其の夜徹夜して、備へありし瓦を悉く葺き終られしが、いとも巧者に出來上りて、翌朝職工の驚嘆せしのみか、家人近隣の人々も、皆な舌を卷きたりといふ、其の後、維新の機漸く熟せんとして、長州征伐の騷ぎありしとき、阿部家は德川氏譜第の大名なれば、福山城は忽ち長兵の攻撃を蒙りしに、刀自は此の時懷胎の身なりしにも拘らず、かひ〴〵しく城中に入りて、彈丸矢石の間を潜り、糧食の運搬、彈藥の供給等、天晴れ武士の妻として恥かしからぬ働きせられしといふ。

刀自が學習院に奉職せられし頃なれば、明治十六年頃の事なりけん、刀自は腹部に一つ結塊めきたるものを生じ、病苦日々に甚だしく、服藥其効を奏し難きより、愈々切解の手術を施すことゝなりしが、其の際醫師の「魔睡劑は自然身體を衰弱ならしむるものなれども、こを用ゐざれば其の苦痛に堪へ難からん」とありけるを、刀自は固く否まれしに、「然らば」とて其のまゝに手術を施しゝが、自若として顔色をすら變へられざりきとぞ、腹部の結塊は惡血の凝まりにて、全體に長き毛を生じ居たりとなん、此の日手術の主任は夫の橋本醫伯なりしが、刀自の非凡なる氣力に驚嘆せられ、此れより臨床の折などに、何くれとなく打語らはるゝに、益々感服すべきふし〴〵多かりしかば、終にはまたなき知音とはなられたりきといふ。

余の刀自に知られしも此の折よりの事なりき、余は學習院創設の時より同院に奉職せしかば、十四年以

來は刀自とも同僚なれば、自然懇親なりしが、當時の學習院長立花子爵は、温良恭謙の君子にして、特に精神修養の眞訣を得られし人なり、されば公務の餘暇には、余も亦た其の道を正し居りしに、是れより先、子爵は刀自の病の日々に重り精氣漸々に衰へぬる趣を聞かれ、余を召きて懇切に喩さるゝよしあり、余はやがて子爵の旨を承けて、刀自を病床を訪ひ其の旨を傳へしことあり、此の時、刀自は深く感悟せられしことあるさまなりしが、爾來子爵を尊信すること最も厚く、施ひて余にさへ及ぼされしが、子爵と余とに於ける交りは、遂に修身渝ることなかりしなり、病癒へて後、刀自の余に語らるゝには、彼の切解の時、固く立花公の敎へを服膺して、只管精神の存養を事とせしに、やがて形骸を忘れて、一心を不動を境に置く事を得たりしかば、幸ひに苦痛を凌ぎて、早く病魔を驅ることを得たり、活命のこと、固より橋本國手の神技に須つといへども、抑もまた立花公が心地開導の力に因らずんばあらず、云云と、此は因みにいふ事なるが、そは兎も角も、およそ右に述べたることゞもは、皆以て刀自が雄々しさの一端を見るべきものなり。

刀自は封建時代に人となりしに、當時は今日の如く女學校の制などもなく、殊に女には學問はいらぬといふ風なりしかば、讀書などのことにつきては、此れと取出でゝいふ程の事はなけれど、父堅兵衞ぬしは漢學にて練上げし士なりければ、古事を引き聖言を證し、庭訓おろそかならざりしかば、さなきだに明敏なる刀自の事とて、一々之れを記臆して實行に顯さんことを勤めたりとぞ、是れ蓋し刀自が將來有爲の女傑たる基礎なるべし、文筆につきては、手紙はさらなり、いかにこみいりたる事にても、己が思想をばさら／＼と書き下し、手跡も亦た拙からざりき、現に余は刀自がものせし裁縫割烹等の法を精細に著したる一書冊を藏せり、此の外、禮式挿花のことにも通じ、裁縫と割烹とは和洋兩様ともに善くせられたり、殊に料理につきては、刀自が生涯の一斑

彩ともいふべき面白き物語種々あり、初め刀自が此の技を學ばれしは、維新前福山に於て、家事經濟の必要に迫られてなり、そを如何といふに、刀自の家は物頭役にて、夫宣直ぬしの部下には二三十人の士卒あれば、平時にても相當に出入繁く、隨ひて飲食の費用世の常の家に比すべくもあらぬに、當時は世の中騒がしく戰爭さへ起りし程の折柄なれば、ともすれば部下の人々を犒らひ、其他にも多人數の饗應をなすことなど屢あり、之を料理屋に命ずるに其の費用莫大にして、もし斯る事の永く續かんには、限りある家祿の支ふべきにあらざるを慮り、何卒して之を節用せんと思へども、さて其の事柄を制限すべくもあらず、品を降し員を減じ味を劣さんも猶更よろしからず、刀自おもへらく、材料の購買と調理の技能を我に收むるに在るのみと、是に於て、易牙氏を家に招きて其の術を學びたりしが、短少の時日にして、已に靑於(師匠より上手)の賞詞を得るに至りしといふ、かくて材料の購買も忽に合點せしかば、爾來專ら手料理のみを用ゐたりしに、費を省くこと豫想の外に出で、客も亦た膳羞の逈に以前より勝れるを歎びしとなん、試に思へ、此後高山氏の三餐の膳はいかなりけん、一家の幸福頗ぶる大なるものなくんばあらず。

刀自が學習院に奉職して間もなき程の事なるが、曾て同院にやんごとなき御方の臨御ありし時と覺ゆ、多數の來賓を饗應せしことありしが、其の際、女生徒の調理に成りしものを供せんには頗る興あるべしとて、遂に其の事に一決せしに、此の時刀自は裁縫禮式などの外に、料理をも受持てる教師なりしかばやがて之を引受けて、姫ごぜ達を督勵し、いと見事なる料理を拵へて之を供せしに、一方ならず來賓の稱賛を得たることとあり、余も亦當時其の席に列なりしかば、今猶ほ其の體裁と風味の美なりしを記臆せり、刀自の歿りし後、宜直ぬしの語るを聞くに、彼の時は素人の田舎者が、東京に於て此上もなき高貴の寄合に、而も幾百人分といふ料理を出すことにて、

之を引受たるは頗る大膽なる仕方なれば、結果如何にと氣遣ひてありしに、宴果てゝ後、立花院長より衆賓感賞の趣きを傳へられしときは、眞にうれしかりしと、刀自の毎々語り出でられしことなり、余は其時の費用のことをも聞きしが、詳しきことは覺えねども、たとへば普通にて五圓程も要すべき處に、僅か一圓位にて事濟みしとのことなりき。

刀自が宮城縣師範學校の女子部に在りし程は、教育上傳ふべき事ども尤も多かるに、先づ其の割烹に關する節々を畧説すべし、刀自が彼の校女子部の舍監たりし前には、何處も同じことながら、食事は賄方の者に打任せたりしを、刀自は其の主義と伎倆とに因りて之を止め、自らを始めとし女生どもの自炊に改めたりしが、此は一方にては食物材料の撰擇、購買、配合、宰制、鹽梅、燔煮等に就き、經濟的、衞生的、技術的の方法を學ばしめ、一方にては現在に其の多からぬ賄料にて、尤も甘美なる滋味を食はしめ、又其の更に重要なる方面は、師弟の親みをして母子の如くならしめ、其間にて女子達の徳性を涵養せんとするに在り、之に就きておかしかりしは、隣なる男生徒の寄宿舍も賄料は同一なるに、其の食物には雲泥の相違ありしことなり、いつしか男生徒は其の相違せることを知り、不平に堪へ難き趣なりしが、既にして男子の倣ふべからざる自炊に關する自然の結果なるを悟るに至りたれば、不平を起すべくもあらざれども、其涎をば遂に禁ずると能はざりしなるべし、かくて女生徒よりは毎々牡丹餅などを製して贈り遣はしけるにぞ、兩舍の間、何となく融和するのみならず、藹々の氣遂に全校に滿つるに至りしといふ、蓋し刀自の慈愛の牡丹餅の味よりも遙に甘きものあるに因れるなり。

（未完）



軍國の片影（三）

笠間醉雨

淚！

（上）

某師團の歩兵大尉内山房次郎氏に二人の花のやうな令孃がある、姉を繁子と云ひ、妹の名は綠である。

綠子は其名の如く本年漸く二歳の嬰兒で、まだ西も東も辨へない年齢ではあるが、姉の繁子は既う學齢に達してゐて今年が七歳である。

大尉は實に此二人の兒を掌中の珠と愛で慈んで居た、平生何の嗜好をも有たぬ身は、隊から歸つて來ると直ぐ軍服の儘で、この二人を膝下に呼び寄せて、或は泣かせたり、或は笑はせたりして、唯既う他愛もなく戯れるのを無上の娛樂としてゐたのであつたが、繁子は、まだ子供心にも父の慈愛が深く身に浸み込んで居たと見えて、『繁ちやんはお母樣よりお父樣が好きだわ！』と、一にも二にもお父樣お父樣と明暮その跡を慕うてゐて、此繁子に取つて大尉は、唯一人の懷しい慕はしいお父樣であつた。

その懷しい、慕はしいお父樣の大尉は過ぐる五月のある朝、勇しい英姿で出征の途に就いた。その時のことであつた。繁子は父の跡を追うて、何處へでも一緒に行かうと云つて、大尉の軍刀に縋つて泣いた。大尉は此時坐ろに暗淚を浮かべながら『繁ちやん、其處を放してお呉れ！』と云つて、言葉優しく諭したのであつた。けれども、繁子は何うしても放さないので、大尉は其可憐しい情を酌まんではないが、何時まで斯くあるべきでもなければ、今は思ひ切つて、稍々聲荒げに『繁ちやん、可けません！』と叫んで、ぐいとばかり軍刀を引張つて、繁子の手から奪ふやうに突放して、直に玄關に立ち出で、、兼て用意の馬に乘つて、夫人を始め、見送の客人一同と離別の詞を交はして、やがて、蹄の音高く、隊の

方へと急いだのであつた。

平生、曾て、叱られたことのない繁子は、啗と泣き止んで、曾て叱つたことのないお父樣を門前に見送つて、默つて、凝乎と其後姿の見えずなるまで見遣つて居たが、やがて、また思ひ出したかのやうに、母の仲子の袖に縋つてわつと泣いた。聲を立て泣いた者は此繁子ばかりであつたが、寔は送る人も、送らるゝ人も共に血の涙！

（中）

『お父樣何時歸るの？』

と、丸顏の愛らしい令孃の繁子は首を傾けて、斯う尋ねたのである。

母のお仲は、さも〳〵返答に困じたといふ氣味合をさへ交へて、

『まだ、なか〳〵歸つて被居らないの！……まあ、それまでは、繁ちやんは、おとなで待つてお出でなさいな……』

と、云つて、莞爾と笑ふ。

『まだ、なかなかつて、幾つ寐んねしてからの！お母樣！』

と、繁子は愛らしい、人形のやうな左手で、數へるやうに指折しながら母の顏を見上げた。

母とは、年頃は、二十五六であらう。ほつそりとした面の、顏色の透き通るばかりに眞白な、鼻筋の



通つた、眉の涼しい、目の優しい、そして、漆のやうな頭髮を花月に結つて、ぐいと銀簪の七寶細工のハイカラなのを差した氣品いやしからぬ婦人、扮裝はと云へば、薄鼠の縞のフラチルの單衣に、茶が勝つた晝夜帶を締めて、極めて質素な風。

『あゝ、繁ちやん、そんなに數へられる位な早い内にお父樣は歸られないのよ、……來年か、來々年よ、……繁ちやんが、八つか、九つになつてから！……………。』

と、母は靜に、繁子の胸に會得し得るやうに斯くばかり。

『はあ、……ながいのね！』

と、さも、氣拔したやうに低く弱く。

『だからね、繁ちやん、お父樣のお歸までに、一度、郷里の方へ歸つて來ませうね！、祖母樣にお土産を持つてね、……。』

と、母の仲子は、大尉とも豫て相談の上、一度、大尉の郷里なる廣島縣深安郡上野村に歸省する積であつたのである。大方、繁子は、平生、郷里の祖母樣祖母樣と騷いでゐるのであるから、嘸や喜ぶことであらうと思つたのが、さりとは思の外、繁子は、小犬の尾のやうに首を左右に振り分けて

『いやだわ、妾、お父樣のお歸りなるまで、此所に待つてゐるの！』

と、悲しいやうな顏付して、聲は既う時雨れて來たのである。

『だつて、繁ちやん、お父樣が歸つて來いと被仰つたの、お前の好きな祖母樣もお喜びなさつて、たんと、美味しいものやら、良いものを下さるよ。』

『いやだわ、いやだわ、妾、いやだわ、良いものなんか入らないわ。お母樣！』

と、小さき胸の決意動かす可くも見えず。

で、母は、此心を諒して、

『ぢや、止しませう、ね、繁ちやん、お父樣のお歸りまで、何處へも行きますまい、ね、繁ちやん。』

と、繁子の顏を差覗く。

愛らしい眼に涙の露を宿してゐた繁子は、紅き袂の先でちつと顔を拭うて、いさゝか得心した所ある如く、輕く首肯いたのであつた。

母の仲子も、端然として石像のそれの如く、身動きもせず今は深き考へに沈んだ。まあ、何と云ふ不思議な繁子だらう、いつも郷里の祖母様、祖母様と、祖母様騒ぎをやつてゐて、去年なんかも大喜びで歸つたこともあつたのに、今度は、何故、まあ、あんなだらう。お父様のお歸りまでいや〳〵此所で待つてゐる、どうも繁子としては、思ひ懸けない詞、どうして、去年のやうでないかしら、年齢と云ふ者が一つ加はつた丈付いた智慧か、何かの分別か、……しかし、此所待つてゐる、ときつぱり云つて私をきつと見た顔付は我子ながら、すごいやうに決心の狀を表はしてゐた。まあ、何と云ふいぢらしい心根だらう。うれしい、うれしい、ほんとに愛らしい、いとしい心根だ、それでこそ、私の子だ、内山の子だ、既う私も歸ることを止めやう、あの子が可愛から……と、

千々に思を碎いで、我知らずばら〳〵と降るは涙！

(下)

嗚呼憐れむべし。歎く可し。繁子が唯一人のお父様の大尉は、遼陽の大戰に於て名譽の戰死を遂げて了つた。繁子が待つてゐた甲斐は消えた。既う歸らなくなつた。二度と再び見ることが出來なくなつた。此悲報一度來るや、夫人仲子は豫て夫と覺悟して居たとは云ふもの丶、今更しく、實に腸を搔き挘られる切ない思、深い〳〵悲哀の淵に沈んで了つたのである。

乳が欲いのか、それとも、父の悲報を知つたのか、今しも、晝寢の夢から覺めて、わつと聲高に泣いた綠子を、夫人はそつと抱き上げて、乳房を彼の女の頰に押し付けた。神の子の如き嬰兒は莞爾と口元には微笑さへ浮べて、無心になつて乳房を吸うてゐる。が、やがて、また綠子はすや〳〵と睡りの手に落ちて了つた。

夫人は、右手に電報を取り上げて見て居る時、丁

度繁子は丿外から歸つて來たので、

「繁ちやん！」

「何んです？」

「お父樣はもう歸らないのよ。」

と、血を吐くより苦しげなのである。

「どうして？」

彼方は、まだ、子供だけに、今度はさ程氣にもかけないやうな口振。

「何うしてと云つて、もう、もう歸らないのよ。」

と、夫人は、繁子が、それを解し得ないだけ、それだけ胸は一色張り裂けるやう。

「ぢや、お母樣、他所の叔父さんが歸つて來ても、お父樣は歸らないの？」

と、幾分か合點したやう。

夫人は、既う、悲しいやうな、痛ましいやうな感に打たれて、答へる術を知らず、「あゝ」とばかり、首垂れたのであつた。

「ぢや、詰らないから、お母樣、……鄕里へ……祖母樣の所へ行きませう！。」

と、云つて、もう、双の眼に一杯の涙を湛へて急に噎ぎ込んで了つた。

母が悲哀に迫り迫つて、甚く抱き締めたのか、それとも亦、火のやうな母の涙を浴びせられて目を覺したのか、綠子は母に抱かれたまゝ、急に身を反し、てわつと何か裂けるやうに泣き出した。それを抱いてゐる母も又しても堰き合へぬ瀧のやうな涙！

前號正誤

頁	段	行	誤	正
一二三	上	二	快濶	快濶
同	同	三		
同	同	五	未明の天	未明の天
同	同	六	交叉してあつた。	交叉してあつて、
同	同	一〇	影さえ。	影さへ
一二四	上	九	秋	秋(の)脫す
一二四	下	一七	吸田	汲田
一二五	上	一	吸田	汲田

蒙古通信（四月五日附）

こは現に蒙古に在りて、王、王妃、及其他の者に日本流の教育を施し居る河原操子女史が、匆忙の裡筆を執りて、舊師、女子高等師範學校の篠田教授に寄せたるものなり。

河原操子

一筆申上候、其後は先生御はじめ皆々樣には、如何に御出で遊ばされ候や、御伺ひ申上候、次に私御かげ樣にて、神身共にまことに工合よう、樂しく過し居り候間、乍憚御休神下され度候。

扨、海軍の大勝利は、まことに御同慶に御座候、其内まもなく陸軍の大勝報も參り候はむと存居り申し候、御地の昨今はさぞかしと御推し申上げ居り候、（中略）女學堂は御かげ樣にて、ます〳〵工合よく、此頃は貴婦人の參觀日々相つき申候、舊暦新年には三十餘名の新入生を得、また先の者は成績により二級に分ちて、都合三學級と致し、何となく學校らしく相成り、一同大喜びに御座候。昨今志願者の續々御座候まゝ、此の分にては一日も早く女學堂の新築にとりかゝらざれば、現在の建物にては入りきらぬやう相成らむと、王、王妃は大に悅び居られ申候。

當地方の人々の地理の觀念の幼稚なるには、實に氣の毒に思ふの外御座なく候、此頃教室に大地圖を掛けおき、學堂に來る人々には、これに就きて色々話し聞かせ居り候處、王府の官吏すら、地圖を見て、世界には中國の外に中國より大なる國あり抔申し候て痛く驚きたる樣子に候、其知識の程御推想願上候。

（中略）毎々御心配いたゞき候當女學堂は、御かげ樣にて其後ます〳〵工合よく、教授、訓練、管理共に昨今秩序立ちて參り、日本の小學と大差なき程度まで漕ぎつけ申候まゝ、何卒御安心いたゞき度候、元來支那の女子は、極く不規則なる家庭に我儘に育ち居り候へば、日本風の考にて、始より整然たる秩序を踏みて行なはんと致し候ては、到底効果を收め得るものには御座なく、まづ始め三四ヶ月、或は半年

間は氣長に親切に導びき、其間に漸々秩序を立て參り候へば、其後は日本の小學と大差なきやう相成申候、扨又、學校の關係者に對し候ふも、氣長と申候事は缺くべからざるの要件に御座候、彼等は智識淺く、常に遊び暮し居り候まゝ、仕事につきての察しなどは少しも出來申さず、且つ時間の觀念なく、何時も悠々致居り候間、日本人同志の交際の考にては一年中立腹致し居り候も日の足らぬ程に御座候、總て支那人に對し候ては先便に申上候ひし通り、呼吸ものに御座候、露國人は戰爭には負け候へ共、他の側に於てはなか〳〵ずるく立ちまはり居り申候、然し日本がそれを知らずに居り候やうの事は決して可無之と被存申候。（中略）

此頃私の受持の學科を試驗致し候ひしに、日の淺きわりには可成りの出來に御座候ひき。第一斑生の答案の一部を御覽に入れ候、外に蒙古の歌一つ、こは側に認め候漢文と同意味に候。

曩に今夏歸朝致し候かやう申上候へ共、都合により來春に相のばし申候、其折には福晉、令妹、肅親王の第一、二の御孃さん方を御連れ申すやうならんと存居り候まゝ、何分よろしく御願申上候。（下略）

生徒の成績と蒙古の歌とは都合によつて掲載を見合せたり諒焉。　（記者）

海外思潮

●交際場裡の女子　　澁谷馬頭

（桑港ブルテン新聞所論）

▲ブルテン新聞は桑港に發刊する小さき毎夕新聞で御座います、併し此論はよく米國の時弊に中つて面白い所が御座います、依つて之を御紹介申ます。

▲女子の側から見ましたなら、男子ほど氣の知れぬ者は御座いますまい、此んな風がよいと好むかと思へば、內心にはそんな者はいやだ、と嫌つて居るので御座います。

▲女子がかもじを入れ、鬘を冠り、白粉を塗り、鉛筆でまぶちを彩り、着物も履物も、頭の上から、足の爪先まで、人の目に付くやうに時好を追うて作りなして、是でやう〳〵男子の愛を惹くに足ると思つて、晴れの場所に出席すると致します。

▲彼方からも、此方からも殿がたの引く手あまたで御座いまして、やたらに握手を求められます、接吻を申込まれます、相擁して舞踏しやうと、細腕を引つ張られます、交際場裡の花として評判されます。

▲精を込めて、化粧を凝らしました甲斐が御座いまして、其女子は嬉しくつてたまりますまい。

▲併し女子の望みは、これで滿足が出來ませぬ、倘ほこれから一段進んで、お金の澤山ある良い方の所へ、縁付きたいと云ふ段になつて參ります。

▲所が、以前に滅茶苦茶にもてはやして呉れました殿がたは、皆知らぬ顔をなさいます、甚だしきは「われは何所にでも遠慮なく出しやばつて、餘ほどお轉婆な娘だ」など仰しやいます、更に甚だしきは「あれは某所の夜會に、誰それと接吻した、誰それと手取り合つて踊つた、何か怪しいことのないとも限られない」なんかんと、惡口を仰しやいます。

▲何でも、平生は交際家たる女子を愛して御出になつて、さていざ御迎へにならうと云ふ場合になりましては、なんでも引込み勝ちな、箱入れの娘さんばかしを御撰みになります、ほんとに無理では御座いませぬか。

▲以上はブルンテンの所論でありますが、此論若し東洋人の口から出たこととしますれば、別に珍くも御座いませぬ、米人がこんな事を云ふ時節になつて參りましたのが、誠に教育に注意深い人々の看過しならぬ所では御座いませぬか。

▲以前は米國女史が男子を凌いで、何事も大威張に威張つて居ます有樣を見て、これ唯米國の女性の風俗の然らしめる所のみと、見て居ました、然るに段段考へまするに、女子のこんな有樣に、何事も派出にふるまひますのは、決して自ら威張ると云ふ心か

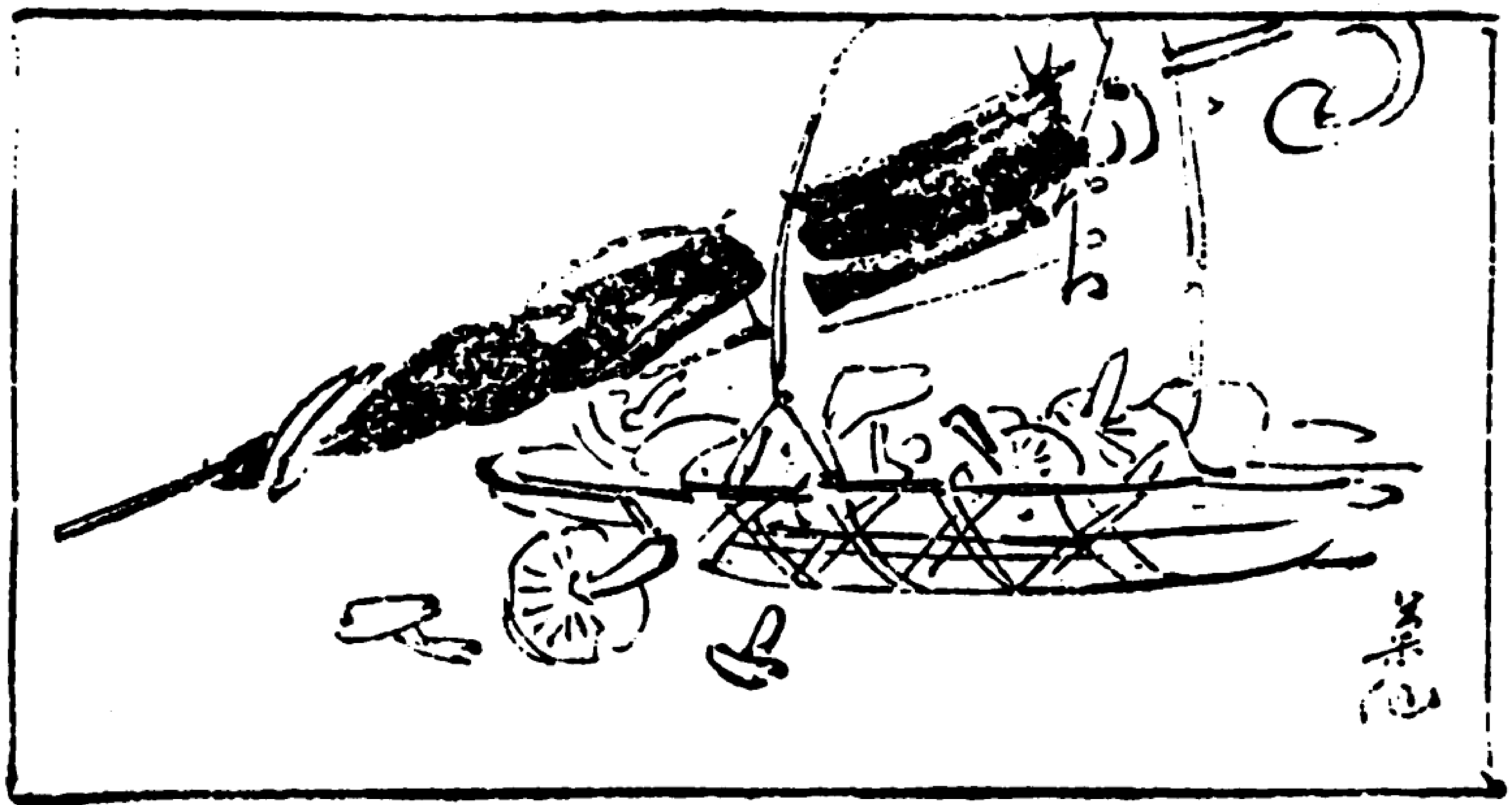
ら、出たのではなくて、是も矢張り男子に愛せられやうと云ふ、一種のたくみに過ぎないと云ふ事がわかりました、所が米國男子も、そろ〳〵柔順貞淑な女子を、愛するやうな氣風に傾いて來ました、米國女子たる者、大に警戒して妄想をつかされないやうにするが肝腎で御座いませう。

▲是を見ても、日本女子は固有の温和貞淑の氣質をわくまでも、維持しなければなりませぬ。

●非高等女子教育論

（コーチル大學總長所論）

▲スタンフオード大學總長は、理學上より男女の相異りたる兩性質を接近調和せしむる爲めに、男女の學生は、幼少より成年後まで、始終同一に教育し行くべき者であると云ふ說を唱へました、コーチル大學總長は、



之に反對して女子は一定の年齡に達したら、早く學を廢して嫁入させるべき者だと論じました、其大略をこゝに御紹介申ます。

▲女性は十八歲頃が、結婚するに最も適當の時期であります、女子が其時期を過ぎてからは、だんだん性質が頑固にかたまり行きまして、ともすると良人の意志に柔順なる能はざるに至る者であります

▲十八歲の女子は、體質は最早充分に發育して、結婚するに差支がなく、而して其頭腦は、左ほどに固まらないから、良人の感化を受けて、自然夫婦の思想を融和して、行末長く樂しく暮らすとが出來るやうになるのであります。

▲女子で學者と云はれる位の者は、大抵固まつた思想を持つて、良人の思想と一致和合させかねる場合が澤山有りませう、これ其一生涯を、不愉快に過させる原因となり、終には離緣

とまではなくても、別居すると云ふやうには、よく成ることであるのです云々。

▲右は良人を本位にしての立論で一寸考へますと、餘りに女子を蹈み付けたやうな議論と聞えます、併し世間の實際は、此通りの有樣で御座いませう。

▲つい近頃某大學の教授たる某博士は、其婦人も同じく同校の教授でしたが、近頃夫婦分れをして居られます、この事を書きました英字新聞が、紛失しましたので、明かに其姓名を申上げる事が出來ませんのは殘念です。

○滿洲所見錄（其二）

第二軍附從軍記者　園田紅村

四、露國人の滿洲經營

こんな事は、女子のお方には、必要がないかも知れぬ、いや必要があるとしても、充分興味を以て、讀まれないかも知れませんが、開戰の原因、交戰國の他國侵略乃至經營等に就いて、幾分の智識がなくては、二十世紀の大日本帝國女子とは申されますまいだから私が此滿洲で、實際見もし、感じもいたした事を客觀的に、一通りお話し申上げたいのであります。

もつとも、吾々一行三十人の從軍記者中には、東京の大小新聞記者は、大概まゐつて居りますし、それに又雜誌記者も加つて居りますので、東京からのが、都合十六人ほどになります、で、これらの記者は、得意に其椽大の筆を揮つて、殆んど遺憾なく、此等の事は通信致したらうと思ひます。

されば、諸媛は、此等新聞雜誌の記事によつて、既に詳しう御存知かも知れない。併し、新聞には、三面記事と申す者があつて、社會百般の眞相を、落ちなく摘發して厶いますので、中には隨分、孝子節婦人の龜鑑と爲る可きものもありますが、其多くは法律上なり、道德上なりの罪を犯したものを、筆誅したのもので厶います。

そこで、上流の家庭、嚴格な家では、子女の新聞を讀むのを禁じてある所が多い、これは、其利を得るよりも害を受ける方が多いからであります、私も子女の教育上、これには至極賛成の一人で厶います。して見ると、偶々家に新聞が來ても、御覽にならない方が、多いだらうと考へます、我女鑑の讀者は、多くは我國上流の家庭の諸媛であるので……

且つは又、凡そ天下の事は、人に依つて其觀察點が違ふ、私の觀察したのと、他の新聞記者の觀たのとは、多少趣が異るかも知れない、だから一つこゝへ私の觀たところをお話し申し上げる積りなんで厶います。

露國は、モスコー府を基點といたして、荒蕪不毛の西比利亞を横斷して、沿海洲の浦鹽港まで、蜿蜒千餘里に連る長距離の鐵道を布設した、其費用の莫大なることは、殆んど想像の及ばない所であります。されど、西比利亞は、不毛荒漠の地、浦港は、冬季氷結して以て、殆んど港灣たるの効力を失ふ所である、此間に鐵道を敷いたとて、決して〳〵收支償ふ筈のものではないのです。

然るに彼が、莫大の費用と、多大の勞力とを、惜しまずに、此大經營を爲したのは、何の爲めで厶いませう、云はずと知れたこと、滿洲併呑、東洋侵畧てふ大禍心を包藏して居るのであることは、識者を俟たなくても、よく解つて居ります。

果然彼は、二十七年日清の役に得たる遼東の還附を我に迫りました、程なく、旅順を掠奪し、滿洲の中心巴賓より、此旅順に至るまで、鐵道を布設した、これが東淸鐵道と稱して、吾々が實見したものであります。

吾々が通過いたした滿洲の地は、無論我軍の占領地域であるから、露西亞人は、一人も居ない、隨つて其行政の有樣などを見ることは出來ないから、これら內容的の研究は、何れ後日に讓ることゝして、只今は、彼等が爲した形跡に就いて御話し申上げます。

此形跡に就いては、二つに分けて說いた方が宜しい、

一は彼等が、布設した鐵道で、一は其家屋であります。

先づ鐵道に就いて御話し致します、露西亞の鐵道は、廣軌で、日本の鐵道よりも軌道の幅が餘程廣い、だから、日本の機關車を支用せうと思へば、勢ひ此間を狹ばめねばならないのです。それから既に御承知でもありませうが、西比利亞鐵道でも、東清鐵道でも、單線で厶いますから、複線に比べますれば、餘程輸送力を減ずる譯になる、これが一つの缺點で厶いませう。

けれども、道がは、露國です、僅々七八年の間に、此大事業を易すヽと完成して、着々滿洲經營の歩武を進めて居た、其規摸の宏大なるには、驚かざるを得ないので厶います。それから、餘程注意した者と見えまして、所々に鐵軌が三四本づヽ備へてある、これは、馬賊に、軌道を取りはづされた時に、直ぐ樣、之を用ゐて修繕する用に供へたもので厶います。それから、橋の近傍には、鐵道守備兵の居た差し掛小屋があつて、其わきに、烽火臺が製らへてあります、これは馬賊が多く橋を破壞するからである、若し守備兵が馬賊の破壞するのを見附けた時は、直ぐ烽火臺の薪へ石油をぶつ掛けて點火する、これを見ると他の烽火臺でも亦點火する、先きから先きへと相傳へて以て、味方に報知する、さうすると、各所に駐屯して居る兵が、駈け付けて來て、馬賊を追ひ拂ふと云ふことになつて居るのであります。

次は家屋で厶いますが、これは靑泥窪の如き、大規摸の市街は、さて置いて、吾々が、通過した停車場及び其近傍に建てられてある家屋に就いて話します何れの停車場に在る建物も皆な大きいが、就中普蘭店、南瓦房店、熊岳城、蓋平、大石橋の建築は宏壯目を驚かすばかりで厶います、新橋や上野、名古屋、京都、大阪、神戸などの停車場は、とてもヽこれに比較が出來たものではない、南瓦房店に在る機關庫の宏壯なるのには、誰れも驚かないものはないのであります。

（未完）

小説

油障子

幸田露伴

冬の初の無雨風烈しく往來の砂埃を巻き立てゝ一と吹どつと吹けば、人皆頸を縮め目を瞑ぎて、歩き悩む兩國橋の袂の廣場、南より來かゝれる茶の中折帽に紺綾の薄外套といふ打扮の男と、北より急げる黑の小い山高帽に短めの外套したる男と、いづれも盲歩きしたる事とて端と衝突りて「これは失禮、」「これは粗忽、」と、双方挨拶して別れんとしけるが、途端に見合はす顏と顏、「や、君か、」「お、君か、」「これは、」「これは、」と思ひがけぬ邂逅に復驚きつ、幾歳の月日に古されて紅顏の昔の色は痕も無くなり、今や漸く世の澁に染まり〱て老い行かんとする互の面を、互になつかしげに打護りたり。

「まあ何を話さうにも此處では仕方が無い、どうせ何家かで支度をせねばならぬ晝飯時、差かゝつたことが無ければ交際つて呉れたまへ、一酌しながら談さうでは無いか、」と茶の帽子がいへば黑の帽子も點頭き、奢らず下卑ずの中通り、一寸したる料理店に先づ入りぬ。

學校友達の間好かりしが年經て遇へるほど可笑きは無し。何より先に胸に浮ぶは互の諢名、互の失策、何といふ教師が面の憎かりしことなど、それよりそれと記憶の絲を

たぐれば種々の事のおもひ出されて、氣も若くなるやうの心地するが常なり。されば和服も洋服も暫時は昔話に奥底も無く笑ひ興せしが「時に君は今何處へか勤めてゞも居るのか、」と洋服の問ひしより談は今の事になりて「いや、僕は他人の著述の下請負などをして餘り香ばしいことも無く生活して居るが、君は」と和服の問ひかへすに「さうかへ、それにしても君はたしか財産はあり御母さんと二人ぎりで樂に仕て居たので同級でも團子レースの兵站部は大概君に引受させて居た位だつたから、今でも定めし豊に仕て居られるのだらうが、僕なぞは元からの貧賤で、親父が死んで遺して呉れたものは借錢といふ始末から學校さへ中途で廢めた位なので、いやもう御話にならぬ彼是を仕て來て、やうやく今度田舍から上つて來て、幾年ぶりで、やつと東京で所帶を持とうといふところなのさ。實は今も自身で相當な借家を搜して歩いて居たところだが、扨、好いとおもふのは價が高過ぎて、價の頃合なのは氣に入らず、困つたものだと思つて居る矢先に、ひよつくり君と出合つた譯だ。」と云ひさして持つたる鍾を差したり。

「あゝ、さういふ事で君は歩いて居たのかへ、それなら此に恰好といふ事がある。君の氣に入るか入らぬかは知らないが僕の所有家が直そこの濱町にある。周圍も汚穢くは無くて、五ッ室ばかりの一軒建だが、實はうつかりして壮士風の惡漢に貸して仕舞つたのだ、屋賃は遣さず、立退けといつても退いては呉れずいやはや何とも彼とも困り抜いて居るのだが、何樣だへ厭で無ければ君一ッ借りては呉れんか、君の事なら敷金も要らぬし、家賃も失敬だが出來るだけ廉くする、其の代り其の惡漢を逐ひ出すに力を借してくれたまへ、實は其の事で今日これから某辯護士を頼みに行かうとしたところだつたのだが。」と和服の男の性質の良さの見ゆる談に、洋服は少し醉つたる顔の眉を揚げて「けしからん憎い奴だ、兎角此の頃は其樣いふ奴がある、君もまた人が良すぎる、辯護士も何も要るものでは無い、よし〳〵、左樣いふ譯なら僕が其

奴を逐ひ出して仕舞つて、其跡を借り受けることゝしやう、端處も質に望むところだ、しかし僕も住み込んで仕舞つてから屋賃を拂はぬかも知れんぞ、ハヽハヽハヽ。」と高笑ひすれば、「ハヽハヽ、君なら拂つて呉れ無くても腹も立たぬ。」と和服は笑つて銚を返しぬ。

談はそこに纏まりて手筈の打合せまで濟めば、其日は左右に立別れしが、何が扨年若き往時より浮世の浪に漂つて苦勞を重ね來し彼の洋服男の五分もすかさぬ手强の談判に、惡漢も爭ひかねて去つて仕舞へば、男は入れ替つて其家に住ひたり。

家作主の悦びはいふまでも無し、惡漢を逐ひたる始終と入れ替つて引移したる由とを、三日ばかり過ぎて自身來つて物語れる彼男に酒など出して、「長い間彼の惡漢に居られたゝめ修繕なども全で爲ずに置いたから定めし彼此見苦しくなつて居やう、屋根も壁も惡い個處があつたら遠慮無く云つて呉れたまへ、早速それぞれ修繕させるから。」と云へば、借主は笑を湛へながら「や、それはまことに有り難い事だ。併し差當つて修繕して貰はねばといふところも無い。たゞ天窓の障子が甚く破れて居つて、無いも同樣だつたので一昨日の雨には大困り、何といつても家込のところだから臺所などは光線が十分に取れないところを、其樣いふ譯なので板戸の方を引て仕舞ふと、臺所は晝でも全で眞闇さ。そこで妻が大にこぼして居たが、」と云ひかくるを押へて氣の毒さうに、「それは早速直させやう、」と家主のいふに、借主は猶笑を續けて、「いゝえ、もう其もよい、僕が手細工で貼り替へて仕舞つたから。ハヽ、たゞ是は談話の序に云つたまでだ。」と談話を切つたり。

家主は猶そのまゝにせず、「でも君天窓の障子は油障子だもの、たゞ貼つたのでは直に剝脱れて仕舞ふ。君が手細工で貼つたといふのは虚言だらう。少許の事ではあるけれども僕の方で爲ればよかつたものを、氣

がつかなかつたので、」と飽まで人の良い挨拶に借主は又新に笑ひ「ナニ君油障子だつて難かしいことは無いさ、では君の家などでは破れたら何樣するのかへ。」と問ひ反せば「どうも素人には貼れぬから傘屋へ持たせて遣つて、貼るのも油を塗くのも仕て貰ふのさ。現に家のも猫に破られたので四五日前に矢張り傘屋に直させたところだ。」と何心も無き答なり。

言ふものは心無し、聞くものは心有り、借人は何をか思ふが如く、ムヽと云ひし限りにて其事は扨措き、餘談に渉りて歸りしが、家に歸りて後妻に對ひて「今日家主のところにてこれ〳〵の談を聞いたが、天窓の油障子を貼る位の事は何の仔細も無い事、饂飩の粉を酢で煉つて貼りさへすれば剝脱れぬは汝も知る通り、それを彼の男のところにては一々傘屋へ頼むといふ事、一事萬事の道理故中々彼の調子では世渡りの疎さが思ひやられる、今は地所家作もあり公債なども有るやうすなれば何事も有るまい、けれども彼の樣子では將來が思ひ遣られる、人の著述の下請負位の事で、あゝ遣つて長く過して行かるゝやうな世の中では無い。好い人だが、ぼんやり育つたゞけ將來がおもはれて、どうも氣の毒でならぬやうの心持がする。」と密に噂して聞せけるとなり。

彼の家の借主は漸く出世して今はおのが商業のため米國に居り、貸主は今いづくにありや、彼の家の所有者は疾にかはりたり。

（終）



詞苑

正三位伯爵黑田淸綱先生撰

（代撰菊池武則先生）

風前紅葉

天

東京市麻布區宮本町三十二番地　宮内たか子

いなり山けさこえ來れはふくかせに
三つの峯々もみちちるなり

地

熊本市東寺原町　田代艶子

ふくかせに淸瀧川のきりはれて
かけてそうつれ峯のもみち葉

人

薩摩國伊佐郡山野村字布計　松原みね子

吹くかせのさそはゝさそへ紅葉は
ちりての後もにしきなりけり

甲

ふきすさふかせのまに〳〵龍田姫紅葉のにしきひろかへす見ゆ　伊豫　梯たけ子

一葉さへちるたになをしきもみち葉をなと吹風のさそひゆくらん　麹町　渡節子

にしきなす庭のもみちをこゝろなくれたくもちらす秋の風かな　武藤　松本まつ子

ふくかせに庭のにしきと散しくはいつこの山の紅葉なるらん　長野　小泉みつじ

乙

さらてたにもろきならひの紅葉はをなと秋風のふきちらすらん　肥後　千知波橘子

ふきすさふ峯のあらしにちる紅葉なり〳〵窓にさはるよはかな　大和　栗山たか子

ちるゝまて赤きこゝろをあらはして風のみせたる山もみちかな　秋田　古瀬りく子

風ふけはにしきのなみも立田川きしのもみち葉みつにうつりて　東京　三好珍子

きのふまで錦おりにしもみぢはもよはの嵐にちりやしぬらん　長野　小泉たつじ子

山風のふきのまに〳〵さそはれておしくもちるか峯のもみぢは　本所　三坂きやう子

山姫のこゝろものすそを吹かへすいろとも見えてちるもみぢかな　赤坂　岩谷淺子

風さそふ外山のみねのつた紅葉そむるかたより散らんとすらん　麻布　松田清子

ひえとりの錦山かせのはけしさにあらそひかねてちる紅葉かな　秋田　古瀬惟子

さらぬたにちり初めたるもみぢ葉をまたも誘ふか山おろしの風　熊本　田代綾子

吹きはらふ風のまに〳〵中空に行へさためす散るもみぢかな　横濱　小泉はる子

心してちらさぬほとに吹よかしあきのかたみとのこるもみぢに　本郷　青木たま子

いろふかき庭のもみぢの夕はえをうしろめたくも吹あらしかな　東京　五十嵐せい子

おほゐ川きりふきはらふあさかせに露なからちる岸のもみぢ葉　三河　永井さい子

をくら山なほ奥ふかくわけいれはそよふく風にもみぢふりしく　芝　松永総子

たつ田川からくれなゐに見ゆるまて風にちりゆく秋のもみぢ葉　麻布　林環子

もみぢすれは春にもまさるこのなかめいたくなふきそ秋の山かせ　東京　ゆり子

ふく風も色やそむらんいこまやま霧のたえまに見ゆるもみぢ葉　麻布　林艶子

秋ふかくさそふあらしに山ひめのた染のにしきぬさとちりつゝ　名古屋　不破きみ子

窓の月に一むらさめのそゝくかと思へは風にもみぢちりくる　肥後　佐々小夢子

吹よするうら風さむくはら〳〵と磯やましもみぢなみにちるなり　愛知　榊原てる子

心なき風にもあるかな山さとののきはのもみぢちらんとすらん　肥後　佐々有隣子

水の面に紅葉のにしきちりくめりかせふきさそふあきの夕くれ　肥後　秋吉輝尾子

心なき風にもあるかたなるたになしきもみぢにいまそふきしく　三重　神山みよ子

秋風にさ霧は晴れてまさやけくみゆるもみぢのうるはしきかな　滋賀　馬淵なみ子

風ふかは龍田のかはのあやにしきけふはいろどる峰のかすみを　磐城　木幡たり子

しつ機の山のもみぢはいろあせてかせのおりたつ音そさひしき　埼玉　横田秋子

もみぢ葉のしくれの雨はぬれしより風にもろくなりにける哉　横濱　寺田光子

おりなせるにしきにゝたる紅葉はをにくや嵐のちらしぬるかな　神田　荒井満武子

あやにしきおりなし木の葉ふく風に歴ゝむみれば秋もすくらし　秋田　伊東よし子

木からしの風なもまたて紅葉はのちりしく庭そさひしかりける　陸前　前田河千年子

人の身もかくこそありけれもみぢはの時雨もまたて風にちる哉　陸前　前田河千念子

横須賀　岩橋花子

詞苑

吹く風に色うつろはてもみぢ葉のしくれそめたり秋ふけぬらし
京橋　別府なを子

なにとなくものおもはしき夕まくれふく風寒くもみぢちるなり
三河　山内經子

下々までもえつくしたるもみぢ葉を吹なちらしそゆきゝの夕風
秋田　小笹千代子

時雨かと音するかたを眺むれはあらしにもろくちるもみぢかな
大阪　岩橋花子

ふく風にまたうつろはぬ紅葉はのしくれそめたり秋くるゝらし
大　栗山俊子

風につれあすにも散らん紅葉はの色こそけふはさかりなりけり
麻布　松田君子

散るまては赤きをおのか心にて小倉のもみぢにしきしてけり
大阪　船越小仙子

みとり濃き影をうつせしいけ水にくれなゐ流すかせのもみぢ葉
長野　岡田千穂子

吹風にあやなくちれるもみぢはは唐にしきにもおとらさりけり
本郷　大枝つれ子

おのつからふくとしもなき夕風に散かさなれるにはのもみぢは
下野　井上[illegible]子

夕かせのゆらくまに／＼木のひまもれて色こきもみぢうつ[illegible]
愛媛　高橋茂子

小雀のふるゝにも散るもみぢ葉は風には如何につれなかるらん
長野　山[illegible]子

ふく風におくれ先たつもみぢ葉のにしき涙たつ四方のやまのは
海保ゑい子

ゆきすさふあらしの山の夕くれにのこるひかけそ紅葉なりけり
下谷　椎野秀子

峰かさるもみぢも風にちりそめてさらに錦をふもとにそみる
埼玉　町田勝子

こゝろして風もふけかし紅葉の今ひとときはのいろまさるまて
東京　竹内みつ子

やしほまて染いたしたるわかにはのもみぢをさそふ夕風そふく
陸前　渡邊しげ子

なか／＼にこゝろそかゝるつた紅葉君見て風にまかすと思へは
大阪　大木春江子

かせふけはちりもとゝめぬ庭もせに一葉／＼とちるもみぢかな
築地　山崎女苑

くれなゐに日かけもにほふ山ゆけは吹くか紅葉の風も冷めたく
北海道　小山春枝子

紅葉茂るやまのかなたに雲飛びてみやひ男三人肩ひそめゆく
福島　松本せき子

花紅葉ちしほにそむるこのあしたあらしきつゝこふしへりやの原
札幌　小山かく子

主もなき舟に飛び散る紅葉のはかなきさためとふひともなし
神田　荒井千代子

さそふましさそはれましな紅葉よ風よにしき織なす風情な仇に
同　荒井こう子

うすくこくにしき彩るもみぢはも一と夜の嵐にちるそうらめ
[illegible]野　山本直子

さわかしき谷のあらしの吹そへて嶺山のもみぢ散らすはかりに
東京　山田婦美子

かせわたる峰の紅葉はちりそめて我には庭はにしきそめけり
長野　小泉餘念子

こゝろなく吹もするかなあきのかせ千入のもみぢ散みたしつゝ
三河　白井芳子

さみしかのなく野とほき奥やまにまた風しらぬもみぢありけり
長野　山本民年子

あら松やにしき染なすもみち葉を吹なちらしそあきのやまかせ
神田 山田靜子

吹きおくる峰のあらしにさそはれて二ひら三ひら紅葉ちるなり
上總 高石とよ子

吹きさそふ風のまに〳〵ちるもみちにしきたゝるゝ心地こそすれ
大阪 山本伊勢子

ゆくあきに花となつかみしはしとむ我こゝろもてに雨とちり〳〵ぬ
秋田 細矢はる子

山ひめのそめいたしたるもみちはをあやなす峯の松かせぞふく
大阪 鹽見峰子

いろづける紅葉もにくやこからしの風に命のちるそうらめし
三河 榊原きく子

紅にそみたるかへてあきかせにはら〳〵と散るすかたやさしき
上野 大谷ちか子

にしきなすあらしのやまのもみち葉もいまをさかりと遊鹿の聲
埼玉 横田音羽子

風すさひもみちこほるゝ我門の駒のあとある前の板はし
福井 今村川鶴子

にはの面の紅葉は風にさそはれし梢さびしくなりにけるかな
埼玉 横田やな子

立田路を秋きてみれはかせあかくいろもにほへる山のもみちは
東京 渡邊名加子

そめつくすこずゑのもみち山風にふきさそはれていつち行らん
東京 米窪胤子

風吹かはやかて散りなむ命とも知らてや木々の何もみつらん
福岡 蟻岡美津野

嵐ふくゆききのなかのたひゝとはもみちの錦かつきぬはなし
東京 神戸錦惠子

たつた川にしきいろとる紅葉はもよはのあらしにちるそ惜めし

音羽山みねよりおろすあたあらしちるそふせいや錦おりなす
神田 荒井あさ子

はら〳〵と風に亂るゝもみちはもやかては赤きにしき織るらん。
和泉 福原菫子

もみちははさやけき風に誘はれてちりゆく時そうれしかりける
東京 ちよ子

ふく風にちるとも今はをしからしかきりの色をみせしもみちは
埼玉 町田かつ子

秋風にはれゆく霧のおとみせてくれなゐしろき木々のもみち葉
松山 山崎国子

動かさはにしきちきれんもみち葉をいたくな吹きそ秋のやま風
東京 敷島うた子

佐保姫の織れるもみちのあやにしき亂れもそする風ふくなゆめ
山形 香澄露子

もみち葉を散してすくる木からしに世のうき様もしられぬる哉
大阪 池田靜子

ねかひてし色になりたる紅葉はなもろ〳〵も風のふき散らしつゝ
山梨 標武子

ゆふひてる庭に敷たるかもの上に散かさなれるかせのもみち葉
東京 金原たまき子

村しくれ風にかはりてくれなゐのしつくみたるゝ庭のもみちは
東京 渡邊初子

ゆく秋も早程ちかし我か庭に風のさそへるみれのもみち葉
長野 吉田次子

秋たちてくれなゐふかき錦くさけふのさかえをとこしへにこそ
磐城 三森須磨子

夕日さすたつたの山のもみし葉も風のまに〳〵散るそをしけれ
富山 白百合

前橋 竹のふし

秋風のさそひかほなるもみちはのはかくれなゐにすくふさゝ蟹
丹後　秀子
山姫の手かひし甲斐も風のためにちるこそあはれこの紅葉はゝ
武蔵　田中拾紫子
花にまさるなかめよろしき紅葉のひとむらはやしけに錦なり
福井　杉本滋
くれなゐのたまも乱れてもみち葉は錦うちはふにはの朝風
大阪　山中ます子
ちることを花やをしへしさくらきの紅葉も風にそむかさりけり
神戸　太田竹子
我がともの墓へまゐれは風のまにあはれ散りゆくもみちの一葉
常陸　川村くめ子
ふく風にみれのもみちはちりにけり麗流るゝかはもあらなくに
長野　小泉徳子
こゝろなき峰のあらしにあやなしてもみちちりしく山のトみち

烟

天

東京永田町一丁日十六番地　渡　節子

立のほるそらの雲ともなりにけり
賤かふせ屋のほそきけふりも

地

熊本市東寺原町　田代艶子

豊かなるしるしもみえて里ことに
にきにきしくもたつ烟かな

人

秋田縣由利郡本荘町裏尾崎町十三番地　古瀬惟子

足ひきの山のおくにも人すみて
すみかまならぬけふり立なり

甲

肥後　秋吉輝尾子
朝ゆふにけふり一筋立みれはこのやまかけもひとやすむらん
長野　小泉德子
君か代は民のかまとの數そひてけふりのたゝぬ家なかりける
麻布　宮内たか子
開け行く御代のしるしとみゆるまていつこの里も烟にきはふ
東京　渡邊初子
作人もありとしられてさとゝほきとやまの奥にけふりたつみゆ
東京　渡邊名加子
ますらをか仇のとりてを打つゝのけふりにくもるもろこしの原
赤阪　岩谷滝子
山のおく谷のそこにも夕けたくけむりにきはふ君か御代かな

乙

秋田　小笠ちよ子
しつかたくをちの山へに一村の雲とも見えてたつけふりかな
三河　山内經子
いくさふれいまや港をいてつらん大空たかくけむりたつみゆ
秋田　古瀬りく子
なかむれは雲にも近く登るなりたれすみかまのけふりなるらん
長野　小泉たつじ子
たちのほるたみのかまとの烟こそ治まるみよのしるしなるらめ

大和　栗山たか子
杣人のましはたくらん山さとのそらにけむりのたゝぬ日そなき
大阪　船越小仙子
海の雲かと見しは歸り來しみいくさふねのけむりなりけり

滋賀　馬淵なみ子
もしほやくけむり悲しも世わたりの細きためしを見る心地して
東京　三阪きやう子
夕山のくぬ木かくれにたちのほるけふりゆたけしをちかたの里
薩摩　松原みれ子
やちまたに夜嵐なひくけふりにそたくみの業のすゝみをそしる
伊豫　たけ子
立つゝくたみのかまとの煙こそにきはふみよのしるしなりけれ
本郷　皆木たま子
山ことにたつるけふりの朝夕にゆたかなる世のかけはみえけり
肥後　千知波橋子
君が代のめくみなりけり朝な夕なけふりたちそふ民のかまとは
上總　高名とよ子
夕けたくけふりさひしく見ゆるかな小川のかなたの竹村の上に
麻布　松田清子
よのちりにそまてやきよくのほるらむ高野の奥の寺のけふりは
東京　三好珍子
しほかまの鹽やく烟うちなひきはろにしられぬかすみとそみる
埼玉　横田やな子
瓦やくけふり一すちたな引てしのゝめくらきうしゝまのさと
福井　今村田鶴子
としごとにたみのかまとの數ふへて疏野のすゑも烟たつみゆ
東京　山田靜子
吹く風にたちもあからす夕けふり思はぬかたになひきぬるかな

埼玉　横田音羽子
汽罐たくけふり一筋そらにおきてくろゝたゝそゝ山本のさと
下谷　槇野秀子
家ことにのほる烟もゆふかせにひとつになひくやまもとの里
埼玉　横田秋子
くれ竹のふしみのさとのゆふけふりたなひきくれしやはた山崎
大和　栗山俊子
もしほやくけふりはきえてわかの浦しつけき空に月のさえけり
松山　山崎政子
むらからすねくらにかへる姿をもおほろにみせて立つ烟かな
東京　松本松子
やしま國さかえしられて海山もけふりのしけくたてるみよ哉
山梨　櫻　武子
浦ちかくたつしらくもと思ひしはあまのたく藻の烟なりけり
靜岡　竹田みつ子
ゆたかなる御代のさかえに朝夕のけふりもしけく家ことにたつ
松山　すゝしろ
雲かへる遠やまもとのいほりよりこゝろ細くもたつけふりかな
東京　金原たまき子
いくさ船つとひかためし唐みなとけふりに空もかきくもるらむ
牛込　米澤胤子
小野の里すみやく烟たゆたひておきの日ひくゝいまくれむとす
麻布　林　環子
筒のおとひゝくこたまのきえぬまにあたの砦にけむりたつみゆ
三河　榊原きく子
ともし火のほのめく見えて竹藪にうすくものほる夕けむりかな
三河　永井さい子
ほそ／＼とのほる鹽屋の夕煙からくや海人のたつるなるらん
大阪　鹽見峯子

いくさ人命を捨て〻國のためうちたすつ〻のけむりいさまし
三河　榊原てる子

いくすぢか沖邊にしろく立けむりいまやみ船のいて〻ゆくらん
東京　山田ふみ子

ほの〴〵と明ゆくそらに立のほる朝けのけふりゆたかなりけり
福島　松本せき子

秋かせを袖にうけつ〻さまよへは夕へさびしくたつけむりかな
東京　松永德子

ゆたかなる年をまもりの神なめにやことのけふり立まさりけり
肥後　佐々小琴子

朝けふり夕けふりをもたてそへてにきはふ御代の四方のむら里
肥後　佐々有鄰子

四方の里民のかまとは朝ゆふのけふりたちそひにきはひにけり
長野　小泉餘念子

天さかるひなのはて迄けふり立さかゆる御代のしろしなるかも
埼玉　澤田房子

かとことにかまとのけむり立見えて出來秋祝ふたみのゆたけさ
麻布　松田君子

すむ人のありとはかりにけむり立ちさびしくくる〻片岡のさと
和泉　福原菫子

大空のくもかとみれはたちのほる豊けき御代のけふりなりけり
長野　山本直枝子

いにしへのたみのかまとに立つ烟大御こ〻ろにかなひつるかな
長野　小泉みつじ

男しかなく豊けきさとの夕けむり立のほりてやくもるなるらん
築地　山崎女苑

山むらにひとむら烟のほれるはいま見し瀧頭のすぐろなりけり
麻布　林　艶子

日のひかりとさせるまてに立けふり榮ゆる國のしるしなりけり
陸前　前田河千年子

ゆたかにものほるけむりのたなびくは夕餉かけてかて炊くらむ
熊本　田代綾子

進みゆく御代のしるしは黒けふりみやこもひなも立おほひつ〻
松山　山崎匡子

月おちてたなびく雲やいへことにたける夕けのけふりなるらん
富山　白百合

あらいその波のまに〳〵みつけふり雲かとおもふあめの夕くれ
大阪　山中ます子

木かくれに山こそみへれ朝けふりひとむらなびくをちの松はら
埼玉　戸田折香

あたふれの烟と共にうちしつむうつしゑ見ても氣味のよきかな
京都　千代子

ゆふ飯たきいそく少女かいとなみも烟にむせふし〻のふせやは
東京　黒崎えつ子

烟てふことばをきけばしのばるれ高津の宮のふるきためしを
神田　荒井千代子

立登るけむりは空をお〻ふまてゆくゑやいつちおちてゆくらん
埼玉　田中花子

夕けむり細きわかやに雨みえていそのきくはたや〻消えてゆく
長野　山本民年子

朝な夕な民のかまとにたつけふりいかなる雲になりはつるらん
大阪　山本伊勢

秋きぬとくさはは露をなきしかとお〻けなきふにさかゆく烟
札幌　小山かく子

なまくさき太刀風はたと吹きやみて烟たなびく遼陽の城
北海道　小山谷枝子

布教師のたとるひろ野のおちこちにくもかと見しは煙なりけり
磐城　木幡たり子

ますらをと千人の思ひのせたりし汽車はせさりけむりたなひく　名古屋　不破きみ子

落葉たく夕けのけむりたちまよひあめおやうけに見ゆる空かな　神田　荒井あさ子

海陸にたゝかふたひのほのけふりくもゐのよそに勇たちゆく　長野　山本甚子

打合るつゝのけふりのはれぬ間は世もうすくらき心地こそすれ　秋田　伊東よし子

しつか家なもれ出る煙てきの　しろ陥落せしといさむなの子等　下野　井上滋子

賤かやはのき立けむりほそくしておきなわらうつおうな糸うむ　三重　神田　みよし子

立のほるつゝの烟にたくみなる世のなりはひを空にしろかな　長野　岡田千穂子

絶えまなく出る淺まのけふりさへ末はかけたにとゝめさりけり　三河　白井芳子

もろこしの野にいさましく立のほるしろきけむりはみ軍のかち　埼玉　澤田伸子

忠に身はくちてもかなるますらをのなきたま祭る烟かくはし　下野　井上絢子

夕風に末けみたれてまきばもりすめるまやよりけふりたつなり　上野　大谷ちか子

古木立しけれる宿の木のまよりゆたかにのほるよへのかまとは　神田　荒井満武子

なかむれは住家もまれに浜しろく海士か鹽たくけむりこそたつ　秋田　細矢はろ子

さゝかにの糸よりほそきけふりさへ君かめくみに立ちのほる哉　荒井幾久子

ほの〳〵と明はなれたる東雲にゝきはふとかいのけむりこそ見ゆ

賤かやの烟にもしろおほ君のはかり知られぬふかきめくみは　埼玉　町田勝子

れやのとをあくろかたよりふく風にいてまとひぬる朝烟かな　大阪　岡　鉦子

あさことにのほる烟のにきはしくなと豊年のしらせなるらん　磐城　三森須磨子

烟立つかまとのまへに小女子か乳房にすかりほゝゑみてけり　神戸　山本松野

賤かやの軒はのけむり盛なり夕けないそくむらのをとめこ　神戸　太田竹子

風前紅葉　福原　中島武子

ますらをか赤き心のもみちはなかつ〳〵ちらす峰の夕かせ　肥後　徳永満游子

○

さそふへき風のならひも山姫のにしきのそてはよきてふかなん　肥後　徳永多瑠子

○

秋ふかくそめつくしたる紅葉はにいたくなふきそ峰の木からし　肥後　徳永僚子

○

ふきおろす峰のあらしに八千もとの梢さひしくちるもみちかな　肥後　徳永為游子

煙　福岡　中島武子

○

軒端さへみえわかぬまてうちなびき賤か夕けのけふりたつなり

○

石炭たくけふりに民のなりわひもにきはふ御代の様そしらるゝ　肥後　徳島多瑠子

○

一むらの雲とみえしは山さとにたくやゆふけのけふりなるらん　肥後　徳永廣子

朝霧とみまかふはかりたなひくは民のかまとのけふりなりけり

華族女學校教授 井上賴圀先生撰

天長節

天

福岡縣筑紫郡警固村 中島武子

何時はあれどこの年程めで度天長節の御祝はあらじ。げに皇軍の向ふ處堅城鐵壁も破れざるはなく、海に、陸に、戰へば勝ち、攻むればとり、敵が根據と賴みたりし遼陽の地も、はや日の御旗翻りて、旅順はた又包圍の中にあり。あはれけふの御祝程めで度く勇しきはあらじと思ふにつけても、我大君には今年二月の始め宣戰の大詔下し給ひてより、御軍服を解かせ給ふ暇だになく、朝はとく出でさせ給ひ、よは遲く迄萬の政事を執らせ給ふとこそもれ承はるさへいとゞ畏けれ。我武士が、海行かば水づく屍、山行かば草むす屍と、進みては退く事を知らず、死して餘榮あらん事を願ふも理ならずやは。

今や我日本の光は、四方の海をてらして、君が御稜威いや高く、旭日の向ふ處、草木も打靡きて、北の國の野末に置く露もあはれかつ／＼消え行かんとす。年は豊かに御國の勢の延びに延び行く樣を見る喜びは玉の臺も柴の戸も同じ心に、我大御代の萬千秋の御榮を仰がざらめや。祝はざらめや。いとおほけなけれど、我もその數にはもれじと、拙き事を述べて、かくなんことほぎ奉る。

地

東京市麹町區三番町 石川薫子

朝鳥の聲麗しく、先づ歡びの聲を放ちて四方に傳へ、戸毎に立てし日章旗心よげに朝風にひらめきつ、曈々たる大陽は靜かに東天の横雲を排き、五色に雲を彩る壯觀、風は冴え、氣は澄みて、塵一つ飛ばぬ今日

嗚呼このよき日、申も畏き事ながら、我等臣民のゆめ忘れ能はざる御威稜いや高き我　大君の御降誕在しませし日なるよ、鶴は千年の齢を保ち、龜は萬古の福を捧ぐと云へど、我　大君の御威稜は、千代に八千代にさざれ石の巖となりて、苔むす迄も榮え盛えつ、世々に輝き渡るこそ、げにかしこき事の極みなれ。平和の爲義の爲に、已むなく戈取りて、世界の强國と歌はれし大兵と戰ひてより、さしもにかたき金城鐵壁も物かは、到る處打平げ、我日の本の勳功をいよゝ世に高く輝かせたるも、一つには我同胞の愛國恩報の心深きによれど、一は皇統連綿萬世一系の我　大君の上に在しまし、畏くも萬機を總覽し給ふ故にならむと、いと畏く覺ほゆれ。

かゝれば、人皆聖代の佳辰を祝し、門を通る小女さへ「けふのよき日は……」と、小さき口より美しき聲を出して、曇りなき眞心を表はし、洋々たる和風は門戸の國旗を飜ひし、見るもの聞くものの幸多き御國の樣を現はせるこそ目出度けれ。いざ祝へ諸人よ、我れも吹はんけふの好日を。

人

東京市下谷區御徒町三ノ三三　岡田柳子

久方のみ空には、塵ばかりの雲だになく、朗かに晴れ渡り、日のみ光りは、街の旗にかゞやきあひて、いや榮え榮えゆく、御國の御稜威を、自ら示しあらはせる今日は、畏こくも、すめらぎのあれましゝ、いとも目出度き日にこそありけれ。申すも恐多き極みなれど、大君の御英明に渡らせらるゝは、今更にたゝへ奉らん迄もなく、殊に慈仁の御心の深くおはしまし「萩の戸の花に宿れる月かげは賤が垣根も隔てざるらん」との御製を拜する者、誰か感泣せざるべき。さればにや、國民忠節の念堅く、君のみ爲には、山はさけ海はあせなむ世迄もと、ちかひたてつゝあれば、今度の御戰にも、連戰連捷の譽れをうるは、實に理りなる事になん。哀れ斯る目出度大御代に、生れあひにし吾等が幸は、限りもなく、如何にしてか此よき日を

祝ひ奉らん。濱の眞砂のつきせぬ嬉しさ喜ばしさに、み祝ひの言の葉もわかず、只咲き亂る、雛の白菊、露ながらに小瓶にさし、盛り久しき此花に、たぐへ奉りて、大君のみよはひの、千代に八千代にさかえませと、ことほき奉るばかりになん。

秋季運動會

天

札幌北一四七の一　小山かく子

頃は九月廿日の朝まだき、あはれ空一面に雲りゆき、墨汁もて一はけ撫でたる如く、今にも降り來らん模様なり、待ちに待ちし運動會はいかになり行くべき。

とても此空模様にてはと、常の支度にて登校せしに、思ひきや八時の鐘を合圖に豫期の如く、會場に集るべしとの掲示、喜ぶ友、つぶやく友、互に氣遣ふ雲行き眺めつゝ、二列となりて進み行けり。足のみは自と力ありていと輕げなり。空氣のしめれるに似で。

泣き出さん計りのみ空も、お慈悲深くてなか／＼に雨を降らさず、參觀者の少なきのみが怨みとこそ云ふべけれ、頓て定刻になりければ、露多き空に響く合圖の發砲に、くさ／＼競技は行はれたり。拍手のうちに、歡聲のうちに。

赤きリボン、桃色の帶、ふさ／＼と下げし髮、下葉かれ初めし秋草ふみ〆て競ひ狂ふ樣、やさしくも凛々しかりし、人よ汝はいかなる心もてそを眺めしや。

午後二時半、興未つきざるに、涙の如き雨は降り出しぬ。はら／＼／＼と。最後の撰手競爭に名譽の優賞旗握らんずる勇婦の心かき亂して。

地

東京市牛込區原町三丁目五十八番地　米窪たね子

野葡萄は熟み、山茶花は笑みて、一樣に來れる秋の色を傳へぬ。行く雲も、流るゝ水も、山と共に皆うら枯れ果てぬ。夜は空林に風泣いて、霜に迷ふか雁の音悲し、嗚呼誰か又秋を樂觀視するものぞ、古も鴫たつ澤の暮れ行く秋に泣きし人もありけるを。

妾先つ日、同じ學舍の心あへる友どち、誰彼語らひて、名のみなる秋季運動會を、それの野に催しぬ。秋の日長閑にさえ渡りて、見ゆる限りの野畑の輪畫をば隈々まで畫き出し、紫に、赤に、はた黃に、恰も彩畫なんどを覆ひしたるが如き中に、巍然として聖塔の如き森は、鈍き角度を以て、反映を投げ、皺をたゝえたる如き漣を連らねて悠々と行く小川は、岸の垂れ萩を浸して、遠く渺々烟霞の內に入り、折りから傍の枯木には鵙の一きは烈しく啼き出たる、恰も瑞西の古畫など見る心地せられて、常世の靈は、今し秘密の幕を透して、此野に宇宙の神秘を默示するもの丶如し。

此景色を見、此自然に接せし、妾はひたと感じぬ。運動會必ずしも、多人數にて笑ひ興ずる物のみかは、靜かに自然の神の攝理の樣を味ひ、造物主の蹤の痕を究むるも亦限りなき慰安と靈養とを得るものを、世の姬達、願くは、自然の瞑想を樂みて、人爲にのみ求むる所勿れかし。

人

北海道夕張炭山聖公會內　小山春枝子

兄樣の行く學校で、秋季大運動會があるから見に來いと、入場劵一枚を添ひて案內があつた。

其日に行つて見ると、會場には、赤、白、黃、綠、紫などの旗が威勢よく風に飜つて、式場の正面にアーチが出來て、大きい國旗が交叉されてある。周圍は隨分廣いけれども人で垣が作られてゐる。

拍手喝采のうちに幾回かの競爭が行はれた、其度毎に優勝旗握つた勇士が、肩身廣さうに、靜々と會長の前に歩みを移す、其雄々しさ嘸やと私の胸までがわく／＼するのであつた。次がチャンピオンレースで彌々散會と云ふ時兄様も交つてゐた、紅葉狩りの皈りか、見物人は急に加つて黒山のやうである。私は氣が氣でない。

廿日も卅日も前から粥と雞卵でお腹を拵へ、曉の露を踏んで鍛へ上げた兄様の健脚、多分不覺はとるまい、然し相手も何れ劣らぬ級中の撰手、競爭は五週！など丶思ふうちに合圖の發砲が耳に響くと同時に、待ち構へた五人の撰手は疾風の如く走り出した。見るまに二人をぬいた兄様の足と體には、私の眼と心とがついて廻るのである。同じ思ひのクラスメートは、何れもかたづを呑んでゐる。野次馬連の見物人迄が咳一つせない……。あはやと思ふ刹那に、大喝采、大拍手に歡迎されつゝ決勝點に飛び込んで來たのが兄様であつた。途端に長い下げ髪をふり亂して、ハンカチーフを振り乍ら『兄様萬歳！』と叫んだ私の心もちは、あゝ確に耻も外聞も考へる暇がなかつた……。

天長節

札幌　小山かく子

鷄鳴曉を報ずるに驚かされて窓おし開けば、隣家の軒端高く旣に國旗の飜飜たるを見たり。嗚呼今日は我　至尊陛下の御降誕を祝すべき佳節なる也。我等國民たるもの誰か恭しく謹賀せざるものあるべき。謹んで思ふ、我叡聖文武なる　至尊陛下の天位を繼がせ給ふてより茲に三十七歳、維新の擾亂を戡定せられ、經國の事業、文物と共に日に新に、黎民を愛撫せられ、國富を計らせ給ひ其御盛德たる前古何ものか比すべき。今や露國と事を構ふるの時に當り　至尊陛下の御英斷を待つべきこと特に多からん。希くは龜鶴の齡を保たせ給はんことを、草間の微臣此所に恭しく聖壽の萬歳を祝し奉るになむ。

東京　松川ちよ子

朝霧隈なく晴れ渡り。戸毎に打靡ける日章旗は常盤の松に匂ひ、千代呼ばふ鳥の聲は空になんすみにける。そも本日は我大君の生れ給ひし大祝日なり。されば上は九重の御奥より、下は鹽燒く濱邊、さては山奥の賤が家に至るまで、皆それ／＼の設けをなして芳ばしき此佳節を祝へり。申すも畏き事ながら、叡聖文武に渡ら

せ給ふ我　天皇陛下の天津日嗣しろしめしゝより、列聖の洪緒を續ぎ、大に中興の偉業を起させ給ひしかば、一きは德澤四海に徧く、稜威到る處に振ふ幾多の御乾德は世の人のなべて知る處、今更記しまつるもいとゞ畏しや。抑も至らぬ限なき大御惠の露におきふす民草。いかにして此御恩澤に答へまつるべき。唯學に、業に、勉め勵みて叡慮をなんじ奉るべきのみ。今や我國は歐洲に强國の名高き露西亞と干戈を交へつゝあり。無量なる御聖德に浴して感激せるの赤子。君國に報ゆるは此時と、砲烟彈雨の其中に勇躍突戦して彼を挫き、國の稜威を世界に輝かしつゝある。又宜ならずや。かゝる盛時に生れあひて、かけまくも畏き我大君の、天壌無窮の寶位に立ち榮え給へる日出度さをことほぎまつる身こそいともうれしけれ。

失名

今や日露の戦は、日に〳〵我威名を、滿州の野に輝し、飽く事を知らずして、慾を恣にせしさすがの露國も、翼收めてあとずさりしつゝある今日此頃、茲にあやにかしこき　天皇の、御生れさせ給ひし、最ともめでたき佳節を迎へぬ。都も鄙もおしなべて、朝日に輝く日の丸の旗を翻へし、和氣藹々たるの裡に、君が代の歡聲は、もれ出でゝ聞ゆ、豈によろこばしからじやは、それにつけても、想ひ出でらるゝは、かの暴風吹きすさぶ、戦の巷にある我軍人、さぞや今頃は、見事群る敵を打ち破り、敵の城頭光り輝く日章旗を押し立てゝ、最と〳〵勇ましく、聖壽の無疆を祝ひまつらるゝならむ。あはれ、明日さへ知らぬ、危き身なるにもさらさら心措かず、ひたすらに　天皇の、萬歲を唱へらるゝかと想へば吾等いかでか徒に過されむや。いで是れよりは我が大君の御影を伏拜み、君が代の千代に八千代に榮えまさむ事を祈ると共に、ひたすらに女の道をいそしみて、大御心の萬が一つに、報いまつらむ事を努はなん。

萬代にいや榮えよと祈る哉

あやにかしこきすめらぎのため

兵庫　飯島淳子

今日のよき日は大君の、生れ給ひしよき日なりと、歡ふ唱歌の可憐の聲、野山にひゞきていと愛でたし。都ならぬ鄙の里にしあれば、各かゝぐる日の御旗も此處彼處にて、ちらほら見ゆる、なか〳〵に風情あり。空高くすみわたりたるめでたき日に、家族打連れ、當地某山に設けられたる遙拜所に至りて一聲に、天皇陛下を初め奉り、各皇族殿下の萬歲などのふるをいつしか例となせる、わきて今年の如き戦時にありては、出來得る限り盛にするこそよけれとの事にて、親族、或は朋友知人を勸誘し、例の遙拜所に行き、兩陛下、各皇族、さては海軍の戦捷を祝ふなど芽出たさ限りなし。其後は各思ひ〳〵にて、散歩する人あれば笑ひ興ずるあり、小女の遊戯競進の相撲など、心も清くすみわたりて、樂しさいふばかりなし是みな君の御威稜の尊さと思へば、畏くも亦芽出度き極みなりけり。

北海道　小山春枝子

秋風そよ吹く、閣の邊に、數々の木の葉ひら〳〵と舞ひ落ちて、其所こゝと飛び散るがごと、さげ髮、おたばこ頭の少女らは、身の丈三尺餘りの一分がり、五分がりと打ち交りて、勇み行く足も輕らに。

『今日は十一月三日の朝よ、陸でも海でも勇ましく、打ち出す祝砲ドンドン、ドン〳〵……』

歌ふ調子も凜々しく、聲さへみ空高く清み渡りつ。折りしも響き渡る大砲の音、無邪氣なる子等の歌ひし餘音と共に、遠く高く、み山の奥に、海の彼方に、はてはみ空遙かに消えゆく様、畏こくも我　至尊陛下のいや高き御稜威を廣く高くふれ示すにも似て、嬉しさ、心地よさ、云はん方なし。此日祝ふ我らの心には、いつとても變りなけれど、今年のみはお

りとあらゆる世界の國民の、おぢにおぢたる敵國と砲火を交へて誇りに誇りし敵の眼に、み國のてぶり輝かし、我大君のみ榮、いや榮に榮えしめたる年にしあれば、日出たきことも亦格別の心地せらるゝになん。扨も忘れ難き十一月三日よ。

群馬　竹のふし

淸き菊花の薫るなる今日の佳日は、畏くも我大君の御降誕ましまし、いとも尊き日なり、地球の上に國と云ふ國はあれども、外國の殊に羨む皇統は、神の御代より變らざる其一系を續き給ふ我天皇ぞ尊けれ、其御位に即き玉ひてより、維新の大業を起し玉ひ繁き萬機を總べさせられ、廣く他國と交りて御威稜を世界に輝かし、其御功績の數々は舉て數ふる暇なく、又國民を慈み、雨の朝に風の夜に、いとも尊き御身もて深く御惱し給ふぞ有難き限りにこそ。されば下し給ひし言の葉は我の民の守とし、四千餘萬の同胞が國の御父と慕ひ奉るも、實に理ぞかし。斯く惠の露に潤ひて榮行く御代に生れし民草が、今日の佳節を祝はんも、家業を休み喜びて嘆ぎまつるも宜なりや。軒の端言づる小鳥さへ朝日の影を伏し拜み、君が千代とぞ囀づるなれ、やよ國民よ、諸人よ、今日の佳節の壽を高く唱へて祝へかし。あわれ年々見そなはし、君が股肱と許します兵士は、今や大君の深き聖旨を畏みて、眞の道を踏み外す彼の蛮驚を神代より傳へし仁義の風をもて、廣き荒野に吹き靡け、野に臥し山に轉びつゝ、幾艱難の其中に今日の佳節の萬歲を高く彼の地に唱ふなるらん。

武藏　松本まつ子

かけまくもかしこき大八洲國はさらなり、とつ國までもしろしめす大君のみあれましゝけふのこの日を祝ひ奉るは、都も、ひなも島のさき迄、ことほき奉らぬはなかるべし、はれ渡りたる大空にはえて、ひのみはたのかゝやきあひて、いとうるはしきに、君が代歌ふ聲さへのとかによもに聞えて、おのづから御代ゆたかなるみ榮しるゝ天つ日のとばに曇らぬ萬世祝ひ奉るとて、

かとことにみはたさゝげてもろ人の
　君か八千代を祝ふけふかな
かしこきやわか大君のあれましゝ
　けふのよきひをあふぐたふとさ

けふはとつ國にてもみさきもる人たちの、御代萬世をうたふ聲、天地をひゞかすらんとおもはる。

横濱　寺田光子

天長節、國民の大君祝ひまつるは今日、朝日の光りまばゆきばかり、門にひらめく日の大御旗をてらしぬ。妹は學校にといで行きぬ小さき弟はかゝげし旗を見て喜ぶ樣もをかし、今朝はいたく霜ふりぬ。花だんの菊は朝日に一入美はしく、恰も今日のよき日を祝ふかの如くさきみちぬ。一枝は文机に、一枝はかざしにと、めもあやなる枝見わくる折しも、訪なふ聲す、誰が君にやと見れば、思ひもよらざりし、なつかしの妙子の君なりとは、久しく病ひのため、得あはでありし君なれば、うれしさいはん方なし、二人手をつられて、久々にて日あたりよき庭をめぐりぬ。そよ〳〵とふく風も心閑なる今日、このうれしき天長節に、君が美しき笑顔、共に黄菊かざして祝はんとは、夢にも思はざりしよ、折からひびく祝砲の音、二人の心はいとも〳〵長閑に樂しくた語り合しぬ。

大阪　船越小仙子

おやにかしこき祐ノ井の水は千代かけて淸う澄み、御園生の白菊は千代の末を契りまつりて色香めでたき今日の吉日、あはれその今日の吉日、わけて今年はいかなる言の葉もて壽きまつらむ。つれならばオーガンに向ふて『君が代』の國歌を二たび唱へまなさ、むさりながら、今日は軍國の天長節よ、殊には女子に生れたる身、けふ一日は繃帶卷く手を休め、せめては負傷に惱める我が同胞の勇士を病院の窓に訪ふて、及ぶかぎり心の限り慰めむこそ、我が大君の大御心にも叶ひまつらむかとぞ、賤が胸にも思はれてかし。

肥後　佐々有鄰子

今日は天長の佳節なれば、木野尋常小學校の教員は、男女の生徒をひきつれて產須根神社に詣で、東方にむかひ校長は生徒を整列せしめて、はるかに　天皇のまします、東京の宮城を伏拜みて、天長節の唱歌を同音にど唄はしめき。式場にて奉仕の社司は、おろしの神酒を一同に賜りぬ。餘興には劍遊び、旗とりなど、とりとりの遊興をつくしぬ。そもそも日露戰爭中なれば、國家安全の祈念をこめて神社をまかりぬ。生徒の某女は

天皇今日のみありの目出たさに
　袖をかされていはひつるかな

またの歌は某女教員なり。

龜はうかひ鶴はまひいてゝ八百萬
　千五百萬代うたひぬるかな

松山　すゝしろ

けふはしも、あやにかしこきすめらぎのあれまして、いとも目出度日にしあれば、上は九重の宮人を始め、下はもしほやく海士に至るまで、都も鄙しおしなべて、君が代を祝ひ、月毎に飜るがへる御旗は、秋のみそらにいや高く、學び子はおのがじゞ身を清めて、校長の御敎への下に
兩陛下の御眞影を仰ぎ奉り、皇國の御威稜いや榮えまさむ事を祈り參らするぞ、我等も、いかでか祝はざらめやは。されば親族知友を打集めつゝ、心のかぎり御悅びのむしろを開き、包むにあまる御目出度さに、數ならぬ身も打忘れ、いさゝか賀き奉りて千代萬代も榮えまさん事を祈り、こゝに拙き筆とりてかくなむ。

伊豫　多計子

門毎に日のみ旗ひらめく今日は、そも如何なる日ぞや、かけまくもかしこきすめらぎの、この世にあれいで玉ひし此上なう目出度き佳節なり。されば、長きあたりは云ふもさらなり。み惠の露に霑ほふ四方の民草らは、よろこびあひつゝ、大君の八千代を祈り、國運の彌榮えんことを、ことほぎまつるになむ。かゝれば茅屋に住ふ賤しき身なりとも、此よき日をなどかは徒に過すべき。申すも畏けれど、日頃世のさまにのみ大み心を注がせられ、片時だも安んじ玉はで、ひたぶるにいそしませたまふ事を仄かに洩れ承るにつけても、誰かは君のみ爲に誠を竭さゞらんや、海外にまでかゞやく大み光のもとに、暗よりもくらき夷の醜草らを打こらしとくなびき伏すべきやう力をつくして、やがて宸襟を慰めまゐらせ、皇恩の萬分の一つだに報ひまつらでやは、と、今日の佳節をことほぎまつりつゝ、思ふまゝを拙き筆もてかくなむ。

肥後　岡山登喜子

今日はしも、あやにかしこき天皇のうまれ給ひし、いともめでたき佳節なり。げに一年の中に、今日ばかりめでたく樂しき日はあらじ。家ごとにひるがへる日の御旗うらゝかなる朝日にてりまさりて、みいづかがやくこゝちこそすれ。今日しも名ごりなふ晴れわたりぬる小春の日影に、咲にほふ菊の花も、みさほをほこり、錦を織れる紅のあかき心に、君が代を千代に八千代に祝ひまつるものゝ如し。まして民草のいづれかは、祝ひ壽き奉らざるべき。あはれ、我等はかゝるめでたき大御代に生れあひ、かぎりなき御惠の露にうるほふことを得たるは、實に幸のきはみになん、されば、この尊き日に、師の君はじめわれ等一同學校の庭にあつまりて、御眞影を拜み奉り、陛下の御よはひの萬代までもかぎりなくさかえまさんことを、いのり奉り侍るにこそあれ。

愛媛　ひ　で　子

申すもかしこけれど、今上陛下玉體愈々御壯しく、今日なん第五十三回の御誕辰に當らせ玉へり。實に今日の一日こそ、天の下四千萬の同胞ども、おしなべて、喜びまつるべき時なれば、身賤しき我らも、心から君が八千代をうたひ壽きて御齡の千代に八千代の末長く榮えまさん事を祈らなん。まことや常々御いつくしみを民草にたれ玉ふこのあはれみ深き大み心に、喜びて暗涙にむせばざるも

のはあらざらん。あゝ我すめら尊、國家多事、九重宵肝の際に御降誕あらせられ、王政維新の大業を定められ、征清の義軍を起され、宇内萬國に比類なき國威を輝し給ひしより、十年の今日、日露戰端開かれて、大み心を安んじ玉はん間もなく、國事にいそしみはげませられ玉ふと承りまつるにつけても、みかどの御上にてすら、かくおはしますと思へば、いかでか身命をなげうちて、君のみ爲國の爲盡さゞるものあらんや。我らかゝるかしこきすめらぎを上に戴き、そのみ惠に浴して何不自由なく明かし暮す身のさち、そも何にかはたとへん。いでや、力の及ばんかぎりつとめつくして、此の厚き御恩惠に報ひまつらばやと、君が八千代を歌ひつゝ、謹んでこゝに天長節を賀し奉るになむ。

上野　大谷ちか子

今日はしも、あやにかしこき　天皇の、あれ出で給ひし、いともめでたき佳節なり。北は千島のはて〴〵より、南は臺灣に至るまで、かくばかり目出度御日を、祝ひまつらざるはあらじ。見渡す限りの大空には、塵程の雲だになく、和々たる清風は靜かに田面をはらひて、民の豐さを示し、ひんがしの空よりさし昇る朝日も常にかはりて一段と光りをそへて、十善の君を祝ふが如く、朝まだきより、軒端に飛びかふ小雀も、一しほ美しき聲もて、千代千代と囀づる、鳥の音も、御代の安らげきを祝ふらん。遠き滿洲の荒野にては、大和島根の武士の、忠と義との床しき心根より、湧き出る萬歳の聲にて、天地もゆるぐばかりなるらん。あな嬉しやな、かゝる目出度御代に生れあひて、限りなきみ惠のいやにうるほうありがたさ、みな　すめら大君のみ稜威なり。いでや人々もろときに、君の御爲め國のため、勉めて勵めたゆみなく、勇みて進めいくさ人、大君の御爲めに。

肥後　千知波橋子

天長節と申すは。我朝三大節の第一に置かせられし、十一月三日今上天皇御誕辰の嘉節なり。此日は皇族を始め、諸大臣參內ありて祝ひ奉り、酒饌をたまふとかや。かしこくも、皇統連綿として、百二十二代の聖主にわたらせたまふ　天皇陛下の御いつ、海内にかがやき、天祐をうけさせられ。いにし征清の役をはじめ、つひで北清事件より、こたび露國との開戰も連戰進勝のほまれたかくかれ露軍を膺懲し、西洋各國をして、嘆稱せしめ給ふありさま實に心地よく有難き事あれば今年はとりわけ臣民こぞりて此日を祝ひたてまつるべきことにこそ。

大阪　岩橋花子

實にや霜月三日としいへば、かしこくも我　大君のあれましゝ、いとも貴き日になんありける。さすがに空も晴れ渡りて、朝日の御旗勇ましく、今日の好き日を祝ひ顔なり。都も鄙もおしなべて御國の民はいはずもがな萬里の波路いとはるかに、外國の野に仇討ち進む丈夫も、故里懷かしみ祝ふなるらん。海に陸に戰へば勝つ御國の軍、忠勇ならびなき我武士の勲とはいへ、いかでか高き大君の御稜威に、よらでやはある。今や御國も常ならぬ雲の行きかひ烈しくとも、大和島根の民草はいと平らかにやすらかに世渡るかしこさは、千尋の海の底深くとも、はた富士の嶺のいや高くとも、大君の惠みにくらぶればいかで者かは。千代に八千代にさゞれ石の巖となりて苔のむすまで常盤かきはにいや榮えませ。

前橋　廣子

君が代は千代に八千代にさゝれ石の
　いはほとなけて苔のむすまで

霜月三日、惟れ天長の佳節、誰かつゝしみ喜びて、此の祝日を迎へざらむ。げに、今日よりめでたく樂しき日はあらじ。家毎にひるがへる日の御旗、てりそふ旭に輝きて、今日や祝はんと、軒端に集ふ雀すら、千代々々さへづる聲のゆかしさよ。名殘なう晴れ渡りぬる小春日和に、操をほこる菊の花、赤き心の紅**葉**、なか〳〵に美しく、錦と見んか、はたあやか。いとゞ淋しき**この里も、いつになくにぎはひて、ゆきかふ人の足しげく、學び**

の庭の教へ子が、打ちむれだちて、君が代をいとゞ愛らしき口もて歌ふなり。ゆきかふ姿の愛たしや。

吾等もし此の大御世に生れずは、この幸如何で得らるべき。夫れ、日露の戦端開かれてより幾日、至上を始め奉り、下臣民に至るまで、一時も安き心のあらぬものを、されど、大君が下に、忠勇なる軍人が、海と陸とにみをさゝげ、勝を占めらるゝ、此の秋にさいし、家の守りの婦女子たるもの、如何で女女しく暮すべき。たゞ／＼己が修むる文の道を奥深くわけ入りて、いや高く女の道を守るべきことこそ、いと／＼望ましけれ。

東京　木村よね子

天雲の向伏す限り、飛ぶ鳥の渡れるきはみ、をしなべて、此しきしまの大和の國民たち、うからやから打ち集ひ、今日の御祝のことほきをば慎み尊み、天つ日つぎの限りなき大御代を、慶し奉らでやはあるべき。

そも／＼我日本の國は、開國二千五百有餘年、萬世不易の皇統連綿として極りなく、常磐の松の千秋の緑ます／＼こまやかに、君が惠の御代りにあふれ給ふこと、日月と其光を同じうし給へり。臣民自ら其御威に打ち靡き、君恩に報ひ奉らぬはあらじ。英聖文武なる我天皇陛下には、明治維新以來、夙に大御心を茲に用ゐさせ給ひ、ます／＼國威を發揚し給ひて、此盛大なる今日の基を建てさせ給へり。こゝに於て、社會諸般の事業は、益盛大に赴き、或は文に、或は武事に、農工商美術等、あらゆる藝能に至るまで、日を追ひ月を閲して、愈盛に、國益の増加すること、年と共に新に、其範圍を擴張するに至り、以て富國の源泉強兵の礎ます／＼固きをなす。加ふるに彼の日清戦爭は、著しく、我國民に刺激を與へ、之が爲に百事長足の進歩を促して、以て今日の盛況を見るに至れり。就中彼の教育事業に於いては、社會の尤も必要を感じ力を盡して之が發達を計るに急なりしを以て、公私の學校は至る所に開設せられ、如何なる山間僻陬の地と雖も、皆其恩澤を蒙らざるはなし。然るに、國家の交誼一たび破れて、日露の戦端相開くるに至り、忽ち黒雲起りて、滿邊の天を覆ひ、日夜馬蹄のたゆる時なく、硝烟彈雨を犯して、我軍隊は君が御命の下に益猛進し、數多の堅壘絶壁を破り、強敵をくぢき、行々地を略して以て彼の遼陽の大勝を擧げ、要塞線砲壘たる旅順の命、又まさに旦夕にせまれりとの報に接して、以て今日の祝日をむかふるを得るに至れり實に君徳のあまねきこと、廣大無邊にして、尊き旭日かげまばゆき大御旗の許に、伏して、感泣することになん。

名古屋　不破きみ子

今日は十一月三日なり、秋風和らけく軒端を廻り、庭の草木は靜かに靡き、差昇る旭の影は麗らけく、咲匂ふ菊花を照し、何れも謹慎祝賀の様を表しぬ。さもありぬらん、今日こそは千早振る神そ知るらん民の爲世を安かれと思ふ心はと詠のたまはせ給ふ聖徳仁慈にましますかしこき今上天皇陛下の御誕身あら・せ給ひしいとも目出度も又うれしき日柄なり。かくも尊き大君の惠みの露におふし立我民草、いかで今日をおろそかに過さるべきと、みなりを正し、手を清め、東の方を遙拜し、我兩陛下の萬歳を祝奉り、出る日影を伏拜み、又床のまに掲け奉る御影には、折柄の珍菓名菓を供へ奉り、陛下の御運長久は申もかしこし、我皇軍の連捷を祈り、一日も早く大御心を安め奉らんと、天地にちかひぬ。顧れば市民軒毎に旭のみ旗高く掲けて、喜びの心を表しぬ。

今や我數萬の同胞は、遠き萬里の波濤を渡り、滿洲の荒野原にみ旗を高く飜し、千軍萬馬の其中に今日の佳節の休を得て、將卒共に打集ひ、兩陛下の萬歳を祝奉るならん。やよ出征中の徒や、受げる佳節の祝盃に、勇鬪奮戰してくちぬ芳名を後世に殘せ。

和泉　福原菫子

今日のよき日は、大君の御降誕あらせられし御日になんある、さ

ひ
たぶるにことほき奉るなれ。そも、天長とは、天地のごと、長くひさしく、きはまりなく遍りなく、世を照らしましまさんことを祝ひ奉るこゝろにて、かく名つけ奉りたるとぞ。古へ光仁天皇の御時に此御名ありて、其後絶えたりしを、明治の初に、御再興ありて之を定禮とせられ、臣民のことごとく、ことほぎまつる事となりけるとぞ、殊に此御日は、觀兵の式をさへ行はれ、天皇臨御ありて、其戎裝のいかに勇ましく整へるかを、みそなはせ給ふ例なりと。今や世界各國交通のたより開け、萬里の外國も隣するに異ならねば、あるは、其國々のうちには、ひそかに親密の念を懷くものなきにあらざれば、備へ怠にせざるやうとの不虞の警戒を忘れさせ給はざる、とふとき、聖慮のほどこそかしこしともかしこけれ、今や古今未曾有の、日露戰爭開かれしも、我軍は常に連戰連捷、向ふ處敵なきぞうべなり御稜威のほどめでたく、大御心をつかの間も忘れで報い奉つらでやはと、今日の聖節を祝ひまつらんと、賤のをだまきくりかへしてかくなん。あなかしこ。

埼玉　戸田折香

あなかしこ、霜月三日はあやにかしこきすめらぎの、生れさせ給ひしいともめでたき吉日になんあたれるとは、如何なる人も知るならん。ひんがしの空ほの〳〵と明け渡る頃より、[illegible]たく濱邊に至るまで、千代も變らぬ日の丸の、御國の旗をひるがへし、文武の百官はきらびやかなる裝して、或は車をはしらせつゝ行き通ひ學びの園に集ふ小供は、皆美しき衣よそひて昇校し、遠く御影を伏し拜みては、聖上の萬々歲を祝ひ奉り、萬民は肩を安めて此の御代を祝ひまつる。上帝の世にたぐひなくましますは、かきつられんも畏しき業にて、御代しろしめし給へしより、高く尊き稜威は外つ國迄行き渡り、海内はまつろはぬ者共なく、日に月に榮え行くのみ。わきて海陸の兵備に至りては、さいつ頃には、日清戰爭、近きは北清の役に於て、現しゝ手並を思ひても、其の進歩の樣推しはからる。げに行ゝ末望ましき御國の形勢ならずや。今や皇軍は露國と戰端を開きつあるなり、されど皇軍の向ふ所敵なく數十回の戰に於て連戰連勝、此等偏に大君の御聖德のよる所ぞかし。あわれ是の大御代に生れ來て、恩の露に浴ふ我々同胞等、とよさか昇る御光のさし出給へし今日の日を、などか祝ひまつらでやは、我は只管ら國運の隆盛を願ふと共に、大君の八千代迄も、榮えさせ給はんことをこそ、いのるなれ。

大阪　山本伊勢子

今日はかけまくも綾に畏こき皇尊の光り出させ給ひぬるこよなき佳き日にしあれば、高きも低きもおしなべて、悅び祝ふ目出度さに賤のをみなもかしこみて、君が御齡の千代に八千代に長からんことをぞことほぎ奉る。誠や畏こき大御心は、常に民家の安かれと、百の司を設して、あしたの風の荒びにも、民や如何にと御いつくしみを垂れ給ふ。世々の皇恩は山又山の里迄も遍ねく御光りにうるをひて仰ぎ祝さぬも無きぞ嬉しき。實に叙聖允文允武の大君は、王政維新の大業を始められ、征清膺懲の義軍をも起されて、外國にはたぐひなき香ばしの榮を萬國の大空に閃めかし給ひつるに、今又勇ましくも義軍を勵まされて、唐原に醜草の生ひはびこるを征せんとて荒鷲の名も高き露の國と戰ひつゝ、あしたに夕に勝どき上げて雲井の外までも轟き渡りぬる萬歲の聲上ぐる喜はしさ、是我皇の稜威のいや高き御德ならでやはと、民は賀ひ祝しぬれ。今日天長節の佳き日を賀ひて、君が御代の百千歲の後までも、千代田の城の花も深う、いよゝ稜威の輝きて、荒野の原の露も散りかざす朝日の御惠を千代萬代に祈らまし。

京都　千代子

十一月三日は、あやにかしこき大君の生れ給ひし、いとも目出度日にぞあたれる、帝の御世しろしめし給ひしより以來、民草もまつ

ろえて、凡ての業の日に月にいやすゝみ、わきて、現に正義の戦たる露軍を、大に破りて連勝し、以て萬國に御光をかゞやかしつゝある、今日、海陸の兵備の盛なる、よろこばしき限りにこそ。學の道も榮えゆけば、内に殘れる妾等は、責任の重きを知りて、只管につとめはげまでやはあるべき。噫此大御世に生れ出で、みめぐみの露に洩れざるうれしさよ。[illegible]さかのぼるみ光のさし出たまひしけふを、つゝしみて御國の運の進まんことをねがふと共に、大君の萬代までもいやが上に榮えさせ給はんことを、いのり祝ひ奉るになん。

大阪　隨見峰子

さえ渡る日も、まして今朝はくまなくてり渡り、四方の山の端さへもめぐみの露にうるほひて、今日のよき日を祝へるが如し。そも今日のよき日とは、いともかしこき我大君のあれまし給ひし目出度日になんある。されば御國人高き賤しきけじめなく、上は貴き大宮人を始めとし、下ははにふの小家に住める賤が童まで、今日の佳節を祝ふこそ目出度けれ。家々ののき毎には日の丸のはたをそよ吹く風にひるがへし、學びの庭に集ふ數子は、小さき口より聲張り上げて、君が代は千代に八千代にさゞれ石のいはほとなりてと歌ふもいとゞ勇ましく、垣根の菊は操高く咲きほこり、千島のきはみ薩摩のはてまでもなびかぬ者とてはなく、いづこもかわらずにきはひ、誠に宮中にてはおごそかなる式を上げさせ給ふとか、いでや我々も此大御代のときはかきはにいや榮えまさんことをほぎまつるになん。

常陸　川村くめ子

今日は十一月三日にて、長くも、今上天皇陛下の、御誕生日にぞある、わが大君の、みいづにや靡きけむ、大空は、ほがらかに晴れ渡りて、昨日の雨の名殘だになし。豐坂昇る朝日子も、悦ばしげなる光を放ちて、この吉日を賀するものゝ如し。御國の御旗は、門毎に飜り、悦びの聲は、里毎にみちたり。

あはれ、
大君の、盛なる御代に遇ひて、やすらかに、この吉日を祝ふを得るは、こよなき幸にこそあらめ。麻のごと亂れにし世に、生れなば、至る處白波など立ちさわぎ、いかでかゝることあるを得べき。
あはれ、今や
大君のみいづは、海をこえ、遠き國々にまで輝きぬ、されば、朝鮮の黒雲もきえ、滿洲の嵐の強き野に、大和櫻はさきそめぬ。
あな嬉なる哉、
大君のみいづ

よし子

戸毎に日のみ旗そよめき、小女子の海老茶はかまに出たち、唱歌うたふ、その聲もなんとなく天長節のよき日とゝはれ、我の心もうきたちて、庭の彼方に飛び行けば、天津御空も晴れ渡りて、勝利の色を輝かし、きぞみ軍人も此のよき日を祝ふらんなど、我の小さき胸裏もそゞろ面白く、共に祝ふ御國の天長節、村も、町も、靜かににぎあふ今日のよき日、

秋季運動會

福岡　中島武子

秋高うして天ほがらかなるの日、一日某の學校の運動會を見る、校長の君の案内にて、定めの席につけば、紅白の幔幕、打渡したる場の東西には、源平の兩軍控へ居たり。やがて運動は始められぬ。實に小學の運動會程、勇敢、無邪氣なるはなきに、今年は又一段の花を咲せてぞ見えにける。さても川中島の戰は、遼陽、旅順の攻撃となり、常に競技中の見物と稱せらるゝ障碍物の如きも鐵條網、堅壕等、今めかしう設けられ。又かの騎馬落、土器割の如きも、今年は只一片の遊戯共思はれぬ樣に、各軍の指揮官數

得て、進退いやしくもせぬ様なり。數多目さましきが中にも、活潑元氣の一生か、先登して遼陽城頭に國旗を揭げたる、旅順敗艦の轟沈し盡されたる、砲壘の燒擊にせられたる、げに〳〵勇敢心地よさかぎりなし。あはれ十年の怨もこゝに晴れぬる心地ぞせられぬ。其他斥候の偵察、工兵の築壘、赤十字隊の救護など、凡て實戰にならひて、一擧一動、教師の指揮命令を守り、中途に挫折するものなきは、我忠勇無比の軍隊にも比すべく、あつぱれ將來の軍人、第二の國民として、戰捷國の名に耻ぢずとやいふべし。定めの時刻にたがはず、勇しきが中に終りを告げぬ。

東京　石川薰

折柄鈴の音の聞ゆるは、旅順陷落か、はた奉天攻擊の開始を告ぐるにかと、氣も心も勇みながら、家路には急がれぬ。

頃は十月、山は瘠せ木は細りぬれど、空いと淸く、小春の如き心地せられつ。朝止事なき所用のため、列に遅れて一人近き道を取り、家居より直ちに會場に行きぬ。來賓見物の人も早や集ひつ、會場の右手よりは、絶えず嚠喨たる樂隊の音聞ゆ、こは六年級の音樂隊なり、一二年を次々に餘興初まれり。提灯競爭、頭盃競爭滑稽幌武者等樣々の面白き事あり、分けて可笑かりしは、初級の人座蒲團大のお猿を向ひ方の岡に列べ、號令の下に馳け出し、紐もて脊負ふなるが、我こそとあせる程に、頭と足逆さに負ふあれば或は橫に負へるもあり。はた元の場所へ歸る道にて落すなと愛らしく、柏手と共に笑ひさゞめき四方に起りぬ。我等は草履蹴それ〴〵赤白二組に分れ、球取競爭をなしぬ。音樂は進軍の譜勇しく、皆亂れ心地となりて探合ひしが、不幸にも我等赤の敗となり、口惜さ云はん方なく、人小なる故など敗をしみ言ひぬ。次は兒島高德の「天莫踐」の競書あり。抽籤の時、書生のカステラとて丸燒大ざる一杯ホガラ〳〵煙立ち登るを兩手に抱へ、會場を三週せし時拍手哄笑され、手は拔もせんと恥しさ苦しさに、顏は辨慶のそれのごとなりぬ。思へばいかに其折の樂しかりし事よ。

東京　松川ちよ子

さやけき秋風に球燈ゆらめき、旭日を浴びて勇ましく飾旗の靡れる樂しき校庭に、ひたすらまちわびし運動會は催されぬ、心をこめて念ぜし其かひありてか、小春日和の空麗かなるに、いづれも欣嬉として打集ふ。やがて號砲一發、師の君たちの命令の下に開かれ例によりて我劣らじとの意氣いとゞ盛なりき。勝ちて勇める者あれば、遅れて口惜しがる者あり。其樣とりどりになかしく、空にのぼるまりの響、走せちがふ足の音など、紅白の幕のほとりに幾多の勝をきそへる樣、あゝ何ぞ極みなき愉快ならずや。さる程に我等のなすべき算術競爭とはなりぬ。先つ程までは、しかせんかくせんと思ひたりしも、さて今其場合となりては、さすがに胸のみ打騷がるゝぞわりなきや。俄然響く合圖の音、かたみにまけじと走り出ず。氣あせる程心亂れてたやすくは出來ず、答を得しはいと稀なりき、思ひもよらず我の勝ちにもれざりしは、いとゞ嬉しさの限りになむ

技は愈々進みて興味湧くが如く、滑稽なるあり、勇壯なるあり、面白さ言はん言の葉もなく、只秋の日の暮れやすきを惜しみぬ。さても此日の運動會よ。いかに深き慰籍を我等に與へけん。あゝげに樂しくも樂しかりき。

大阪　鹽見峯子

待ちに待にし暑中休暇もいつか夢の間に過ぎさりて、虫の音もはたとやみ、朝々吐く息も白く見え、立田姬の手業も、いかならんと、なづかしく思ふ折柄、我校には秋季運動會をなん開かれぬ。時は十月廿五日、午前九時より始まるてふ事なりしが、敎子は嬉しさの餘り、八時頃より校内へ集りぬ。始めを知らする鈴の音に運動場に集まる生徒は凡そ二三百人なりき。皆々袴を裝ひ凜々しく、師の君の御聲の許に、一二年は友千鳥をなしぬ。終るとわれわれの番にて、傷病兵を「タンカ」にのせて赤十字病院迄走る競爭

なりき。我こそ第一にと思ひ居りしが、其場に成ては何んと無く恐しき樣なる心地せられぬ。一二三の聲と共に、かけだしけるに思ひあやまたで、一番に行きつき、うれしかりき。次は四年の舞踏にて、次は一同の征露軍歌、其他樣々有りけるが、一つとして面白からざるはなかりき。皆々君が代を奏し、一日千秋の思ひに待ち居し運動會も目出度終りをつげぬ。空はくまなく晴れ渡り、垣根の菊は操高く咲きほなり居ぬ。此日の事はいれたる後の夢路にさへ繰り返されぬ。うれしさのあまり、あらましをこゝにしるしぬ。

愛媛　なむせい

朗らかなる秋日和の今日しも、某校にはこゝに盛大なる秋季運動會を催されたり。廣き會場の周圍には、國旗の風に靡へれるも美しく、觀客の人々おまた居並びたるそが中にて、未だ嘗の如き少女等、頭のリボンひらめかしつゝ、洋々たる音樂につれて我劣らじと競へる樣の愛らしさよ。かくてとりどりの運動ありし中にも毬、球、花ならべ、綱越し、提灯競走など、ことにおもしろくはたなかしうこそ、見はやされしか。あはれ、あるにつけても体育盛になりし今の世にかゝる運動をはげまさるゝは、ひとへに師の君だちのみ心つくしなりと思へば、おろかなる身さへも、喜ばしう感ぜられてなむ、げにも面白きこの運動會よ。

兵庫　飯島淳子

空青くすみ渡りて、紅葉散りしく秋の日に、樂しくも亦面白の運動會は催されぬ。そも會場といふは、見渡す限り芝生にて、南西にはべらの木多き中に、松楓など程よく植ゑられ、北は營外堀の芝生堤なり。九時開會との事なりしが、老人子供を連る身の兎角遲れ勝にて、妾等の着きしは十時頃なりき。近頃稀なる好天氣、且つは時おくれし事とて、群集せる人々のため見えざりしが、暫して女生徒の後に行く、常にはあまり出でざる老人のもの珍らしく、幼兒の喜ぶさまなどいとをかし。運動の數々ある中にて、今に覺ゆるは、まづ男女の徒歩競爭、鹽干狩、擲足、遠廓約、マレイ送り、球入れ、日月競爭、布縫、單語綴、風船つき、球運び、猫に紙袋、アレイ拾ひ、體操、責任競爭、職員競爭などありし中に、今一つをかしかりしは、尋常小學校の生徒一同大江山の唱歌を唱ひながら、先登の先生の持たれたる長刀にて、鬼ならぬ赤髯に大將の首をさして、勇ましく引退りたる、時に取りていと趣ありけり。其他輕便煙火面白く、又賣店も相應に賑ひて四時閉會を告げ、一同引上げしは四時半なりき。競爭せる人々は、互に吾こそ勝を得んものと、懸命の事ならんが見る人々も手にあせしてこそおもしろけれ。

京都　F代子

秋も早最中の頃となりぬれば、今度の運動會は鞍馬登山とぞ定められける。其夜は嬉さに得眠らず、幾度か起いでゝ月さやけく限なきに、星輝て晴天疑なき空を打仰ぎも幾度なりしか。朝とく校門を跡にし、西北に山路を辿りぬ。山谷深うして人烟稀に、三里餘にして鞍馬寺に着き、堂より見下せば、一陣の風さつと吹て、足の勞も消失せ、快なる事譬へ難し。義經辨慶の野太刀甲胄等、古き昔を忍ばせつ、正午には皆打集ひ妾等共に、辨當を交換せしぞ一入樂かりける。再び立て奥院に至る途に、義經公の背較石あり計り見しに思ひきや、僅に三尺ならむとは、劍術場も殘りたり、時に一時半、名殘惜くも歸路につき、十七町にして、流清き山里に出づ、岩石に走かゝる水の音錚々と、秋風漸く深く、鳴虫の音も聊々たり。岩角に腰打掛け清水を掬する折しも、胡蝶の一羽淋けに舞こそ哀れなれ。妾は「吹く風も悲しきけふを蝶一羽化なき里に何思ふらん」と、歎詠し、同情の念に堪えざりき。あはれ彼蝶の行衛や何處、知得ずして別れしこそほいなけれ、暫しいこふも眞清水の音に心を消うせられ、終に歸校して床に入し時、夢の如き今日のこし方を、忍びけるぞこよなく樂しかりける。

肥後　佐々有郁子

今日は秋季運動會なりければ、郡中の各尋常小學校の男女の生徒は、菊池川の水源なる、廣河原といふ所に、午前六時より、各校旗をひろがへし、或は熊本縣廳より授與されし一等紫二等赤の旗を朝風にふきなびけて、生徒の數は一千餘人、小學校の數は拾餘校、一同にくりいだしぬ。路すがらの山に入りては、茸もとり栗もひろひて、水源小學校の運動場に立よりて勢を揃ておし出しぬ水源ちかくなるまゝに、栗はますますおほく、茸もまたお𛂞かり男教員の某は歌ふて曰く、

足引の山わけころも、とりよそひきて栗ひろひ。

紅葉かざしておもしろく、ひろかはらにぞつきにける。

男生徒は、河原の面の所々水わきいづれる處にてアブラメといふ魚を釣らんと綸を垂るゝ者多く一人にて十尾あまりも釣たる者あり。女生徒は此水源には菊葉苔といふ有名の苔あれば、とりぐ拾ひとりて、家づとになしてよろこびいさみて家路をたどりつきぬ。姿も一首

菊葉苔香をなづかしみとりぐにわが父母にそなへまつらん

松山　田村多美子

ボート競漕やよけむ、ベースボールの競技やよけむと、をのこはをゝしきわざをえらへるも、時局によればなるべし。秋季運動會にも、男はさるべけれと、女は猶やさしき方をとおもはるゝは、常の事ながら、こもことしは、をゝしくをかしきさまをとれがへるにやあらむ。はかなき玉とりのわざ、はかゆかぬはしりくらべも、常に異なりていさみにいさみたちたるは、皆世のさまにつるればなるべし。いくさはこのましきわざにはあられど、人の心をふるひおこすものにて、人にいはゞ興奮劑とかいへる、藥のそれなるべしと、おもふもをこなりや。

短文

紅葉狩

檜垣常子

秋は何となく物さびしげなれど、春の花やかなる櫻花にもおとらざるはもみぢの色なりけり。この頃のいとうらゝかなる日の見すぐしがたく、又けふはいとまあればとて、學びの友ふたりみたりいざなひてほとりなる山奥深く分け入りぬ。道の邊の苔むせる岩角に、霜になやめる山菊のみだれかかれるも哀れなり。やがて清き流れに紅葉の一つ二つ流れくるをみとめつゝ、この奥の思ひやられていとうれし。いよいよふみ登れば、楓は幾木とも知れず紅したゝる錦かと疑はるるばかりなる所あり。昔林間に酒を温めし例もあれば、そのもとにまどゐして、瓢を出し、落ち散りたる紅葉をかきあつめ、酒あたゝめなどす。人々の顔の紅に染まるまゝに、歌をよみ、あるはからうたをくちずさみなどするほどに、酒もつきぬれば、いざや家路にとて出立つ。今日のこの山ふみのしるしにもとて一枝を手折る人もあり。夕日傾き、秋風身にしみ

て、顔の色もさめたるころ家につきぬ。

初雪　　札幌　小山かく子

昨夕は馬鹿に寒いと思つたが其筈だ、うそを云へば雪が一尺もつ積たよ……と頓狂な聲で弟が叫んだので目がさめた。なる程、二三寸計り積つてゐる、お庭も、銀杏も松も、いたやも、皆看護婦のよふに白裝束をつけてすましてゐる。鳥が隣りの林檎の木で、羽ばたきをすると、雪がばッと飛んだ、雀のなき聲迄常よりは、ひくゝ細いやうにきこえた。

罪の身の飛べと隱せぬ雪の朝。

くだらぬ發句が、ひよッくり口をついて出た、指さきのびりッとする程寒かつた初雪の朝！

評曰、景あり、情あり、引き緊つて氣の利いた文だ。

こほろぎの音を聞きて　岩橋花子

家居繁き都にしあれば、庭の狹きもまゝならず、わづかに植ゆる秋の一もと、それさへ花の盛り過ぎて、夜每鳴きまさる白露に、花はうつろひ葉はかれて、昨日に變る今日の姿、み空の月に影もあらはに、いひしらぬあはれ思ほゆる折柄、まだ來しこともなきこほろぎの、今宵めづらしくも我庭に、秋の夜しらべそめたるぞ又なくいみじう、歌もがなと心浮き立ちてなん。

評曰、風情まのあたり見る心地す。

一日記　　北海道　小山春枝子

十月一日、土曜日、曇天。

午前十一時に學校を參觀した。高等科の生徒が體操の代りに軍艦遊戲をやるのを見た。我と共に文を學ぶ某男生が後列の司令長になつたが、二度まけたので、先生が前列の夫と交代させた所が、今度は二度共勝つた、部下の心が一致せないのが失敗の原因だと云ふ説明があつた、魯國の連戰連敗もこれと違ひはない。天氣が曇つたり照つたり猫の目の如く代つて氣持がよくない。午後二時仲よしの照ちやんが遊びに來た。お芋のお茶うけで茶を呑んだ。ぽちが食ひたがつて頼みもせぬチンチンをやつた。

四時から照ちやんと成田山のお祭りを見に行つた

角力とノゾキを見た。歸る頃にはそこら中の軒端に燈火がちら／＼輝いてゐた。

評曰、なか／＼面白い。

秋の夕

下野　井上滋子

實に心なき身にも物悲しきは秋の夕なれや、入相告ぐる鍾の音彼方の森、此方の林、やがては人里にひゞきて、人毎にいかなる思をや引くらん。愛晴さんとえん近く立出づれば、百草千くさ咲きみだれし庭の面に、露にむせぶ虫の音いと哀れなり。草の根方にはた織虫の聲高く、千草の花をあやなして、わすは織りてんあや錦、七草の露もて、うすくこく染めなしたるぞ見まほしき。小萩の露のほろほろとこほれ、尾花にすさぶ秋風の葉末の露を吹き拂ふも、いづれ哀れならぬはなきを、まして他國の空にさすらふ身には、見る物きく物うら悲しく、古郷の事のみ偲ばるゝぞ是非なき。

評曰、華麗。

老たる我友＝古き斧

東京　石川薫子

朝月夜影空に殘りて見し夢の名殘も未だ現なる時、山幾重雲幾重右往左廻九折の嶮岨を厭はず、或は茸々たる荊棘をたち、古木喬木をなぎ倒し、或は歌ひ或時は叫び、諸鳥梢に集まり、山氣身に浸み、仰ぎ見れば鋭き星の光天上に輝く頃、我は汝を負ひて麓の小屋に歸り、爐を賑すべく小枝を切り、しかして食し然而眠る茲に多年、噫忠實なりし友よ、汝と相見しはげに三十年の昔、里の祭りの歸さ、とある小さき古物店にてなりき。顧ひば其頃は我も若く汝も亦若かりき。然而われの年老い衰ふると共に、汝も亦齡を重ねて、今や柄はすれ齒は減りぬ。アヽ、忠實なりし友、老たりな我友。

評曰、斧若し心あらば樵夫の情に泣かん。

ある夜

埼玉　田中花子

また一トしきり窓うつ風の音、
渡殿の方から御諸の御聲がだん／＼と近くなるのは、たしか西子樣の御歸り、ではもう十一時かしら。
何でも私が一番睡後れてしまふのは、ねかへれば、窓に、黒く山茶花の影がゆら／＼。
今頃祖母樣はあの淋しい／＼御隠宅にたッた御獨で、屹度、まだ御ねむりなさらないで御庭の虫の音に、屹度私の事なんか考へていらッしやるだらう。
あの御倫しい松村の兄樣は、何遊ばしていらッしやるだらう。

あゝそうだ、御かた身の白百合の鉢を御机の上に、又例の讀書にふけッて御出遊ばすのではないかしら、どうして兄様はあの様に…………

あれ程御醫者にとめられて御出での御身で有ながら………私どうしても好きだ、兄様ほんとの妹の様にして可愛がつて下さるのだもの………。早い事もう三年前になる、丁度今晩の様な月夜、忘れもしない兄様や、姉様と、手を組みながら月の濱邊をあるいたッけ、ねむるが如き江島はぼんやりと右手の方に見えて、浪は冷たく足元迄遠慮もなくよせてはかへり、かへりてはよせてゐた。折りもをり誰れ人のすさびか、菲木をもれてかすけき小督の曲。思ひ出した様に姉様は「花子さん今日はよく來て下すッたのねー」と云ひもあへず、ぴッたり寄りそふて氷の様な御手で自分の手を確乎と握りしめたが、堪へでや熱き涙はほろ〳〵と其上に落ちた姉様は其夜から然の御發熱、只もうう（は）言斗り、おり〳〵よくわかッたのは百合はらと云ふ御言葉ばかり、あゝ姉様はなぜあんなはかない御命を持つて御生れなすッたのだらう。白かッた窓はいつか黒くなッて、面白かッた山茶花のゆらぎも見えない、あゝ月も雲にかくれたのか。

涙

京都　竹下季子

涙！涙！嗚呼何たる縫しのものぞ、こゝろみに思へ、人生五十歳年中の喜憂、悲嘆、煩悶、怨恨、ありとあらゆる心の、刺激にあひて、感極り情至る時、吾等が小き兩眼より聲なくして湧き出づるものは、げに熱き涙の露に非ずや。こは之神の賜ひし心の泉！我は實に涙無き人を憐みて、涙多き人を愛す。道の爲めには、丈夫も泣けや、情の爲めには手弱女も叫べ。萬解の血涙をも惜まず注げ、唯忘れても不潔なる戀の花の上には一滴の涙をも落す勿れ然らば吾等が涙は、永久高潔にして、希望と光榮との玉水たるを得む。

仲秋月を觀ざる記

肥後　秋吉輝尾子

弓はり月の影ほのかなるころより、かゞなへ待わびし、望の夜とておもふ友どち打つれ、たそがれより菊地神社の境内なる、月見殿になんのぼりぬ。月きよき嵯峨野の奥の松風に、絶え〳〵かよふをちの琴の音、と曾我刀自のものし給ひし事どもをおもひ、やしろの松の夕風に音するゝをきゝ、風流人のものせられたる事ども語りあひ。月光の出るをのみまちぬ。をりしも天水の如く晴れわたりたる空は、いつよりかきくもりしか、黒雲のみとなりて、眼下に見くだす隈府町の家々も見えわかずなりぬ。あなうたてや。月輪鏡より〳〵まとかにみえわたるべかりし今宵、うたて空しうすごさんはのこりをしくもわびしき極にこそ。姿のみかは、世の文人墨客はいかばかりは今宵の月を樂みに待ちつらんものをあな心なき黒雲かなうしともうしや。千種の花の色もみず。すだく虫の音もの悲しく簷にかよひし松風もあはれをますのみにていとど心のそこさびしうなりぬ。

出陣中の父君に贈る文

肥後　岡山登壽子

御なづかしき父上様の遼陽よりの御消息、とる手おそしと母上様ともろともにくりかへし拜し申上候ところ、いつもかはらぬ御勇壯の御文御筆のおといさましきにさだめし御無事にあらせられ給ふ御事とこよなう御嬉しく思ひ侍りぬ。御申越の品々早速御郵送申上候。御出征遊ばされ候てよりは母上様ことの外御すこやかに弟もおとなしく小學校を勉強いたし居候間御安心あそばし御軍務

御はげみあらせ給ふやうに、かげながらねんじ上居申候、戰場にてはさぞかし萬事御不自由の御事と、それのみ御うはさ致し居申候。常々御申聞せられし通り、けつして他人の笑を受くることとはいたさず軍人の家族たる覺悟いたし居申候。猶ほ御首途の前夜仰せられしことは、かたく守り居申候、かならず萬々御心にかけ給はぬやうに御願申上候。申上度事は海山かけて候へども、先は筆とめ申上候めでたくかしこ。

谷川

下野　井上佾子

谷しき流の谷川よ、汝は若き子が胸に燃る希望の焔ならばびては幾度か、清き流に心を洗はしめしなるべし。汝は今も我心に滿る望と燃立つ焔とをゆくりなく流しては、彼方此方の岩根に碎けつ碎かれつ、石にさへられて、沈みては浮かび、結びてはとけとけては結ぶ、うたかたの流れ行く末、障こらせど遂にわかず。嗚呼希望の焔も燃ては消え、消えては燃立ちて、終のいつなるかわかず。嗚呼。我も世の浪風にゆられゆられて、やがては取つくしまのあるべきか知らず。知るは唯、神のみなるか。我は知らず。

わかれ

京都　千代子

「あゝ本當にいつまで、かうして泣て計り居つても仕方がありまこんわ、チ、月子さん、御覽なさい、まるいお月さんも出ました遠くの寺よりは暮つぐる鐘もひゞきますよ。私は此月をあなたと思て歸ります。。。。。。誠に逢ふは別のはじめとか申す事もありますからもう少し〳〵とてこんな所まで、送つて頂いてすみません、早うお歸りなさらんと、御母さんも御心配なされるでしうよ」と何處までも送りたいといはるゝ、妾が友月子さんにいふたのは、賀茂の野であつた、月子さんは「私これほどあなたを愛して居りますのに、なぜ早う〳〵歸れと計りおつしやるの、本當に悲しいわ」と泣きだされるから、私は又も「だつて此樣に暮れ深うなりますもの私でもあなたを姉さんとまで、思つてゐるのをよう御存じでしよう」噫、いつも學校では人にほめそやされ給ふ、賢いあなたであるのに、よう考へて見て頂戴な」と妾も共に大聲に泣かうとした時、目がさめた、まあ今のは夢……

月見に友を招く

京都　千代子

去年は仲秋月なくして、恨みしげき事に思ひすごし候ひしが、今宵こそは、三日月の時より待ちに待ちし、樂しき望の夜に候へば、いかで〳〵むなしうはすぐし申さるべき、常々敷島の道を好ませ給へる君よ、妾と只二人、蓬が家に、山の端よりさし出づるを待ち、琴音よりも妙なる虫の聲々を耳にし、共に名句を考へ申さんは、こよなき興ある事に候はんと存じ候まゝ、とく〳〵御出て待ち上參らせ候。あなかしこ。

茸狩

前橋　竹のふし

ゆくりなく茸狩の約成りければ、支度もそこ〳〵姉妹秋を列れて出で立ちぬ。道すがら野路の優しき草花に足留めしは幾度ぞ、崩れし垣の隙をもる圃の聲に心の塵を打拂ひ、小き祠に額づきて天氣を祈る可笑さよ。細き岬道辿り行き、松杉數多立並ぶ林の中を徘徊ひつ、木の根を探り、笹を分けて、えし初茸を家苞に、歸道にぞ急ぎける。後より來る里の子の問はず語に、袖濡し、前の初茸與ふれば、いと嬉げに微笑みて、後振り向きつゝ歸行く童の姿哀れなり。あはれ嬉しき此一日、目ざす茸は無けれ共、幼き子より聞き得たる孝の德こそ尊けれ。此賜物ぞ目出度けれ。

茸狩

前橋　廣子

空も、いとなごやかに、晴れぬれば、ふと、心の進むまゝに、妹共々秋の野山あるきも一入ならめと、出でたつ道の邊に咲ける八千草、尾花が風になびき搖ぐぞいと哀れなる。

足の進むまに〳〵、細き小路を、後になり、前になり行く折しも一人の翁に、こゝは何地ぞときけば、木暮の里となん云ふて茸狩する人も多かりとか、もはや、足の疲はどこへやら、松の木立あちこちと、我とてなどか劣らじな、雑木をわけ草をわけてやう〳〵におやと云ひつゝ手にとり見れば、之れなんまがふ方なき、初茸一つ二つ三つ四つ。

しばし足をばやすめんと、少さき御堂の傍に座をしむれば、妹も嬉しげに我が傍に来りつ「姉さヤンコラ」と我に見する初茸二つ其の愛らしき面ざし何にたとへん。勉めて後にいざ遊べ、遊びて後はやよ、励みなん、諸共に、又あすよりは文の學び、今日の一日の樂しさよ、」

草庵の記

關谷猪子

濁世煩惱の色慾界に處し、よく五塵の火宅を脱るものすくなし。祇園精舍の鐘の音、諸行無常と響き、沙羅雙樹の花の色は、盛者必衰の理をあらはせども、凡夫は出離の直道を知らで、いよよ三界の邪道に迷ふ。故に生きて瑜伽成就の樂を得ず、死して骨を打つ靈鬼泣く〳〵前生の業を恨むなりこゝに何がしの主眼を寂光の彼岸に馳せて有想無想を語らんと、やがてかやが軒松のとぼそに心の月を澄ましめぬ。庵は外山の中腹にあり、木立ものふりわたりにはおのつからなる竹むらを離に結ひ渡し、せき入るゝ水の流清く、石のたゝずまひ殊更ならずして、幽巖靈溪のけはひたゝならざれば、煩想おのづからおとたえて、心ゆくさまなりさて春は花の香を居ながら袂にしめ、夏は松籟を寢ながらに聞き、秋は月に嘯き、冬は雪にうたふを得べく、瀟湘の八つのながめ、南湖の十の境も目の前に占めたれば、世上を達觀して心源を開き眞如の月を探るをうべし。そも松風よな〳〵玉琴の竹に通ひて、木闌の舟幾隊の紅裙を載するの人足をこゝに置かば身は、天地と均しく幽玄のドラマに入り、風雅の極まる處、理想のいたるところ造化の大鈞に接せむ。

短歌

寢顔　　北海道　小山春枝子

人形に手枕させて添ひ寢する
　小さき束髪笑顔美し

評　愛の神のしめたまふらむあにれなでしこよ。一は造花一は生花。

折にふれて　　愛媛　高橋茂子

鐘のひゞき雲にきえゆく夕ま暮
にはのくち葉に雨の音きく

評　遠雷のごときひゞきをよそにきゝて。糸のごとき雨に耳な傾く……趣味。

折にふれて　三河　榊原てる子

日ごと日ごと我かはらからの血しほわき
ちしほ流るゝもろこしかはら

評　血ある歌とこそ。

毛布寄附　下野　井上尚子

ますらをかつゝをまくらのかりの夢
結ふませめてみにまとひませ

評　村役場門前、時ならぬ花紅葉。うつくしき民の心を、そのまゝ

折にふれて　三河　榊原きく子

つゆむすふ草をまくらのますらをか
とけてねぬよの夢いかならむ

評　と、おもひやる人もまた、夢やすからず。

旅順港　滋縣　馬淵なみ子

とりてより放つ砲の音空にきえてみなと小暗く日は暮れにけり

野の月　下野　井上滋子

つゆふかく虫の音つゞく野へ三里こよひはつきのあるじ顔なる

狂ほしき今宵　山崎女苑

同　苑

このつきにこの磯にきて今宵またいはほかゝへて泣きぬ悶えぬ　築地　山崎女苑

月

峰いくつへたてゝみちは遠けれど君居ます方へつきのかたぶく

八月中の四日の戰鬪を聞て第二艦隊の某大尉の内君に其人君の安否を尋ぬる消息のついでに

東京　大塚里子

もやと共にうらみもはれて北の海あさ日かゝやく波のうへかな

秋雨　大和　栗山たか子

花一むらちり殘りたるはきか枝にきのふもけふもふる小雨かな

海邊雁　大和　栗山俊子

月さえてしつけき和歌の浦風にふかれてわたるかりのひとつら

秋の夕友の許に　札幌　小山かく子

君來ませ錦の紅葉見に來ませあきの女神の笛ふく夕

田舍夕景　福島　鈴虫

釣人か魚籠さけてかへり行くそひらを照す山の端のつき

紅葉　埼玉　戸田折香

盛りなりかならすこよと友の許に紅葉の一ひらこめてやりつる

田家月　津市　神田みよし子

きりはれて山田の庵もみゆるかなかけさやかなるつきの光に

暮秋　肥後　徳永燦子

今日のみの秋と思へはおのつから虫のなくねもあはれなりけり

殘秋菊　本所　三坂鐵子

つゆしもにうつらふ色もあはれなり秋のなごりの垣のしらぎく

弟の身まかりければ　肥後　秋吉輝尾子

たなそこの玉とめでにし綠子もあはれ四とせの夢にぞありける

風告秋　東京　大塚里子

あきの來ぬ葉末につけて軒ちかくそよくもさびしをきの上かせ

出征軍人　肥後　志方圓子

おほきみの御楯となりて露のすむあら野にさけふ大和ますらを

近衛騎兵少尉勳六等功五級從五位長岡譲全朝臣の遼陽陥落の時名誉の戦死により明治三十七年九月六日特旨を以て正五位を贈らせ賜へるよし承りて　肥後　佐々有隣子

遼陽のおほそらたかくあけし名は日本武夫のかゝみなりけり

四屆保子の君に　熊本　田代艶子

なつかしききみか言葉の花みればいよゝむかしのしのはるゝ哉

京都　竹下季子

はぎちりて秋のたまかは水あかしゑふでを染めてきみに贈らむ

悲しみ　東京　三好珍子

朝なゆふな涙のあめのそゝけともきえぬはむれの思ひなりけり

天長節　和泉　福原すみれ子

かしこきや御庭の鶴もうちむれて君の八千代をよひかはすらし

中秋無月　大阪　岩橋花子

人みなのあふきみるらむもちのよの月のみやこは雲いつくにか

勉強　横濱　小泉はる子

ともし火のかけにむかひて文見れば秋の夜なかも思へさりけり

秋夕　京都　千代子

山寺のかれのひゝきも消えゆきてさひしさまさる秋のゆふくれ

虫　山梨　槿武子

月はすみ千草はにほふその内になにをかこちてむしのなくらむ

虫　東京　たみ子

すかの枝の長き夜すからきりきりすつきにすみ行こゑそ聞ゆる

山道に名誉なる戦死者の墓に詣で　磐城　三森須磨子

おくつきになひくみ旗の勇ましく荒野にはてし人をしそおもふ

虫の音　野　露

わか庭の葉かけのつゆにやとしめてなく鈴虫のこゑあはれなり

山里　愛媛　和氣勝子

田はみのりいくさはかちて君か代はゆふへ賑ふあきの山里

今様

旅順の末路　周防　堀たね子

東の空に日昇りて　望みの星も影消えぬ
道ひき給へ我が神よ　行くへも知ぬ露の身を

亡友　下野　井上滋子

共に樂しく去年のけふ　あそびし庭に色香よく
咲出し花はかわらねど　親しき友はよをさりて
ひとりつむらん天國の　かみの御にはにさく花を
思ひは友よ友こふる　我をあわれとおぼさずや

母なき少女　札幌　小山かく子

木の葉わびつゝ只一人　奥津城近く立つ少女
手向けの花のゆるゝ時　母うなづくと頬笑みぬ

惡しき子　築地　山崎女苑

優しく眉目を化粧して　醜の心をつゝみつゝ
わらこの小鬼魔の劍　かくしてゆくよ人の世を

明石潟　八幡　鈴木菫子

千歳かわらぬ老松の　梢の月も明石潟

苦屋にかたる親と子が　たのしき笑顔照しつゝ

友の死をいたみて　前橋　廣　子

親しと思ふ友垣は　無情の風にさそはれて
遂にはかなくなり給ふ　奥都城とへど答なく
たゞきこゆるは風の音　ありし昔を忍ぶれど
たゞ出るものは涙なり　あゝいたましやなさけなや

あゝ今宵　築地　山崎女苑

金色輝く横雲の　月を迎りて夜は冷ゆる
月ざゝぬ窓に身をなげて　泣けども君はかへらじな

白薔薇　京都　竹下秀子

一りんさきし白しようび　詩歌の聖なるきみにとて
たをれば陰にとげひとつ　さても恐ろしあゝばらよ

別れし友に　札幌　小山かく子

別れは暫時嘆くまじ　とは云へ募ふわが心
君が輪姿眼に入りて　接吻したり今日も亦

中秋の月を見ざるををしみ　須磨子

八千草の數もつられて　待今宵の月
更くるも知らで眺めばやと　思ふ思ひのあやにくも
空おほえぬるくろ雲に　愛づる月はかくれけり

立秋　前橋　竹のふし

ひとつのわざもはてぬ間に　今年も中ばすぎにけり
桐のひと葉に秋たちて　今更おぼゆせに汗な

秋の農村　北海道　小山春枝子

馬丁の追分節冴えて　あ[illegible]道ゝ消えゆけば
稲苅る少女聲もよく　歌ひ出しけり戀の歌

菊　下野　井上滋子

軒にかゝぐるひのみ旗　朝日照そふにはがきに
君がよわひと千歳代　つきせぬ菊のかそ高き

萩　肥後　秋吉輝尾子

桔梗かるかや女郎花　色をきそひて咲出る
なかにゆかしき萩が花　かざしゝ露は玉とみる

山道　野露

家路をいそぐ山道の　あたり色どる七草を
手折る秋に吹き入りし　秋風寒くみにぞしむ

詠茶　肥後　千和波橘子

梓弓春さりくれば
武士の宇治の里なる
をとめ子がつむや木のめは
むかしよりいまもかはらで
もてはやす人ぞおほかる
そがなかにみやびをとめが
清き舎に器ならべて
たきものゝ煙くゆらし
釜の湯のにゆるをやがて
くみとりてたつる木のめの
味ひはいくはしきかも

かくはしき春の木のめの
かをりゆかしも

出征せる夫を想ふ

鶴島 鈴虫

秋風立ちて空はれて、
露散る庭の木の間より、
人影絶えて寂しくも、
静けき窓のあなたより、
あはれ吾夫いかにして、
見て在すらむ此の夕、
あはれ吾夫いかにして、
聞きゐますらむ此の夕、
思ひぞ出づるきさらぎの、
庭の梅が枝香しく、
谷間に春は訪づれて、
今や古巣を立ち出でゝ、
日露の平和は打破れ、
出征の途に立たれたり、
なれし故郷をふりすてゝ、
梅が香一しほ香ばしく、
笑をたゝへて吾夫は、
主なき宿となりぬとも、
やよ鶯よいざゝらば、
汝が清きその歌を、
心ありてか梅の花、

雁なき渡る此の夕、
ほのかに照らす月清し。
玉露かゞやく此の夕、
もれくる虫の聲あはれ。
いつこの空に此の月を、
いつこの空に吾夫は。
いつこの里に虫の音を、
何處の里に吾夫は。
まだ消えやらぬ軒の雪、
匂ひをはなつ其のあした。
冬にねむれるうぐひすも、
唱ひ出でける其の朝。
動員令のありしとき、
あゝなつかしき吾夫は。
出でまさんとてありし時、
なき出でにけり鶯は。
軒端の梅よいざゝらば、
汝が色香は清かれや。
主なき宿となりぬとも、
唱ひて歸りをまちねかし。
そよ吹く風だになきものを、

梢をはなれ片々と、
心くみしか鶯も、
梅の梢に羽をやすめ、
鶯かへり梅散りて、
今迄在せし佐保姫は、
あはれ共々たのしみし、
別れを告げし其後は、
いつしか夏もすぎ去りて、
邊りけしきの淋しさに、
月にあこがれ花によひ、
エデンの園に遊びしは、
君の爲めとは言ひ乍ら、
いかでか戀しからじやは、
あゝ吾夫よすこやかに、
めでたく歸りまされてよ、
戀ひつしたひつ只一人、
つまの心はいかならむ、
女心の戀しさに、
野かけに虫の音は絶えて、

途遮ぎりぬ吾夫の。
ふしおもしろく唱ひしを、
しばし止めぬ其の歌を。
春のけしきも更け行けば、
雲の上にとかへり行く。
いとしき梅と鶯に、
涙にくれて居たりけり。
早や吹き初むる秋の風、
忍び出さる吾夫を。
手を携へてもろ共に、
僅か一時の夢なりし。
國の爲めとは言ひ乍ら、
いかでかしたはしからじやは。
むらがる雲をきり拂ひ、
うつし姿にむせびなく。
待ち渡れるも聴あはれ、
今宵如何なる夢や見む。
くりかへしつゝ思ふ内、
月はゝやまにかくれけり。

天長節

磐城 木幡たり子

あゝ楽し今日のこの日、
東の空にうら／＼と、
門毎なびく日の旗は、
あゝ嬉し今日のこの日、
森を飛びこふ雀さへ、
囀り合ひつゝ大君の、
想へ人々今日の此の日、
この大御代に生れずは、

のぼる朝日に輝きて、
栄行御代を祝ふなり。

未明より千代／＼と、
栄行御代を歌ふなり。

豐さか昇る朝日子の、

最と麗はしきみ光な、
想ひ人々今日の此の日、
裏の露のかゝらずば、
大和島根に生ひ出し、
祝へ諸人今日の此の日、
七百年のそのあひだ、
浮雲はらひて御光の、
歌へ諸人今日の此の日、
■民草をそだてむと、
振延へ給ひし大君の、
稜威輝く今日の此の日、
玉の臺もしばの戶も、
我がおほ君の萬代に、

爭か仰ぎ得らるべき。
世の雨風を外にして、
民草争か榮ゆべき。
天つ日影を掩ひてし、
さして給ひし愛度日。
裏の露のいとしげく、
生れ給ひし吉日なれば。
天地もどよめく聲あげて、
窮りなきを歌はなん。

(記者曰、こは祝題のものなれども文章として見るべきものにあられば玆に掲ぐ)

秋の夜

京都　千代子

淺茅が原に病む虫と
花おとろへて風さむく
更けゆく月にうつむけば
虫の鳴く音も枯にけり

姉と妹

木村よれ子

頃は小春の朝ぼらけ、
庭の園生の白菊に、
折しもこゝにおとゝえの、
椽がはぞひのおくの間に、
姉なる君はいざよひの、
妹君は三つばかり、
明日のいそきに母君の、
色こそかはれとりどりに、
来た消え殘る秋ぎりは、
薄くかゝりて流るめり。
二人のひめは諸共に、
針の業をはとりたまふ。
上につもるや二春秋、
若やきてこそみえにけれ。
えらひ給ひし被布の袖、
深きなさけの染模樣。

姉なる君は妹に、
敎へ示せり正しくも、
敎のまゝに妹は、
針目正しく袖口に、
裏の袖には袖口を、
表の如く縫ひ上げて、
ほゝゑむ姉の口もとに、
よくも出來つれ此たもと、
衿肩右にせのびをは、
これより身頃にうつるなり。
裏の身頃に終りなば、
何所をぬふにも心して、
敎ゆる姉の心なば、
前の下りをぬひぬひて、
まちはむかふに身は手前、
後のまちももろ共に、
はりの運びのたゆたひに、
髪のもつれのゆらゆらと、
あやめのかざしもゆるびの、
かゝるむつびの兄弟を、
かくてまちなばつけ終り、
さし示してよ姉上と、
姉の面には滿足の、
いざこれよりは袖付よ、
心用ゐて折目をば、
裏の折目は身の方へ、
上より下を五分ひろく、
えにしも深きたらちねの、
よく引きのへておしたゝみ、

針のはこびの順序なば、
仕立るみちのはしくを。
先づ袖取りて袂より、
ぬいて糸どめなしにけり。
かくれば同し右左、
姉にみせけり其袂。
こもるなさけの現れて、
見事にぬひし四つの袖、
後身頃を手に取りて、
針目こまかに表より、
更に襟をば付くるなり。
先づ糸ごきが大せつよ、
よく汲みとれる妹の君、
早も取りけり前身頃。
表よりして順々に、
裏の方へと縫ひ給ふ。
ゆらきにけりなもゝわれの、
何れも分かぬはなあやめ。
れがけの色の美しさ、
もつ親心如何ならん。
あしき處のありもせば、
やさしくとひて打守る。
笑みをたゝへて妹よ、
ここのぬい目はいとゝなほ、
袖の方にと返すなり。
堅衿取りて前にもち、
小衿はあとにつけ給へ。
親子びつけもすみつれば、
綿こそ入れめ後より。

二人の姫は相ともに、
裏の身頃は其上に、
綿ふくやかに入れなして、
地色は花の満れずみ、
きての匂ひや又如何に。
裾打ちはらひおとゝえは、
袂袖口のくろみより、
姉なる君は口そへて、
綿ふくませてくけ方も、
そが終りなばたて衿と、
ほどよくとちて衿先も、
小衿のまるみはくし形よ、
やがて其をは前にもち、
付てぞ終へぬくけかたも。
西に五彩の雲のいろ、
さす夕陽の美しさ。
楽しくゑみぬ條のほに。

わた打ちのばし裏身よ、
折りかへしつゝ白雪の、
かへすや綾の破布の袖、
秋の千草のこぼれざき、
之にて綿も入りたれば、
互に笑を湛めたり。
くけ付け給ふ妹の君。
ふりのくろみはいと薄く、
小針にこそはし給へや。
さしづのまゝに妹は、
小針に縫ひつ上と下。
へらのまに〳〵縫ひ〳〵て、
身頃に添て二分ゆるく、
冬の入日のいとおかく、
ながれ〳〵て木がくれに、
二人の姫はもろともに、

○新刊概評

Sketches of Distinguished Women

本書は女子大學教授松浦政泰氏が歐米著名の傑婦才媛四十五名の傳記を撰定編纂せるものなり高等女學校卒業程度以上の女子には最も有益なる讀物なるべし（定價金四十五錢神田表神保町同文館發行）

▲第六明治才媛文集　例の東洋社に於ていはゆる明治の才媛達の文章を蒐集刊行したるものなり選評者は文學士饗井雨江氏なり（定價二十五錢神田區南乘物町東洋社發行）

▲長唄樂譜秋の色草　譯譜者高折周一氏の自序に曰く段友嚴本氏意を專ら日本音樂に傾けられ盛んに和洋音樂の比較研究と之が調和的樂律の作製私を主張せられて不肖余輩に吾等邦樂節調の研究と之が調査とを囑托せられ遂にこゝに樂友の求めにより此の長唄の上梓を公にすることゝなれりと音樂界の一發展として此書の刊行は斯道の人にとりて頗る有益と云ふべし（定價一圓神田區表神保町東京堂發行）

新刊書目

六合雜誌第二百八十六號　東京市芝區三田四國町日本ゆにてりあん弘道會
大日本婦人教育會雜誌第百六十八號　麴町區永田町一丁目同會
國學院雜誌第十卷第十號　麴町區飯田町國學院
婦人と子とも第四卷第十號　本郷區湯島町フレーベル會
教育第五十六號　本郷區元町二丁目茗溪會
女學世界第四卷第十三號　日本橋區本町博文館
をんな第四卷第十號　麴町區下二番町大日本女學會
慶應義塾學報第八十三號　芝區三田二丁目同發行所
家庭のしるべ第四號　日本橋區通一丁目白木屋
中央公論第十九年十一號　本郷區本郷四丁目反省社
工談雜誌第百七十三號　京橋區新榮町三丁目工談會
うらにしき第百四十三號　神田區駿河臺尙□社
時好辰の卷十號　日本橋區駿河町三井呉服店
愛國婦人每號　麴町區下二番町同會
婦女新聞每號　牛込區東五軒町同社
中學科講義錄每號　神田區北神保町大日本中學會
家庭の友第二卷第六號　本郷區西片町內外出版協會
日本婦人第五十九號　府下豊多摩郡澁谷村同會

○女王殿下の美徳

賀陽宮由紀子女王殿下は京都市立竹間尋常高等小學校に御在學あらせらるゝが大阪毎日の記者同校を訪ふて親しく殿下の御樣子を伺ひまつりし記事に曰く殿下は御齡本年僅に十歳、尋常第三學年の教室に四十餘名の衆生と席を同うして御勉學あらせらるるので記者が拜問した時には受持訓導荒谷俊子が熱心に毛筆畫の教授をしてゐた時で、殿下は前列の第三番目に御座を占めてあらせられた、今し机上に白紙を伸べ給ひて、荒谷訓導が黒板に馬上提灯を描き、其側に帝國萬歳の四文字を記して、其文字を提灯の中に記入するやう一同に訓へてゐるそれを一心に瞶めやがて傍の筆を御取り上げ運筆輕く一氣に書き上げ給ひし後「帝國萬歳」の四文字を眞ン中に御記入遊され御微笑を含んで荒谷訓導に御示し遊されたが御齡に比して如何に見事に出來上れる事よ、殊に「帝國萬歳」の四文字は平素好んで御認め遊す文字とて出來榮一入麗しく拜し奉るのである、殿下にはまだ御幼少の御身ながらも了得は衆民の上に立たせ給ふ御身とて日頃戰爭の話に多くの興味を有し給ひ嚢には御小遣を節して金十五圓を恤兵部に下賜在らせられたほどである開戰以來畏くも日々の御通學御徒歩にて餘程の雨天にあらざる限りは人力車などに召させられぬので校長は勿論訓導學務委員等直接間接に御教育申上ぐる人々は殿下が衆民の儀表に恥ぢぬ御心掛が衆生の模範となり大に面目を施した事を喜ぶ



と共に、殿下の御行爲が延いて全校の上に及び、殿下と御同席の生徒は勿論他級のものも自然之に感化されて風紀肅然として正く他地方よりも入校を申込むものが尠くない樣になつた云々

○愛國婦人會移轉式

同會は從來日本體育會内の一部に事務所を置き各般の會務を取扱ひ來りしが今回同會の全部を購入して此處に本部を移すこと〻なり九日午前十時より移轉式を擧行したり門前には國旗を交叉し屋内の各室には淡泊なる飾裝を施し式場は屋後の廣場に設けテントを張りて總裁宮妃殿下の御座所を整へ左側評議員席右側幹事席正面を來賓席として會員は其後方を圍繞し斯くして開會の時を待ちしに軈て午前十時に至るや總裁閑院宮妃殿下には久邇宮妃殿下と御同列にて式場に臺臨わらせられたれば一同最敬禮の後會長公爵夫人岩倉久子御前に進み出で左の祝辭を朗讀したり

我が愛國婦人會は事業の擴張と會運の發展とに應じ茲に本部移轉の擧式を見るに至れり抑も本會の創立は明治三十四年二月なりき其當時は實に定まれる家屋さへなかりしに然るに數年ならずして今や會員は日に月に增加して殆ど二十萬をかぞへ會基漸く牢くして遂に本部を購入し之れに移つるに至る畢竟是れ總裁殿下の御統率宜しきと職員始め會員諸君の熱心盡力とに因りてなり豈祝せざるなきを得んや其建築たる宏壯輪奐の美を見ずと雖も本會が全國支部の中樞機能たる活動をなすに足ること〻信ず職員諸君益々戮力勵精會務の擴張と充實とを努めば庶幾くは本會の盛期を遂し得られん聊か感想を述べて祝意を表す

繼で總裁宮妃殿下の御起立わり各員最敬禮の後に御聲麗しく左の御諭旨を下し給へり

總裁閑院宮妃殿下の御諭旨

我が愛國婦人會は本日を以て茲に本部移轉式擧行のことを告ぐ今や時局の進運は益々急なるに際し外は會員の增加を聞き内には此移轉の式を見る何の悅か之に如かん然れども本會事業の前途尙ほ遼遠なり職員たるもの本會の主旨を服膺し益々實實以て事に當り其隆盛を期せよ

爰に移轉の式に臨み智惠子の希望を述べて祝詞とす

會長岩倉久子再び進み出で〻恭しく左の答辭を朗讀す

本日我愛國婦人會本部移轉式を擧ぐるに際し畏くも我總裁宮妃殿下並に名譽會員各宮妃殿下の台臨を辱うし優渥なる令詞を下し給へり會員一同感激に堪へず久子等自今一層至誠を盡して恐き台旨に副ひ奉らんことを期す一同を代表し謹みて答辭を奉る

當日の來會者は毛利公爵母堂、山内禎子、大山捨松子、濱尾作子、鳩山春子、棚橋絢子等數百名にして

式後茶菓の饗應あり本會創立主唱者奥村五百子刀自の始めて事務所を此處に設きたるは玄關前の門番小屋にて會況甚だ微々たりしに僅々三年の短日月に於て全國會員の數二十萬に垂んとし機關雜誌の發行をさへ見るの隆盛に赴きたるは苦心經營の甲斐あり誠に喜ばしき限りにこそ

○マッギー夫人の叙勳

米國婦人マッギー孃は日露干戈を交ふるや同志の篤志看護婦を糾合し我海陸軍人の傷病者を救護せんと企て蹶起萬里の波濤を凌ぎクラッドウイン孃外八名を伴ふて渡來し五月一日より日本赤十字社救護員と共に廣島豫備病院及び博愛丸弘濟丸兩病院船に搭じて救護に從ひ熟練の技能と誠實の精神とを以て他の及ばざる所を爲し勤勞一方ならざりしが先月下旬を以て一同歸國するに付き其功勞を表彰せんが爲め左の通り叙勳の御沙汰ありたり

米國婦人　アニタ　ニユーコム　マツギー

勳六等寶冠章

米國婦人　メリーイー　クラツドウイン
同　ソフイヤ　ニエー　ウエル
同　アリス　ケンメル
同　セニヴ井ーヴ　ラツセル
同　セフ　ピー　キング
同　ミニー　クツク
同　アデル　ニーブ
同　エリサベス　アール　グラツ
同　アデレード　マクレス

勳七等寶冠章

○マッギー女史一行に贈品

米國篤志看護婦マッギー女史一行は二十一日長崎解纜の米國汽船にて歸國の途に上るに付送別の爲め篤志看護婦人會々長鍋嶋侯爵夫人幹事大山侯爵夫人は本日午前六時新橋發汽車にて廣島に赴き紀念として一行に左の品を夫々贈呈せらる

一金銀製七寶燒入胸飾　各一個

右は日米兩國の國旗を交叉したる七寶入にて徑一寸大のものなりと

○マッギー女史一行送別會

日本赤十字社は十月十六日午後二時廣島の淺野侯所有泉邸にてマッギー女史一行送別園遊會を開き來會者二百餘名非常の盛

會にて同五時半散會せり當日小澤副社長が社員を代表して述べたる告別の辭は左の如し

貴下等を日本に歡迎したる春は過ぎたり貴下等の親切なる心もて我が負傷病兵か海に陸に炎熱を厭はず看護せられたる夏は去れり而して今茲に貴下と別るゝの秋は來れり余豈に多少の感慨なかるべけんや貴下等が日本に來りたるの精神貴下等が叮嚀親切熱心誠實我が負傷病兵の救護勤務に六ヶ月間從事せられたる功勞に對しては單に彼等患者の滿足感謝する處たるのみならず我等赤十字社員否な我が國民の擧て謝意を表せざる可からざるところ又た我が兩陛下に於ても大に滿足遊ばさるゝ處なり

水師提督ペルリーの來朝が單に外國貿易の道を開きたるのみならず又我國の文運に貢献せしが如く貴下等の來朝は我國の救護事業に裨補する所多大にして同時に他の方面に於て我國民の學びたる處大なり貴下等今我國を去ると雖も貴下等が我國に遺したる功績は長へに我國を去らず貴下等が永く我國民に記憶せられんことは余の深く信じて疑はざる處なり

夫れ日米兩國の關係は恰も母子の關係に於けるが如し而して此親密なる關係は更に貴下等の來朝によりて濃厚となるや言を俟たず蓋し婦女子は一家の最大要素たるが如く一國に於ても亦最大要素たり故に貴下等の來朝は我國の婦人と貴國婦人とを結び付くるの緒たらずんばあらず兩國の結合層一層に緊縮せるや明かなり況んや貴下等の目的が我赤十字社と等しく世界同胞主義人類主義なるに於てをや猶ほ況んや米國の國是が我帝國の國是と等しく平和主義なるに於てをや猶ほ最後に更に我儕の謝意を表し貴下等の幸福愉快なる航海を祈る

○忠婢お八重　國を擧げて戰爭に熱し到る處血醒き噂ばかりを聞く時に當り珍しく忠實なる工女あり賞を下賜せられたりと云ふ森の緑りに一點紅の花を見出たるが如く美しくも亦優し忠婢名はお八重四谷區東信濃町小川幸吉の姉にて十一歳の時群馬縣前橋市製糸業中澤嘉平方に工女として傭はれ能く業に努めしが會々主人の家に不幸ありて財産を失ひ屋主も其長男も世を去り次で次男は又不治の病に罹り一家打續く災禍に生計は益す困窮し全く悲境に陷れりお八重主家の沒落を見るに忍びず自ら率先して主家の爲に稼業を勵み老たる主婦を扶け病める幼主を看護し薪水の勞に到るまで一身を以て之に當り些も自身の爲めに利慾を計らず傭はれてより十七個年の間一日もかはる事なく其筋に於ても誠に奇特の事となし賞勲局に於て取調の上去廿四日特例に依り金五十圓を下賜せらる誠に昭代の佳話なり

○伊勢の孝子　賞勲局に於て去月十六日特例を以て金三十圓を下賜したる伊勢の孝子川戸長藏に與へし賞状左の如し

資性温良年甫めて十二歳父疾に罹り生計困乏母を

助けて家計を支持し專ら孝養怠らざりしも終に起たず尋て母亦病み後ち瘋癲に變じ日に狂暴を極むるに至るも毫も倦厭の色なく承歡益す努め弟半藏と與に夙夜力を看護保擁に致し適ま人の之に妻を勸むる者あるも孝道の或は衰へんことを恐れて肯せず一意奉養十餘年一日の如し母歿するや貧困の中厚く葬祭を營み爾來勵精業に服し勤儉家を治むる等洵に奇特とす依て爲其賞金三十圓下賜候事

○奇特なる婦人　愛國婦人會員にして神戸驛の同會犒軍所に出張し同驛通過の軍人に熱誠を捧げて其勞苦を慰藉し先きには征露軍獻十二萬枚と卷煙草等を出征軍人に寄贈して其名を知られたる神戸市山本通五丁目佐藤勇次郎氏の妻女みね子は去る二十五日も同所に出張しゐたるが、午後二時四十分頃同驛着の山陽列車中に某師團に後送患者あり其中越前敦賀の岡本時次郎と岐阜の鄕某の二名は脚氣病にて稍重症に陷り大阪までも送ること困難に見受けられしより輸送指揮官は神戸にて下車せしめ治療せしめんと思へど急場の事にて當惑の體をみね子が見かね自ら進んで其二人の患者を引受け早速神戸病院に通知し擔架を取寄せ其間は婦人待合所に入れて親切に介抱しやがて擔架も來りたれば懇ろに世話して入院せしめたるより其一人は大に輕快に赴きたりといふ奇特の婦人といふべし

○女豆腐賣と女生徒　女豆腐賣の評判高き麻布區竹谷町八番地豆腐商多田七藏の女房お竹(六十三)は病痾に臥せる所夫七藏と嫁おみつの看護より孫お定(四ツ)お秀(三ツ)を養育の傍ら出征中の伜直松の立派な功を奏して凱旋するを切ても樂みに相も變らず芋洗坂より扨は龍土日ケ窪邊までも日毎に豆腐を賣歩き一昨日も例の如く孫の手を引き日ケ窪町の通を豆腐々々と賣行く姿を、折しも向ふより來懸りし同町第三女學校の女生徒二級四年生の五人連が認めアレこそ兼て噂さに聞き及びし憐むべき出征者の家族なりとて同情の淚禁めあへず各々毛絲の巾着を探り

多少の金錢を集め其塲に惠み與へたる温かき心に老母は涙を流して感謝の意を表し尚ほ先頃件の許より來りし書信をも讀み聞かせ貰ひ一同に厚く禮を述べし上右と左に立別れしといふ美しき女生徒の振舞感ずべし

◎軍人家族救護美談　内務省にては出征軍人家族救護の事に關しては絶えず調査しつゝあるが左に錄するものは其の調査する外なり

◎生産扶助と専賣事業。。。。。。。　大阪府北河內郡津田村に於ては軍人家族救護の爲めに燐寸及び石鹼を軍人家族に專賣せしむることゝし同村を甲乙丙の三部に分ち丙部擔任者には燐寸及び石鹼を甲乙部には燐寸を販賣せしむるの法を立てたり乃ち上半月甲部の販賣したるものは下半月乙部に上半月乙部を販賣せしめたるものには下半月甲部を擔任せしめて不衡平なからしめ又別に甲乙部及び他村に石鹼を行商せしめ其の資金及び現品購入等は一切津田村奉公會に於て擔任し大阪市の製造物販賣店に事情を告げて原價に購入し軍人家族には現品を交付して只販賣のみを行はしむ理事者の語るところによれば本村は邊鄙の小村なれば到底長期間の救護に堪へざるを以て斯る方法を採るに至れり誠に耻づべきの次第なりと

◎軍人妻女の自譽精神。。。。。。。　大阪府泉南郡大土村北中通村及び西葛城村一部の軍人家族は他の救護を受くるを以て一家の耻辱なりとし一旦救護を受くるときは村民と比肩する能はざれば如何なることあるも一切救護を受けざることに決心せりと

◎社會の好模範。。。。。　或る日一婦人あり神戶市奉公會なる同市救護事務所に來りて云へる樣　私は昨日此通知書を受けたるも夫の出征中他より救助を受くるは夫に對して相濟まざるにつき辭退せんと欲す今之を辭するも差支なきやとの事に役員は怪しみて貴家に對しては我等再三調査を爲したる結果救助すべきものと認め此の通知を爲したるものにて世間には往往事實を構へても救助を受けんことを申出づる者あるに今之を辭退せらるゝは如何なる理由ぞ又た何故

に我等の再三調査に赴きたるときに之を辭せざりしやと問ひけるに婦人は答へて調査を受けたる當時は姑や小姑ありて是非共救護を受けよとて勸めらるゝ故之に逆ふともならず又自分一人の力にては姑や小姑までも安逸に暮さしむる能はざるが爲め已むを得ず救護を受度旨申出たるも今や小姑も他に赴きたるに依り熟考するに夫の留守中なりとて救護を受くるは夫の名譽を損ふものなれば自活の道を求め之が爲には如何なる艱難辛苦をも厭はぬ決心を爲したるに依り再三の手數を煩したるは恐れ入りたることながら願くは此の通知書は取消されたしとて返戻したりと又同市茸合村部落の一婦人は毎日午前三時其の兒女を神戸市婦人奉公會に於て設立せる幼兒保管所に托し二里餘の道を遠しとせず兵庫新川地方某工場に通勤し十二時間の勞務に服し漸く午後八時保管所に來り午前托したる兒女を伴ひて家に歸り家事を整ひ終り十一二時にして始めて寢に就く有樣にて日々斯く婦人の體力不相當なる勞働をも厭はざる所以のものは其夫が出征の際借用したる若干金の辨濟を爲さんとするものなりと

○寄贈袋三萬組　日本橋婦人會の市原よし子（求夫人）柿沼花子（谷藏夫人）長井とし子（利ヽ衛門夫人）其他數十名の發起に係る日本橋婦人會にては出征軍人に日用必需の物品を寄贈するの目的にて頃者縱一尺幅五寸許にして寄贈者の住所姓名を記入したる寄贈袋なるもの三萬組を調製し廣く之を配布して衆人の贊成を促したるが同情者は手拭及ハンカチーフ半紙、塵紙、書翰箋封筒及繪端書、鉛筆、清心丹、寶丹、袋入齒磨及楊枝（竹柄）靴下及手袋其他何品に限らず又多少を問はず各自隨意に此袋中に封入する仕組にて同會にては其儘之を戰地に送り各軍人に配付するの仕組なりといふ

○濟美音樂學校　江原素六氏の主宰せる芝區三田四國町の同校は開校以來盛況なるをもて今回新に高等科をも設け唱歌、オルガン、ピアノ、ヴァイオリン等を教授し講師には東京音樂學校教授天谷秀氏

外數名を聘して專ら音樂の普及發達を期する由にて目下生徒募集中なりといふ

○鐵道作業局の女子雇入に就て　同局運輸部にては豫て女子を雇入れ一は新橋其他主要驛の出札掛に宛て一は同部調査掛に置き乘車切符等の照査を爲さしめつゝあり尙調査掛にては引續雇入を爲すといへば左に其必要の事柄を記して志望者の便に供す

一　年齡　は十六年以上二十五年以下で夫のないものに限る

二　試驗は尋常小學校卒業の程度に依り讀書、算術、習字、作文と外に體格の試驗がある

三　格體試驗料　は金廿錢當日直に醫師に納むる定めである

四　職務　は使用濟の乘車切符を取調べ又た乘客貨物の賃金に間違等のありやなしやを見分けるのである

五　執務時間　は午前八時より午前四時まで夜勤をする樣な事は決してないから父兄抔の心配も隨て無用である

○白色劑と腋臭必治劑　色白劑は化學的の作用にて天質色黑き人用ゆれば忽ち肉體白色に變化する峻烈き特効あるのみならず一般の皮膚病を即治する効あり又腋臭必治劑は頑固なる腋臭を根治し再發或は他病に變ずる患ひ無き根治的新藥なりと云ふ共に東京神田五軒町日新館藥房の專賣藥なり

定價

一册	前金貳拾錢
三册三ヶ月分	前金五拾七錢
六册半年分	前金壹圓拾錢
拾貳册一年分	前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金三拾錢
半頁　三十二行	金八圓
一頁　六拾四行	金拾貳圓
表紙一頁	金拾六圓

（色刷は特に御相談に應ず）

御注文規定

一切前金の事（但郵劵代用一割增の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に劵錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治三十七年十月卅一日印刷
明治三十七年十一月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　渡邊乘一

東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人　河本龜之助

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　株式會社 國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八番）

●圖書代價大割引廣告

我國開國三千年の久しきに及ふと雖も本年の天長節の如きは歷史上未だ曾て見ざる處の大紀念日なれば聊か奉祝の微意を表せん爲め大割引を以て弊社發刋の圖書を販賣し廣く江湖の需めに應ぜんとす其の書目及價格は左の如し

但御注文の際は必ず割引券御送附を乞ふ

東京市京橋區築地二丁目

株式會社國光社出版部

國光社發行

圖書特別割引券

●本券有効期限は明治卅七年十一月卅一日限とす

●本券は直接本社宛御注文者に限り有効とし特に別表之通り割引す

●期限經過後は無効とす
（但し郵稅は別に要す）

●前金添へ（郵稅共）御注文に非されば無効とす

東京築地二丁目
株式會社國光社

國光社出版圖書減價表

書名	冊數	定價郵税共	特減價税共
島田佳矣・野口駿尾共著 ●女子技藝 編物模樣圖案	五	松ノ巻四十三錢 櫻ノ巻五十二錢 藤ノ巻五十二錢 菊ノ巻五十七錢 梅ノ巻五十七錢	松ノ巻三十八錢 櫻ノ巻四十七錢 藤ノ巻四十七錢 菊ノ巻五十二錢 梅ノ巻五十二錢
登張竹風著 ●讀書と修養	一	參拾四錢	參拾四錢
棚橋絢子著 ●女道叢話	一	參拾四錢	參拾壹錢
三輪田眞佐子著 ●女子之本分	一	參拾壹錢	貳拾九錢
三輪田眞佐子著 ●女子處世論	一	貳拾四錢	貳拾貳錢
磯部武者五郎著 ●家計簿記法	一	拾七錢	拾四錢
幸田露伴編 ●四季物語	一	五拾四錢	四拾四錢
藤野天城著 ●女子小觀	一	貳拾四錢	拾六錢
堀內新泉著 ●女樂師	一	四拾壹錢	貳拾五錢
生田目經德著 ●標註雅文消息集	一	貳拾九錢	拾九錢
松川霓州著 ●結婚と家庭	一	拾九錢	拾四錢
堀內新泉著 ●家庭の鑑	一	貳拾三錢	拾七錢

著者書名	冊數	定價郵税共	特減價税共
女鑑編輯局編 ●新編ひめかゞみ	一	貳拾九錢	貳拾貳錢
梅澤清一著 ●清少納言と紫式部	一	四拾壹錢	參拾壹錢
大町佳月著 ●常磐御前	一	拾五錢	拾錢
澁谷愛著 ●萬國女子風俗	一	貳拾九錢	貳拾四錢
堀內新泉著 ●少女讀本	三	各廿貳錢	拾九錢
小林雨搭著 ●勾當の內侍	一	拾五錢	拾錢
濱田廉著 ●袈裟御前	一	拾五錢	拾錢
國府犀東著 ●靜御前	一	拾五錢	拾錢
長田偶得著 ●顏世御前	一	拾五錢	拾錢
杉谷正隆著 ●家庭歌訓 修身百首	一	貳拾四錢	十八錢
清藤正輔編 ●皇后陛下御畧記 坤德	特 並	三十九錢 二十九錢	特 二十一錢 並 十九錢
高瀨眞卿著 ●學校家庭 修身一夕話	特 並	六十六錢 四十四錢	特 四十八錢 並 三十三錢
指原乙子著 ●女子文章軌範	一	三十四錢	廿五錢

第五回内國勸業博覽會

銅牌并に褒状受領

壽美禮おしろい

登録商標

五二會品評會功勞銅牌

THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ヴソイオレツト株製
錫器附乳白硝子器入
壽美禮おしろい

壽美禮おしろい

ねり製（定價 大壜二十錢 小壜十二錢）

水製（定價 大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢）



錫栓附乳白硝子壜入

グワイオレツト水



すみれ白粉は　歐米諸國に専ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成蹟體等を以て配劑しおるを以て皮膚を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり『壽美禮白粉』は常に用て御顔肌等の色を白變せしめきめをこまやかに、にきび、そばかす、あせも等を生ぜす御肌へを清々しく天然の白色きに至るべし『菫おしろひ』は芳香馥郁長く保つが故宴會祝席雑踏の場所に臨て諸々の悪臭を退け不淨を拂ひ心氣を清爽快活ならしめ衛生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして其意匠も美妙なれば御准物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

皮膚艶白劑壽美禮あらい粉

綠、藍、紅彩蝶番ひボックス入三錢

罐詰六錢五厘　袋入壹錢

●弊舗製造の壽美禮洗粉の素は方今歐米諸國に専ら賞賛する香料及弊店新製の原料を用ひて製せし物なれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば漸々皮膚の色を白くし美くして艶を出しきめをこまかに常に御肌を清々しくなし總面皮膚の患ひにかゝる事なし

●常に髪洗ひに用ひ給へば毛の抜る病を豫防し毛のくせを直し美くして艶を出し髪のねばり垢を取り頭あかふけ等を生ぜす又絹綿布等に用ひて能く汚垢を落し總べ物を漂白する性あり

●使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は温湯に溶し又はぬかに混ぜ入浴の際用ふるを良とす

登録商標

洋色白くなるあらひ劑

SUMIRE.
WASHLNG IOWDER.

壽美禮あらい粉



製造本舗

東京東兩國（兩國橋際）元町

伊勢吉壽美禮堂謹製

賣販所は全國到る處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場に有り

東京築地株式會社國光社印刷